

ROTARY



シカゴ大学出版

田中毅訳

ROTARY



大学グループによる

シカゴ・ロータリークラブの展望

最も古いロータリークラブの要請に基づいた

シカゴ大学社会科学調査委員会による

シカゴ・クラブの歴史、業績、将来性に関する報告書

シカゴ大学出版

田中毅訳

ROTARY? 目次

前書	5
序文	21
第1章 ロータリーの曙	29
1. シカゴ・ロータリークラブの起源	29
2. シカゴ・ロータリークラブの成長	59
3. 国際ロータリー	95
第2章 シカゴのロータリアンたち	127
1. シカゴ・ロータリークラブの会員	127
2. ロータリーの主張	140

第3章 ロータリーの役割

1. 最初の刺激

148

2. 親睦の理念

164

3. 奉仕の理念

176

4. 指導力を持つ集団

194

第4章 会員身分の問題点

1. 量か質か

212

2. リーダーとしての要素の選択

223

3. ロータリアンはいかにあるべきか

224

4. 入退会問題と会員身分の維持

248

第5章 構造上の問題点

1. 子クラブの問題点

274

2. 機能と地理的分割

307

第6章 組織の問題点

321

第7章 クラブ奉仕

337

1. 役員選挙

337

2. クラブ事務局と職員

341

3. 広報および出版物

349

第8章 親睦奉仕

356

第9章 事業上の指導力

381

1. 職業奉仕とは何か

381

2. 職業奉仕はいかにあるべきか

398

3. 事業の促進は開かれたものか

400

第10章 市民への指導力

421

1. 社会奉仕の意義

421

2.	ロータリー募金箱	436
3.	ロータリーと行政	456

第11章	世界市民	468
------	------	-----

1.	国際奉仕	468
2.	ニュー・デイル政策	477
3.	世界は一つ	481

第12章	要約、結論および参考文献一覧	487
------	----------------	-----

	効果的な指導力の具体例	504
--	-------------	-----

	エピソード	508
--	-------	-----

	アンケート	514
--	-------	-----

	アンケートおよび回答一覧表	515
--	---------------	-----

	訳者あとがき	533
--	--------	-----

	電子文庫版について	539
--	-----------	-----

	I SAW A MAN	541
--	-------------	-----

前書

シカゴ・ロータリークラブ調査委員会

ロータリアンは時折り自問自答する。

「地域社会に対して、個人として自らで対処することと、組織としてのロータリーが対処することとは、果たしてどちらが価値があるのだろうか？ かなりの時間とエネルギーを費やさなければならぬし、金銭的支出も決して馬鹿にならない。その努力は正当に評価されているのだろうか？ ローターリーに在籍する平均的な期間は10年であり、ほとんどの組織の在籍期間を上回っている。人は一生のうちで幾つかの運動に参画するが、平均10年間ロータリアンとして留まったとすれば、ロータリーからその経験に値するだけの、十分な見返りを得られるだろうか？ ローターリーは、何年もの間自分自身をのめりこませるだけの値打ちのある精神的な体験を与えてくれる組織なのだろうか？ 僅か10年では、人に及ぼす精神的な変

化の影響など取るに足りないものであり、まったく等しいに等しい。私はロータリアンとして何をやるのだろうか。私の物の見方、私の経済活動、私の社会や家庭における幸福に、どれほど影響を与えてくれるのだろうか？」

そして更に、憶測の度合いは広がっていく。我々ロータリアンは、相互扶助の楽しさに熱中し過ぎたので、世間から見向きもされなくなったのではないだろうか？　ロータリアンは我々に自己満足と幸せをもたらしたのにとっては実に都合がよかったかもしれないが、その一方で、十分な機会を捕らえて、すべての義務を果たすというもくろみに失敗してしまったのではないだろうか？

我々のクラブはどうだろうか？　クラブが為すべきことを、完全に行っているだろうか？　我々が最初のロータリークラブであることは、紛れもない事実である。我々はいろいろな地域のクラブに対して道を切り開いたばかりでなく、全米ロータリーと国際ロータリーを考え出し、それを実現させた。我々はこれらの事実で満足した余り、新しい機会を逃してしまつたのではないだろうか？　我々は世界中にロータリー運動を発足させ、そ

の運動は、種々の名前のもとでこの種のすべての運動の源流となった。誇らしさや満足感に駆られる誘惑は極めて大きいが、我々は過去のこと執着し過ぎた余り、未来や現在を逃しているのではないだろうか？

これらと同じような質問は、世界各地のロータリアンからしばしば耳にする。疑いなく、彼らは常に心の中で問い続けているのである。ロータリーの役員たち、特に我々のクラブの役員たちは、これらの疑問をより率直に徹底的に自らに問いただし続けた。彼らは、ロータリーが数だけではなく、精神的にまた実力においても成長することを期待しているのである。ロータリーは世の中を変え、ロータリーもまた28年前に発足して以来、大きな変貌をとげていった。

我々は時代の進化に即応しているのだろうか？

ロータリーは世の中の現実と同じくらしいの速さで進化しているのだろうか？ 進化の速度は適切なのだろうか？ そのことを十分に理解しながら、

会員たちを奉仕しやすい方向へ導くことができるのだろうか？

我々のクラブの会長や理事会や目標設定委員会 **the Aims and Objects Committee** は、これらの疑問に対する回答を試みようとしたが、僅かな事実以外に彼らが必要とする答えを見つげ出すことはできなかった。その前の年にも、募金箱 **Chest Fund** と人道的活動を支援するための方法についての質問が寄せられたが、回答するために必要な事例と意見が容易に見つからなかったので、募金箱に関するアンケート調査が、1931年12月にガイ・カッシング会長 **Dr.Guy McCushing** の任期中に行われた。

1932年4月にシカゴにおいて、ロータリーによって設立された独立した調査機関と、それを補助する手立てを設けることの是非が、我々のクラブ幹事からシカゴ大学学長ハッチンス **Hutchins** に文書で提案された。大学から積極的な関心が表明されると共に、ポール・ハリスを含んだ、委員長チャールズ・ヘリック **Charles E. Herrick** やハーガー会長などの理事たちが、そのような調査を実施することの是非を票決した上で作られた、シカゴロータリー未来展望委員会 **Chicago Rotary's**

Forward-looking Committee の20人のリーダー・グループによって、活発な議論が闘わされた。費用を支払うために必要な資金が用意され、地域内の調査や計画が指示されると共に、委員会の中に有能な調査員や記者を確保すること、彼らの報告書を受け取ること、更にそれを出版することが命じられた。

地域内調査委員会の資格

この委員会の委員には、ジョージ・コールドウエル・ハーガー会長、元会長2名、元国際ロータリー会長1名、シカゴ・クラブの副会長2名および幹事が含まれていた。この委員会は、ロータリーの経歴は別にして、経歴中にその他のいささか例外的な条件を加えており、委員長は大手精肉出荷会社の会長であり、精肉出荷業者の全国組織の会長を2期務めたし、彼を含めた他の委員たちも、10年以上もの間、全国および地方の商工会議所の役員または会員であった。他の2名の委員は大企業の大要職にある人た

ちであり、専門職の1名はシカゴ市保健衛生局長であり、長年にわたってイリノイ州保健衛生委員を務めると共に、全米保健協会会長、地方医師会の会長でもあった。もう1名は、何年もの間、様々な都市の公益事業の組織を管理していた。何人かの人は、外国に住んだり旅行した経験を持っていた。

委員会は教育的な経験者を除外していたわけではない。ある委員は38年間、他の1名は16年間大学の教授を務めていたし、1名は数学の博士号を持ち、何人かは大学の学士号を持っていた。更に別の人は、ラテン語の教授、成功した弁護士、会社重役であった。

作業に関する幾つかの問題点を検討した結果、委員会は、シカゴにある大きな大学の一つに調査を依頼することを決定した。その次に行われた決断は、それを引き受けてもらうために、シカゴ大学を含む3大学の専門家たちの委員会を召集することであった。

独立調査委員会の選抜

シカゴ大学のグループはその役割を了承して、大学と提携している公営情報センターや様々な部門から抜擢された調査委員を任命し、大学の調査委員会や彼らが持つ権限に関する人事が発令された。

合意書

連携して活動する二つの委員会によって合意された、調査と報告に関する覚書は次の通りである。

1. シカゴ・ロータリークラブが雇用した大学調査委員会によって実施される調査は、この調査を独立して実施すべきであって、シカゴロータリー・クラブ調査委員会によるいかなる指示を受けるものではない。
2. シカゴ・クラブの元および現会長、役員、委員長、委員および同クラブの職員は、すべての記録を利用したり調査資料を入手する手立て

を提供すると共に、アンケートに回答し、インタビューに応じ、必要がある時にはあらゆる方法で調査指導者および補助員に便宜を与えること。

3. 報告書、特に意見や結論や勧告は、大学の調査委員会によってなされるべきであり、シカゴ・ロータリークラブによる干渉や制限を受けないこと。

4. 大学の調査委員会の報告書は、シカゴ・ロータリークラブの調査委員会によって内容が省略されたり、違った形に修正されないものとする。出版に際しては、大学調査委員会による承認のない限り、削除や変更することなく完全な形で出版すること。

大学の調査委員会とシカゴ・ロータリークラブ調査委員会との了解事項は、下記の通りである：

a) 現在の状況や考え方を理解するために必要であると思われる場合に限り、ロータリーの出来事や哲学の歴史を調査するが、それを更に

深く追求しないこと。

b) 時間や機会が許す限り、組織の構成と構造、クラブの正確な調査を期すために必要と考えられる、シカゴ・ロータリークラブ会員の職業上や個人的な関係などのロータリーとの係わり合いや関係を調査すること。

c) 目的や目標や方法を提案するが、シカゴ・ロータリークラブの現および将来の会長や理事や他の役員の権利と責任を推理して先取する方向には進まないこと。

シカゴ・ロータリークラブの目的は、国際ロータリーを包括的に調査することではなかったが、作業が進むにつれて、大学の調査委員会がそれを理解しようと思えば、国際ロータリーの結成に関連する国際的な背景を調査する前に、シカゴ・ロータリークラブとの関係を調査しなければならぬことが、国際ロータリーの役員に対するインタビューや、国際ロータリーの出版物の調査を通じて明らかになってきた。大学の調査委員会は、そ

これらの記録の幾つかを開示することと、何人かの役員とインタビュすることを国際ロータリーに要望し、この件は丁重に了承された。従つてこの報告書は、国際ロータリーの文献や規約などの徹底的な調査に基づいて、国際ロータリーのあらゆる面を網羅したものとなっている。特筆すべきこととして、大学の調査委員会の委員たちは、その殆どが外国の大学で学んだ経験があり、多分に国際的な感覚を持ちあわせていた。また彼らのうちの何人かは実際的な政治経験があり、更にそのうちの何人かは国際政治や国際経済に携わる経験を持ちあわせていた。知的な特徴および経歴の背景として、少なくとも2人の大学調査委員は他の都市においてロータリークラブの事実上の元会員であつたことに加えて、あらゆる点において、地域的、全国のおよび国際的なロータリーを理解する能力を見事に備えていた。

従つて、報告書の少なからざる部分において、国際ロータリーやアメリカ合衆国や、アメリカ大陸の他の国々や、ヨーロッパや、他の場所のクラブに対して関心を抱いていることが窺える。もしも、シカゴのロータリーを分析することが(率直な批評家の立場からはそうであつてほしいのだが)、

他のロータリークラブの利益になるならば、シカゴ・ロータリークラブは役立ったと感じるに違いない。

大学の調査委員会の報告書の冒頭には、試みていることが成し遂げられるはずもない男に関する、ステファン・クレーン Stephen Crane の詩の一節が引用されている。人間というものは、人の言うことを聞くためにちよつとだけ立ち止まったとしても、考え方は変わらないし、目的を修正することもない。決意はまったく変わることなく、自分が手がけている仕事をやり遂げるまで続けるものである。ロータリーの調査委員会は、これを、大学の調査委員会が出した個人的意見を代表するものと解釈している。ロータリーは不可能なことから出発し、それをやり遂げた。彼らが手がけた仕事の一部には、成功した理由を見つけることができるものもある。すべての他のロータリークラブが社会に影響を与えた新しい奉仕の偉大なる機会が、続けられていくように手助けしていききたいと、ロータリアンたちが心に描いていたものと分析することができる。成功するために、ロータリーの会員が一致協力していることは明らかである。

これは即ち、もし個人がロータリーそのものを手助けしたり、社会に役立つためにロータリーを援助するならば、ロータリーは逆に会員個人個人を援助しなければならないことを意味している。

大学の報告書はロータリーによる指導力を強調している。ある分野では、クラブによる集団的な指導力があり、他の分野では、実業や専門職種や社会的な、いわば社会の縦糸と横糸を張り巡らせたような、個人個人の専門的な活動によるクラブ会員の指導力がある。なおその他の分野には、シカゴ・クラブが少なからず貢献してきた、指導力を育成しこれを伸ばしていきたいという願望がある。これらの機能を実現することこそ、シカゴ・クラブが明確に認識すべき目標として要求されているのであり、この計画を実現するためには、理性的に物事を考えると共に、賢明に計画する必要があるのである。

ロータリーの未来に関して、少なくともある部分においては、我々は常に新しい考えや新しい問題点に対して、自らを適応させるように準備するという、流動的な状態にしておくことが望ましく、今までも常に、そのよ

うにしてきたつもりである。成功を収めようとする他のすべての団体は、組織の周りで起こった新しい問題や新しい影響に過敏に反応するという習性を身につけているという側面を持つていなければならぬし、同時に、やり甲斐のある方法や辛抱強い方法で社会に奉仕しようとする団体は、確固たる目標と辛抱強い性格という側面を持つていなければならぬ。

シカゴ・ロータリークラブの調査委員会は、ロータリーの会員個人個人に対して、あえて報告書に対する賛否を問うことはしない。もし、全員がこの結論に賛同するようならば、この調査はつまらなく、利用に値しない、値打ちのないものであろう。この点は、大学の調査委員会の見解と一致していると思われる。彼らは、個々のロータリアンが慎重に報告書を読みかつ検討すると共に、我々の弱点や欠点や欠陥に対して、分析的、同情的な視点で熟考するために、委託を受けた独立した大学委員会として、必然的に論争を起こす可能性のある調査を行い、かつ挑発的に作製されているものであることを、心に留めることを期待しているに違いない。

謹んでこの報告書を提出する。

シカゴ・ロータリークラブ調査委員会

委員長、チャールス・ヘーリック CHARLES E. HERRICK

ブレナン包装会社 Brennan Packing Co. 社長。

シカゴ・ロータリークラブ元会長、

アレン・アルバート博士 Dr. ALLEN D. ALBERT

1933年世紀の進歩博覧会大統領補佐官

著述家、ジャーナリスト、社会学者

1933年度シカゴ・ロータリークラブ副会長、国際ロータリー元会長

ウイリアム・エバンス博士 WILLIAM A. EVANS, M.D.

シカゴ・トリビューン紙健康欄執筆者

1933—34年度シカゴ・ロータリークラブ副会長および理事

前シカゴ市保健衛生局長、イリノイ州保健衛生局委員

「アブラハム・リンカーン夫人」の著者

元全米保健協会会長、元シカゴ市医師会会長

ジョージ・ハーガー **GEORGE C. HAGER**

コンシューマーズ社 **Consumers Co.** 副社長兼秘書

シカゴ・ロータリークラブ元会長、1933—34年度国際ロータリ

ー理事

アルバート・マーティン **ALBERT B. MARTIN**

キワニー・ボイラー社地区マネジャー

1913年度シカゴ・ロータリークラブ副会長

ジョン・バン・デ・ブリース **JOHN N. VAN DER VRIES**

全米商工会議所北中央地区マネジャー

元シカゴ・ロータリークラブ会長

幹事、ジョージ・トレッドウェル **GEORGE L. TREADWELL**

シカゴ・ロータリークラブ（1920年度より）

中国アメリカ出版社支配人代理、中国上海（1916—20年）

上海ロータリー・クラブ創立会員および初代幹事、
(1919—20
年度)

序 文

シカゴ大学社会科学調査委員会

この報告書は、大学外の政治調査分野で活躍する委員長を含んだシカゴ大学社会科学調査委員会によって、9ヶ月におよぶシカゴ・ロータリークラブに関する調査と再検討に引き続いて、4人の調査専門家からなる大学専従スタッフによる集中的な調査の結果をまとめたものである。この委員会は、その発祥の地であるシカゴにおいて、公平で、完全に独立した調査を行うために、シカゴ・ロータリークラブによって雇用された、社会科学調査委員会および調査員たちによる調査、研究、判断の結論である。データの編集に関して調査委員会および担当理事は、ルエラ・ゲッティ Luella Gettys 博士、シカゴ大学の調査員、シカゴのドロシー・ブルーメンストック Dorothy Blumenstock 嬢に手伝っていただき、データの解釈につ

いて社会科学委員会は、調査担当理事による徹底的かつ広範な助言を頂いた。基本となるデータの収集に関して委員会は、ロータリーの創立者ポール・ハリス Paul PHarris、シカゴ・ロータリークラブの1932—33年度会長ジョージ・ハーガー George CHager、シカゴ・ロータリークラブ幹事ジョージ・トレッドウエル George LTreadwell、国際ロータリー副幹事レスター・ストルザー Lester B. Struthers、この調査の発案者であるロータリークラブ調査委員長チャールズ・ヘーリック Charles F. Herrick、さらに、あまりにも多すぎていちいち名前を申し上げないが、シカゴ・ロータリークラブの委員長、委員、元役員を始め、シカゴ・クラブの委員会の他の委員諸兄から測り知れないほど貴重な援助を頂いた。我々は、この報告書の発刊にあたって、一致協力してなし得た我々の評価を發表する機会を与えてもらったことを、心から感謝するものである。

自主的、率直な分析

この報告書自体が、実業家やロータリアンとは異なつた立場にいる現実的な考えを持った社会学者のグループによつて観察された、シカゴ・ロータリークラブとロータリー運動に関する、特定の目的を持った率直で自主的な分析に留まるものではなく、概要を探り問題点を解決しなければならぬこの調査のために、長期間にわたる実質的な深い接触によつてなされたものだと考えてもらえば、より理解しやすく有用なものとなるに違いない。

報告書の中に、もし不正確な事実や資料の誤つた解釈が見つかれば、その責任は我々社会科学委員会が負わなければならないことは当然である。ロータリーのすべての問題点やシカゴ・ロータリークラブのすべての活動状態を網羅することに関して、調査報告書に欠陥があつた場合の責任についても同様であるが、与えられた時間と資料の関係上、完全かつ徹底的な調査をすることが許さなかつた理由によるものであることを、前もつて弁

明しておきたい。更に外部の団体は、組織の詳細については詳しくないことから、不利な立場を余儀なれされるものであるが、4ヶ月の期間内で、この不利な立場を完全に克服できるわけではないことは、言うまでもない。報告書を検討するロータリアンが、社会科学委員会の立場は、ロータリーの諸問題に対して、新鮮なものの見方と公平な対応という立場から見れば、バランスを欠いた不利な立場にあることを理解してもらうことを、切に希望するものである。

読者の考え方と一致しない分析や提案や勧告の一端もあるに違いない。社会科学調査委員会は、完全でかつ妥協を許さない率直さをもって、自らの考え方と評価に従った表現をすることが、シカゴ・ロータリークラブにとって絶対必要な要望であると思ったからであり、事実、ロータリークラブがこの要望を明確に要請したからでもある。社会科学調査委員会は、すべての共同作業を試みるに際して、単なる個人的な好みや予断に基づいた判断を避けなければならぬし、予想される反応の結果を恐れることなく、その結論をはつきりと単刀直入に述べることを逡巡するようなことがあつ

てはならないと考えている。

調査方法と組織

調査方法と組織はきわめて大規模なものである。会員の立場や意見や態度を確かめるために作られた信頼度のかかなり高いアンケートが、回答表をつけて付録として再掲されている。最大の回収率を確保するために、2週後に再度送られた書類を含めて、全会員670人にアンケートが配られた。

すべてのパーセンテージは、1933年3月10日にさかのぼった、405人の匿名のアンケートに基づいたものである。その後、およそ35通の遅れたアンケートを受け取ったので、合計440となり、普段と同じような素晴らしい高い回収率となった。これらの35通の追加されたアンケートは、意見や提案の中には含まれているが、パーセンテージには含まれていない。報告書の中にある匿名によるすべての回答は、特別に明示しない限り、シカゴ・クラブのロータリアンのアンケートに対する意見を表し

たものである。他の統計や図表の資料は、付録に再掲しなかったが、非常に有用であると思われる部分については、報告書の本文の中に組み入れている。

アンケートの他に、この調査に使われた元になる資料は、ポール・ハリスの「ロータリーの創始者 The Founder of Rotary」、フランク・ラム Frank Lamb の「ロータリーの意義 The Meaning of Rotary」 「実業人の解釈 A Business Man, s Interpretation」などの国際ロータリーの一般的な著作物が含まれており、未発行のロータリーに関するポール・ハリスの1933年の原稿もまた、貴重な資料として使われている。

豊富な資料として提供されたパンフレット、出版物、記録等のシカゴ・ロータリークラブの蔵書は、すべてにわたってその内容が詳細に調査された。多くの重要な資料が、シカゴ・ロータリー委員会史を含む、様々な委員会の手書きの記録や、理事会の議事録から拾い集められたし、利用可能な年度の、委員会や理事会の年次報告書も使用した。

統計諸表の作成は、国際ロータリーの事務局のファイルの中から、活動

中の委員会の手書きの記録を元に作られた。

今日までのジレーター、ロータリアン誌、国際ロータリー年次大会報告書を含むロータリーの出版物は徹底的に参照した。

様々な資料からの特別な引用は、調査報告書の随所に見られる。

調査に関する総論と結論は、最終章において簡単に要約している。

この報告書によって、ロータリー運動に対する分析を試み、ロータリーの理想をより効果的に実現し適用するために、建設的な批評や提案をしようとする外部の社会科学者が現れて、ロータリーの理想像を伝えることが、シカゴ・ロータリークラブや一般のロータリアンに有益であることが証明されることこそ、科学調査委員会の最も望むところである。

謹んでこの報告書を提出する。

シカゴ大学社会科学調査委員会

委員長 ルイス・ブラウンロー Louis Brownlow

調査理事 フレデリック・シューマン Frederick L. Schuman

副委員長 Frank Bane

幹事 カール・ヒューズ Carl F. Huth

チャールズ・メリアム Charles E. Merriam

ドナルド・スレジンガー Donald Slesinger

チャールズ・アッシャー Charles S. Asher

第1章 ロータリーの曙

1. シカゴ・ロータリークラブの起源

ポール・ハリス Paul P. Harris は、彼が1905年にシカゴで始め、自らの一生の間に印象的ともいえる発展をとげ、実力を蓄え、全世界的にその威力を発揮した活動に関して、極めて特殊な立場にある。一代の間に、自分の夢が果たされるのを見とどけることができる組織の創立者は、そうざらにいるものではない。世界におけるロータリーの異常とも言える高度成長、さらに続いて起こった、ロータリーの原則を模倣した他の職業分類クラブの出現は、最後の章に書かれている通り、近代実業界の歴史上、驚異的な現象でもある。

その歴史について記述することは、シカゴ大学調査委員会の作業には含まれていない。しかし、その起源や発展を慎重に考察することなく、シカ

ゴ・ロータリークラブの現在の状態や諸活動を、正確かつ適正に分析したり、未来の可能性を指摘することは不可能に近い。

出来事や日時や人物という点から見たシカゴ・ロータリークラブの歴史は、シカゴのロータリアンや特にベテランの会員には、あまりにも知られすぎていたことなので、進んでこれらのことを再考してみようという試みはなされなかった。歴史とは、動機が膨らんだり変化して目的や活動につながり、一般社会や市民との関わりの跡をたどる道具として表面に現れて来るものである。調査委員会は、新鮮な視点で事実を扱い、科学的な方法で独自にそれを解釈するという立場にあるので、たとえ、以下に述べる要点が、ロータリアン自身によって編纂された歴史ほど完全ではないとしても、この調査を引き受けた目的に叶うように、示唆に富み、光彩を添えることが証明されるに違いない。

思考の芽生え

ロータリーを作ろうという考えは、彼が組織の設立を目指した行動を開始する何年も前から、ポール・ハリスの心の中に芽生えていた。彼は、多くの事柄に努力を傾け、幅広い経験を積んだ職業人であると共に、伝統と社会的な連帯感が欠けている大都会の中で、若くて張り切っている新参者をしばしば襲う、寂寥感と孤独感に時折悩まされ勝ちな、社会的に感受性の強い人間でもあった。彼は、実業家や専門職業人同士の付き合いが、社交性や親睦に満ちあふれたものではなくて、しばしば、とげとげしい競争や疑惑に満ちたものであり、お互いが自分の金銭的な儲けを目指した、冷え切った非人間的な勘定づくであるという現実を嘆かわしく思っていた。1900年の初夏、彼はロジャーズ公園で、ある友人の弁護士が、どういうわけか、近所に住んでいる何人かの実業家と心から親しい関係を持っている事実を目撃して、深い感動を憶え、何とかして、事業上の友人や同じような関心を抱いている他の人たちを、社交上の友人にできないだろうか

いう疑問を抱いた。当時のことを回顧して、「彼は社会的にお互いに結び付けられた実業家のグループのことを思いつき、会員がお互いに、自分に固有の商売や専門職種における唯一の代表者になれば、特別な便宜が図られるのではないかと考え、会員同士がお互いに助け合えるようなクラブを作ることを決意した。」と、はっきり述べている。

1905年2月23日に、ハリスは、彼の事務所で会った3人の友人、シルベスター・シール *Silvester Schiele*、ガスターバス・ローア *Gustavus H. Loehr*、ハイラム・ショールー *Hiram E. Shore* に彼の計画を打明けた。友情と事業上の利益という、二つの極めて密接に関連した理由によって、その考え方は直ちに共感を呼んだ。この計画には、会員同士の親睦を深めるといふ社交クラブの可能性が秘められていたが、このことだけでは、独特なものとは言えなかった。

大部分の独創的なグループは、会員同士か、少なくとも親しい者同士の社交クラブであるか、いろいろな種類の親睦組織であった。他のそのような組織は、単にそれが存在していること以外には、会員個人や一般の地域

社会に対して大きな意義を持つものではなかった。創立者の考え方の重要な点は、実業家たちが合理的に「話し合う場所」で会合を開いて、事業を進展させるための社交的な付き合いを図ると共に、友情を固めるために事業上の付き合いを利用しようという実業家の社交クラブは、彼らが知る限りシカゴのいかなる場所にも存在していなかったことである。そのような考え方は、彼らが親しんできたすべてのクラブではタブー視されてきた。発足時にはそのような目的をまったく持っていなかったにもかかわらず、新しいクラブは、会員間の取引を活性化する「ブースター」クラブになっ ていった。ハリス以外の3人の発起人たちは、クラブの発足時のことを次のように述べている。

シール：最初の会合の時に、ハリスがこのように私に言ったことを覚えている。「やあ、シール君、明日の晩私の事務所に来てもらえないだろうか。我々がこれから発足しようとしている新しいクラブについて話し合うため

に、ちよつとだけ会いたいんだが。それはブースター組織の一種みたいなものなんだが、我々自身を押し上げようとするのではなく、我々のお互いが他の仲間を思いやろうという考えを持ったものなんだ。」

シヨレー：人々が私の店に集まってきて、彼らの服を作るために、時間外勤務をしなければならぬほどのたくさんの新しい友人ができるという彼らの考えは、とても素晴らしい提案として私の心を打ったので、ぜひその勘定の中に私を入れてくれるように頼んだ。

ロアー：最初の集会は私の事務所で催された。その時、ハリスは、一人の人が、自分自身やお互いのために働き、高め合うことができる2—30人の素晴らしい友人を持つことが可能な計画について話し始めた。

1905年当時におけるロータリーの独特な意義は、今日と同じような

ものであり、会員同士の親密な付き合いを通じて親睦と利益を増進することを共通の目的として、事業と友情の両面から打ち溶け合った、実業家と専門職業人の社交クラブを旨指すというものであった。この独創的な考え方の特色が、後に暗い影を投げかけ、他の出来事によって一層不鮮明となった結果、現在のロータリアンは儲けの機会を活動の場に持つことを認めながらないのである。利益に対する現在の態度を特徴付けるような、いくぶん恥じらいを持った寡黙さは、利潤をあげることは、ある面ではロータリアンにとつては不名誉なことであると考えられているかのような錯覚を部外者に抱かせる。このような雰囲気は偽善や戯言として攻撃を受けることに繋がり、活動に対して敵意を抱く批評家の標的になり易い。

二つの考え方の統合

初期のロータリアンはこのような考え方をまったく持っていなかった。彼らは無意識に、利益をもたらすことこそ、現代の産業界におけるすべて

の経済活動の後ろ盾となる偉大な原動力であり、自分自身の合法的な目的を恥じるような馬鹿正直な実業家は、自分自身や自分が住んでいる地域社会の信頼を失うのだと自認していた。創始者たちはこの傾向に惑わされることはなかった。ロータリーの独創的な原則（これは、創立当時にはそんなに強く強調されていなかったが）は、遠くかけ離れた関係にある友情と事業を、両方とも非常に素晴らしいこととして融和させながら、親睦を保つという会員たちの社交的な風潮と儲けの動機づけとを結びつける機会を提供することであった。

職業分類の考え方はこの概念を直接反映したものであった。直接的な競争相手同士が友情を深めることは、少なくとも事業上の競争が熾烈な世紀初頭の雰囲気の中では困難なことであった。当時の競争相手同士は、事業上の利益が友情を損なわないとは限らないという理由から、お互いに事業上の取引をしないことは明らかであったし、事業家たちを対象とした他の社交クラブは、必ずしも事業の発展をもたらす存在ではなかった。ハリスと同僚たちは、もし会員の誰もが他の会員としてのぎを削ることがなければ

ば、事業と友情とが調和したクラブとして、大いに成功するに違いないと気づいていたので、会員身分はそれぞれ異なった事業と専門職の人たちで構成すべきであると結論づけた。

最初は、現在の考え方である、いろいろな事業や専門職の代表者であるという考えは、まったくなかった。一人一業種制度 **exclusive representation plan** は、すでに内部における競争のないグループの中で、会員を受け入れることによつて、友情を深め事業を發展させていきたいという願望の産物であった。最初に出発した会員の中には、ポール・ハリス：弁護士、ガスターバス・ロア **G. H. Loehr**：鉱山技師、シルベスター・シール **Silvester Schiele**：保険業、ハリー・ラグルス **Harry L. Rugles**：印刷屋、ジャドソン・トユニソン **Judson Tunison**：芸術家、ハイラム・シヨールレー **Hiram E. Shorey**：仕立て屋、モンテীগ・ベア **Montaguem. Bear**：彫刻師、チャールズ・ニュートン **Charles A. Newton**：火災保険、チャピン **R. F. Chapin**：銀行家の人たちがいた。これらの会員の間に競争がまったく存在しないことは明らかであり、友情を育み、注文と契約を交

わず機会だけが存在していた。後に続いた会員たちも、同様な基盤の下で入会してきた。儲けることが第一であり、親睦は元来二次的なものであった。「奉仕」という考え方は、後になって開発されたものであり、クラブが設立された段階ではその役割を演じていなかった。

名前の選択

創立時の会員たちは、お互いの事業所で交代に例会を開いていた。このやり方は、会員数が、この取り決めが実行不可能な大きさになるまで続けられたし、このやり方が名前の選択に大きな影響を与えた。

ローテーションは、このグループの本質であったものの、会員身分は、会員の出席記録に基づいて毎年再検討することが必要であるという、基本的な考え方に基づいた「ローテーション・クラブ」は、少なからず扱いにくいように思われた。ハリスは「シカゴ・シビッククラブ」という名前を考えたが、その名前に充分威厳があるかどうかについて、少なからず疑義

を抱いていたらしく、最終的に「ロータリー」という名前を提案した。

例会の持ちまわりは、お互いの職業を通じて取引を活発にすることを通じて、会員の親密度を高める目的で計画されたものである。取引を盛んにすることこそが、大きな目的であった。資料として現在保管されている、初期のロータリーの文書は、その目的を単に繰り返しながら念入りに仕上げることを推し進めていく点にあることを、明らかにしている。

会員増強広報(1907—1908)

「独特なクラブ：ロータリー」から

起源

4人の若い事業人、ポール・ハリス、ハリー・ラグルス、ガスターバス・

ロア、ハイラム・ショーレーは、1905年2月にクラブを発足させた。今なお彼らは正会員であり、ハリスは現在会長を勤めている。

彼ら全員は、会員個人個人の事業上の利益を向上させるという目的を持っているクラブこそ、素晴らしい未来が待ち受けているという確固たる信念を抱いている。

その後、クラブの活動の範囲は、後述のごとく拡大された。

ロータリーという名前は二つの理由から選ばれた。第一に、クラブが定められた場所で例会を開くのではなく、いろいろな会員の事業所を回りながら例会を開くこと。第二に、会員が生涯にわたって選ばれるのではなく、一年間の期限を切って選ばれること。すなわち、会員身分の限界が変化することによって、会員の交代が生じることが決められたからである。

クラブの名前をより明白な意義を持つものに変更しようと言う提案がたびたび出されたが、その名前で出発し、現在もそう言われていることから考えて、ロータリーという名前はそのまま引き継がれるべきである。

ロータリー

ここに、あなた方が今まで参加したことも耳にしたこともないような、変わったクラブが存在する。外部の人たちは入りたいと思うし、一度その門をくぐった内部の人たちは何とかして留まろう願う、あまりにも斬新で珍しいクラブである。

他のクラブは、取引を確保する手段としてクラブを利用する一部の会員の努力に対して、眉をひそめるが、彼らが重要視している規則は、それを厳守することではなくて、しばしばそれを破るように行動することである。他のクラブでは秘密とされることでも、ここではクラブ活動の一部であり、まさしくクラブが存在する理由の一つとして、公開されるのである。

ロータリークラブは仲間の会員たちを啓発し、彼らに次に述べる事業を達成させる役割を担っていることを、率直かつ明白に宣言する。彼らはあなたに成り代わって、あなたと同じ仕事をする。ロータリーは遠くの道も厭わない。あなたが同僚の会員に利益をもたらすために、友人や知り合い

のあらゆる事業にも影響を与えることを、ロータリーは宣言する。ロータリーにおける、相互扶助の精神は堅固なものである。

クラブ・クラブの会員身分は各々の業種の代表者一名に制限されており、これらの人たちは、シカゴ市の合法的な事業に従事している事業主、共同経営者または会社役員の間でなければならぬと云うのが、定款上の取り決めである。

クラブの会員を各々の業種の代表者1名に限定している理由は、会員個人個人が他の同僚たちのおかげで、事情と理由が許す限り、利益を享受することができるという理由によるものである。会員は、同僚たちに取り上げの便宜を与えたり、有利な影響を与えることを義務づけられているわけではない。それが可能なときは、そうするに越したことはないが、もし事業の性格上それが不可能でも、他の方法でクラブに大きな価値を証明することができる。

最初は、新しく選ばれた会員は、クラブの活動の目的と範囲に完全に精通していない限り、同僚たちから歓迎された上に、取引することを勧めら

れることに気付くと共に、統計担当者が、“提供した”“提供を受けた”“助言をした”“情報を提供した”といった、取引の記録を持っていることを知って、驚かされる。

しかし会員は、ロータリーで、このようなことよりもさらに多くのこと、すなわち、自分の町の市民福祉に関する活動や、ロータリークラブが自身で考えだした活動の分野に、積極的に参加する機会を見つけることができる。

そしてその上、クラブの社交的な側面から、多くの楽しみを得ることができるし、その運動体の性質上、他のクラブでは考えられないほどの親密な社交上の関係をもたらししてくれるのである。

これらの特徴は、さらに一段と、ロータリークラブを特徴的なものにしていき、活動に積極的に参加しようとするこれらすべての会員にとって、貴重なクラブとなっていくのである。

1908年5月現在、産業や商業のいろいろな分野の人たちで構成されている約200人の会員が、ロータリーを、我々の偉大なる町シカゴの経

済活動の強い原動力にしている。

ロータリークラブ

現在、事業のそれぞれ異なった分野からの代表者200人によって構成されている。

クラブ内に、事業のある分野の代表者がすでに存在している場合には、同じ分野の他の代表者は、その事業分野の会員の承諾なしに入会することはできない。

会員資格の適用は、事業主、共同経営者、会社役員のみに考慮される。

会員たちは、お互いに取り引きすることを求め合い、可能なかぎり、取り引きを彼らの会員仲間にまわすことが期待されているが、これは決して強制的なものではない。

入会金や会費は不要であるが、僅かばかりのクラブの経費は、小額の「罰金」の徴収によって賄われる。比較的短期間の間に、クラブは会員として、シカゴ市のあらゆる重要な産業や商業の代表者を擁することが予想され

が、その時点に達するまでの道のりは遠いので、クラブの会員は大変貴重な財産なのである。

例会は隔週毎に開催され、会員一名あたりの夕食代は1ドル50セント、「婦人の夜」は2ドルである。50セントの「罰金」は、失敗が注意される度に課せられる。

この広報はチャールス・ニュートン所有の原本のコピーだが、シルベスター・シールの代わりにハリー・ラグルスの名前が入っている。

…訳者注…

“正しいと確信したら、前進しよう”

ロータリーからの引用：

“ロータリークラブは仲間の会員たちを啓発し、彼らに次に述べる事業を達成させる役割を担っていることを、率直かつ明白に宣言する。彼らはあなたに成り代わって、あなたと同じ仕事をする。ロータリーは遠い道でも厭わない。あなたが同僚の会員に利益をもたらすために、友人や知り合いのあらゆる事業にも影響を与えることを、ロータリーは宣言する。ロータリーにおける、相互扶助の精神は堅固なものである。”

以上の理由から、もし塗装や室内装飾関係の仕事があれば、どんな仕事でもお申し付けいただく機会をお待ち申し上げております。この閑散な冬季の期間中に、お申し付けいただいた注文に関しては、特別に注意を払っ

てお引き受けすることを、確約いたします。

J.P.Sullivan

塗装・室内装飾請負

Sullivan & Langston Co.



そこで、クラブが設立された4年後（1909年）の会員名簿の中では、次のように宣言している。

「ロータリークラブは仲間の会員たちを啓発し、彼らに次に述べる事業を達成させる役割を担っていることを、率直かつ明白に宣言する。彼らはあなたに成り代わって、あなたと同じ仕事をする。ロータリーはどんな遠くの道も厭わない。あなたが同僚の会員に利益をもたらすために、友人や知り合いのあらゆる事業にも影響を与えることを、ロータリーは宣言する。ロータリーにおける、相互扶助の精神は堅固なものである。」

重要事項：毎回の食事の量を確定し、会員相互で取引されたビジネスの量を確認する必要がある。この郵便物を直ちに返送すること。あなたが取引したビジネスを立証する記録をつけて、その会員の名前を示した記録を大切に保管しておくこと。

次の例会に参加しますか

はい

同伴者数

いいえ

会 員 報 告

前回の例会以降、

私は | | 人の会員から | | 件の取引を提供された。

私は | | 人の会員について | | 件の取引に影響を与えた。

私は | | 人の会員に | | 件の取引を提供した。

日付 | |

署名 | |

クラブ統計係 取引交換表

ロータリークラブ

日 付

会 員 名	職 業	提供した	提供を受 けた	紹介した
F.W.Adams				
Wm.G.Adkins	会計監査人			
E.P.Allen	バルブ製造			
B.E.Arntzen	葬儀屋			
J.J.Aston	新聞発行			
F.L.Batmen	大陸横断運送			
G.E.Baxter	内科医			
M.M.Bear	彫刻家			
L.Beauregard	金属研磨			X
C.R.Boak	運送業			
Wm.Boeppler	音楽指揮			X
B.Bong	顔縁			
M.Bowbeer				X
S.B.Brierly	ホテル補助			
Wm.Buekham	チューインガム			
H.G.Carnaban	デザイナー			
D.M.Carter	特許弁理士			X
A.Carqueeville	石版印刷			
M.H.Cazier	衣料用ハンガー			
M.A.Chamberlain	写真配布			
R.F.Chapin	銀行家			
M.C.Clark	雑誌発行			
V.B.Clarkson	書籍			
J.J.Comstock	農場			
J.O.Craig	職業斡旋			
H.A.Crofts	紙・木箱製造			X
C.L.Cruver	広告用品			X
B.L.Darby	ピクルス製造			
F.C.Dellone	私立探偵			X
A.A.DeWitt	ソーダ水製造			X

ロータリアン各位殿

1911年2月17日

ロータリークラブの新しい委員会が、先日採択された定款に基づいて承認されました。

取引交換会の責任を負い、かつその準備をすること、そのような会合が成功するように援助すること、クラブ会員間の取引交換を活発化することが、取引交換委員会の義務です。

ミラー会長によって、今年度上半期に指名された委員は、アルフレッド・パッカー委員長、フランク・コリー、ジェームス・クレイグ、グレスナー、アイラ・オマレー、フレッド・ロズバック、ウイリアムソンの各会員です。会員の取引上の利益を保護するために、クラブからこれ以上の人は選び得ない、最高の能力を持った委員会です。新しい執行部の下で、クラブの

最初の例会は、この委員会が担当して、2月23日木曜日の夕刻、ストラットフォード・ホテルの豪華な宴会場で開催されます。来訪者は7…30から暫時着席できますが、諸君たちは、友愛委員会が手伝ってくれる、例会前の社交と取引上の知己を増やす機会を利用するために、6時30分かそれ以前に来る方が得策であることを申し添えておきます。

今夕の標語は、「共に獲得し、共に助け合おう」であり、この方針と、会員たちから出された他の約束事に関する、非常に生き生きとした取引上の話し合いが行われます。ここに取引交換委員会は、木曜日の夜に、意外な出来事が我々を待ち受けているという通知を發送する次第です。

参加して、取引と喜びの機会を利用してください。

先週の金曜日にボーゲルサングで開かれた「取引交換昼食」が引き金になって、その場で、数多くの取引交換が成立しました。火曜日のボーゲルサングの「資金調達昼食会」は、熱のこもった、有益で、非常に興味深い行事でした。ロータリークラブのすべての会員は、これらの会合の機会を利用する資格が与えられているのです。昼食会の時間は、火曜日と金曜日の

昼、12時30分から1時30分までです。あなたがそれに参加すれば、大歓迎を受けかつ有益であることは間違いありません。

まもなく発行される「ナショナル・ロータリアン誌」の広告の目録は、3月10日に締め切られます。至急に、全米ロータリークラブ連合会幹事、ペリーに、申込書を送ってください。

目録および新しい役員と委員会が記載されている印刷物は、会員名簿の中に挿入物として同封されています。

幹事ホーレス・デイビソン

1909年の方針

今年度の私の方針は以下の通りです。

1. 私は、あなた方に素晴らしい企業経営能力を与えるつもりです。私は、会員数を増やすために、最善を尽くすつもりです。私達が素晴らしい人を各々の分野から発見すると同時に、会員を増やします。会員選考委員会が、申込者から申し入れのあった人について、多くのことを知ることを期待するのは、ほとんど不可能に近いので、すべての会員は、会員に接近してくる人たちに対して、細心の注意を払うべきであると考えています。我々はクラブの水準を引き上げなければなりません。

2. 会員間の取引交換量は、非常な速さで伸びています。もしあなた方が、返信はがきを点検して、会員間で処理された取引の量を見たら、驚くに違いありません。提供したり提供されたりした量は、2週間に15種類にも及ぶ注文を超えています。

3. 実行可能な限り、会合のたび毎に会合の通知を書き、会合が成功するためには十分な責任をとり、義務を果たしてくれる、異なった委員長

を指名する予定です。

4. 例会を興味深いものにしてくれる人を望んでいます。時には有名な公的な卓話者による話によって、例会を開くたびに才能のある人を育てるように努めたいものです。クラブの大多数が賛成ならば、我々の例会の正式なものしたいと思います。

5. 拡大作業について。すべての大都会にロータリークラブを持ち、シカゴに本部をおいた全国組織を持つことが理想的であると信じる一方で、これに関して、注意を払いながらいくべきであると信じています。この問題は理事会において、すべての角度から協議されるべきです。私はこの作業について責任を取りたいとは思わず、委員会の責任の元で、クラブの考え方に従った計画を提出すべきです。

6. まったく利己的な動機から、最善の成果を得ることができるとは信じていないので、クラブが一定量の市民に対する活動を取り上げるべきだと確信しています。

7. ロータリーにとって、成功した年になることを希望しています。我々

は肩を寄せ合って活動しようとしています。我々は、我々の事業を通じて、お互いに助け合っているようにしています。我々はお互いに知り合いを深めようとしています。そして我々全員が善き友人になろうと
しているのです。

ハリー・ラグルス

塗装と室内装飾を請け負っていたある初期会員は、彼の会社の名前を特徴付けるために、この言葉を引用した上で、挨拶文を付け加えている。

「以上の理由から、もし塗装や室内装飾関係の仕事があれば、どんな仕事でもお申し付けいただく機会をお待ち申し上げます。」

毎例会に先だって、彼らが他の会員から提供された取引件数と、他の会員に提供乃至は影響を与えた取引件数を「クラブ統計係 club statistician」に報告するために、会員たちにあてがわれた返信用の郵便物が、資料や歴史上の証拠として、その実態を物語っている。クラブに常設された役員で

ある統計係は、常に、印刷された取引交換表の連続記録を持っていた。(図を参照のこと)

最初の会員名簿(1905年)には、30人の会員の名前が載せられている。最初の年に、クラブの極めて特徴的な多くの事柄が展開していった。会計のハリー・ラグルス **Harry L. Rugles** は、合唱の実行を開始し、それ以来、合唱は永遠に続けられている。自動的な点呼の実行だけではなく、グリーククラブの基礎は最初の年に作られたのである。ハリスの提案によって、彫刻家の会員モンテグ・ベア **Montague M. Bear** がクラブのエンブレムとしてロータリー・ホイール(埃をたてて回っているワゴン・ホイール)をデザインした。最初の年に、会員たちは互いに他の会員と職業を通じてよい知り合いになるために、様々な事業所に、午後の散歩をした。新しい会員たちが、知己と親睦を深めようとして、事業所に訪ねて行き易いように、委員会が組織化された。歯科医のウイル・ネフ博士が例会における「公式歓迎人」になった。

2年目は、会員の増加と、「名誉会員」の承認が特徴的である。最初の定

款と細則が、1906年1月19日に採択された。この時点ですでに、クラブは、会員の事業所を持ちまわりしながら例会を開くには、大きくなり過ぎていた。最初の昼食例会は1905年6月の第2木曜日に、シャーマン・ハウスにおいて開催された。彼らはいろいろなクラブやレストランで持ちまわりしながら例会を開催していた。1906年早々に、例会においてアルコール飲料を出さないことと、きわどい話をしないことが決められた。酒場経営者が、入会を拒絶されたが、1908年の会員名簿にはアルコール蒸留業者の名前が出ている。1911年1月12日は新しいシャーマン・ホテルの開設日であり、この日に、クラブは新しい出発を記念して、最初の宴会を開催した。クラブは1913年の秋に、シャーマン・ハウスに事務局を開設し、同時に、数年続いていた夕食例会を中止して、毎週の昼食例会に切り替えた。

これらの初期の年代におけるクラブの安定した成長は、その二つの重要な目的が実業界に与えた、幅広い魅力に起因するものであった。友情と親睦への招待は、競争による利潤追求という、冷え冷えとした非人間的な付

き合いに反発している社交的な実業家にとっては、魅力的なものであったし、競争相手ではない他の実業家との友情に基づいた、有利な取引上の付き合いへの招待は、大きなグループにとって極めて魅力的なものであった。利益に対する魅力は高まり、親睦はこの目的を促進するために開発されたものであった。このようにして築き上げられた「利益のための親睦」は、後に自ら終局を迎え、例会は、気晴らしと、くつろぎと、若々しい騒々しさという、歓迎すべき機会をもたらすようになってくる。ここには少年時代の心に戻った素晴らしい何かがあり、それは喜びと利益が組み合わされた独特なものである。ハリスは次のように述べている。「ロータリーは、利益を得るために必要な刺激と幸せと生きがいを、多くの中年の人たちに与えた。」

2. シカゴ・ロータリークラブの成長

シカゴ・ロータリークラブが、最初の目標と活動をゆるやかに拡張した

り部分的に修正しながら、次なる発展を目指したことは、会員が増えたり役員や正式な組織が変更されたことよりも重要なことだと、調査委員会は考えている。規則正しい会員増強の動きが起こった結果、会員数は1907年の年度始めの87名から1908年の年度始めには134名にまで増加した。最初は、会費はまったく徴収されていなかったが、当時、年間12ドルであった会費は、二度にわたって値上げされ、最初は25ドルであり、戦後は現在と同じ50ドルになった。ハリスやシールたちは、新たな会員を確保することやこの活動を拡張することに、積極的な関心を抱いていた。他の都市への拡大については後述する。ここでは、シカゴ・ロータリーの会員たちの動きが、新しい活動と目標に発展する役割の一部をなしたことに気づけば、それで充分である。ドナルド・カーター Donald M. Carter の協力の下で、ハリスは、部外者の目を引く意味合いを含めて、市民に対する活動を提案した。カーターは、会員たちが受益者にならない組織を作することを模索し、この考えに基づいて定款を変更するきっかけを作った。

奉仕理念の高まり

これらの努力は、最初は、彼らの間から浮かび上がってきた小さな反応に過ぎなかったが、最初の漠然としたものがだんだんはつきりしてきて、後には奉仕理念が活動を支配するまでになってきた。この新しい概念の少なからざる部分は、利益と言うまったく利己的な動機を持った実業家の組織に過ぎないという、クラブ外部からの批判に起因するものであった。創立者の考え方は、クラブは決して、会員間の事業を発展させるためにだけ存在することを意図したものではなかった。ハリスは楽しみや親睦に関心を持つ一方で、最初から、クラブが地域社会全般に対して、市民としての価値のある機能を果たすことを望んでいた。しかし彼の同僚たちの大半は、別の考え方を持っていたので、彼らを説得するのは並大抵のことではなかった。

彼は、市民に対する奉仕を一般的に話すよりも、なにか具体的な計画を立てる方が、会員にとって興味があるのではないかと考え、達成しなければ

ばならない目標を具体的に決めることにした。彼は商工会の会合で、ルーブ地区に通行人用の公衆便所の施設がないことが議論の対象となっていることを知って、この市民のニーズに、シカゴ・ロータリークラブの活力を発揮できないだろうかと考えた。会員たちがこれに反応したので、クラブは、1907年に、24名余りの市民団体の代表者に出席を要請して、グレート・ノーザン・ホテルで会議を召集した。ロータリー主導の直接的な成果として発足した、公衆便所設置連合社会委員会は、商工会の前事業マネジャーであり、シカゴ計画委員会の次期マネジャーのウォルター・ドワイト・ムーディを委員長に指名し、委員会は毎月1回のペースで2年間にわたって開かれた。その計画は、各々の店が適正な設備を備えているとして、その土地にあるマーシャル・フィールド社の反対をうけたが、委員会の強い圧力によって、1909年に、市当局が市役所の公衆便所を設置するために、20,000ドルの予算を当てるといふ成果をもたらした。

この成果こそ、直接的な利益ではなく、利益への道として奉仕を強調する立場をとって、事業と市民生活の中で高い奉仕の理想をかかげた、実業

家と専門職業人の組織としてのロータリークラブの中にゆつくり具体化していった、奉仕理念の始まりであった。この変遷に巻き込まれていった興味深い心理過程を知るために、理念の発生を簡単に追跡してみたいと思う。1908年に、消費者に対するサービスを強調する、販売学という新しい分野の学問の教師であるアーサー・フレデリック・シエルドン Arthur Frederick Sheldon が、クラブの会員になった。彼は直ちに、クラブの会員増強委員会のポストに就任した。委員会はその問題をきっちり試算し、クラブが800人の会員を擁することが可能であるという予測を立てた。シエルドンは会員増強の活動を推し進めると同時に、実業家としての機会を生かして、顧客や世話になってる人たちに奉仕すべきであることを、何回かにわたってクラブで演説した。この考え方は、アーサー・ホルマン Arthur Holman、ロブ・デニー Robt. Dennit、エルンスト・スケール Ernst Skeel、ジェームス・ピンカム James Pinkham などの、シアトル・ロータリークラブの創立者たちによって、さらに広められていった。

シエルドンは、販売学を教える学校の授業の中で、**He profits most**

who serves best” という言葉を使った。彼は、1910年に最初に開かれた、ロータリー全国大会の閉会式の宴会で、この言葉を使ったが、当時、彼の言葉に関心を抱いた人は誰もいなかった。しかし、1911年のポータランド大会において、シアトルのグループは、同じ考え方を持った宣言の原案を提案した。演説を終えるに際して、シエルドンは再びその言葉を使った。その言葉は直ちに熱狂的な歓迎を受け、ピンカムの動議によってロータリー宣言の中に書き込まれることになった。

この新しい理念は、直ちに会員たちの想像力を捕らえて、クリスマス・バスケット、交通信号の必要性の研究、市衛生局に対する適正予算運動、そして最も象徴的なロータリー運動を他の都市に拡大する努力などの、様々な奉仕活動につながっていった。ポール・ハリスは次のように述べている。

ロータリー運動が、倫理運動であることが、このようにして世の中に知

れ渡ったとき、今まで存在しなかった職業分類制度の真の意義が理解されたのである。我々は、予測することなしに、未来永遠に使うことができる機械の一部を、最初に作り上げたのである。今我々は、職業分類に基づいたロータリアンが、実業と専門職種における自己滅却の奉仕理念の提唱者の役割を果たしている姿を、目のあたりにすることができると。その上、我々の地域内のあらゆる方向に広がりながら、各々のクラブ特にシカゴ・クラブが、大勢の会員を得るために努力したばかりでなく、我々が成し遂げることができたと同じように、世界中のたくさんのクラブが努力を続けてきた。我々は地域社会を良くするために、何をすれば効果的かということを知っていたので、ロータリーの組織と共に前進して行けたのである。

奉仕理念が明確に具体化されると、その活動は直ちに、会員たちが親睦と取引を高めようという排他的な考え方にうつつを抜かすべきではないという、道徳的精神的な様相を呈してきた。これらの目標は、奉仕というス

ローガンに置き換えられるものではなかったにもかかわらず、この新しい概念は、会員たちの考え方や話題や行動にとつて、だんだん重要なものになってきた。ロータリーはかつて商業組合だったことはなかったし、現在でも、福祉団体や市政改善クラブではない。新しい奉仕理念は明らかに精神的なものであり、多分に神秘的なものでさえあるが、黄金律を事業に適用する努力をしていることから、当然のことながら新興宗教ではあり得ない。この分野も、他の分野の一般的な例と同じようなものであり、多くの精神的な指針が一定のあいまいを持っているのと同じように、奉仕理念もまた、他の精神的な指針と同じような長所と弱点の双方を合わせ持っていた。

その長所は、自分の指導方法の正しさについて、自ら精神的な安心感を与える必要がある場合や、誰でも一度は考えたことのあるように、理念という大義名分の下で実行しなければならぬ特別な行為が、行動に移されるのを激励する場合に、会員たちがいつでも使えるような、心地よい言葉が見事に組み合わせられていることである。その弱点は、クラブが町の政治

に巻き込まれたり、特別な理由を持った活動の代理人に変えさせられることなしに、それを具体的な行動に移すことの難しさである。奉仕理念が強まってきた時期から、全体のロータリー活動を通じて、奉仕理念のこれらの長所と弱点の割合を追跡することは可能である。

奉仕理念のこのような特徴によって、ロータリーは、更に一層厳密な言葉で定義しにくいものになってきた。「親睦と利益」は、合理的で現実的な人間の評価である。しかし、「奉仕」は、ともすれば、定義も特定もされることのない言葉であるために、頻繁に使われる「楽しい」とか「愉快」といった言葉のような、形の無く、ぼんやりとした、非現実的で、理想主義的で、神秘的な感情が集まったものを連想させる言葉である。この点に、より深く考えるロータリアンが印象付けられたような、思考と目的に確実な混乱を招いた根源があるのである。その混乱は、奉仕と親睦と利益の間の関係を明確に公式化することが難しいことから、さらに悪い状態になってきて、ロータリーを定義するための努力を象徴する、あいまいさと明らか
な矛盾を、白日の下にさらしたのである。

セントルイス大会の決議34は、次のように述べている。

ロータリーは、自分のために利益を得たいという欲望と、他人のために奉仕をしたいという欲望の間に常に存在する矛盾を和らげようとする、人生哲学である。

元国際ロータリー会長である、フィラデルフィアのグレン・ミード **Glenn Mead** は、サンフランシスコ大会で冒頭に述べている。

ロータリーは、利他主義の心を持って、経済的な目標を達成する方法と、キリスト教の教えと社会正義の心を持って、事業の運営に影響をあたえる方法とを模索する職業人の組織である。

1年後、別の元会長、アレン・アルバート **Allen Dalbert** は主張して

いる。

ロータリーは、競争を排除するように考えられた方法に従って選ばれた個々の会員が、奉仕の新しい能力を開発することに専念する、職業人のボランティア組織である。

さらに、イギリスのロータリアン、ウィリアム・モファット **William Moffat** は次のように述べている。

それは人生の歩み方であり、心の態度であり、魂の状態である。

ワシントン州ホークアム・クラブの元国際ロータリー副会長、フランクリン Frank Lamb は、ロータリーを次のように定義している。

人々の間に、より親密で、より能率的で、より道徳的な関係の増進を図るための相互の親睦。

それらの定義を変えたり、その根底にある考え方の混乱を解決しないことよって引き起こされた諸問題については、報告書の後半において論議するつもりである。この報告書に与えられた制限内で、シカゴ・ロータリークラブの成長に関する毎年毎年の詳しい話をすることや、クラブの拡大に際して指導的立場をつとめた数々の指導者たちの名前を記録することは不可能である。従って、この調査によつて考えなければならない重要な事柄は、確実な流れと発展が、前向きに設定されていなければならないということである。前者は、国際的な活動の発展という形で、シカゴ・ロータリークラブが果たした役割である。ハリスは、1906年以来、最初にシカゴで作った組織の考え方を、他の都市にも広げていこうと考てきた。ただ注目に値する事実は、彼は何年経つても、シカゴ・クラブの大勢の会員

の中から、拡大作業を支持する会員を、ほんの僅かしか見つけられなかったことである。

1909年には、シカゴ・クラブはすでに300人の会員を擁していたが、記録によれば、古くからの会員たちは、古き良き時代の親交や親睦を懐かしみながら、過去の回顧にふけっているに過ぎなかった。実のところ、ハリスが会長として拡大作業に熱中した余り、その活動報告のために例会時間の大半を費やしたことや、シカゴ・クラブに財政上の負担を要求したことなどの理由から、他の何人かの会員たちの反感をかっていた。1910年1月の選挙は、拡大問題を争点として争われたものである。

単に指名委員会 **Nominating Committee** が選択した候補者を批准するという普通のやり方の代わりに、会員たちの興味をかきたてるために、会場の中に二種類のカードを置くことが、1908年1月に入会したペリーから提案された。候補者は両方とも拡大作業に反対であり、当選したラムゼー **A. M. Ramsay** はさらに強く反対していた。彼は、選挙に負けたペリーを新しい拡大委員長に任命したが、明らかな意図を持ってなされ

たペリーの任命は、彼とハリスの双方にとって不愉快極まりないものであった。

この時点から、ハリスは、その時までには15の他クラブの設立につながった努力に対して、シカゴ・ロータリークラブから支持を受けようという望みを、ほとんど断念せざるを得なかった。しかし、政治的な歴史の一端としての興味深い結末は、ペリーがハリスと密接に連絡を取り合った結果、彼はそれがシカゴ・クラブだけの責任だとは感じなかったにしろ、この拡大プログラムに対して、皆を味方に引き入れることに成功したことである。それに応じて、彼は、拡大作業に対する財政問題のためにすべての既存クラブの連合体を作って、すべてのクラブ活動のための情報センターとして奉仕することを提案した。そのような連合会を結成するための全国大会の計画を作るために、ハリス委員長、ペリー幹事よりなる7名の委員による合同委員会が作られた。

組織委員会からの呼び出しは、シカゴ・ロータリークラブから出された。委員会は、ニューヨーク、サンフランシスコ、ロサンゼルスクラブの会長

とシカゴ・クラブの拡大委員会からなる4名の委員で構成されていた。

1910年8月中旬、全米ロータリークラブ連合会 **National Association of Rotary Clubs** と呼ばれた最初の大会が、シカゴのコングレス・ホテルで開催された。当時は、合計約1,800人の会員からなる16クラブであった。それぞれのクラブには、50人の会員ごとに1名の代議員が割り当てられた。ペリーは委員長に指名され、定款が採択された。

ハリスが会長に、シアトルのロブ・デニー **Robt.A.Roy Denny** が副会長に、シカゴのエルマー・リッチ **Elmer A.Rich** が会計に選ばれ、九つのそれぞれ異なったクラブからの9名によって理事会が設けられた。ペリーは、新しい組織の幹事になるように説得された。1911年早々に、シカゴ・クラブと全米連合会は、1ヶ月あたり50ドルを払って速記者を雇い、フアースト・ナショナル銀行ビルに共同の恒久的な事務局を設置した。今や、ロータリーは確実に全国的な活動となった。

方針に大きな影響を与える、ロータリーの次なる国内的、国際的な拡大と、シカゴ・ロータリークラブの展望については、次の章で議論を闘わし

たい。クラブの発展のもう一つの要素についても、この報告書の後の方でされる幾つかの提案を理解するための基礎として、簡単に、要点を説明しておくべきであろう。単に理事会の年次報告書を要約したり、シカゴ・ロータリー歴史委員会によって収集された材料を再生したりすることを試みるのではなく、この調査の目的のために、クラブ活動が発展していく流れを観察することが重要だからである。拡大作業も、奉仕理念の強調も、親睦と取引という元来の目的から関心をそらすには至らなかったし、プログラムも、会員たちによる自分たちの事業や専門職について話をするのが基本であった。1908年の会員名簿によって、会員たちは初めて順序良く並べられた。この名簿は、より容易に交友が図られるようにと、シールによって提案されたものである。最初のビジネス・シヨウが1908年に開催され、会員たちは、資金調達委員会 **Ways and Means Committee** が会合を開いていたボーゲルサング・レストランで、直ちに商品を陳列し始めた。このグループは、プログラムを計画するために、もともと毎週土曜日の昼に、ユニオン・レストランで会合を開いていた。

ラムゼーの執行部（1910年）の下で会計幹事を務めたウイル・ネフ **Will R. Neff** 博士 **Dr. Will R. Neff** は、1920年まで連続してこの役職に就いていた。彼の幹事および会計としての務めぶりは、他の役員たちが毎年交代するにもかかわらず、クラブ方針に対して連続的に影響を与える貴重な存在であった。1910年に、セント・クリソストム教会の牧師ノーマン・ハットンは、彼の教会でしていた慈善事業をロータリー・クラブに引き継いでもらい、40個のクリスマス・プレゼントの籠が配られた。1911年に、ウイリアム・ミラー **William S. Miller** がこの慈善事業を担当したが、翌年には、それ以来この活動を指導し続けることになるビー・オー・ジョンズ **O.B. Jones** に、この仕事が引き継がれた。

1913年には、クラブは恒久的な事務局を、無料でシャーマン・ハウ스에設置した。その年は、また、シカゴ・クラブが初めて、グラスゴーのハイムブライン少佐とマンチェスターのトマーソンを海外の代議員としてもてなしたという事実も重要なことである。

大戦の最初の年に、クラブは例会毎に、”**God save the King.**”と、**Die**

“wacht am Rhein” を歌って、中立性を示す方法を模索し続けた。戦争は会員間の愛国心を奮い立たせたばかりでなく、アメリカの産業や農業や商業の大きな発展を引き起こした。シカゴのロータリアンは新しい機会を見逃すはずはなかった。印象的なビジネス・シヨウが、エドウィン・バーンズ Edwin C. Barnes の世話によって、1915年に計画された。クラブはレコード・ヘラルド紙の特別号を買い占め、約200名の会員が展示に関する小枠を分担して、新聞広告を実施した。記録によれば、約30,000人の人々がその催しに参加したと述べられている。ラグルスは会員名簿のコピーを一万部印刷して、来訪者に配った。この特別号の代金は、広告によって支払われた。

会員名簿は、正直さと誠実さが証明されたロータリーの会員であるメーカーや商人や専門職の人々のリストとして、非ロータリアンに配る意図を持った広告の目的で、長期間にわたって継続的に使われていた。1915年にクラブは、クラブの265人の会員間で約1,750,000ドル相当の価値に相当する事業が交換されることを試算して、取引促進委員会

Business Promotion Committee を設置した。これは、クラブがそのような委員会を設置した唯一度の機会であったが、そのような活動は、組織を不都合な外部からの批評にさらす対象になるといって、古い考え方によって、表面的には中止せざるを得なかった。

1915—16年はまた、他の分野におけるクラブ活動の進展にも、注目すべきものがあつた。戦争景気による上げ潮は、クラブ活動における新しい活力と魅力による満足感を、確実に会員にもたらすことでその役割を果たした。会員間の亀裂は、シアトル・ロータリーの創立者の一人であり、当時はシカゴ・ロータリーの会員であつたロブ・デニーの、会長選挙を巡る失敗によって引き起こされた。彼は、アングスターの下で副会長として、すべての新しい会員たちを集めたグループを作って、新会員たちに、クラブにより積極的な興味を持たせるのに役立つ方法を教えるために、そのグループの会合を頻繁に召集していた。亀裂は、ハリー・ウイルキー **Harry C. Wilkie** を折衷案に基づいた候補者として会長（1916年6月—1917年5月）に選挙することによって修復された。ハーバート・アングス

ター Herbert Cangster 会長は、より大きい関心と活動を刺激する方法について、委員会やクラブの多くの会員に対する約束を、可能な限り実行に移した。親睦を推し進めるもう一つの道具は、会員のファースト・ネームを呼ぶ代りに、「ミスター〇〇」と呼んだ会員から、10セントの罰金を取ることであった。この時期には、ファーストネームとニックネームが共に会員のバッジにも書かれていた。昼食例会は夕食例会よりも頻繁に開かれ、同様な出席クレジットが、両方の例会に与えられた。夕食例会はその後まもなく中止されたが、夕食例会の出席クレジットは、1922年まで放棄されることはなかった。

1915年に、クラブは初めて例会のゲストに、アバディーン卿夫妻を外国の貴族として招いた。英国領事代理はこの目出度い機会に先立って、適切な威厳と作法の程度を知らせるために話し合いをしたが、ジョセフ・ハーン Joseph M.Hahn がジングルベルを演奏し、卿が4回もアンコールを求めたことで、すべての上流社会のしきたりは消え去ってしまった。実用的な冗談と陽気な親睦は、この時期におけるほとんどの例会の特徴とな

っていた。1915年のその他のプログラムは、アンナ・ヘルドとブランチ・リングに特徴付けられる。リサイタルはバイオレット・ポーネットによって後援され、700ドルが、奨学金として、彼女が音楽の研究を進めることができるように贈呈された。下町のいろいろな団体と、親密な付き合いが築き上げられていった。下町の代表者たちは、ネフ博士によって準備された、市当局の高官が全員出席した注目すべき市民プログラムに参加した。同じ年には、クラブの音楽隊が設立されたり、ズーやパウパウへの遠足が計画されたり、ボーリングへの興味が高まった。クラブ内のボーリング部は1916年に創立された。

1917年、アメリカ合衆国の参戦に伴って、元シカゴのロータリアン、ブリッグスによって創立された国家愛国組織、アメリカ保護連盟 **American Protective League** にクラブ会員の約1/3が加わり、愛国的な活動やプログラムなどによる後援が行われた。ラウンド・テーブル **Round Table** は、毎日の昼食会のグループとして、1918年6月20日に組織されたが、このグループはかつての資金調達委員会が発展したも

のであり、現在も引き続いて存在している。

1919年8月2日に、ロータリー・ジイレーター **ROTARY CYRATOR** の最初の配布が始まった。その名称はラッフス・チャピン **Rufus F. Chapin** 会長の発案によるものであり、ロータリーのスペルを後ろからと前に綴った新語である。クラブは、これまでの広報誌を” **The Yell**”と呼んでいたが、ジイレーターが最初の正式な週報である。チャピンの執行部は、多くの催し物や劇場でのパーティー、ダンス、カード・パーティーを催したことで特徴的である。会長が反対したにもかかわらず、ボーイ・スカウト募金運動が了承された。

1919年に、シカゴにもっと多くのクラブを設立したいという要望に対して、最初の深刻な議論が起こった。その問題は、シカゴ・クラブの活動を分割することに対する反対があまりにも多かったので、行動を起こす時期が来るまでは、棚上げにした形をとると言うことが決定される。1921年にまで持ち越された。この時期における一番目の活動が、アメリカ保護連盟の愛国心に満ち溢れた誠実な人物である、キール **W.F. Kier** 会長（1

919年6月—1920年5月)によつて進められた。” *Be There!* のスローガンの下で、昼食テーブルにおける25人の出席指導者を通じた活動として、活発な出席キャンペーンが推し進められた。

1920年に入つて間もなく、クラブの運営はアルフレッド・パッカー *Alfred A.Packer* 幹事に、引き続き2人の事務長、ツアットン、モイヤーの両氏に任せられた。ハロルド・ハーヴェイ *Harold B.Harvey* 会長の下で、クラブは1920年8月に、3年間にわたつて卸売りおよび小売りの書籍販売を行い、上海ロータリークラブの創立会員であり、最初の名誉幹事を勤めていた、中国の上海からアメリカ合衆国に戻つてきたジョージ・トレッドウエル *George L.Treadwell* を、常勤の幹事として獲得した。トレッドウエルは、それ以来現在もなお、シカゴ・ロータリークラブの幹事を続けている。

1921年の春、ハーヴェイ会長の指導力の下で、その後2年間続いた、会員のタレントによる最初の吟遊詩人とボードビル劇ショーが、シカゴ少年週間の資金を集めるために始められた。シカゴ少年週間 *Chicago*

Boys, Week を始めたのも、準備をしたのもシカゴ・ロータリーであり、1924年にシカゴ・ロータリーによつて非営利法人としてつくられたシカゴ少年週間連盟 **Chicago Boys, Week Federation** が財政と運営を預かったが、自分の力で歩むことができるようになるまでは、故ミルトン・マック **Dr.Milton H.Mack** 博士の指導の下で、ロータリーによつて運営されていた。これらのショーは、オーケストラホールで開催され、2年間にわたつて少年週間の財源となつた。

ハーヴェイ会長は、彼の在職中、州議会によつてイリノイ大学にだされる数百万の費用を、イリノイ州議会によつて2年毎に出される予算に加える運動を、州全体にわたつて、イリノイ州のロータリークラブと共に指揮を取りながら実施した。

トレッドウエル幹事は、新鮮な考え方と研ぎ澄まされた感覚を事務局にもたらすと共に、1922年の不況に際しても、15年間にわたる卓越したクラブの指導力と業績を背景とした、組織や管理や成果の継続的な計画や委員会マニュアルを含む、シカゴ・ロータリークラブの15,000語に

も及ぶ調査報告書を作り上げた。彼は、夏の間ずっと、ポール・ウエストバーク Paul A. Westburg 会長の協力を得て、報告書の作業に取り組んでいた。1922年9月11日に、ウエストバーク会長と理事会は、その調査報告書と、考え付く限りの美辞麗句で飾った推薦書によって承認した。

調査は来るべき年に向かってクラブを指導していくための、七項目から成る一般的な目標が掲げられており、これらの目標に向かって、クラブが進むべき進路が、初めて示された1923年度幹事年次報告書として要約されていた。

最初の目標は、役員や理事会を通じてではなく、個々の会員を通じたクラブの活動の拡大であった。クラブ活動の分野を拡大すること、増加したすべての活動家たちの数を登録すること、ロータリーの諸問題に対する新しい方向付けを考え出すことが、満足すべき発展につながると報告されていた。理事会は、この新しい方向付けの結論を、セントルイスのロータリー国際大会に、今なお有名な、その大会の「決議34」として決議すべきであると、チャンピオンに提案した。

クラブ計画に述べられている2番目の一般的な目標は、会員の能力を高めることと、委員会活動を成文化することであった。より慎重な入会申込者の調査は、ずっと以前から会員選考委員会によって実施されていた。以前は、毎年約一〇〇名の会員の退会に対して、一〇〇名の新しい会員が補填されていたが、1922—23年には、僅か54名が退会して59名の新しい会員が承認された。職業分類の矛盾も調査されて、最小限にまとめられた。クラブ委員会も再編されて、時間励行と出席記録の実行が始められた。委員会は明確な義務と役割分担が設定されて、現実に機能していないものは廃止または統合された。一定の委員会、例えば少数のグループによるアスレチック活動は、計画を尊重しながらも自立することに基本が置かれ、そのような活動に参加している会員の割合が少ないことを勘案して、少数のグループにしか興味がないような特定の活動には、クラブの一般財源を使うべきではないという方針が、理事会によって支持された。

新しいクラブ計画の3番目の一般目標は、理事会は全般的に、もっと会員に対して敏感に反応することであった。すべての他の委員会の委員長で

構成された、新しい資金調達委員会が作られた。この機関は、会員たちの考え方の情報センターとして役立つと共に、クラブ内の親密な付き合いを推し進めるのに役立つた。

4番目の目標は、自分のクラブに対する個々の会員の責任をより強調する姿勢と、自分の職業分類を高い道徳的基準に引き上げることであった。この目標を追求するために、苦情処理委員会は、考え方の不満に対して、大きい活力と機敏さを持って活動した。

5番目の目標は、国際ロータリーに対するより身近な協力であり、6番目はロータリー・スピーカー・ビュロー **Rotary Speakers, Bureau** を組織することであった。そのようなビュローが組織されて、他のロータリークラブを含めたいろいろな団体に、一年間の間に50回のスピーチをするために、ボランティア会員が派遣され、卓話者たちはロータリーの物語を中心にした話題を提供した。7番目の目標は、1925年に、20周年記念として、シカゴにロータリー国際大会を誘致する計画を立てることだった。委員会は、この件について研究するように命じられたが、193

0年に25周年記念をしたという要請があり、そのように決定された。

この時期における、クラブの活動に含まれている広い範囲を知ってもらうためにも、幹事が初めて作った年次報告書を、ある程度詳しく要約する必要はあるかも知れない。若干の変更を除いて、ここで指摘したそれぞれの委員会は、現在に至るまでその役目を果たし続けている。常勤の、また経歴深い幹事としてのひらめきから、クラブの定款細則は、時代遅れの条文を削除すると共に、標準国際ロータリー定款細則の文言や、新しいクラブ計画と整合性を持たせるために大幅な改訂が行われた。これは、この年における管理委員会 *Administration Committee*（現在は規定委員会 *Rules Committee* と呼ばれている）の主な仕事であった。仲裁委員会 *Arbitration Committee* は聴聞をまったく行っていなかったし、アスレチック委員会は、他の都市のクラブと試合をする野球チームを応援したり、毎週のボウリング部や月例のゴルフ部のトーナメントを応援していた。自動車委員会は、青少年活動やシカゴを通過する地区大会や国際大会の代議員たちの輸送実施手段となっていた。青少年活動委員会 *Boy's Work*

Committee は年間に12回の会合を開催した。非営利法人としてシカゴ少年週間協会を発足させ、1932年に至るまでは、オーケストラホール・ショーの利益から毎年それに寄付をすることによって、その活動を支援していた。シカゴ少年週間は、1932年以降はシカゴ青少年週間として市民に親しまれている。なお青少年活動委員会はユースホステルの計画を検討したり、シカゴのすべての青少年組織の活動を調整する役目を引き継ぐことを、シカゴ社会協議会に納得させた。最初のシカゴ少年週間は、1921年5月に開催され、シカゴの他のすべての市民団体や産業界から支持されて、毎年の行事として歩み始めた。職業秩序委員会 **Business Methods Committee** は、ロータリークラブが道徳律の適応を進め、会員たちが代表している様々な産業と専門職においてどの程度機能を發揮しているかというデータを集めるために、アンケートとそれをフォローする2通の手紙を発送した。市民委員会 **Civic Committee** は、他の市民や実業団体と協力して、オコナー消防署長の退職による空席を補充すめために、消防署の年功序列制に従うことと、公務員委員会の前で、それに反対している5人

の副署長がオコナーに対する告発を撤回させることを、トンブソン市長に主張するように、理事会に勧告した。さらに市民委員会は、スプリングフィールドの諸問題に対して、クラブが保留にしている法令を承認するように、クラブに勧告した。

会報委員会 **Publication Committee** はジレーターを規則的に発行した。地区大会および国際大会委員会 **Conference and Convention Committee** は、ロータリー年次大会の代議員のために特別列車とホテル予約の手配をした。教育委員会 **Education Committee** は、クラブの中で特に弱点だとみなされている会員の退会を減らすために、自ら奔走した。それぞれの入会候補者は、ロータリーの原則と目的を学ぶために、教育委員会の会合に出席しなければならないという規則が功を奏し始めた。同時に、すべての申込人と推薦者に送られる申込書に関するアンケート（後に会員選考委員会によって採用された）を提案した。なお教育委員会はスピーカー・ビューローの仕事も継続して行った。

余興委員会 **Entertainment Committee** は年間2回の晩餐会を企画し、

親睦委員会は、委員を四つのグループに分けて、毎週の昼食例会における正常な機能を継続した。クラブを健全な財政基盤上に据える予算が、フィリップス会長の下で、1921年7月に財務委員会によって採択された。ジイレーター宣伝委員会は赤字を報告した。年間3件の非道徳的な商慣習に対する苦情が、苦情処理委員会によって検討された。ハウス委員会 **House Committee** は、昼食メニューや帽子とコートの点検のような問題を取り上げた。希望の光委員会 **Sunshine Committee** は、18,000ポンドの食物を入れたクリスマス・プレゼントの籠を配って400所帯を援助したり、病気の会員を訪問したり、葬式に出席したりした。イリノイ大学委員会は、イリノイ大学の2年間予算案提案に対するクラブ承認や、農業大学の4人の学生の学業維持を援助する活動をした。会員選考委員会、プログラム委員会、ラウンド・テーブル委員会は、その通常の機能を継続した。

450人の会員を擁するクラブのこれらの活動の多様性は、1908年の小規模な出発当時と比べると驚くべき変化である。年次報告書の続きは、

経済的な背景から理事会が印刷を中止したため、1927年より先に間が飛んでいる。調査委員会は、組織の発展振りを毎年毎年追跡することが、クラブ役員や会員にとって大きな価値があることを考慮して、年次報告書の発行を再開することを強く勧告するものである。

多くの成果があげられたことは、年次報告書の続編や、単に経過に就いて触れているその他のクラブの記録によっても明らかである。クラブは、常に、災害による打撃の援助要請に応えていった。クラブの募金箱を通じて自発的な寄付金による1924年の基金は、イリノイ州南部の竜巻の救助に寄付されたものであり、1923年の1,500ドルは、日本の地震救助に寄付されたものである。1927年の1,500ドルは、ミシシッピ川洪水救助に寄付された。さらにロータリーは、その催しが行われる5年前の1928年に、合計2,625ドルもの世紀の進歩博覧会（1933）の切符を買って、一〇〇パーセントの寄付金を達成した最初の組織でもある。1929年には、クラブは1週間に3,000ドルの費用をかけて、165人のオーストラリアの少年たちを楽しませた。1930年にシカゴで開催さ

れたロータリー国際大会における、日本の徳川家達公、梨本宮殿下の特別歓迎会は、異なった時期に作られたクラブの間で、数多くのゼスチャーが飛び交う国際的な善意の見本のようなものであった。

ちようど、クラブがシカゴ少年週間協会を発足させた頃、身体障害児対策を推し進め、財政的、道徳的な支持を与えることに関心を抱いている他の機関にも声をかけて、イリノイ州身体障害児協会の組織を結成した。

1929年以來、学生貸付金は合計で15,000ドルにのぼった。このプログラムの一部として、シカゴ・ロータリークラブの後援の下で、シカゴ大学に委託した身体障害児に対する職業調査は、クラブにとって7,000ドル以上の投資額を示している。希望の光委員会は、何年にもわたって、数万ポンドにもなるクリスマス籠に入った食べ物を、会員たちが個人的に配って、貧しい人たちに届けた。

異なった分野におけるクラブの成果として、1931年と1934年にジュリアス・ロザーワールドとラップス・ダウズにそれぞれ授与された、地域社会や国内や国際社会における著名な奉仕を認定する形式である、シカ

ゴ功労賞の制定があげられる。

最後に、募金箱の財政や、シカゴの社会や市民のニーズと、彼らにとつて最もよい方法は何かという調査を進めるための調査研究を援助する継続的な機関として、シカゴロータリー財団を設立することを、クラブが望んでいることについて触れておかなければならない。

シカゴ・ロータリークラブは国際ロータリーの活動についても、それを指導する役割を果たし続けた。1930年にスポンサーを勤めた、25周年記念国際大会もその典型的な例の一つである。1930年のロータリー国際大会に対するこのシカゴの選択は、クラブへの贈り物であり、大会運営を成功させたクラブの役割は、その年における際立った成果でもあった。

活動の範囲が広がったことによる、そのような特別な成果以外にも、クラブの諸記録の調査を通じた今回の調査によって、もう一つの成果として明らかにになった興味深い事実は、クラブの役員や事務局による自己批判の姿勢が続いたことである。このようにして、我々は1922年に、トレッドウエル幹事によって行われた包括的な調査のほかに、幹事の勧告に基づ

いて作られた組織人事委員会 **Organization and Personnel Committee** をあげることができる。この委員会は、1925年に、多くの具体的な提案につながる、クラブ運営や機能や活動の包括的な調査を終えたが、最も重要な提案は、クラブの慈善活動を財政的に援助するために、会員の広い参加を確保すると共に、いろいろな事情によって、資金に対する会員たちのばらばらで調整のとれていない要請を防止するために、募金箱委員会 **Chest Fund Committee** を設立することであった。この委員会によって提案された変更と整合性を持たせるために、1926年4月に、クラブ運営の効率を大幅に改善するように、細則が全面的に改正された。

年次報告書にもう一つ付け加えておきたいことは、クラブが取った発展の歩みを示すよりも、その経過について触れることの方が大切だということである。職業秩序委員会 **Business Methods Committee** は、1926年に、85パーセントという驚くべき回収率によって、業界におけるロータリアンの人口調査を実施した。年次報告書には、この目的のために送られたアンケートの幾つかは、回答がなかったか、専門職または商業の同業

者団体に加わっている会員でさえ抵抗を感じたと述べるほどの非難があったことが、報告されている。

クラブが、会員の質や量や奉仕活動の分野において著しい進歩を遂げたことは、この簡単に述べた歴史のあらすじからも明白である。シカゴ・クラブは力強く成長した組織であったと同時に、その機会を捕らえること以上に、いつもその弱さを自覚していたことを示している。彼らの模範であると、他のロータリークラブから見られていることによって、シカゴ・クラブは、団体の精神、名声、影響力、さらに13年間の会員数すらも倍増していった。

もしも、より批判的な会員の間で、クラブが大きくなっていった規模について反論する考えが噴出したとしても、その理由は、会員数が増えていく割合について会員の支持が得られなかったことと、様々な委員会の多くの活動に関して正しく知らせなかったことを意味していることが、当然分かるに違いない。この状況はすべての大きい組織において、多かれ少なかれあることであり、調査委員会はこれを重大な問題とはみなしていない。

3. 国際ロータリー

シカゴ・ロータリークラブが、その活動を伸ばし、拡大している間に、ロータリー運動もまた世界的な様相を帯びてきて、多くの国に広がっていった。これらの発展を詳細に取り上げることが、この報告書の本来の目的から逸脱するかも知れないが、国際ロータリーの活動の特色について簡単にあらすじを述べることは、その運動の口火を切り、世界的な活動にまで成し遂げたシカゴ・ロータリーの立場と、シカゴ・クラブが国際ロータリーに及ぼした影響を正しく理解するために不可欠なことである。

ちょうどシカゴ・ロータリークラブは、アメリカ合衆国の他都市のクラブ組織に対する最初のスポンサーを済ませて、アメリカの国外にその活動を広げるために指導力を発揮しようとしているところだった。双方の例とも、ポール・ハリスは拡大活動に関する激励者であり指導者であった。アメリカ合衆国以外にクラブを設立しようという彼の最初の努力は、カナダのウイニペグに向けられ、何回かの試みが不成功に終わった後、1911

年、その地にロータリークラブが設立された。その年の暮れ、ハリスは英国の首都にクラブを作るつもりで、ロンドンでタオルの商売をしていた、ボストンのハーヴェイ・ウィーラー **Harvey Wheeler** と連絡をとった。

後に、ウィーラーと、アーサー・フレデリック・シエルドン **Arthur Frederick Sheldon** と、セイヤ・スミス **F.Sayer Smith** は、ロンドンとマンチェスターにクラブを設立した。

その直後に、ハリスは、すでに、1911年3月に設立されたロータリークラブが、ダブリンに存在することを知って驚いた。不思議な事実を調査していくと、サンフランシスコの元ロータリアンであるスチュワート・モロー **Stuart Morrow** がダブリンとベルファストにクラブを作ったことが、最終的に判明した。ハリスはモローと連絡をとって、彼の組織を作る仕事を続行するように頼んだ。彼はその後、ロンドン近郊の多くのローカル・クラブだけではなく、グラスゴー、エジンバラ、バーミンガム、リバプールにクラブを設立した。彼をオーストラリアとニュージーランドに行かせようという、正式な計画が立てられたが、ギニー金貨で会員資格を

表1 ロータリーの成長

年 度	クラブ数	会員数
1919-11	28	3,750
1911-12	49	5,088
1912-13	76	10,000
1913-14	123	15,000
1914-15	167	20,700
1915-16	230	27,000
1916-17	321	32,600
1917-18	415	38,800
1918-19	516	45,000
1919-20	758	55,150
1920-21	976	70,000
1921-22	1,243	83,150
1922-23	1,493	92,800
1923-24	1,796	102,000
1924-25	2,096	108,000
1925-26	2,396	120,000
1926-27	2,628	129,000
1927-28	2,932	137,000
1928-29	3,178	144,500
1929-30	3,349	155,000
1930-31	3,460	157,000
1931-32	3,514	152,000
1932-33	3,603	147,000

急速に広がっていった。

英国のロータリアンにとって好ましからざる存在であることが判明した。ひとたび拡大が始まると、その活動は大英帝国だけではなく、他の国に

売買するというやり方で、自分の生活を成り立たせていたことが分かり、

その後の活動の成長ぶりは、表1に示した通りである。シカゴロータリーの指導力の下で、1910年に結成された全米ロータリークラブ連合会 **the National Association of Rotary Clubs** は、それを引き継ぐ組織として、世界中のすべてのロータリークラブの連合体である国際ロータリークラブ連合会の中核としての働きをした。1911年にロータリー・モットーが採択され、最初のロータリー宣言が作られた。この期間中にハリスは、ロータリーの「哲学」の論文を準備していた。チェスレー・ペリーは、これを雑誌の創刊号に載せて出版するアイデアを考えつき、彼の提唱に基づいて、ロータリアン・マガジンが1911年1月に創刊された。第2号は6ヶ月後に発行され、ペリーの提案によって、ポートランド大会で月刊雑誌としてその出版が承認された。1912年のダールズ大会において、全米ロータリークラブ連合会が発展的解消して、国際ロータリークラブ連合会 **the International Association of Rotary Clubs** が創立されたが、これは、1922年のロサンゼルス大会において国際ロータリー **Rotary International** となった。

10年間の年月の間に、活動は急速に広がり、文献や哲学や目標を設定する作業が進んだ。1910年に制定された最初の定款は、すでに社会に対して均衡のとれた活動をしていく上で不十分なことが分かってきた。時に応じていろいろな変化が起こり、1920年のアトランティックシティー大会において、委員会は、新しい定款を制定するように命じられた。国際的な活動をするための管理上の最もよい形を巡って、鋭い意見の対立が広がり、委員会によって準備された定款の原案は、アメリカ合衆国の外で開催された最初の大会である1921年のエジンバラ大会で、却下された。そこで、31の委員会を代表した委員会が、問題点をさらに深く掘り下げて考えるように命じられた。バツファローのサミュエル・ボッツフォード **Samuel B. Botsford** 委員長の下で、1921年11月にシカゴで委員会が開かれ、慎重に審議された後、やっと国際ロータリー定款および細則ができあがり、1922年のロサンゼルス大会において採択された。その後今もお、若干の改正がなされているが、国際ロータリーの活動における定款の基本となるものである。

現行の「6項目の綱領」は、時代の流れの中で採用されてきた綱領の初期の組み立て方に基づいて、ボッツフォードの委員会によって作られたものである。6項目の綱領は、1921年のエジンバラ大会において採用された。1914年に、ヒューストン大会において、ロータリーの哲学と教育についての委員会が設立され、フィラデルフィアのガイ・ガンディカー Guy Gundaker が、この委員会の委員長として、ロータリー通解 *a talking knowledge of Rotary* と名づけられた、4冊のパンフレットを1冊にまとめた本を作った。ロータリーの道徳律 *Code of Ethics* は1915年のサンフランシスコ大会で採択された。個々の事業と専門職に対する道徳律の次のステップもまた、1923年に国際ロータリー会長に就任したガンディカーによって、かなりの部分が大きな影響を受けた。

1922年に国際ロータリーが設立されて間もなく、ロータリーの「社会奉仕の憲章」とも言われている、セントルイス大会（1923年）の決議34の制定がこれに続いた。この注目すべき原則の声明文は、ロータリーが多くのクラブや会員たちから、そのような活動によって奉仕したいと

いう要望に対する論理的な裏付けになるものであり、慈善団体だとみなされることによってロータリーの存在を正当化するようになってきた事実を、改めて思い起こさせるものである。数多くの慈善運動や雑多な活動が、実業家たちが財政的な負担や同じような重い義務を、彼らがしたことがないような方法や特別な訓練を積んだり、時間を提供したりまた直接に彼らを支えたりしながら、様々なクラブによって後援されてきた。クラブの活動は、あれこれと他の有益な運動を支援したり後援するための要望が、なだれのように殺到してくるために、浸水の危険をはらむようにすら思われた。決議34は、社会奉仕に関するロータリーの役割をより正確に定義するのに役立つと共に、この問題に対するその後の有益な指針となるものである。

目標設定計画 **Aims and Objects Plan** は、ロータリアンを教育する目的と必要性に関する多くの意見が混乱している状態から抜け出して、活動をはっきりしたものにして管理するために、ある程度体系的で効果的なやり方によってもつと秩序あるものにしたという、必然性が生じてきた結果できたものである。

この計画は、1913年に結成された英国ロータリークラブ連合会が発展的解消してできた英国・アイルランド国際ロータリー(R. I. B. I.)が作ったものである。設定された目標の差異や動機や目的に関する会員のばらばらな対応は、外部の人たちから批判され、嘲り笑われ、さらに奉仕理念は、“American Mercury”を書いたメンケン H.L. Mencken や “Babbitt”を書いたシンクレア・ルイス Sinclair Lewis といった文学界の革命児たちによって、単なる美辞麗句、無意味な動作、口先だけの言葉、偽善に過ぎないと酷評された。

目標設定計画はロータリーの教育を、クラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕の四つのカテゴリーに分け、クラブ委員会をこれらの四つの名称の下にグループ分けするものである。この計画はイギリス諸島で試験的に実施された後、その結果が、1927年1月に、R. I. B. I. の幹事であり、かつてロータリアン・マガジンの編集者をしてきたビビアン・カーター Vivian Carter によってシカゴの国際ロータリーに提出され、1927年のオステンド大会において、全体の組織のための構成要素として採択され

た。英国で使われた基本文書は、後日、“ロータリーの意義 **The Meaning of Rotary**” という表題の下で出版されている。

最近の国際ロータリーにおける、歴史上のハイライトについて少々触れてみたい。第16回年次大会（クリーブランド、1925年）において、ロータリアンの働きかけの結果として、この3年の間に97の職業倫理訓が、さまざまな技術や専門職の業界団体によって採用されたことが報告された（議事録、95ページ）。青少年活動に対するロータリーの承認が、ボイスカウト、ボーイズ・クラブ、ビッグ・ブラザーズ、YMCAの4大クラブに与えられた。教育委員会は、すべてのクラブの助けになるように標準ロータリー教育概論 **Standard Outline of Rotary Education** を作成した。1926年のデンバー大会で、「明らかな失敗」と述べたある幾つかのクラブが注意を受けたが（議事録、60ページ）、ハリー・ロジャース **Harry H. Rogers** は、次のように述べている。

もし、正しく実行しなければならぬ完全な規約のあらすじを書くのであれば、競争相手との関係の改善に留意することである。最近我々の背後で現実起こった事業経営に関する大きな改善は、主としてロータリーや類似した組織の影響力によるものである。もし絵を描くとすれば、沢山の身体障害児たちの生活が完全に、または大いに改善されている絵を描きたい。ロータリー学生貸付基金が沢山の若い男女の大学進学を支えている。沢山の吃音や病に苦しむ人々が、いろいろな治療によって完全に治っている。沢山の人々が、ロータリーの贈り物やロータリー精神のお陰で、楽しいでクリスマスを迎えている。混雑する道路に子供たちを近づかせないように、沢山の運動場が整備されて、子供たちの生命が救われている。

沢山の犯罪者たちはロータリアンを見て震え上がり、社会に役立つ人に立ち直っている。都市にも田舎にも適応したプログラムの下で、農夫たちが楽しく集っている。……そんな絵を描きたいものである。

もし、様々な憎しみが拭い去られて、個人や町や州や国の間で友情が作

り上げられていく光景を示すことができれば、ロータリーが失敗を犯したと非難する声を、再び聞くはずがないと信じている。

市民団体との関係について、ロータリーはすべての市民団体やすべてのやりがいがある公的運動と協力すべきではあるが、深刻な政治問題や、ロータリークラブを落胆させるような決議や団体活動をすることは避けるべきであると、ハリリー・ノリス **Harry Norris** は述べている(議事録215ページ)。1927年の18回大会は、ヨーロッパの大陸における最初の大会として、ベルギーのオステンドで開催され、決議3「ロータリーの目標設定を進める目的のため、該当する地域のクラブを団結させる地域管理体系を設定すると共に、国際ロータリーの定款細則を改正することによって、すべてのロータリークラブに対する、国際ロータリーのより平等なサービスが保証されるように準備すること」の採択は、注目に値するものと言えよう(議事録155ページ)。

1929年のダラス大会において、“He profits most who serves best.”というモットーに対する、興味深い議論が闘わされた。英国の代議員は、このモットーは国際ロータリーの道徳的な目標設定を正しく説明する根拠にはならないし、金銭づくという言外の意味を感じさせることなく、他の国の言葉に翻訳することが難しく、“Service Above Self”で充分なので、廃止すべきであると提案した（決議7、議事録27ページ）。この提案を支持するテキサスのロングは、次のように主張した。

私の考えとしては、大きな利益を得ることを目標にしているようなスローガンは、ロータリーにとってまったく価値がないものである。ほかの国でどう感じるかは知らないが、ここテキサスでは利益とはたった一つの意味しか持たず、それは金銭的な利益のことである。私は、現在のスローガンやモットーがロータリーのことを誤り伝えるものであり、一つでいいものを二つも持つことは、まったく辻褃のあわないことだと思う。

しかし、この決議は却下されて、アーサー・フレデリック・シエルドンの販売学のスローガンは、不満を残しながらも、ロータリーのモットーとして残されることになった。

職業奉仕技能協議会の演説で、サウス・ダコタ州ミッチェルのロイ・ロナルド Roy Ronald は、ロータリーの6項目の綱領は、奉仕の理想に結ばれた、自らの職業の実際の管理運営に、その考え方を導入した実業や専門職の人たちによる世界的な親睦や職業奉仕を通じて達成することができる」と語っている。国際奉仕協議会のガンディカー委員長は、国際奉仕の最も重要な目標は、ロータリアン同士が国際的な関心を養うこと、物事を国際的に考える習慣を持つこと、狭い考えを捨てて国際的な視野を持つようにロータリアンを教育することであると述べている。

21回目の年次大会は、シカゴ・ロータリークラブおよび全世界のロータリー運動の25周年を記念するために、1930年にシカゴで開催された。創立者ポール・ハリスは、記念講演で、ロータリー運動に対する批判に次のように抗弁した。

ロータリーは社会改良運動であり、その種の運動は、しばしば前例の影響を断つという危険性を孕んでいる。現在の社会はすでに疫病のために苦しんでいる。ロータリーは実業家たちの組織であり、現在やっている活動は、その考えもやり方もほとんど革命に近いものである。より素晴らしい事業に関心があれば、数百万ドルの価値のある機械をスクラップにするにとすためらわない。

企業は自らの事業を批評する専門家を雇って、彼らに高給を払っている。企業を診断するために、その弱点を探し出す大きな生きた機械として調べているのである。ロータリーには、給料を貰っている批評家は一人もいない。彼らはすべて外部の人間であるがゆえ、彼らの活動は長所と短所の双方を併せ持っている。ロータリーには、大企業の調査部門に匹敵するような、建設的な批評をする部門が必要である。ロータリーはその適切な使命を実現するためには、常に進化していかなければならないし、時には革命すら必要である。

大陸で開かれた2回目の大会である1931年のウィーン大会では、再び国際奉仕に対して多くの関心が向けられた。オーストラリアのシドニーのジョンソン E.W. Johnson は、ロータリーの最も大切な使命は、「国際理解と善意と平和を推進すること」であると述べ（議事録155ページ）、この目標は、決議22および決議28の採択につながっていった。前者は、「国際ロータリーの国際奉仕委員会は、最も実用的な一般的な第二外国語は何かを調査すると共に、国際ロータリーがそのような外国語の採用を進めるための最善の道を調査することを要望する」ことであり、後者は「来るべき軍縮会議の成功を保証するために、すべての政府によって取られる、すべての有効な方法に賛成する」ことであった。決議12には興味深い文章が付随していた（議事録89ページ）。

ロータリークラブは、それぞれの国や地域社会における学校教科書の調査を行い、その上で、有害なものや偽りの情報について報告することを勧

告する。——中略——ロータリーは、間違つた理念や無益な賛美や国家の憎悪といった戦争賛美の土壤によつて若者の精神を墮落させないように、強力で団結した、全世界的な教育をすることが可能な、全世界に影響を及ぼすような団体を目指すこと。

国際奉仕理念の実際的な行動を形作ることを目論んだこの決議は、「政府の教育当局に影響を与えるような、ロータリアンのいかなる活動についても、政治行為に対する干渉と解釈する」という基本に基づいた、決議委員会の提案を否定するものであった。この行動に反映されている姿勢は、あらゆる場所におけるロータリアンの典型的な姿勢を表すものとして、大学調査委員会にとって特に重視すべき事項であると思われる。もし、政治的だとか、政府の機能に抵触すると解釈することができるとして、全然行わないとすれば、奉仕理念そのものが、まったく弱いものになってしまうに違いない。国際平和や国際理解は、当然のこととして政治的なものであり、

政府の要素を持つものである。社会奉仕も同様に政府の機能や政治的問題を伴っている。国際ロータリーの議論によって明らかにされた、この問題に関連する見解についてのシカゴロータリーの考え方は、この報告書の第10章と第11章において、更に十分に議論してみたい。

1931年に国際ロータリーは、理事を選出していない地域から、さらに2名の理事を加えることや、アメリカ合衆国以外の国から4人目の会長を選出することによって、RIの運営のさらなる国際化に対応するための二つの手順を踏んだ。その結果、イギリス、サーベイのシドニー・パスコール Sidney W. Pascall は1931-32年に会長を務め、メキシコのサットン I. B. Sutton、カナダのマツカロー博士 C. C. McCullough、レスリー・ビジョン牧師 E. Leslie Pidgeon、ジョン・ネルソン John Nelson が、国際ロータリー会長を務めた。

シアトルの1932年の大会において、テネシー州ナッシュビルのウィル・マーニア Will R. Manier による、国際奉仕に関する有名な演説が行われた。彼は、すべての奉仕活動には、ロータリークラブが、地域社会のた

めに様々な奉仕活動に携わっていけるような組織にするという客観的な考え方と、個々のロータリアンを価値ある状態にまで啓蒙するために奉仕活動をするという、主観的な考え方の、二つの流れの考え方を共に進めていくことが大切であることを指摘した。セントルイス大会の決議34は、これらの二つの考え方の間に介在する矛盾を調和させるために捜し出されたものであると、彼は述べている。メーニアは、国際奉仕に関して歩み寄る道を示すために、次の言葉を述べている。

ロータリーにおける国際奉仕の目的は、理解と善意と平和を促進し、これを育むと定義されているので、善意と理解とを基本に置かなければならない。これらのことは考え方の問題であって、国際奉仕におけるロータリーの活動は明らかに客観的なことよりも、むしろ主観的なものでなければならぬ。さらに、ロータリークラブにおける国際奉仕は、国際ロータリーやロータリークラブの団体活動によって政府や外交や国際政治に影響を

与えるよりも、むしろ、それにふさわしい心の状態になるように個々のロータリアンを啓蒙すると共に、活力溢れた考え方で彼らの活力を充分發揮できるようにしなければならぬ。しかし、実業家と専門職業人による世界親睦は、ロータリーが善意と理解と国際平和の推進を目指すことを意味することから、国際ロータリーとロータリークラブは、時に応じて、適当な制限の下で、国際的な事業に影響を及ぼすような経済や金融の問題点について、共同の行動を取るべきであろう。さらに、当然のこととして、各々のロータリアンは、ロータリアンとしてではなく個々の職業人として、外交や国際的な政治問題に対する自国の政府の方針に関して、忠誠を誓う市民として当然の義務を果たさなければならない。

大都市におけるロータリークラブの数を増やす問題は、1932年のシートル大会において、再び討論された。ヨーロッパ諸国、特にイギリスの代議員から出された増加に関する提案は、再び否決されたが、その問題を

研究することが、決議3Aにおいて次のように勧告された。

国際ロータリー理事会は、すべての都市、町、村、区に一つ以上のロータリークラブの組織を作る方針の研究を行い、その趣旨を織り込んだ決議を提出することを指すことを、1923年度国際大会は要請するものである。

会長は、国際ロータリーが国際連盟総会の会議に、会長による指名を受けたボランティアのオブザーバーを派遣することを、理事会が決定したことを報告した。個人活動とクラブ活動との論争は再び高まり、この問題について、会長の報告書は次のように結論づけている。

この問題は、ロータリーが成長し、多くの地域社会において、様々な問題に対する意見や活動について我々が頻繁に訴えかけられる重要な地位を

占めているという証拠でもある。ロータリーが行う重要な貢献は、個々のロータリアンの活動を通じるものであり、世界中で素晴らしい奉仕をするためにロータリーが橋渡しをすることによって、その活動が引き起こされたり定着したりすることもまた、事実である。（議事録474ページ）

1933年7月1日現在で、国際ロータリーは147,000名以上の会員を擁する3,603のクラブから構成されている。これらの内訳は、アメリカ合衆国2,444、カナダ112、メキシコ32、英国・アイルランド375、フランス49、ドイツ36、イタリア26、スペイン22、イス22、南アフリカ10、オーストリア11、日本11、中国8、後は地球上の古い場所に不均等に分散している。超大国の間では、ソ連だけがロータリークラブを持っていないし、弱小国の間では、主にインド、エジプト、シリアを除いたイスラム圏の国々にないことが特徴的である。西半球の3国だけがクラブを持っておらず、世界の植民地のほとんどに存在する。

この世界的な組織は、シカゴ市のウエスト・ワッカー通2111に中央事務局を持つている。最初から、幹事はチェスレー・ペリー Chesley R.Perry であり、会計は何年もの間、銀行家のラッフス・チャピン Rufus F.Chapin であつた。国際ロータリーにはチューリヒに支局があり、ロンドンにR.I.B.I.の本部がある。極東には移動事務局が設置されている。組織の管理主体は、年次大会において選ばれた14名の会員からなる理事会である。アメリカ合衆国の代議員から5名、カナダ、南米、英国とアイルランドの代議員から1名づつが選出され、他の国のクラブ会員の元理事から5名が選ばれる。理事会のその他の構成員は、会長と直前会長である。理事会によって、第1、第2、第3副会長が指名され、会長、財務長、地区ガバナ―、R.I.B.I.議長は、大会において選挙される。事務総長は理事会によって指名される。全員は、会長の管理運営下にある年度は、理事として会長と共に一年間努める。新クラブは、一〇〇ドルの創立費を支払うと同時に、理事会によって国際ロータリーの会員として選ばれる。

国際大会は、会員数50名およびその端数から1名づつ選出された、少

なくとも1名以上のクラブから送られた代議員と、長老代議員 *delegates at large* を務める国際ロータリー元会長、役員、理事が集まって、通常6月に開催される。国際ロータリーは、特にイギリス諸島のクラブにおける幾つかの例外を除いて、各々のロータリアンに対する人頭分担当として4.50ドルの年会費によつて賄われている。各クラブは大きな区域をもつ地区を構成し、1933年には78の地区が存在する。各地区のすべてのクラブは、ほぼ4月15日から5月15日の間に毎年開催される地区大会に代議員を送る。ここでは、各クラブは、会員25名每およびその端数に対して1票の選挙権を与えられ、これらの選挙人は地区ガバナーを選挙する。この指名を受けた地区ガバナーは、次年度のロータリー国際大会において、すべてのクラブからの代議員によつて選挙される。地区ガバナーは自分の地区のクラブを管理し、国際ロータリー理事会とこれらのクラブとの間の連絡調整役員として活動する。

これらの管理機構に加えて、国際協議会と地区協議会がある。前者は、ロータリーの計画と活動を提示し、それを適用する方法を議論するために

召集された、一般役員、地区ガバナー、委員長、理事、R・I・B・Iの地区議長、およびその他の人々から構成されている。地区協議会はすべてのクラブ会長と幹事によって構成され、地区ガバナーと会合を持つ。各ロータリークラブは、様々なクラブ活動を管理するために、会長によって指名された14の委員会活動を通じて活動する国際ロータリー理事会の、一般的な管理の下に置かれている。

締めくくりの言葉として、シカゴ・ロータリークラブと国際ロータリー間の関係について述べておく方が適切であろう。国際ロータリーを論じる上で調査委員会の委員として必要と思われることは、R・Iの活動を調査することは、シカゴロータリーの調査をするための正当な目的ではなく、シカゴ・ロータリークラブとR・Iの間に存在する独特な関係の理由を明らかにするためである。

シカゴ・ロータリークラブは、世界中のそれに類するすべてのクラブの中で、最も古く最も大きい。1905年2月23日に設立された、すべての職業分類クラブの元祖であり、**Exchanges** (1912年

設立)、キワニス **Kiwanis** (1915年設立)、ライオンズ **Lions**、ジャイロ **Gyro**、ゾンタ **Zonta** (女性)、コーポレイティブ **Co-operative**、シビタン **Civitan** などを含んだこのような組織の源流とも言えるクラブである。他のクラブはある意味では子供に当たり、**R. I.**自身も歴史的に見れば、シカゴ・クラブから生まれたものである。

かつては、シカゴ・クラブと国際ロータリーの間には、解決することが難しい、調整上の問題が生じるといふ出来事も時々起こった。シカゴ・ロータリークラブの古い会員たちは、古株の政治家のように、世界中の他のクラブの会員よりも、国際ロータリーに対して関心を抱き、ロータリー全体の重要な活動と指導力に関する大きな影響力について、あからさまに意見を述べてきた。国際ロータリーの創立当初は、シカゴ・クラブは、多少保護者的な態度をとり、常に歓迎されるとは限らない無償の忠告を与えてきたが、これがそのまま、シカゴ・クラブに跳ね返ってきた。

国際ロータリー本部は常にシカゴに置かれている。国際ロータリーの本部を訪問し、その後にはシカゴ・ロータリークラブを訪ねる他のクラブの会

員や役員たちは、一様に、シカゴ・クラブが全体の活動に優位性を発揮するため、努力を続けており、ロータリーの前途は総じて各クラブにかかっているという彼らの受け止め方を述べている。一般的な人材の発掘に関しても、それに類する対応の矛盾が、当然予測されるが、そのことが、国際ロータリーやシカゴ・ロータリークラブにとって本当に深刻な問題になったことはまだ一度もなく、さらに、1919年以来、こういった類のすべてのいらだたしい兆候は、他の団体からの要請に対して私心のない奉仕をするとか、指導力に重大な貢献をしているといった間違った認識を、他の団体がすることによって、消えうせたとも言えよう。

R・Iの文書が世界中に行き渡り、直ちに多くの言語で印刷されれば、地の果てのクラブの役員たちもが国際的になることが当然であることは、明らかである。シカゴ・ロータリークラブそのものも地域のクラブであることから、これら二つの組織が、これから先もお互いに認め合う態度で、お互いそっぽを向くことなしに助け合うことを期待するものである。

国際ロータリーとしても、地球上に散在する3,603のクラブに対して

責任を持つ組織として、シカゴ・ロータリークラブによって支配されているという印象を、ぜひとも避けなければならない。シカゴ・クラブは、1922年のロサンゼルス大会において、「ロータリー」という名前に関する著作権を自ら放棄した。自らの定款と細則を基にして修正を加え、R・Iの雛型として対応させていたが、いまだに、国際ロータリーがこんなに驚異的な大きさになるまで、長年の間その活動を管理していた規約を完全に捨てきれずにおり、クラブに対する一般的な目標設定計画が1928年にR・Iによって公表されたにもかかわらず、シカゴ・ロータリークラブは、これを1932年までは、全面的に採用しなかった。

しかしながらよく観察すると、国際大会におけるシカゴ・ロータリークラブが派遣する代議員は、すべての単一のロータリークラブの中で最も大きい影響力を持っている。シカゴ・クラブは、国際大会や地区大会において際立った存在であると同時に、全体の活動に関する根本的に重要な問題を主張しようと思うときには、常にその地域分野や国際分野における、シカゴ・クラブの指導力が、ますます広がっていくことを認めざるを得ない。

シカゴ・ロータリークラブがその指導力を身につけていることが、時として誤解され、攻撃されることは、人間として当然のことと認めざるを得ない。役員たちは、クラブを全体のロータリー活動の公僕であると自覚すると共に、自分たちが最高のロータリーの理念と目的の効果的な提唱者でなければならぬとして、その計画や活動や理念を完遂するために努力しているのである。シカゴ大学社会科学調査委員会によってこの独立した調査を開始したことは、彼らの開かれた心、注意深さ、自己反省の能力、さらに、彼らが今なお彼ら自身だけではなく、ロータリー運動全体に対する価値を期待しながら活動を繰り広げていることを示す、生きた証拠でもある。

イギリス諸島やアメリカ合衆国と、他のヨーロッパ地域のロータリーとの相違から、社会情勢や一般展望の違いによるある種の誤解が、時たま引き起こされる。英国とアメリカ合衆国のクラブは英語を話し、みなで歌ったり、ファースト・ネームを呼び合ったりして、ヨーロッパ大陸のクラブによって採用されなかった、知己と親睦を深めていくための様々な手段を

採用している。ヨーロッパ大陸の地域にあるクラブは、産業界や経済界、行政や政界の指導者たちを養成する多くの機会を作りあげたことや、権威と礼儀正しさや、知性と美的な関心や、社会的政治的な展望においても、彼らの影響力は、英国のクラブとは似ても似つかぬものであったし、アメリカ合衆国のクラブとの格差はさらに大きかった。彼らは伝統的な貴族の血を受け継いでいたし、さらにこの事実によって、イギリスのクラブは、北アメリカにおけるロータリー概念に含まれている、多くの有益な職業における指導的立場を代表することを妨げる結果につながった。アメリカ合衆国の多くのクラブでは、ほんの一例を紹介しても、理容師、大工、仕出し屋、土建業者、清掃業者、染物屋、靴直し、荷馬車屋などの職業分類の代表者を有しており、そのような職業分類はどんな場所でも数え切れなほほど数多く存在する。それに反して、ヨーロッパの地域社会のクラブは、しばしば社会的階層のより高い層を代表したものであり、何年か前の典型的なロータリアンに関する漫画家の概念とはまったくかけ離れたものである。

さらにその上、ヨーロッパからやってくるロータリアンは、時折、アメリカ合衆国のクラブに対して、確かに横柄な態度を見せると共に、ロータリー国際大会においても、シカゴの国際ロータリーの事務局の人間であるうと、どこから来た人間であろうと、アメリカ合衆国のロータリーによって支配されないように、油断を怠らない。

イギリスの代議員たちは、例えば大都市近郊のクラブの問題を含む、R・Iの管理に関する多くの問題点に関して、アメリカ合衆国のロータリアンと大きく異なった意見を持っている。ロンドンの大都市圏内には、現在74以上のクラブ（1932—33年度国際ロータリー公式名簿41ページ）があり、イギリスからの代議員たちは、イギリスの地域的な理由を勘案して、町に複数のクラブを結成することに賛成するように、ロータリーの一般的なやり方を改正するように要求している。彼らは、また、国内の本部と地区議長の管理による、R・I・B・Iの事実上の国家としての自治権によって、現在の中央集権化された世界の流れから離れようという彼らの究極の目標について、他の国の人たちが疑問を抱いているという事実を充

分意識している。何世紀にもわたって、世界の指導力をとる役割を自ら果たしてきたもかかわらず、この20年来続いているアメリカ合衆国のロータリアンの主導的な指導力の下にある活動に対して、気が気でないという国民の心理状態が、批判的な英国の態度の根底にあるのかもしれない。それはともかく、この明らかな意見の相違に関して、イギリスのロータリーの指導者たちと、シカゴと同じ意見を持つロータリークラブの間で、これらの問題と、町に複数のクラブを認めることに関して、激しい意見の対立が続き、この問題は、1933年のボストン大会を始め幾つかの国際大会の論議にまで発展していった。国際ロータリー決議委員会による投票の結果、ロータリーは単に会員数を増やすことによって活動を弱体化するのではなく、卓越した指導力と、付き合いを広めることを目指すべきであるという意見が、多くの他の大都会のロータリークラブの支持を受け、シカゴ・クラブ一派の意見は、大方の態勢とは大きくかけ離れたものとなった。

規模の大きい組織において、そのような意見の違いがあることは当然のことであり、従ってロータリー活動に携わる会員の意見の違いによって、

その活動は変化していくものである。彼らはすでに過去に何回も、激しい議論を避けて妥協してきた実績がある。どんな団体でも寛容の精神と理解を持って他の人たちの考え方を審議することは確実であり、その姿勢が未来永劫に続くことは疑いのない事実である。

R・Iとシカゴ・ロータリーとの間の意見の対立は、国際奉仕に関する国際ロータリーの議論および決議として、この章において引用した文章によって例示した通である。結局のところ、誰でも普通は、国際関係の問題に関して、地域的なクラブではなくて、国際的な団体が取り組むことを期待しているのである。このことは、地域的なクラブが立てた計画や姿勢は、所詮は、国際的な活動の一部にしか過ぎないという事実による影響しか及ぼさないが、国際的な土壌における議論を経て考え出された方針は、必ずや、構成しているクラブに影響を与えるという、数多くの例の一つに過ぎない。

第2章 シカゴのロータリアンたち

1. シカゴ・ロータリークラブの会員

シカゴのロータリアンたちとはどんな人たちなのであるか？ 本章では、他の多くの質問に答える前の回答として、この質問に答えるつもりである。どのような建設的な提案であっても、会員たちの能力や限界や意見や一般の社会的、政治的な立場を考慮することなしに、シカゴ・ロータリークラブの現在の活動や将来の奉仕の機会に対して提案をすることは不可能である。この章において、シカゴの地域社会におけるロータリアンの一般的な地位を述べて、この団体の最終的な社会的な位置付けを示すと共に、調査委員会が関与すべき問題に対するこれらの事実の裏側に潜んでいる真の意味を提案できることを、切に希望するものである。

ロータリーは職業人の組織であり、その会員は世界中の都市における産

業界の経営者たちから構成されている。その発祥の地であるシカゴにおいては、創立当初から、企業の管理職、経営者、所有者、支配人に、専門職種の著名な人や代表者を加えた団体として計画されていた。

すべての社会の通例として、学識の高い専門家たちは必ず拔擢されて、経済や政治で権力をふるう社会的な団体に入り、それに依存するものである。中世において、専門職種の人たちは通常聖職者であった。17—18世紀には、西ヨーロッパにおける弁護士、医師、教職者たちが、もっぱら貴族社会から拔擢された。20世紀には、専門職種の人々は、社会的階層における彼らの立場上の考え方で、多くの産業や商業などの営利事業を支配している実業家たちと共通した多くの関心を持ち、西欧文明の一大中心地として他にその例を見ない、シカゴの実業界の一翼を担うに至った。

いろいろな場所で作られたロータリーは、アメリカの民主主義に基づいて階級上の差別が存在することを否定すべきであり、時と場合によっては、企業の管理職以外の経済団体の活動家を含めるべきであるという階級闘争の提案に賛同する意見に対して、シカゴの一部のロータリアンたちは憤慨

した。イギリスを例にとれば、労働者のためのロータリークラブを組織する可能性について、なにがしかの関心が払われた形跡がある。

これらの意見はさておいて、ロータリーは、その会員を社会の特有の階層からほぼ排他的に集める活動であることを素直に認めた方がよいと思う。シカゴ・ロータリークラブには農夫がまったくないし、一般的な感覚から見た従業員や賃金労働者もまったく見当たらない。シカゴ・ロータリークラブの会員の2パーセント足らずの者が労働組合の会員であり（アンケート、No.22）、この組織から、労働組合やその他の賃金労働者を代表する団体に向した例がないことは確かである。以上指摘したとおり、アメリカ合衆国のクラブを通じて言えることは、職業分類を代表者するということとは、ありきたりのことではなく、個々のケースで言えば、少なくともロータリアンは従業員ではなく、事業の経営者であることだけは間違いない事実である。もしクラブの個々の会員のシカゴ社会における立場を率直に認識することができれば、ロータリーの社会的な意義と奉仕の機会を、理性的に論じることができらるであろう。

調査アンケートの回答によって示された実態によれば、シカゴ・ロータリークラブの平均的な会員は、その分野における比較的大規模な会社の経営者であり(アンケート以下Qと省略—Q46:大規模35.80%;比較的大規模36.14%;中規模15.31%;小規模3.70%)、近隣地区を対象とする実業家ではなく、その大部分は、国内および国際的な市場における商品の製造、サービス、販売業である(Q47)。主な収入は、給料および事業の利益から得ており(Q44)、殆どの例は年収9,000ドルから12,000ドルの間にある(Q43)。教会の信徒であり(Q48)、高校を卒業し、多くの例で、大学に通っている(Q50)。結婚し所帯主であり、殆どの例で、2—3人の子供を持ち(Q39—41)、自宅を所有している(Q42)。

政治的傾向は、時としてはリベラルな傾向を持つものの、共和党支持であり、保守的である(Q51—52)。シカゴ市内に住んでいる人と、シカゴの郊外に住んでいる人との割合はほぼ同じである(Q37)。大多数は、その土地に住む両親の下で、その土地に生まれ(Q38)、市民としての関

心事は、近隣のことや州全体や国際的なことよりも、市全体や国のことである（Q53）。

社交クラブや友愛団体や専門家組織、商業団体に所属すると共に、しばしば、市民団体や宗教団体にも所属している（Q22）。彼らの関心の度合いは、ロータリーの会員であることよりも、これらの団体の会員であることの方が重要であると考えている（Q24）。しかし、自分たちを通じてロータリーの理念を、特に業界や宗教界や市民組織などの外部の世界に、波及させていると考えている。

この複雑な現象の特徴には、特別な注釈が必要であり、こういった表現方法は、会員の画一性と均一性の度合いに対するうぬぼれにあることは、疑いの余地がない。しかし、社会的地位、経済的地位、市民としての関心、政治的立場が揃っていることは、非常に勝れていることであり、注目しなければならぬことである。未婚の会員は7%以下であり、85%以上は子供を持っており、その意味からは家長である。ほぼ90%は、アメリカ生まれのアメリカ人である。

会員の約15%だけが年収6,000ドル以下であり、年収25,000ドルを超える者は9%以下である。会員のほぼ半分(43.7%)は、彼らの収入が、専門職種の報酬、給料、事業利益の何れから得ているかについて解答することを拒否したが、この件に関して回答を寄せた者の75%は、給料と事業収益またはその両方から収入を得ていると答えている。

自分たちの業界で、最大規模またはそれに準じる企業を代表する者は、72%を超えている。共和党支持者は72%以上であり、民主党支持者は9%以下に過ぎない。政治的な考え方では、会員の半分以上は、疑いなく保守的であり、約40パーセントがリベラルで、一見したところ、8パーセント以上が態度保留、過激派は1%以下である。

既婚で、家族の長で、適当に裕福で、政治的には保守的で圧倒的な共和党支持者のはえぬきのアメリカ人の事業家という、極めて画一的で均一的な集団であると言うことができる。

その一方で、会員たちがお互いに大きく異なっている点も、数多くある。約2/3の会員は教会の信徒であるが、1/3はそうではない。会員たち

の宗派の選択は、一覽表にはしなかつたが、受け取った全体の回答の約1／8の無作為抽出によれば、会員の圧倒的多数がプロテスタントであることを示している。ざっと見たところ、カトリックは10%未満であり、プロテスタントは監督派、長老派、会衆派等幅広い宗派にわたっている。

会員のほぼ半数以下は国内市場(44.4%)、約1／5は国際市場(21.2%)、12.5%は市内全域を対象に事業をしており、15%は大都市圏または州全域で事業をしており、近隣の人たちを対象に事業をしている会員は1%に満たない(0.74%)ことは、特記すべきことである。

会員の教育状態の違いは幅広いものがある。一見したところ、19%強の会員は中学校しか卒業しておらず、約1／3は大学卒である。1／5は大学に在学したが卒業はしていないし、4%は高校に在学したが卒業はしておらず、11%は高校を卒業したが、大学に進学していない。すべての会員はシカゴの市域に事業所を持っているが、40%以上の人はシカゴ市内に住んでいない。

シカゴ・ロータリークラブにおける「代表者」という言葉に対する

疑問は、しばしば議論された。ある意味では、会員は、シカゴの地域社会におけるすべての代表者とは言えない。何故ならば、会員の約半分がシカゴに住んでいないばかりでなく、この団体はシカゴ住民の横断面を捉えるという意識がないような方法で会員選考をしているからである。

1930年の人口調査によると、シカゴの外国生まれの白人人口は、全体の24.9%の構成となつてゐるのに比して、外国生まれのシカゴのロータリアンは、たった9.39%に過ぎない。シカゴの黒人人口は全体の6.9%であるのに、シカゴのロータリアンには黒人がまつたくいない。

1,125,000名の会員を擁するローマ・カトリック教会は、シカゴの中で最も大きな宗教団体であるにもかかわらず、シカゴ・ロータリークラブにおける代表者という考えの下では、釣り合いが取れておらず、会員中の宗教家の選考は、シカゴの地域社会における宗教の分布状態を反映したものはなつていない。

何回もにわたる選挙の結果に基づけば、コック郡の民主党と共和党の勢力はほぼ均衡を保つて変動しており、社会党と共産党は最近の選挙におい

て、42,000票の僅かな投票しか得ていない。シカゴ・ロータリークラブにおいては、共和党は明らかに代表者が多すぎるし、民主党は少なすぎて不釣り合いであり、社会党や共産党はまったく言っていないほど代表者がいない。年齢分布、教育状態、所得分布などによる数字の比較によれば、シカゴ・ロータリークラブの会員はこれらの点を勘案して、まったく代表者には当てはまらないと結論づけざるを得ない。

もし「典型的」とか「正常」を意味するような形容詞を使うとすれば、シカゴのロータリアンは、明らかにシカゴっ子を代表した人たちとは言えない。彼らがそうである理由はまったくくないのに反して、彼らがそうでない理由は山ほどある。もしシカゴの住民の人種や言語や政治や宗教の違いが、クラブ会員によって正確に反映されたとすれば、この巨大なシカゴの地域社会自身と同じように、変化に富んだ、種々雑多なものとなって、成立不可能で、統一した行動が取れない組織になったに違いない。

奉仕の理想に邁進する企業の指導者たちの組織は、選り抜かれた集団である必要がある、その点に関しては高い基準によって選考したシカゴ・ロ

ータークラブの人たちによって達成されている。入会を許された会員について、婚姻状況、家系、宗教の選択、政治的見解等々を考慮にいたれたことはまったくなかったもので、これらの項目から見てもクラブに特別な構成上の偏りがあったとしても、それはまったくの偶然に過ぎない。選考は職業に基本をおいて行われている。会員は専門職に携わる人、企業の経営者、共同経営者、会社役員または支配人でなければならず同時に、分類されている事業および専門職種にふさわしい代表者であると推定される実態と責任を持った人たちでなければならない。

従って、シカゴのロータリアンが使っている代表者という言葉に対する疑問は、会員たちがシカゴ実業界、すなわち様々な専門職種や事業や職業を、彼ら自身が代表しているかどうかという問題に置き換えることができ、その答えは、どのような基準を当てはめたとしても、再び断固として否定されるに違いない。まず第一に、シカゴの実業界そのものに対する厳密な定義はまったくないし、高度で技術的で誤解を招かないように定義するような方法すら、まったく見つかからないからである。アメリカ合衆国

の1930年の人口調査によると、シカゴには、パン屋 7,700人、建築請負人 4,700人、エンジニア 10,000人、工場の職長、監督 10,700人、工場経営者 8,200人、工場の支配人、役員 12,600人、洋服屋 14,600人、株式仲買人 4,400人、銀行家、銀行役員約 3,000人、保険代理業の支配人、役員 11,000人、不動産仲介業の役員 12,400人、小売業 59,000人、卸売業 4,000人、牧師 2,700人、歯科医 3,200人、弁護士、裁判官 6,500人、医師 6,000人、理容師、調髪師 14,000人、レストラン、喫茶店、仕出し屋 6,200人などが存在している。

これらの団体は、工場職工 165,000人、工場労働者 75,000人、一般労働者 12,500人、建築労働者 21,000人、自動車運転手 40,000人、鉄道労働者 13,000人、電話交換手 14,900人、店員 14,500人、販売員 97,000人、教師 19,000人、看護婦 10,000人、ビル管理人 20,000人、洗濯屋 14,000人、家事使用人 66,000人、ボーイ 20,000人、簿記会計係 30,000人、事務員 139,

000人、速記者56,000人および何千人にも及ぶ、その他の雑多な労働者から構成されているシカゴの労働者社会として、シカゴの実業界を代表しているのである。しかし、これらの人口調査の類は、標準的なロータリーの職業分類よりも更にいつそう、それ自身が非常にあいまいなものであり、しばしば誤解を招くことは一瞥しただけでも明らかである。

さらに、ロータリーの目的と構成員のせいで、実業家と専門職種の人々の一般的な範疇に入っていると世間から認められているこれらの団体でさえ、シカゴ・ロータリークラブは代表していないし、そうするわけにもいかないのである。ロータリーの職業分類制度はすべての職業を同格に置いて、事業や専門職種に携わる人々の数や、シカゴの産業界全体の職業に対する商業や金融の重要性などは無視して、それぞれの職業から1名の代表者を入会させようとするものである。近所にいる事業や専門職種の人々は、すでに在籍している会員によって殆ど完全に除外され、在籍会員のすべての事業上の競争相手も同様に除外されている。

もし誰かが、「在籍会員は、市全体、国全体、世界全体の事業に関心を抱

いている、シカゴの実業家たちを代表していますか？」と尋ねられても、そのような実業家の総数や職業の分布を確かめるために、利用できる統計的な基礎資料はまったくなく、各々の団体から代表者を確保する方法もまったくくない。

会員の章において、この考え方に対する実際的な関連について議論するつもりである。ここでは、職業分類制度全体とクラブの基礎的な構造を根本的に変更することなしに、一般的なシカゴの地域社会はもちろんシカゴの実業界を、会員が代表するという可能性がまったくなくという事実を認識すると共に、シカゴのロータリアンがそれに気づいてくれることで充分である。調査委員会は、そのような修正を加えることが、実現可能であるとか、望んでいるとかについて述べているわけではない。ロータリアンは、多かれ少なかれ、申込者の代表者としての資質や、ロータリーの目的や活動に基づいた奉仕をする可能性に関して、在籍している会員の印象による判断に従って選考している。この選考の方法によって、シカゴの大企業の合理的な代表者を、合理的に均一に人選して、ロータリーの理念を促進す

るために共に考え行動することが、合理的に可能かという結果に落ち着く。

2. ロータリーの主張

引き続き、シカゴにおけるロータリアン候補者に対する、ロータリアンの主張と、すでにシカゴ・ロータリークラブに所属している会員の動機や目的に密接に関係する問題について考えてみたい。

この問題を明らかにするために、調査委員会が元ロータリアンやロータリアン候補者と会談することは不可能であった。しかしながら、アンケートの回答や会員のコメントは、会員資格に対する在籍会員440名の立場から、ロータリーに入っている理由を克明に記述した資料として、妥当なものであると思われる。

アンケートの2番目の項目は、ロータリーに加わった理由を、会員から引き出すために設定されたものである。多くの会員が、四つの選択肢の一つ以上にチェックを入れたために、全体のパーセンテージについての答を

だすことは不可能であった。79名の会員が職業上の関係を有利にするため、189名が新しい友人を作るため、106名が社会的な付き合いを通じて自分たちの人間性を磨くため、120名がクラブの諸活動を通じて個人奉仕をするためと述べていることは、満足すべき回答である。その他の様々な理由については、次のようなことが考えられる。回答の一覧表は、もしそれを額面通りに受け取れば、友情と親睦という主張が第一位であり、第二位が奉仕をあげ、第三位が自己啓発を訴え、最後に利益があげられている。

しかしながらこの結論については、他の状況を考えることなしに、無条件にその結果を受け入れるわけにはいかない。利益に対する動機が、質問2において示された回答より、ずっと多い力を及ぼしていたと信じるに足る理由がある。その一方で、質問4に関して、「ロータリーの付き合いは、あなたの事業に著しい増収をもたらしましたか？」に対して肯定的に答えた人は、僅か17.2%に過ぎず、これに対して77.2%は否定的であった。質問5に対して「ロータリーの付き合いは、あなたの親しい個人的な

友人の数を著しく増やしましたか？」について、78.02%が肯定的な回答を寄せ、21.48%が否定的であった。これは、利益より親睦が重要であることを、ロータリーに在籍する会員が主張していることを、明確に証明しているものと思われる。しかし、彼らのロータリーの会費は、会社が支払うべきであると述べた回答が、約1/3(32.3%)を占めている。

多くの指導的立場にある会員や役員たちは、実際はもっと多くの会員が会社から彼らの会費を支払っているはずであり、匿名のアンケートにおいてさえ、多くを認めたがらないものの、会員たちの大きな割合を占める人たちが、ロータリーの付き合いを通じて、自分たちの事業を大幅に伸ばしているという事実があるという意見を述べている。

この矛盾した証拠から、様々な結論が引き出される。シカゴ・ロータリークラブに在籍する会員たちは、利益に対する関心を奉仕理念の表面に出すように多少なりとも歩み寄るべきであるという意見に傾いている一方で、利益に対する動機づけを強調することは、浅はかで非道德的であるという意見を持っているということになる。次章で分析するこの態度は、疑いな

く、アンケートの実態に歪みをもたらすものである。調査委員会は、この問題の処理に当たってその他の多くの証拠から、入会の同期は利潤獲得によるものであって、その動機は、ロータリーにおいて実業家たちが描いている大きい役割を果たし続けるという見方を採っている。会員の90%はこの考え方によって入会を動機づけられたわけではないと言っているが、実際は会員の大多数はこの意見に影響を受けていると思われる、17.2%以上の会員が、ロータリーの友情を通じて、直接、または間接的に取引の拡大を達成したいと、かなり強く感じているのではないだろうか。約1/3の会員の会費が、彼らの会社から支払われていることを明らかにしているこのアンケートの回答は、これを結論づける証拠でもある。

利用可能な証拠に基づけば、社交的な親睦と事業上の付き合いに対する願望が、実業家たちをこの活動に惹きつけた二つの大きい誘因であることが明らかである。これらのことは、より効果的な利潤の動機づけであることとは疑いなく、調査委員会は、次章において述べる理由によって、この状況は利己的で不名誉以外の何ものでもなく、シカゴ・ロータリークラブや

一般のロータリー活動の目的の誠実さを反映していないものだと考えている。それどころか、ロータリーの奉仕の機会という観点からは、今までのやり方よりも、より率直に利益を主張することを表に出す方が、明らかに有利であることに気づくはずである。

質問3の「なぜ他の職業分類クラブの中からロータリーを選んで入会したのですか？」に対する回答は、今までに、在籍会員に対して目的の調査や比較が殆どされていなかったことを、示しているように思われる。その理由は、次のような典型的な意見が出されたことから明らかである。

「目立っていると思ったから」「有名な奉仕団体であるから」「ロータリーは最初のクラブであり、世界で最も規模が大きくて影響力を持っていると思われるので」「最もよい奉仕団体だと思ったから」「その目的が好きだし、会員が誠実そうだったから」「いっぱい旅行ができる。それは、世界中のいろいろな人との付き合ったり交わったりする方法であり、入会したり、何かの方法で接触することは、指導者になりたいと思っっているからである」「より民主的である」「他の組織の会員よりも、友人たちによく知られてい

るから「会員の個人的な友人である」「ロータリアンの事業を引き受けて、彼の職業分類を引き継いだから」

キワニス、ライオンズ、エクステンジなどに優先して、ロータリーを選んだことを後悔するような考え方を示した回答は、一切なかった。もしシカゴにおいて、近隣地区にロータリークラブを設立する努力がされていたら、すべての関係は望ましくない結果となって、そのような団体との競争は熾烈なものになっていたかも知れないが、ロータリーとこれらの他の奉仕団体または職業分類団体との間では、会員を巡る深刻な競争はまったくなかったし、現在もないというのが調査委員会の意見である。時間と利用可能な資料の関係で、そのことに関して調査をすることが不可能だっただけであり、この結論は他の奉仕団体の会員の詳細な調査に基づいたものではないことを率直に述べておきたい。

二つの要因に基づいた結論は次の通りである。

(1) シカゴ・ロータリークラブはすべての奉仕団体または職業分類団体の源流をなすものであり、そのロータリー活動は後で組織されたすべての

他の類似組織の励みとなったこと、他の団体が設立される前は、産業界における最も活動的で優れた指導者を輩出したことで、シカゴのほとんどの地域社会に最もよく知られていたこと。

(2) ロータリーは市全体、全国的、国際的な関心を持った、企業の管理者と専門職業人の指導者の組織であり、地域および近隣の実業家によって構成されている、ほぼすべての職業を網羅した職業分類クラブという性格を持つものであること。

こういった声明は、ロータリーを褒めちぎるか、他の組織をけなす目的によつてしか、出すことはできない。これは、ロータリーと他の職業分類クラブの間の関係について考慮することを、いつも心に留めておく必要があるという事実を、端的に述べたものである。そのような組織が数多く存在するすべての都市では、ロータリークラブの会員の中には、他の奉仕団体に属する平社員の会員よりも、明らかに高いレベルの社会的、経済的特権階級である多数の実業家と専門職種の人が含まれている。ロータリーは、単なる、典型的な実業家や専門職種の代表者の組織ではなく、近所にある

食料品店や薬局の人たちによって作られたその他の奉仕団体に魅力を感じず、自分たちの事業や専門家としての活動や市民に対する関心に価値を見出した、実業家と専門職種の指導者たちの組織なのである。従って、会員の質が根本的に違うこれらの組織間において、現実の競争はまったく起こらないのである。

第3章 ロータリーの役割

1. 最初の刺激

前の二つの章では、ロータリー運動の起源と発展のあらましを説明し、その地域社会におけるシカゴ・ロータリークラブの立場を説明することに心がけたつもりである。この事實は、運動を伸ばすことに重点をおくことに、はつきり転換したことを示すと共に、結果として、ロータリーの眞実の目的について混乱をもたらしたことを、充分に示すものでもある。従つて、シカゴ・ロータリークラブの現在の活動に対する適切な評価をするためには、できることなら、これらの活動の一般的な目的が何であるかを、よりはつきりと公式化し定義すると共に、これを改良するための具体的な提案を示すことが絶対必要であると思われる。

調査委員会は、この再定義をするに当たつて、多くの人を巻き込みながら長い間苦勞を重ねるような、あらゆる社会的な活動や公共運動の目標や

目的を述べることを引き受ける場合には、社会学者が役に立つことがよく分かるような分析することが大切であると考へて、努力を傾注してきたつもりである。まったく科学者であるという考へ方に基づいたこの分析が、反対に批判的であるとか、個人的であるとかいうような誤解や疑惑をまったく抱かせることがないように、この種の分析の背後に隠れている一般的な考へ方を明らかにすることが重要であると、調査委員会は考へている。

歴史家や社会学者は、広範囲に広がった運動の社会的な意義や目的に関して、活動が伸びた後の回想や活動の早い段階において表明された目的はもちろんのこと、その活動の創立者や指導者たちが、単に口頭で述べた言葉とか文書にしたためた声明書などは、公正に評価できないことを、ずっと以前から知っている。経験豊かな第三者は、その種の言葉を長い間唱え続けることによつて単なる象徴と化す傾向があり、実態は急速に変化していくにもかかわらず、その言葉が適用されることによつて第三者に混乱を引き起こすと共に、変化した裏側に潜んでいる事実が玉虫色になることによつて、変更された内容を非難されるような象徴と化すことを知っている。

る。古い言葉は、変化した状況の下で、しばしば意味が変わったり、本来の意味をまったく失ってしまった形で生き残るものであるが、生き生きと育っていく社会的な活動や施策は、必ず、新しい人たちや新しいニーズに自ら適応していくものである。施策というものは、その時点における会員が、それをどのように定義したら良いのかはつきりと分からなくとも、基本的に真の社会のニーズを満たすものならば、しばしば成長して実を結ぶものである。施策を遂行するためのニーズを理解することは、原則と方針を再構築するための基本とも言えよう。

社会科学者は、安い給料で日なが一日働かざるを得ないという世界の中で、抽象的な記述や分析をすることで満足しているのが常であった。しかし今回のケースでは、社会科学調査委員会は、彼らの分析が活動を確定する基礎として役立つという、特別な任務と稀な機会を与えられた。従って調査委員会は、特にロータリーがこれまで演じてきた、また演じようとする役割の社会的な意義を、できるだけ明確なものにしたいと考えている。委員会としての考え方は、会員（入会していない人も）に一定の満足を与

え、その地域社会における社会生活に対して不可欠な役割を果たしている、既存の社会的な活動に関する事実について、いかなる判断を述べることに
も関心を抱いていない。この調査の目的は、満足とは何であるか、役割と
は何であるかを明らかにし確認することによって、自らの限界を知ること
である。

精神的な運動をすることが本質的なことであるという考え方は、ロータ
リーの創立者や指導者たちの発言の引用からも明らかである。これが真実
であるという証拠として、ロータリーは、すべてが未来永劫に変わること
のない、偉大なる運動に自らが邁進しているという考え方や、調査アンケ
ートで、ロータリーは「教会を優先している」という回答を、何人かのシ
カゴロータリーの会員がしているように、**Service above self** という注目
すべき立場に立っている会員の熱意という、素晴らしい便りを運ぶ炎のよ
うな情熱と熱い心を持った精神的な運動であるという、幾つかの特徴を示
している。

社会現象を分析する立場から、精神的な運動で大切なことは、自らが魅

力を感じている人々と共に計画を練ることである。活動が教会の組織と同じような形を取っているか否かにかかわらず、これはまさしく眞実であり、結束したある種の新しい概念によって、会員として自らを認識することができるように、集団に方向性と親睦をもたらしうような、象徴やスローガンや価値や理念やその他の形として備えられているものである。

世界を風靡するような偉大なる宗教とか、地方に限局する団体の発想から得た忠誠心や奉仕といった新しい物の見方などの、広い見識を持ったすべての精神的な活動は、「万物はすべての人の物である」という範疇に属するものである。他の人たちが持っているものとは、幾分異なつた意味を持っている、各人の多岐にわたる精神的なニーズに対して奉仕することであり、これはロータリーの精神的な活動として順当な活動でもある。ロータリアンに対する、ロータリーの独特な意義の一つとして親睦があり、次にリクリエーションがあり、三番目に教育がある。その他にも、事業上の付き合い、個人的信望、奉仕の機会、交友関係の促進などがあげられる。単に、指導者や会員たちが表明している理屈や文章を検討することによって、

ロータリーの真の意義や社会的な目的を理解することが不可能なのは、この本質的に定義することが不可能な性格を持った精神的な活動のためである。特定の評価や具体的な提案をするための基本として役立つように、その目的に対する一般的な表現に到達するための別な手法が用いられなければならない。この手法は、運動体としてのロータリーよりも、人間としてのロータリアンという考え方であり、現代の世界の趨勢は、単に理屈をこねるよりも、人間を磨くことを必要としているのである。

この観点から、すでに指摘したようにロータリアンは、現代社会における限定された企業の経営者や専門職、都市の商業や工業や金融業の経営者や支配人といった階級の人たちから選考されていることは明らかである。彼らは、現代の歴史家や社会学者によって中産階級と名づけられた地域社会の階層に属している。この言葉は、ここでは悪口の名称ではなく、現代の経済的な序列におけるロータリアンの一般的な社会的地位を示すために、説明上の分類として使われたものである。ポール・ハリスは次のように述べている。

ロータリーは中産階級の組織として計画されたものだが、イギリスでは店の経営者という市民が、アメリカ合衆国では、豚肉の箱詰め業者などの市民が、会員として指名されている。そのようにしたこと、イギリスとアメリカにおいて、ロータリーが生き残ることは間違いない。金持ちも貧しい人も、王子も一般の人も、ロータリーに入会している。我々が主に中産階級の人たちが入会する方が良いと思ったことは、別に恥ずべきことではない。

このことは、次に示す通り、ロータリーの社会的な意義は、ロータリーが会員を選考した階層の現代社会における地位という点と、このグループ内で発展した個人的な関係の絆という点に限って、理解することができるということ、譲歩すべきことなのかも知れない。この妥協は、ロータリーは階級組織であるとか、シカゴの地域社会や一般的なアメリカ合衆国の社会的な亀裂であると鋭く定義したり、はっきりと認識していることを述

べようと意図したのではない。階級の線引きがはっきりしているヨーロッパ大陸では、ロータリークラブの会員は、中流階級の上の部類（今日で言う中産階級）や知識階級に限定されており、まれに貴族の末裔が在籍していることは、良く知られた事実である。商店の経営者や小規模の実業家等々の零細な中流階級は、小作人や労働者階級の人々に過ぎないとして、堅く門戸を閉ざされている。

民主主義と平等という伝統を持つアメリカ合衆国では、そのような厳しい差別は存在しない。ロータリー活動は、他の場所と同じように、ここでも、アメリカ社会における経済力や政治力の恩恵を受けて存在する、主に受益者の集団とでも言うべき実業家と専門職種の人たちによって構成されていることは、間違いない事実である。その会員たちは階級意識と団結心にしぼしば欠けるものの、この集団はヨーロッパ人の感覚による支配階級には当たらない。しかし、個人個人が、財産と職業のおかげで、農夫や賃金労働者などのその他のグループとは別なものとみなされる社会的経済的な地位を作り上げていったのである。このグループは、私有財産と経済的

な取引によって得た利益に依存している、すべての現代社会に存在するものであり、すべてが民主主義的な条件の下で、経済的政治的な威力を發揮するロータリーの源ともなっている。世界中の大国で、そのような階級が存在しない唯一の国がソ連（ロシア）であり、ここでは、この階級と経済制度が、社会主義革命によって壊滅された結果、ロシアはロータリークラブがまったく存在しない、世界における唯一の重要な国家である。

さて、その目標の改善を図るに当たって、ロータリーは、社会における会員の立場を率直に認める必要がある。ロータリーは実業家と専門職種の人たちの親睦のために、彼らの訴えかけによって作られたものである。採用する計画や、乗り出そうとする未来を切り開く道がどのようなものであるろうとも、実業家と専門職種の人たちの組織であり続けることは、まず疑いの余地はない。その意義は大いに主張すべきであり、実現可能な究極の目標は、現代の社会制度の中で生活する実業家や専門職業人の、心構えや行動や考え方や関心や必要性などの中から見つけ出されるに違いない。

ロータリーの起原から見ると、その活動が起こった当初の実業家と専門

職種の人々の生活における最も重要な特徴として、三つの事柄をあげることができる。(1) 20世紀初頭の社会における実業家と専門職業の人々は、彼らの職業上の活動を通じて個人的な利益をあげることが、動機の大きな割合をしめていた。(2) 高度な個人主義社会の中で生活し働くことは、とりもなおさず、個人や会社や法人の間における、売手と買手、雇用者と労働者、協力者と競争相手の間に冷たい非人間的な関係をもたらすような個人の自由意思と主導権が、どちらかといえば大きな割合を占めている、自由競争によって特徴付けられていた。(3) これらの二つの事柄のため、実業家と専門職業の人々には、集団としての責任感や、心のこもった対人関係に基づいたグループとしての団結心などの感覚が欠如しており、過酷とも言える個人主義社会の勝利者として立派な存在であるにもかかわらず、いつも寂しさにさいなまれ、社会的な好奇心を満たすことに満足できない、社会や経済界の孤立した立場に自らが立たされていることを常に自覚していた。

これらの考え方は、ロータリー活動が、他の世界に対して驚異的とも言

える急速な拡大を成し遂げたことを理解するための、手がかりを与えるものと思われる。1905年から1906年にかけて、ハリス自らが集めた小さなグループは、伝統や社会的文化的なまとまりや、人々が共に歩んでいこうという他人との連帯感を著しく欠いた、新しく急激に膨れ上がっていく大商業都市の特徴的な社会関係にある寂しさや、非人間的な冷淡さから逃れたいという要望によつて、大きな生命の息吹を吹き込まれた。商売や専門職の同業者組織が広まる前は、競争は激烈で、しばしば苦々しい思いすら抱かせるものであり、事業家や専門職種の間で、親睦とか真心を気遣うことは極めて困難であった。実業家に与えられた使命は、友情ではなく、より活動的に商売をすることであつて、友情を培うことは、市場における競争相手がいない人々の間に限って可能なことであつた。創立者がこのこと気づいていなかったか、またぼんやりと気づいていたかは別にして、職業分類の考え方の心理的な基礎はここにある。自由と友好的な開拓時代の頃のこと、年取った住民の思い出の中に鮮やかに残っているアメリカ中西部の新興都市に、この考え方が最初に根をおろしたことは、

別に意外なことではない。しかしこの運動は、シカゴ・ロータリークラブの源となった創立者のうちの何人かにとっては、競合のない実業家たちの間の付き合いを進めることによって、利益を増やすように計画されているように思われた。ざっくばらんに言えば、寂しさと非人間性から生まれたニーズに対して、社交的に述べられた新しい方法によって作り出された社会的な動機が、まさしく、利潤という目的によって、直ちに支持を受けたのである。

初期の動機は、彼らが生きていくために、一日中働かなければならない世界でまったく否定されていた、彼らの間で注文や契約や得意客を交換して、彼ら自身の事業や専門職種を伸ばしていきたいという要望や、友情やほのぼのとした個人的な付き合いをすることは、孤立していた実業家と専門職種の人々としても、心から望んでいたことであつた。これらの目的を達成することができる組織は、あらゆる場所にいる実業家と専門職種の人々の訴えを成就させなければならず、この動機こそ、シカゴ・ロータリークラブや国内や国際的なロータリー活動の驚異的な成長に、決定的とは

言わないまでも重要な役割を果たしたことは疑問の余地がない。たとえ、それ以外の動機によって役割が果たされたとしても、会員たちが親睦を深め、取引を増やす機会を見つけなかったら、活動がこれほど成長したはずがないと言っても、言い過ぎではない。会員たちの利益に対するニーズと社会的なニーズが、同時にかなえられたことによって、ロータリーは生き残り、広がっていったのである。

しかし、ずっと最初の頃から、三番目の動機、すなわち後に、「奉仕」という言葉によって象徴される動機がその役割を演じていた。1900年代の初頭、シカゴの実業界で流行っていたというより、産業革命以来の西欧社会において、大なり小なり一般的に行われていたやり方では、商習慣の厳しさと無法ぶり、ごまかしや不誠実さ、無制限で節操のない利潤の追求、市政への無関心さや政治の腐敗などが伝わってくるだけで、ただ単に実業家としての社会的な本能に飢餓感を生じさせ、個人的な孤独感をつのらせるだけであった。これらの芳しくないやり方（25年間の努力にもかかわらず、いまだに芳しくない現状が続いているが）は、健全で寛容さを持つ

た社会的に敏感な市民の良心に、自ら痛みを刻み込ませるものであった。

「1905年2月23日は精神的な日であった。正義の力が不正に対して果敢な戦いを挑んで、社会の大きな嵐が白いしぶきをあげていたシカゴこそ、ロータリーの誕生にとって最適の場所であった。」

町を蘇らせる望みを託されて、商慣習や政治的な行動に対して高い理念を掲げながら、奉仕の機会を提供する活動や組織は、有利な条件を備えながら、社会の考え方に満足していないこれらの実業家や専門職種の指導者に、当然のこととして、力強く訴えかけたのである。ここに、親睦と利益という機会がなければ動き出さなかったかもしれない、何人かの人々の活動を誘い出した、三番目の動機があったし、更にここには、具体的な事実を示すことによって、共通の目的である奉仕に対して、社会や市民生活における親睦の必要性を示すという動機もあった。更にこれは、その背景にあった利益を得るために集まってくるという動機を進化させて、全体の活動の道しるべとして誘導する動機となつて、初期にその可能性があった崩壊からクラブを救つたのである。

このように、ロータリーは明確な三つの動機づけから成り立っていたが、これは長所と短所を併せ持っていた。三つの動機の長所は、実業家や専門職種の指導者たちに、共に活動しようというすざまじい求心力を与えると共に、グループを結合させるためのすさまじい行動力を与え、行動する会員たちに活力を与えたことである。三つの動機の短所は、まったくいいほど首尾一貫しておらず、調和がとれていないこと、理念と目的を論理的に融和させる筋書きが、簡単には理解できるものではなかったことである。親睦と利益とは決して相反するものではない。親睦と奉仕とは相反するものではなく、実はお互いに補い合うものなのである。しかし、奉仕と利益とは相性の悪いものであり、少なくとも、外部の多くの批評家の意見は、自ら奉仕に貢献しながら利益を追求する団体として、偽善者として写らないものであった。

これらの三つの目標は、会員の心の中でも、お互いに葛藤を繰り返している。古い一派に属する小集団は、最初に利益を置く立場を貫こうとするし、一般会員からなる大部分のグループは、活動を導く原則として親睦の

必要性を強調する。事情を理解した指導者を含むその他の人たちは、奉仕の理念を強調しながら、大なり小なり成功した、古くからある親睦と利潤という動機を組み合わせたこの理念に基づいて奉仕する活動を、具体的な形で表わしていった。この経過の中で、利益という動機は当然のことながらロータリーの文献から追放されて、少なくとも大多数のロータリアンが口にすることはなくなった。親睦は、多くの指導者や会員たちの間では奉仕に次ぐものとされ、全体としての奉仕理念の中では、親睦を育むとか、深めるなどということ以外には、あまり大きな意義を持たないものになってきた。

実業家と専門職種の人たちに対する、ロータリーの基本的な主張を考慮したこれらの相互関係の実地調査は、シカゴ・ロータリークラブと、一般的なロータリー活動の現在の問題点を明らかにすると共に、会員と地域社会に対するより効果的に役立つ活動を、さらに完成に近づけるためには、何が必要であるかを示すために、大いに役立つに違いない。

2. 親睦の理念

会員間の親密で心のこもった個人的な関係を深めることに失敗した組織は、組織としての社会的な目的を達成することは不可能である。絶えず社会にとって役立つことを実行しているグループでなければ、感情の統一、親睦の絆、高い道徳観、忠誠心や団結心などを高めることは不可能である。一部の古いタイプの企業は、最初のカテゴリーに入っている。そのグループを構成している人たちは、お互いの取引において、冷ややかで、非人間的で、利己的で、自己中心的である。彼らは共通な活動によって経済的な利益をあげることができたとしても、組織に対する会員たちの忠誠心によって、逆境の嵐が吹き荒れる天候に耐えながら、社会に奉仕できるような組織を築き上げることはできない。

会員間の友情を深めることだけに専念する組織は、自分たちと同じレベル以外の社会に奉仕することは不可能である。この二番目の例では、必ずといっていいほど、グループの活動力は地域社会や一般社会など外部に向

かつてではなく、会員に対して内部に向けられている。一部の親睦組織は、二番目のカテゴリーに属しており、これを構成している人たちは、心がこもっており、助け合い、お互いに同情的であるが、外部の世界との関係が希薄であり、広い社会的な目的に対する能力が備わっていないか、団体としてしか行動できないようなグループである。事実彼らは、上流を気取って他のグループとは一線を画すか、個人的な威信と、際立って優れた人たちの組織として、一般社会の人たちとは別の次元にいる団結したグループとして、彼らの親睦の強さを誇示する傾向が強い。

ロータリーの活動は、その会員と表明している目標の点で、これらの両極端の真中に位置しており、会員間の親睦よりも社会に対する奉仕の方が、より一層重要であるという組織を作るべきか、社会に対する奉仕よりも会員間の親睦の方がより重要であるという組織を作るべきかという、輻輳した目的の間に立って、どちらかといえば、不安定な平衡を保っている組織とも言えよう。最初の目標設定では、集団としてのクラブによる社会的な活動が検討されたものの、1922年以降における目標設定では、僅かば

かりの、クラブとしての団体活動が強調されてはいるものの、個々の会員による奉仕に対する自己開発や教育や啓蒙や修練に重きが置かれるようになってきた。

現在国際ロータリーは、ロータリーの哲学は、ロータリアンの個々の行動と指導力に影響を及ぼすことに意義があるのであって、ロータリークラブを通じたロータリアンの集団による活動は、それに関連する二次的なものに過ぎないということを認めている。このことは、あたかも、選手個人個人とチームが連帯感を持たなければならないように、団体と個人の行動は、双方がバランスを取りながら成功に導くことが必要であるという原則に基づいた、1922年9月のトレッドウエルとウエストバーグによる組織管理手続計画以降においても、シカゴ・クラブの前提とはなっていない。

各々のロータリークラブの全体的な道德の比重は、彼らの毎日の取引や、彼らの同業者組合や専門団体にロータリーの原則を地道にそつと波及させているこれらのロータリアンにかかっている、という事実を強調するため、ある解説者は、青少年活動や偶発的な慈善活動や些細な社会奉仕など

のようなロータリーの散発的な試みは、「真のロータリーの使命と比べると、塵のようなものに過ぎない」と述べている。ロータリーの本質は、付随的な博愛行為によつて、いささかの影響も受けていないのである。

別の注釈者はいつそう強く、そのことを指摘している。

ロータリーの弱点とは何か？ ロータリーの体質的構造にあるのか？ アメリカにおける運営にあるのか？ ロータリーの弱点は、ロータリーが多くの会員たちにとつて、単なる手段であり組織に過ぎないという事実にある。ロータリーに忠誠を尽くすのは、会員個人個人の義務である！ ロータリーはロータリアン自身にかかっていることを認識しているロータリアンは、そう多くはない。騎士道にも似たロータリーの精神は、活動することによつて対価を得るのではなく、活動することによつて正義感を得ることであり、対価として支払われるものは精神的なものである。あなたの行動があなたを真のロータリアンにする。あなたがロータリアンであること

を、他の人たちに認識させなければならぬ。このような方法によつてのみ、ロータリーは、強力な指導者、勇氣ある人、殺伐とした環境の下で起る失敗や間違ひを取り繕おうと、頭を悩まししながら、結局はこの文明を維持していかなければならない立場にある、雄々しい実業家として、錦の御旗を掲げながら前進することができるのである。

この心構へは、親睦と奉仕理念の間の関係を考える上で、多くの問題点を抱えている。すでに指摘したように、社会的な見地から、二つの理念を切り離すことができないことは言うまでもない。会員同士が共に親睦の絆で結ばれていない組織は、団体としてとか会員個人個人としてとかにかかわらず、地域社会に効果的な奉仕をすることは不可能であり、さらに、会員たちが大規模な奉仕活動に従事している組織は、必然的に、共同の努力と経験を分かち合うことを通じて、心の通い合いと協力を深め、共通な目的を遂行するために共に行動している人の間の親睦を深めていくものである。

る。しかし、別な見方をすれば、親睦に類するようなことは、奉仕理念との直接的な関連性はまったくなく、事実、奉仕理念を効果的に実行する妨げになると考えられていることも容易に想像できる。いたずら気分の少年のように、友情あふれる「よい仲間」としてのグループは、団体的にも個人的にも、一般の社会に奉仕をする必要性のない、社交とか親睦といった動機によって団結するものなのである。

そのようなグループは、いとも簡単に自己満足し、独り善がりになり、自己完結型になり、鼻にかけ、閉鎖的になり、孤立してしまう結果、世間やその問題の外に引き摺り下ろされてしまう。このタイプに属する楽しい組織では、会員たちのより広い社会的な関心や感覚は不活発となり、その会員たちが社会に対して奉仕する能力は衰えていく。

ロータリーの親睦は奉仕に支障を及ぼすか？

そこで、ロータリーの親睦に関連して提起しなければならない辛らつな

質問は、個人的または団体的な奉仕が社会のためになっているのか、それともそのような奉仕は社会にとって有害なものなのかということである。ロータリアンとは口先だけで社会的な理念を語り合うような、単なる打ち解け合った仲間なのか、それとも、心の底から人間的な友情と心配りに関心を払うことを優先して、親睦の形を内部に向けて定着させたいのか、または、個人および団体活動を通じて奉仕の理想を実現するために、見かけ上の親睦の形を深めながらお互いが結束している実業家や専門職種の指導者たちなのか？

この質問に答える前に、他の小さいクラブよりも注目をあびる可能性が高い、大きな規模であるにもかかわらず、活動的で心のこもった親睦が、実際にシカゴ・ロータリークラブにおいて達成されていることを指摘しておいた方がよいかもしれない。アンケート(N.º 5)に対して、回答を寄せた440人の会員の78.02%は、ロータリーの付き合いによって個人的な友人の数がかなり増えたと述べているのに対して、僅か21.48%がそんなに増えていないと答えている。昼食例会のプログラムについて、20

1名の会員が、その重要な意義は親睦であるという見解を述べているのに比して、娯楽性と述べた者は65人、出席クレジットをうけるためと述べた者は21人であった。その一方で、アンケート(N^o.14)では、23人の会員が、ロータリーから情報を得るために参加していると答えている。疑いなく、心暖まる親睦は達成されているものの、この形の親睦が効果的な奉仕に対して最もふさわしいかどうかについての本質的な問題は残されたままである。

シカゴ・ロータリークラブの会員間の個人的関係について慎重に調査した結果、クラブの中には両方のタイプの親睦が存在しているという結論に達したが、百分率によって、どちらのタイプが優勢であるかを測定する方法はまったく見当たらぬ。しかし、外部の第三者にとっては、会員の大多数は、奉仕の理想の実現に向けた個人や団体として、ささやかな感動を現実に達成するために、自らが開発した親睦がもたらしてくれる、暖かく深い個人的な思いやりのある行動によって、共に結ばれているように見受けられる。このタイプの親睦は、まったく望ましいものであると共に、本

来そうあるべきものであり、奉仕の理想の一概念として、精神的な基盤を構築しているのである。

ごく親密な個人的な関係を利用する別の形の親睦は、個人の社会的な衝動を満足させてくれたとしても、各々の個性に刺激をあたえたり、多くの一般の社会的な感受性を目覚めさせることは明らかに期待できない。問題を通じて考えたことを実行しようとすれば、自らが作り上げた機関であるクラブに夢を託した、極めて少数の会員だけが計画をたてて、自らの力で考えた親睦の形を推し進めながら、まったく異なった形の奉仕を積み重ねていかなければならないのである。この二つの奉仕の形については、ここでは参考にとどめ、次の章で議論するつもりである。ここでは、指摘した二つの親睦の形について、できる限り明確に区別することで充分である。

社会的、宗教的、政治的な親睦の形態

修道院に代表されるような活動的な宗教団体が、親睦の代りに、奉仕と

言う言葉を最も良く表しているいろいろな極端な団体の縮図のような立場をかたくなに守っているように、社交クラブ、秘密結社、友愛団体などは、はっきりと区別できる方法によって、内部に向かって極端な特徴化が進むか、親睦が進むかの道をたどることが指摘されている。最初のタイプの組織では、会員たちはお互いに助け合ったり親密な人間関係を通じて、真の精神的な満足感を引き出すことができる。組織の足並みをそろえるために、シンボルや神話や神秘性や形式や伝統などで、自らを特別視しながら会員たちの忠誠心を呼び起こしていく。そのような組織と外部の世界との間の接触が疎遠になればなるほど、会員たちは、自分たちが演じている役割が一般的な社会の要望とおよそかけ離れた役割を演じていることに気づかないものである。組織の会員が他の団体と接触するのは、単に彼らと他の組織とを区別するためであり、組織に入るのは、社会や業界の名声を勝ち取るためだけである。そのような組織の中には、会員間の暖かい友情はおろか、社会に対する奉仕やその他のことに対する関心など、まったくくないに等しい。

その一方で、チュートン騎士団や中世の十字軍やフランシス修道会やドミニコ修道会や、もっと近代ではイエズス修道会のような一致団結した親睦で結ばれた活動的な宗教団体は、個人だけではなく団体としても、地域社会に対する奉仕を行っている。グループの会員たちは、汚い手段を弄したり、気楽な炉辺の社交よりも、むしろ、彼らの関心を社会の外側に向けた行動のプログラムとかシンボルとによって、自らの存在を証明しているのである。地域社会の人々の目に写った会員たちの評判や、一般の人々の尊敬を受けるに値する理念に代表されるような活動的な奉仕よりも、一般大衆の畏敬とか好奇心をかきたてる、バッジとか、合言葉とか神秘的なことに、極めて大きく左右され易い。20世紀の世界において、この活動が捻じ曲げられて、目を背けたくなるような親睦の典型的な形態を見せた例が、例えばイタリアのファシスト党や、直ちに聖職と支配的な上流階級の特徴を備えたロシアの共産党のような革命的政治組織である。ここにもまた、神秘性や儀式や多くの隠語や合言葉があるが、こういったものの本質は、力強く社会的に行動をしていこうという理念に対する共通の愛着かも

知れない。

ロータリーは社交クラブではないし、宗教団体でもなく、いわんや社会において独裁的な力を發揮していこうという野望を持った政治組織でもない。多くの会員間で定着している親睦の形態は、どちらかというところ、宗教団体で見られるタイプよりも、社交クラブや秘密結社のタイプのものに似ている。これは当然のことであって、冷やかな非人間的で混迷した現代の都市文明の下では、心のこもった人間関係を作るタイプのもはもちろんのこと、どのようなタイプの親睦であろうとも、社会的に素晴らしいこととして歓迎されることは間違いない。しかし、一般には受け入れられ易いタイプの親睦が、最も望ましいタイプの奉仕につながるとは言えない。この考え方に対する一般的な疑問として、ロータリーが社会的に重要なプログラムに向かって活動するためには、バビットで風刺されたタイプと違った親睦を深めるために、共通の精神的な努力を傾注するようなタイプに近づくように、今までとはある程度違ったタイプのプログラムと、団体活動に向かって努力すべきである、という問題を提起しなければならぬ。こ

の質問に対する回答は、奉仕理念そのものの起原と性格をより明確に分析するのを待たなければならぬであろう。

3. 奉仕の理念

「奉仕」は長い間、ロータリーの根幹となってきた。Service above self と He profits most who serves best は、共にロータリーの錦の御旗ともいふべき、誇り高きスローガンである。ロータリー哲学やロータリーの社会的な役割のすべての考え方において、奉仕理念の出発点としても、結論としても採用されてきたスローガンである。そのような奉仕理念のあるべき姿とか効用とかについて、抽象的に議論することはまったく価値がないことである。それはすでに、ずっと昔から完全に定着し、ロータリアンの心にしつかりと根をおろしており、実現可能であると共に必要な理念として評価されている、ロータリーへの本質から切り離すことのできない部分なのである。ここで提起された問題は、理念の起原や、その真意や内容、

より効果的に実行できる可能性に関する問題であつて、「なぜ奉仕をするのか？」ではなくて、「どんな種類の奉仕をするのか？」とか「どこで奉仕をするのか？」を問題にしているのである。

歴史的にみた理念の起源の片鱗は、たぶん、現在のシカゴロータリアンの考え方と活動に、奉仕のスローガンの心理的な意義として、明らかに影響を与えている。この言葉の背後にある考え方は、どう考えても新しいものではなく、最も古い宗教や最も古い人類の観念や社会的価値と同じくらい古いものであろう。ロータリーの文献の中でも、黄金律の新しい形式あるいは新しい適用としてしばしば述べられており、ロータリー道德律の中で、次のように引用されている。

この職業倫理基準は、我々に共通した人間性に基づく思いやりを心に留めるものである。職業上の取引や野望や諸関係は、常に社会の一員として自分が果たす最高の義務を考慮すべきである。職業生活のあらゆる場面に

において、また、自分が直面するすべての責任において、最初に考えなければならぬことは、その双方を終えたときに始めて果たされる責任と義務を満たすことである。人間の理念と業績の水準を、それに気づいたときよりも、少しでも高めなければならぬ。

「すべて人にせられんと思うことは、他人にもその通りにせよ」という黄金律の普遍性を信じ、我々が、すべての人にこの地球上の天然資源を機会均等に分け与えられた時に、社会が最もよく保たれる。

この理念がシカゴ・ロータリークラブによって採用され、ロータリー活動に採り入れられた状況については、この調査報告書の冒頭において概略を述べた。親睦と利益を促進するために、共に集った実業家と専門職種の人々のグループは、利己的な目的を持った組織であるという非難や、組織の内外からの会員の関心の高まりや批判に対して、強い衝撃を受け神経質になった。彼らはそのような非難を受けた会員たちの関心を刺激する方法

として、何か地域社会のためになることをしなければならぬと感じた。1907年のシカゴ公衆便所計画はその直接的な結果となったものである。その後まもなく、何人かの会員は、販売術と宣伝の専門家、アーサー・フレデリック・シエルドンの考え方によって、確実によい影響を与えられた。例え他のロータリアンたちが、利潤追及のスローガンではないと訴えたとしても、もともと、サービスという言葉は販売学上でいう事業上の利益から生まれたものである。シエルドンのスローガンは、1911年の年次大会で公式に採択されて、ロータリーの輝かしいモットーとなった。その当時およびその後当分の間は、多くのロータリアンにとってこのスローガンは、事業の動機を覆い隠す糖衣錠のような、魅力的なものであったに違いない。事実、このスローガンは、奉仕の前提に利益を置き、利益を得るための方法を奉仕だと定義づけている。時が経つにつれ、この考え方はロータリアン自身からの批評をうけて、**He who serves best profits most** に変更しようという提案すら検討された。

奉仕理念はもともと、利潤を得るための動機と関連しているという事実

は、単に歴史的に興味があることであつて、現在における奉仕の意義に関する議論とは何の関連性もないが、人間の精神が活動する幾つか方法に、我々の近代的な解釈法を照らし合わせてみると、調査委員会はこの歴史の事実をそんなに簡単に退けるわけにはいかないと考へている。すでに、我々は社会科学者の立場として、活動と理念の意義を分析するに當つて、活動の指導者や会員が彼らの目的を説明しようとして述べた表明や公式の声明だけでは、証拠として認めるわけにはいかないという事実を述べてきた。

事実、分析心理学は、彼らの行動をよく見ると専門的にまたは合理的に計画する人たちとしての、深い人間的な事情があり、實際のところ、彼らが引き起こした行動と潜在意識の刺激という二つの相反するものを表しているのかも知れないということ、この3—40年の間に、我々に教へてくれた。防御反応として、動機をそのようにして覆い隠すのであつて、こういつた人の非常に重要な特徴は、それを表に出すときには、自分たちを行動に駆り立てた隠れた刺激を、他人から覆い隠そうとはしないことであると、心理学者は語っている。それを隠したいという意識的な考へからくる

無意識な反応が常に働いて、普段はそれを覆い隠しているのかも知れない。

あまり価値がないものであっても、その人が見つけ出したとか、探し出したと認められるような活動に携わっている人は誰しも、必然的に、立派な名誉とか価値があるとか有益とかと表現される言葉を使って、彼自身と地域社会に対する活動を正当化するものである。もし我々が自尊心を保ち続けたいのならば、それも必要かもしれないが、我々の体質を強化するためには、その考えを捨てて、精一杯自分たちの活動を続けていきたいものである。

銀行家と密造者、強盗と牧師

銀行家と酒の密造者の対比は、食料品屋の主人と大学教授、強盗と牧師との対比とまったく同類のものである。バーナード・ショーの **Man and Superman** に登場する陽気な山賊は、財産をより公平に分配するために計画した、彼らの土地の要求を正当化しようとしている。これはまさしく、

貧乏人を助けるために金持ちを襲った、ロビン・フッドの正当化と同じ次元のものである。

これは、ロータリアンが従事している事業や専門職の活動を、密売者や強盗や山賊と比較しようとするものではない。それどころか、彼らは近代産業界における最も有益で不可欠な機能を果たしているのである。ここで議論するつもりはないが、我々が現在議論する上で重要なことは、みんなが認めている幾らか奇妙な理由とも言える、これらの活動の背後にある利益への欲望という価値ある動機が、公に発表する動機としては、確実に無価値のものになってきたということである。利益の探求に関して、実業家を含む何人かの人たちは、金銭上の利益が成功の度合いや報酬として表に出てこない他の活動よりも、賞賛に値するものではないと考えている。しかしながら理屈に合わないこの心構えが、我々が述べた防衛本能を正当化する原動力になっていることは疑いなく、状況の分析に当たっている心理学者としては、ロータリーの奉仕理念はこの流れの中で無意識に起こったものであり、この分析によって理念に関する現代心理学上の意義が明らか

にされることを確信している。

フロイドと彼の一門によって構成されている分析的心理学者は、多くの異なった状況の下において人間を支配する動機となる、数々の力の相互作用に関する観察を続けている。それは興味深く脚光を浴びているものなので、我々がここで検討している利益と奉仕の動機の相関関係がどのようなものであるかを、心理学者の専門用語で読者を悩ますことなしに、他の人たちの意見も加えながら述べてみたい。この分析心理学は、人間の個性を三つの要素に見たてている。感覚の満足度を追求する無意識の原始的肉体的な衝動と、これらの原始的な衝動を、社会的に許容される枠内に制御するために社会的に身につけた自制心で、これを抑えたり、コントロールしたり、止めようという意思と、意識的に身につけたこれらの二つの要素を混ぜ合わせた自己意識とである。原始的な衝動に溺れたり、乗り越えたりする際には、それを何とか修正しようと決心した時に限って、潜在意識下で、無意識な力が反対することによって起こる心の内の葛藤が引き起こされる傾向がある。

これを修正することは、あるタイプの人々には文字どおり可能であり、それは禁欲主義、自虐、自己卑下の形をとるかもしれないし、またそれは姿を変えて、献身とか地域社会に対する奉仕といった崇高な理念を開発する形をとるかもしれない。分析心理学者は、このようにして、ロマンチックな愛情というものは、性的な領域から社会的に許容できる表現の枠組みの中で、根底にある動物的本能を無意識に改良し修正したものであると述べている。彼らは遠方にまで出掛けて、すべての人道的な道徳的理念や、すべての文化の高い精神的道徳的価値は、この深層心理の過程によって説明できると解説している。もしこの分析を我々が議論している問題に当てはめれば、ロータリーの奉仕理念は、社会的な良心と、個人個人の人間性の中に本能として存在する原始的な衝動との間の、相関関係によって生まれたものであると言うに違いない。これが、昇華と呼ばれる過程である。

ロータリアンの活動は、どこで留まるのか？

この問題に役立つ分析をするためには、昇華の過程が結局はその最終点まで進むか、それとも多くの人たちや状況が、どの段階で立ち止まるかを認識する必要がある。もし元来備わっている原始的な衝動が、完全に昇華するための引き金になっていなければ、原因となったきっかけとは明らかに関係していない、道徳的で精神的な価値を生むであろう。いずれにしてもそれに関連した二通りのやり方に対して、完全に説明可能な抵抗があるはずである。事実、昇華の過程において自らがやり遂げる動機となったきっかけは、反対と非難との意図的な対象になりやすいものであり、もし原因となったきっかけが、反社会的で、非道徳的なものならば、特にその傾向は強い。このようにして中世に、教会が、高利を罪として非難した際、金持ちが利益を放棄することなどが珍しかったにもかかわらず、彼らの財産を貧乏人に与えて、彼らの罪を懺悔するための免罪符とした。しかし、20世紀には、利益や高利(利子)は罪作りなものだとは見られておらず、

それどころか、合法的に許されたものとして認められており、彼らの存在は必要不可欠なものだと経済学者は考えているのである。しかし、我々の文化（そのほとんどは、先人から引き継いだものである）の道徳的な価値の下では、実業家自身は、無意識のうちに、奉仕という言葉で自ら偽装しながら、利潤を得たいという動機とそれに相對する道徳的な清廉さとの間で真剣に悩んでいるのかも知れない。従って、利益を放棄するように行動することは、まったく不可能なことなのである。

すなわち、分析心理学者は、ここに昇華の過程の一部があり、ここに、ロータリアンや非ロータリアンに共通した奉仕理念に対する、多くの基本的な批判が横たわっていることを述べているのであって、ここに、サービスを偽善とか自己欺瞞と呼んだ、メンケンやシンクレア・ルイス一派の批評家たちの跋扈を可能にした矛盾が潜んでいるのである。そのような批判の多くが、無知や悪意、またはその両方から湧き出ている限りは、我々が実施している心理分析学によって、これらの批評家たちに何処で応戦すれば効果的なのかが、明らかに異なるに違いない。奉仕理念は歴史的にも心理

的にも、利益誘導が発展したものであり、ほとんどのロータリアンの真意は、利益を得たいという反応を放棄したのではなく、むしろ利益に対する動機を修正したに過ぎないのである。

奉仕が利益を促進することを証明する素晴らしい方法として、利益の考え方の意味が最も自然な形で再構築されたのである。モットー自身は最初に利益を置き、利益を得るための方法として奉仕をあげている。この姿勢には偽善がまったくないものの、奉仕理念に対する精神的な熱狂ぶりをかき立てるわけにはいかない。

次のレベルにいるロータリアンは、儲けようという利己的な動機と社会に奉仕しようという動機は、ある程度対立するものの、ロータリーの効用によって両者を共に推し進めることで、調和が保たれることを認識している。不幸なことには、外部の批評家たちはこのタイプのロータリアンをあざ笑い、不誠実の証拠を暴き出そうとしているのである。分析心理学者は、かつての大酒飲みを、最も感動的な禁酒運動家にしたたり、ダイナマイトと装甲板の製造家を平和運動の指導者にする（国際平和のための、ノーベル

平和賞やカーネギー寄付のケース）ような、興味深い心理学的なメカニズムについて多くの他の状況を観察した結果、奉仕に対する熱心さは、利益を得ようとする熱意やその衝動と直接比例するものであることを指摘している。更にこの分析において、ロータリーが唱えている利益と奉仕の双方を波及しようとするロータリアンは、たぶん、奉仕という言葉や行為に對して本能的な衝動を感じると共に、この衝動に對する潜在的な恐怖を感じているに違いないと述べている。そして、その結果は必然的に、何人かの部外者に不誠実という印象を与えるのである。

3番目のレベルにいるロータリアンは、奉仕とは道徳的な理念として存在するものでも、個人的な利益を得るための方法でもなく、もし利益誘導が本当に非難すべき行為ならば、奉仕団体としてのロータリーは、利益を追求することをすべて止めるのが当然であると考えている。しかしながら、利益は非難すべき行為ではなく、我々の経済体系には利益を得たいという衝動を押さえる機会はまったくないという、調査委員会委員の知的な見解を受け入れられるものと思われる。そのようなロータリアンは、利益を合法的

なものであり望ましいことであると認めると違くない。奉仕をするために、ロータリアンが利益を放棄する必要はまったくないし、利益とは儲けるために砂糖をまぶしてごまかすことではなく、それ自体が理想的な価値を持つものなのである。ロータリアンを奉仕団体として受けとめ、もし奉仕と利益が矛盾する場合には、利益を捨てて奉仕するために自らを捧げるに違くない。

正当な利益と奉仕は両立する

最後の分析として、奉仕理念と利益誘導を調和させようという問題は、客観的に考えて非現実的な問題だということである。ある種のロータリアンが、基本的に道理にかなっていない利益に対する考え方で、無意識に抑制されているとすれば、それはまさしく本人自身の問題である。この報告書の前提は、正当な利益は完全に合法的なものであり、ロータリアンの付き合いは、事業上の目的のために合法的に活用すべきだということであり、

さらに、会員の職業や地域社会や母国や世界に対するロータリーの奉仕は、儲ける手段とか、利益誘導の隠れ蓑などという見方とはまったくかけ離れた価値のある理念であるということである。理性的な観点から、そのゴールは、儲けるための奉仕でも儲ける代りの奉仕でもなく、奉仕と利益とは、それ自身がお互いに無関係な、素晴らしい特徴を持つものなのである。

この概念によると、奉仕の最高の理念は、利益を得るために品物を売ることを通じて顧客に奉仕をすることではなく、利益と考えられることすべから縁を切つて、その人の仲間や地域社会の人々に奉仕することである。顧客に対して奉仕することは、望ましいことには違いないが、その目的は個人的な利益を得ることなので、公正な取引に関する一般的な商道德と制定基準に基づいたロータリアンの良心を備えている、個々のロータリアンに任せるのが最善であろう。しかし、顧客にサービスをするための奉仕と、社会のための奉仕とは別の問題である。これは、すでに述べたように、より広くより高いロータリーの理念であり、たぶん、ある意味では少しばかり時代遅れの感があるモットーのせいで、たとえそれが儲けを考えたもの

と未だに混同されたとしても、この奉仕の概念は、すでにシカゴのロータリアンの間に定着しているに違いない。理念とははっきりと公式化できるものではなく、また現代の事業や市民生活や国際的な問題のニーズに対して効果的に実行されるものでもなく、散発性の慈善活動と楽しい言葉に自ら酔いしれるものなのである。

ポール・ハリスは次のように述べている

現在のロータリーにおいて、長年使っている表現が余りにも保守的な言葉や言いまわしを、頻繁に繰り返すことから逃れようとしても、余りにも成長し過ぎてしまった感がある。「役に立つ」という言葉は、うぬぼれの少ない言葉であり、多分「奉仕」よりふさわしい言葉である。ロータリーは、実業家の組織と実業家たちを地道に歩ませるものである。

そこで、問題は、今日の問題点を処理するために、奉仕理念を撤回させ

たり、社会的に役立つ行動の方向に効果的に導くのは、いったい誰かということである。もしも、ロータリーのニーズが非常に緊迫した状況にあるのならば、植え付けられた理念の言葉や、言葉の繰り返しや、散発的で非体系的な慈善や人道主義的活動の中から得られるものは、ほんの僅かしかないことを認識しなければならない。

この報告書の残っている章の多くは、奉仕理念を社会的に効果的な活動に転換する、特別な方法を示唆することに費やす予定である。ここでは、この争点に対する一般的な形として、議論のこの部分を断定する方法によって指摘してみたい。現在要望されている条件における、奉仕理念の行動に関する適正な解釈は次の通りである。

1. 広く社会的な理解を受けるために、理念を利益を得ることから切り離すこと。

2. 奉仕理念の理論的なこだわりに対する精神的な満足度は、組織さ

れた社会の知的集団に実行を要望されている社会的な諸問題に関する建設的な考え方と行動の満足度に置きかえる方が好ましい。

3. 行動に移す方が望ましいと思われるような問題について、その目的を考えることは、個人的な問題というよりもむしろ、非人間的なことである。

4. 奉仕は倫理や道徳的の面だけを心に描くのではなく、社会や政治や経済の現実を考えなければならぬ。

5. 奉仕のための親睦という形は、現代の産業界を苦しませている悩みをより効果的に解決するために、子供じみた興味からではなく、大人の個人的、団体的指導力を高めるといふ立場から開発されたものである。

6. 奉仕理念は、事業および専門職種における個々のロータリアンの職業活動であるとは、厳密に解釈されておらず、すべての事業家と専門職種の人たちが現代の大都会の地域社会で相互依存と相互関

係を持って、実業家や専門職種の人たちの前に立ちはだかる重大な問題を、個人または同業者団体による部分的な行動としてではなく、実業界や一般地域社会全体に影響を与えるような問題に対して、組織的に集団的思考で行動することによって適切に処理するという仮定に立って、広く地域社会ニーズに応えることだと考えられている。

4. 指導力を持つ集団

奉仕や新しい形の親睦の高まりが、広く一般の社会から認識されたとき、初めて、現代の諸問題を処理する知的で迅速な行動が可能となるに違いない。シカゴ・ロータリークラブや一般的なロータリー活動は、社会に役立つ奉仕活動のプログラムを計画すると共に、その指導力を今日のニーズに対処できる方向に向けるように自らを軌道修正すべきである。

個人の利益や一般的な事業の収益は、単なる個人の努力や人と人との付き合いによって得られるものではないし、そのような努力や付き合いだけでは、現在の世界の市民問題や国際問題を処理するには不十分であることは明らかである。

ロータリーが古い形の親睦を深めているだけでは、知的で建設的な活動を刺激するのに充分ではないという結論に達することができれば、もっと素晴らしい昼食例会クラブになることを認めなければならない。

これらの提案は社会科学調査委員会の単なる見解ではなく、1930年代における産業界、社会的な関係、地方自治体、国内、国際的な生活の時代的ニーズを勘案した、確かな仮説に基づいたものである。彼らは、各地の社会科学者の主流派や、慎重に選抜された実業家や専門職種の会員たちから選ばれた人たちであり、彼らの意見は、アメリカ合衆国における最近の社会的傾向に関する、フーバー大統領の委員会の報告書にも反映されている。彼らは次のように述べている。

現代社会の大部分の人たちは、個人や団体や階級や国家の間で繰り広げられる競争と矛盾のうねりという、古い形の自由奔放な利己主義に起因する混乱や適応不能の結果として起こる、数多くの入り組んだ弊害に悩まされている。しかし、この個人主義こそ、この30年間の間、実業家たちは、そうすることが有利だと考えた時には、例えば税金や移民登録や教育やあらゆる公的なサービスに関して、助けを求めするために、集団的な行動（例えば、現代の組織的なトラスト活動）をして政府に援助を求めることを、一度もためらったことがないという事実はさておいても、大部分のアメリカの実業家の心の中で特に大切にしてきたものである。

古い利己主義は、急速な経済発展と市場拡張の時期には、事業上の利益だけではなく、国家の繁栄と公衆の福祉を促進してきたが、その弊害によってもたらされたその後の経済的不況の時期には、デフレーション、信用や通貨危機、失業、貧困、階級闘争、関税戦争、および未曾有の規模の悲

惨な国際的混迷を引き起こした。これは、高い利益を求めた実業家と、高い賃金を求めた労働組合と、名声を求めた外交官たちの、もはや制御のきかない泥沼の争いの結果とも言えよう。

現在の世界危機は、多分、ミコーバー氏のように、何とかなるだろうと、人々がただ気長に待っているだけで通り過ぎるような、「まさしく他人事の不況」ではないし、19世紀の価値感や体制や方針に、歩みを戻すことによって原点に返ったとしても、もはや解決されるものではない。集団として前進していく計画に対して、個人と団体の活動を統括調整するためには、足並みをそろえた行動と総合的な社会の英知を集めて、社会秩序と経済計画の母体を創設することによってのみ、すべてが解決される可能性がある。

ファシズム、共産主義とは？

もし、不況や反動の力による抵抗さえ受けなければ、まだ当分の間は、穏やかで安定した状態が続いたかもしれない。彼らは必ずしも、社会主義

や政治機能が拡がってくることを予感していたわけではなく、最終的には改善方法の共同計画となるような問題を考えるために、西欧文明の産業界の指導者たちが全体的な行動をとることを予感していただけである。彼らは、もし自分たちがこの賢明な措置を取らなければ、アメリカの事業運営や政治的伝統にとつて、非常に危険で壊滅的な状況になるかもしれないと考えた。集産主義の極端な右傾化はファシズムに通じ、極端な左傾化は共産主義に通じるものである。アメリカの実業界の一部には、知的な自己主導の能力が残っているので、アメリカの状況はこの絶望的な主義主張のいずれにも関連していない。しかし、もしアメリカの事業や世界の事業を、徐々に沈んでいく沼地から安全に脱出させようと思うのならば、知的な自己主導のニーズは、急を要するものであると同時に、現状のままでは絶望的でさえある。

この調査が開始された時点において、これらの提案は大多数ロータリアンの同意を得られる状況ではなく、ある程度のためらいをもって提案せざるを得なかった。最後の何か月かの出来事は、余りにも早く動いたので、

ロータリアンとこの路線に従った協力者たちにこの事実を伝えたのは、調査委員会の提案が印刷される直前であった。

ロータリーは大きな機会を持っている！

我々の経済機構を再び機能させるための現在の試みは、ロータリーにとって大きな機会である。それには、その分野における最高の能力を持つている実業家と専門職種の人たちの、活力と知的な指導力が要求される。農夫や労働者や零細な商人や店主ではなく、社会的な名声や経済力や政治的な影響力をもっている実業界の指導者たちによって解決されれば、この危機は間違いなく回避されるに違いない。これらの指導者たちは、たとえ古い利己主義のなごりが残っていたとしても、当然のこととして利己主義ではなく全体のことを考えて行動するに違いない。ロータリアンにとって最大の関心事は、この指導力がどこからもたらされるのか、どのようにして教育されたり組み込まれるのか、どのようにして短時間の間に備わるのか

という問題である。もしそれが誰かからもたらされるとすれば、当然のことながら、事業家や専門職種の人たちの層からであることは間違いない。それは既存の組織や事業家や専門職種の人たちや、商工会議所や専門職種と商業の同業者組織、愛国的な社会団体からかも知れないし、その他の奉仕クラブや職業分類クラブからかも知れない。アメリカではまだ現実化していない半ば政治的な新しい組織からかも知れないし、ロータリーからかもしれない。

調査委員会は、必ずしもロータリーだけが、事業や市民運動の指導力を開発できる唯一の機関であると指摘するように、心配りをしているわけではないが、ロータリアンの空想をくすぐったり、虚栄心を満たすような指摘をするように、若干配慮しているつもりである。ロータリーはその独特な組織の長所と目的によって、そのような指導力の開発に向けて、他のグループ活動よりもさらに多くの活動が可能であることを述べると共に、この視点から、ロータリーの長所と短所を議論するつもりである。

望ましい指導力の型

もし西欧文明が現在の水準で生き残るとするならば、危機を目覚めさせる指導力の先頭を走る者は、高い能力を持った知性と教養と誠実さ、広い社会的、経済的展望、および建設的な結論に向けて現代風な諸問題を考える性格という特徴を發揮しなければならないと同時に、実業家と専門職種の人たちの指導によって、集団的な考え方と行動を通じて改善計画の仕上げを成し遂げる、集団の指導力でなければならぬ。

救済は、十中八九、一人の独裁者や新しい救世主によって達成されるものではない。実業界が全面的に託した、様々な産業や専門職種の代表者たちは、実業界と政府による効果的な救済活動を実施するにふさわしい、総合的な再建計画を考え出さなければならぬ。

そのような計画は、「テクノクラシー」「公共経済」「非政府産業」やその他の同類のスローガンのような、感情に訴えるような標語からは、浮かんてくるのではなく、各々が、自らの直接的な関心事以上に、地域社会や

国に奉仕することができる良心的な実業家のように、全体の国家経済に関連することに対して、慎重に良識を持つて問題の本質を学んだり計画したりする人だけに浮かんてくるものである。

それには、政府と実業家や専門職種の指導者たち間における、継続的な協力が必要である。

現在、これらの理念を現実に実行するために必要な、政府と実業界が協力する立法措置が準備されつつある。その準備が整うと同時に、政府と実業界の双方の指導者たちは、立法化で可能となった知恵をはるかに超える運用をすることで手腕を発揮する成功の機会がやってくることを認めざるを得なくなるに違いない。実業や専門職種の団体は、それぞれの団体としての活動をするに最善を尽くしているが、それぞれの事業と専門職種の間にもすれば専門的な問題に必要な関心と目的に限定される傾向が強い。過去の経緯を見ても、国の復興計画に携わっているそのようなすべての団体の中で、本当の意味をはっきり捉えている人は誰もおらず、そのやり方に口先だけで同意しながら、未だに古くて疑わしい方法にしがみついている

るのである。

国家的な計画の重大な意義を把握して、社会の理解が得られる指導力を発揮するためには、単に各々の実業団体だけではなく、すべての経済機構のために重要な事業と専門職種における指導力を広く代表しているグループが、そのニーズを満たす以外には方法はないであろう。

職業上の代表者による議会

ロータリーとは次のような団体である。元来、お互いに取引を交換しやすいうように、競合しない実業と専門職種の人たちを会員として確保するように計画された職業分類制度は、地域社会の主要な経済活動を広く代表した、一種の職業上の代表者による議会のように、各々の業界の代表者によって構成される結果となった。代表者はそれらの産業のリーダーとして選ばれる。彼らは、各々の職業に関する情報を交換し、奉仕の理念を磨くと共に、以前抱いていたよりもなお一層磨き上げた広い視野や展望や目標を、

彼らの業界に持ちかえるために、共に集うのである。ここには、工業や商業や金融や専門職を代表した人たちの共通の力強い親睦と、お互いに関心を持ち、共に奉仕の理想に結束した偉大な教育機関の会員が存在すると共に、アメリカや世界の人たちの生活に、大いに重要な力の根源となる目標や構造を形作る組織が存在するのである。更には、現代文明における経済的、社会的な真実を認識としている組織が存在する。その会員たちは政府の人間とは違って、人工的な地理上の地区は代表していなくても、現実の経済活動に対する関心を代表しているのである。彼らの集まりは、お互いに学びあい、助け合い、事業上の諸問題を自らで学び、彼らの事業や地域社会に奉仕する関心を持って共に行動し、毎日の生活で無数に存在するチャンネルを通じて付き合っている人たちに、その収穫を届けているのである。これは、あらゆる場所における、世界的危機やその国の復興計画に早急に要望される指導力の源となる可能性を秘めた人たちである。

この考え方に対する反対意見も当然あろう。アメリカ合衆国には、数多

くのその他の奉仕クラブや職業分類クラブが存在するので、ロータリーだけが、その目的と機構が独特なものではないという指摘があるに違いない。模倣を最高のほめ言葉として使うなら、ロータリーは広く模倣され、1905年2月23日にシカゴにまかれた種は、遠く広い範囲に新しい種を蒔く植物に成長したのである。他のロータリークラブがいろいろな場所に生まれ、ロータリー運動は全国的、国際的な活動になった。職業上の代表を基本にしていろいろな形の奉仕理念を掲げた、エクステンジ、キワニス、ライオンズ、シビタン、ジャイロ、ゾンタ（女性）やその他の組織がその後続いた。ロータリーと比べて、これらの組織の活動によって指導力を発揮することは、まったく不可能なことなのだろうか？ この質問に対する回答は、完全に否定することも、完全に肯定することもできない。ある地域では、キワニスやライオンズの方が、ロータリーよりも、事業の指導力や市政改良の推進に手腕を発揮しているし、他の地域では、それほどでもない。個々の地域社会の状況を詳細に調査することなく、この種の報告を一般的に非難することは適切ではない。

一般的事実について確実に言い逃れできないことは、これらの他の組織すべては、意識的であろうと、また無意識であろうと、ロータリーをモデルにして作られたものであり、さらに、それほど頻繁にあるわけではないが、しばしば先生より生徒が優れている場合もあり、特にロータリーが親として好調に出発した、年乃至二〇年の時のように、まねをした別の組織の方が、親の組織の活動より成功することも、また真実である。ロータリー以外の他の二つの職業分類クラブが限界を迎えたことが、直ちに思い浮かぶ。その何れもが、ロータリーのような広い国際的な展望を持っていなかったし、第一、近隣の実業家で構成されたものであり、排他的な組織ではなかった。特にシカゴにおけるロータリーの底力は、それが本当に世界的な活動の一部であり、全国的にまた国際的に有名な実業と専門職種の指導者たち自身が、惹きつけられたという事実が、それを物語っている。シカゴ・ロータリークラブは、彼ら自身が入会の意思を示すのではなく、地域社会の企業生活の実態によって、彼らの仲間たちの意見に従って、選ばれた指導者によって構成されている。こういった状況の下では、他の職業

分類クラブが、近い将来にロータリーの基準やロータリーの潜在能力に匹敵することは、彼らが達成してきた幾つかの重要な業績とは違って、とうてい無理なことであろう。しかし、最初にロータリーがその分野にあつたからといって、必ずしも、必要な指導力の形を開発できるということにながるものではない。この組織と目的が、ゴールに達することを保証できるものは、誰もいない。その可能性は、現在の事業や市民や国際的な問題について、良心的な研究や見解の一致や、個人および団体的行動によって建設的な計画を考え出すことに邁進している会員たちの個人的な考え方や快不快によって、必ず制限を受けるに違いない。市民や実業界の課題に対するロータリーの影響が、大都市や大都市圏よりも大きな存在となつていく幾つかの小さい町クラブでは、ロータリアンは、シカゴのような大都会で彼らが占めているより地位よりも、考え方や行動の指導者として、飛びぬけて重要な地位を占めていることが一見ただけでも分かる。これは、ヨーロッパ大陸の幾つかの大きいクラブで見られるように、ロータリアンがしばしば、広い文化的な背景とか、高等教育を受けているとか、多くの

富や多くの政治的な影響力を持った人間であるという点で、明らかに支配階級であることとよく似ている。ともあれ、シカゴのような地域社会のリーダーークラブは、多くの小さなアメリカのクラブや、幾つかのヨーロッパのクラブの人たちが楽しんでいるような、地域的な指導力に匹敵する地位を占めることは不可能である。その問題を解決するために、クラブの人たちやシカゴ地域社会の何れがそうさせているのかという原因を分析をすることは、この報告書の範囲外であるが、慣れや、無関心や、自分たちの職業の忙しさや、会員たちのばらばらな教育程度や、保守性や、決められたやり方から逸脱することに対するためらいなどの幾つかの障害が存在することは明らかである。これらの要素が、小さい地域社会にも存在することは間違いないので、たぶん、その度合いが、大きくて複雑な都会では増してくるからであろう。

指導力習得のための教育

これらの障害や難題があるにもかかわらず、ロータリーの目的をよりの確に会員に教育することなしには、正しい活動をするための奉仕理念を習得できないという、一般的には理解できない現在の条件の下で、シカゴ・ロータリークラブやロータリー全体の活動は、そのような指導力の質と機会を開発する能力をすでに備えていることを、調査委員会は明言しておきたいと思う。それは、自らを抽象的な感覚で、単に奉仕をする組織だと考えているのではなく、指導力とは何かという具体的な役割に就いて、会員を訓練し感動を与える教育機関だと考えているからである。

これは、必ずしも古い考え方による、ロータリー理念や目的、使命、スローガンなどの体系的学習によって、ロータリー教育を集中的に行うことを意味するものではない。そのことは、現在、シカゴ・ロータリークラブが充分にロータリーの理念を徹底していないと感じている会員が、約1/3 (30.86パーセント) であることから明らかである (Q6)。

これは、必ずしも、教育委員会（注：現在のロータリー情報委員会）がその仕事について怠慢であるとか、これに焦点を当てたプログラムや活動が不十分であることを意味するものではないにしろ、結果は確かにその通りであつて、たぶん、ロータリーの目的や理念が、いくぶん掴みどころがなくて抽象的な性質を持つていることに対する不満を意味するものであろう。必要なことは、特別な事例に対して、これらの理念をより具体的に適用することである。これはロータリー活動における古くからの要望であつたが、古い考えのまままで問題を考える限り、回答が得られない要望でもある。もしこれらの活力が建設的な歩みを進めているのならば、すでにすべての目標が定まつているクラブに対して、さらに善意と美徳を備えるように説教をすることは適切ではない。ロータリーの奉仕が最も有意義なものであることを自らが理解するように、個々の会員に勧めると同時に、自らがそれを適用することが、最も素晴らしい結果を生むと一般的に考えられているにもかかわらず、すべての会員たちにとって、さして重要だと思われないような散発的な活動の成果を気にしながら活動することは、決して

芳しいことではない。その時代における重大な経済的、社会的、政治的な問題に対処する指導力の開発に順応した体系的なプログラムが要求されてきているのである。この報告書の最後の4章は、この分野における将来性を検証してみたい。

第4章 会員身分の問題点

1. 量か質か

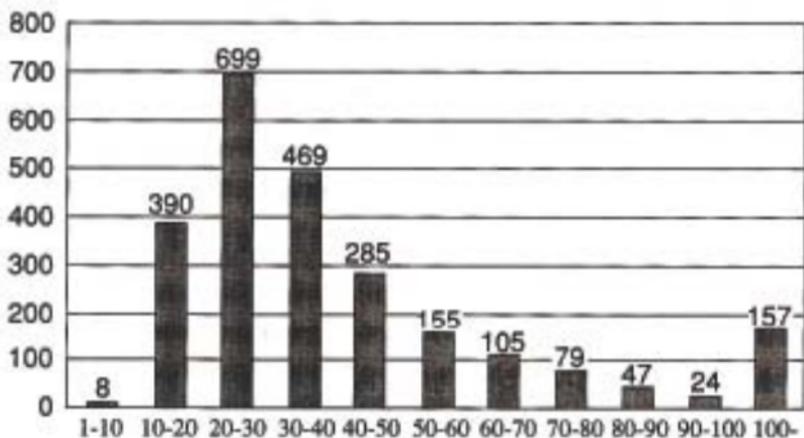
シカゴ・ロータリークラブの多くの特殊な問題点は、その大きな規模に起因したものである。1931年のピーク時には670名の会員を擁し、1933年7月1日現在では640名であり、この種のクラブの中では世界で最も大きなクラブである。付表の棒グラフは、1933年現在のアメリカ合衆国と世界中のロータリークラブの会員数の分布を明らかにしたものである。明らかに、20名から30までの会員を有するロータリークラブが、他のグループよりも多く、アメリカ合衆国では699、外国では317である。20名以下の小さなクラブの数もまた現実に、アメリカ合衆国に398、外国に161存在する。アメリカ合衆国と外国のすべてのロータリークラブの3/4分は、50名以下の会員を持つ小さなクラブである。50名以上の会員を持つクラブの数は急激に減り、100名以上の会

員を持つクラブは、アメリカ合衆国では僅か157、外国では70に過ぎない。

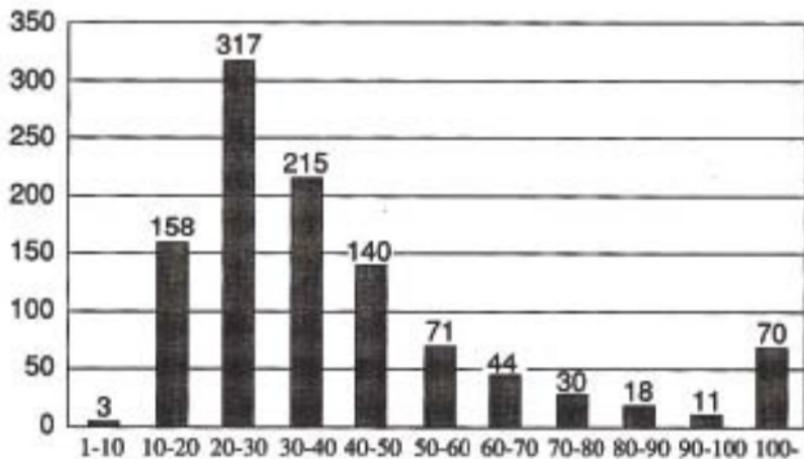
100名以上のすべてのクラブは一まとめになっているので、グラフの上では大きく示されているが、これらのグループの中には、会員の増加数が急激に落ち込んでいるクラブもある。アメリカ合衆国のクラブについては、100名以上の会員を持つクラブは24、110名以上が22、120名以上が16、130名以上15、140名以上7、150名以上5、160名以上7、200名以上11、210名以上4、220名以上2、230名以上3であり、300名以上の会員を持つクラブは僅か17に過ぎない。

他の国のクラブについては、アメリカ合衆国より大きいクラブは、絶対数、規模共に存在しない。100名以上の会員を持つ外国のクラブは18であり、110名以上9、120名以上13、130名以上5、140名以上が5、150名以上が16、200名以上のクラブは僅か8で、300名以上は1クラブしかない。これらの数字は、規模に関するシカゴ・ロ

アメリカのクラブ



世界のクラブ



ロータリークラブの独特な地位づけをはつきりと表している。ロータリー活動が始まった時から、その経歴中もずっと、シカゴ・クラブは最大のクラブであった。1932年の終わりには、世界中の3,514のクラブに、152,000名のロータリアンがいる。従って、平均的なクラブは約40名の会員を持っていることになり、シカゴ・クラブは平均より16倍以上も大きいことになる。クラブ規模の委員会が、一つの大きなクラブの中に集まったようなものである。

シカゴ・クラブの規模の大きさに対するシカゴのロータリアンの関心は、注目に値する。最も有利にその機能を果たすためには、クラブの会員数が多すぎると感じたのは、会員の1/4 (23.95パーセント) であり、多すぎることはない69.88パーセント、どちらとも言えない6.17パーセントであった(Q34)。会員を推薦するには大きなクラブより、小さなクラブの方が推薦し易いと感じているのが1/4以上(27.16パーセント)に対して、そうは思わない68.15パーセント、どちらとも言えない4.69パーセントであった(Q25)。会員の大多数が、クラブが大きい過

ぎるとは感じていないのは明らかであり、これを無視している人は少数に過ぎない。

小さなクラブに賛成する会員の意見は興味深く、それに関する幾つかの典型的な意見は次の通りである。

小規模のクラブでは可能であるのに、その規模が大き過ぎるために、ロータリーの理念を実行に移そうと思っても、うまくクラブ内の意見の合意が得られないように思われる。その意思は充分あり、我々のクラブの役員は素晴らしい仕事をしているにもかかわらず、シカゴ・クラブの大きさのために、どの執行部も、これまでそのもくろみを実現したためしはない。その大きさのために、かつて満喫したような友情あふれる心を失ってしまったようだ。今は、商業会議所のようなものである。

ロータリーの主な目的は、クラブのそれぞれの会員が、すべての他の会員と親しく付き合うことにある。大型クラブはこの主要な目的を達成する

にはふさわしくない。

それは、ロータリーが選択すべきことであるというのが、私の意見である。会員が選択していかないような会員数の増強は誤りであり、会員の価値を損ねるものである。営利化していく危険性があり、地域社会の素晴らしい代表者たちの魅力を失わせることになり兼ねない。

その一方で、小さなクラブでは望めないような考え方を、指摘した意見が多く寄せられたことも重要である。

確かに、少ない会員数の方が、付き合いをより身近にし深めるかも知れないが、この都市の大きさを考えれば、必ずしもそうとは言えない。

会員数が多くなるほど、奉仕の機会も多くなる。規模の最大限度は、昼食例会に際して、会員が適切に利用できる設備の大きさによって決められるべきだ。もしこの本音以外の説明を望んでいるのなら、どこかの大きく

て、うまく組織化された銀行に行つて、副頭取に、近所の小さくて健全な銀行から得られるようなサービスを提供していただけでは、何故みんなが取引をしないのかという理由を尋ねてみるがよい。大銀行だけができて、小さい銀行では絶対に提供できない、いろいろな分野のサービスを直ちに示してくれるに違いない。

私は、シカゴの様々な実業と専門職種の中で、特に有名な代表者だけから構成されている、現在のやり方が望ましいとは思わない。私は、シカゴのあらゆる有名な実業と専門職種の人たちを、代表者として会員に選ぶべきだという、このクラブの目標を信じて共に、これがシカゴ・ロータリークラブの将来を左右するものだと思つて信じている。

ロータリー活動の一般的な性格と急速な成長の勢いは、拡大のための拡大に重点を置いていたようにさえ思われる。多くの場合には、他のブラスター組織が現れるものである。確かに何人かのロータリアンは、大きくなり過ぎた不利に気づいて、例えば人口に関連づけてクラブ会員を制限した

り、正会員に対する準会員の割合を制限することで、拡大を制限する提案を主張している。

シカゴにおける拡大の動機は、むしろ、広く指導力を持った代表者を確保することにあつたように思われるし、奉仕をする地域の大きさを考えれば、シカゴ・クラブは、釣り合いのとれないほどに大き過ぎるとは言えない。

他の大都市圏におけるロータリアンの数は、彼らが結成したクラブの数にもよるが、比較することは可能である。1933年7月1日現在、ニューヨークには、マンハッタン(364名)、ブロンクス(117名)、ブルックリン(245名)、スタツテン島(76名)、クイーンズ(52名)の五つのクラブに854名のロータリアンがおり、ロンドン大都市圏には、74のクラブと、3,000名以上のロータリアンがいる。ヨーロッパ大陸のクラブは、パリ215名、ベルリン93名である。バツファロー392名、ボストン345名、シンシナティ318名、フィラデルフィア346名、シラキュース355名、サンフランシスコ347名、ロサンゼルス3

00名であり、アメリカ合衆国のその他の大都市圏のクラブの規模と比較しても、シカゴの640名の会員数は跳びぬけて大きいものではない。

その一方で、昼食例会のプログラムが親睦活動の中心であるという、現在の組織の形が続く限り、1,000名以上の会員を擁するクラブを運営することは、明らかに不相当だと思われる。ロータリーの親睦と多くのリーダーを見つけるために、そんなに多くの会員を集めることは、物理的に不可能なので、国際ロータリーのリストにある2,300の職業分類のすべてを満たそうとする努力は浅はかなことであろう。比較的多数の年間の退会者によって起こる、シカゴ・クラブの規模の縮小を防ぐためには、毎年50名から75名の新入会員を入れることが必要である。会員数の実質的な増加をもたらそうという計画を成功させる唯一の鍵は、現在の指導力を維持すると共に、新たな指導力を開発して、それに組み合わせることである。

しかしながら、この理想的な規模という重要な問題は、そんなに簡単なものではなく、会員の目的と機能を考えることなしに、理想的な規模を示すことは不可能である。規模によって物を評価して、最も高い建物とか、

最も長い橋とか、最大の人口などを誇りにする傾向がアメリカ合衆国の人々にはあるが、規模を誇るために規模を大きくすることは無意味なことである。この傾向は、シカゴ美術館の前にある青銅のライオンが、世界中で最も長い青銅の尻尾を持っていると、ニューヨークの友人に誇らしげに自慢したシカゴっ子の寓話と同じようなものである。単に規模を大きくする目的だけのために、シカゴ・ロータリークラブの人数を増やしたり、反対に、規模を小さくするために、クラブの人数を減らすことはまったく無意味なことであるというのが、長年にわたる指導者たちと会員増強委員会の方針であった。シカゴの地域社会を代表すると思われるシカゴ・ロータリークラブが、本当に代表しているという性格を達成するには、どの程度の規模であるべきかということが、問題なのである。

この指摘に対して、どのロータリークラブも、とりわけシカゴ・ロータリークラブは、単なる人口の割合によって代表者を選ぶことはできないし、そうすべきではないと指摘するに違いない。シカゴで、全部で5,000人の人々がロータリアンになったとしても、会員が全体の数を把握できないよ

うな全市民を代表しているという考え方をとっていないので、この関係はまったく意味のないことである。彼らは、自らの職業の代表者であり、またそうあらねばならないし、それぞれの職業を代表する著名な指導者なのである。ロータリーには地理的条件を勘案した代表者という原則はないし、政治的意見のグループ、宗教団体、人種のグループなどを代表するという原則も存在しない。職業上の代表者、それも各々の職業から1名だけの著名な代表者という原則で選ばれているのである。

クラブの規模やこれに関連した構造上の問題は、この原則に照らし合わせて考えなければならぬから、シカゴ・ロータリークラブは、シカゴにおける各種の最も重要な実業と専門職種の職業分類を持った、優秀な指導者を会員に含めるだけの、十分な大きさを持たなければならない。もしもそのようにすることが重要な目的に反するとするならば、小規模の実業や専門職種の平凡な代表者を含めたとしても、そんなに大きくなるはずはない。確実な職業分類に保とうとするならば、そのような平凡な職業は排除して、高い能力を持った指導力を保持し続けることが必要である。

2. リーダーとしての要素の選択

実業と専門職種の客観的な意義についての重要性の基準は、次の章で考えるとして、この章では、実業と専門職種を代表する個人についての重要性の基準を指摘してみたい。シカゴ・ロータリークラブは、シカゴ地域社会の重要な実業と専門職種の指導者を会員として確保することをめざさなければならぬ。この会員資格に対する考え方が、すべての思慮深いロータリアンによって十分に認識されれば、そのような不満は、多くの会員たちにとってはとるに足らないものとなり、すべてのことは、会員たちの能力と資質によって実行に移されるに違いない。

彼らが指導者であるかどうか、また指導者としての資質や能力を備えているかどうかを確かめるために、ロータリアンに適用できるような物差しはまったく存在しないし、どんな基準であろうとそれを提案すれば、批判の対象になることは明らかである。たぶん、これに関する詳細な調査が、ヨーロッパ大陸のどこかのクラブの事業として、会員を対象に実施された

はずだが、一般的な印象としては、現状で満足しているようである。しかしこの問題は、全体の職業分類制度に関連するものとして、はっきりと議論しなければならぬ問題でもある。

3. ロータリアンはいかにあるべきか

この調査報告書の第2章で、シカゴのロータリアンとは、どんな人たちなのだろうかという質問に答える努力をしたつもりだが、そこで提起された幾つかの疑問に対する一般会員の考え方について、その平均的なものを見方を、ここで検討してみたい。ロータリーの独特な特徴であり、正会員の基本として欠かすことのできない職業分類制度は、そのような議論をするための明らかな出発点である。

シカゴ・ロータリークラブ細則より抜粋

第3節

本クラブの正会員は、クラブ区域限界内で現実に活動している、各々の事業や専門職種に従って分類されなければならない。各々の正会員の職業分類は、ロータリアンの所属する事業所、会社または団体の主要かつ一般世間がそのように認めている事業活動を示すものでなければならず、もし、独立して事業や専門職種に従事しているならば、その職業分類は、会員の主要かつ一般世間がそのように認めている事業活動を示すものでなければならない。

第4節A項

正会員は、新聞の職業分類を除いて、それぞれの事業や専門職種の職業分類から1名によって構成されるものとする。

これらの細則の具体的な原則は、国際ロータリー職業分類分類指針の前

書きに示されている。

ロータリークラブは、地域社会のすべての世間に認められている事業と専門職種の活動に影響を及ぼすことを目指している。会員は社会の代表ではなく、地域社会の経済活動の代表である…

この会員制度は、最終的に、社会のあらゆる分野において地域社会で活動する、世間に認められている有用なすべての事業と専門職種の代表を、1名だけクラブに入れることを、考慮したものである。

このようにして、各々の会員が、自分が代表する事業について自由に議論する上で支障をきたさない範囲の大ききさで、事業を代表する集団を維持しているのである。そのような議論の自由は、ロータリークラブを結成する活動の成果の基本になるものである。

この計画の下で、地域社会のあらゆる経済活動は、主に工業、商業、および専門職種を代表する「職業分類の大分類」に分けることができる。R

Iのリストでは、そのような79種類の大分類が、2,300種類の小分類に分けられている。すべての大分類はシカゴで作られ、事実上それらのうちのほとんどは、すでにシカゴ・ロータリークラブの中で代表者になっている。

しかし、地域的な特殊条件や、品物やサービスが世界的規模で流通する時代では、一定の産業がそれぞれの地域で盛んであることが、他の地域にとってそれほど重要なことではない。アクロンのゴム、ハリウッドの映画、ミネアポリスの製粉、シカゴの精肉業と鉄道などは、直ちに頭に浮かぶことである。真の代表者による職業分類体系とは、少なくとも、地域社会における経済の重要度に応じた大分類の代表者を、ロータリークラブの代表者にするものであるが、RI理事会は、「一つの職業分類の大分類に含まれる事業と専門職種の会員は、クラブ会員の10パーセントを超えてはならない」と勧告している。

この制限を正当化するために、「これは、いかなる事業や専門職種のグループからも支配をうけない、クラブの安定的な維持を保證するものである」

という声明が付け加えられている。10パーセントに制限することが賢明なのか、または正当化されるべきなのかについては議論の余地があるものの、調査委員会は、国際ロータリーの手中にある排他的な問題に関して、議論を喚起する考えはまったくくない。

この計画全体は、広く代表者を集めてクラブを作り上げることが、見事に考え出したものであり、社会や全体の住民のためでも、地域社会の事業と専門職種の指導力を高めるためのものでもない。確かに、RIの職業分類指針にも、標準クラブ定款にも、シカゴ・ロータリークラブの細則にも、「指導力」は、会員の必須条件として暗示こそされているものの、はっきり述べられていないことは確かである。未だにロータリアンは、彼らが職業分類上「有名である」とか「代表している」という点で、有益な会員であることをお互いに了解しているに過ぎない。

ここに、できることなら整理しなければならない、混乱の要素がある。「代表」という概念は多くの意味を持っている。もしそれが「典型的な人」を意味しているなら、無作為に抽出する手段を使って、最も代表的な人を

選ぶに違いない。そうすればそのロータリアンは、各々の事業や専門職種において、過小な存在でも過大な存在でもない、平均的な凡人が選ばれるはずである。この考え方は、ロータリーを平凡な人たちのクラブにしまうことにつながる。その一方で、もし代表の意味が、管理運営の自由裁権とか、先見の明を持っていることとか、幅広い視野や、豊かな経験や、すべての会員に影響を与えるような産業界や専門職種の諸問題を理解する能力を意味するのならば、そのロータリアンはよいリーダーになり得るに違いない。この考え方こそ、大多数のロータリアンが期待するものであると同時に、ロータリーが持っている潜在能力の限界を試そうとする、他の外部のグループにとつても、関心のあるところと言えよう。

指導力とは、少なくとも二つのことを意味している。充填された職業分類が、地域社会の最も重要な経済的な意義における事業と専門職種を代表していることと、充填するために選ばれた個人が、これらの事業と専門職種を代表した優れた経営者であることである。しかし、与えられた職業分類の分野における経済的な意義を測定したり、個人に備わっている実力を

測定する簡単な方法は存在しない。

この問題は、職業分類委員会と会員選考委員会による自由裁量と一般常識を適用することによって、大雑把な方法で、個々のクラブが、実情に即して解決しなければならぬ問題であり、どのような方式を採ったとしても、詳細を解決することはほとんど不可能に近い。シカゴ・ロータリークラブにおける、新入会員の実際の方法は、次の章で考えてみたい。

その目的は、地理的な代表や典型的な凡人を選ぶことではなく、地域社会における最も重要な個々の事業や専門職種で活動している、指導者とみなされるような価値のある人を選ぶことである、ということを提案したい。この目的を達成するためには、職業分類の細分化を避けると共に、すでに関連する分野で活躍しているにもかかわらず、クラブに入っていない素晴らしい人たちが持っている数々の職業分類を、会員個人に割り当てることをやめるように留意しなければならない。さらに、それに加えて、同一分野に定義されている各々の事業や専門職種の活動から、一名の会員だけを代表にするように留意する必要がある。1911年にシアトル・クラブか

ら提案されたように、すべての競争者たちに広く門戸を開放することによって、職業分類制度の基本的な原則を崩すことが必要である。

これに関連して、シカゴに、シカゴ・ロータリークラブの職業分類制度を適用することが、実際にシカゴの地域社会における事業のリーダーとしての組織を作り上げていく結果につながっているかどうかという問題が起こってくる。この質問に対する正しい回答には、事業や専門職種の指導者たちが判断して目標を設定した実行不可能な活動や、クラブの個々の会員たちの判断によって設定した、同じように実行不可能な活動を試みることも含まれている。調査委員会は、少なくとも他のアメリカのすべてのクラブより高い水準にあるシカゴ・クラブは、一般的観察に基づいたこの意見に同意すると思うが、たぶん、同じように高い水準にあるヨーロッパの幾つかの有力なクラブは、反対するに違いないと思っている。いずれにせよ、ヨーロッパの基準に、アメリカの基準を適用することは不可能なのである。

全体として言えることは、シカゴ・ロータリークラブは、確かに平凡な人たちの集合体ではなく、職業構成や個々の会員の点でも、市内に数多く

存在する著名な事業と専門職種の人たちを会員に含んだ、地域社会における事業や専門職種の活動を指導する適切な代表であると思われる。シカゴ・ロータリークラブには正会員に加えて、4種類の会員がある。同じ職業分類を持った正会員から推薦された準会員 *Associate member* または第二正会員 *Second active member* (注：現在のアディショナル正会員) は、個人的に重要な関係を持つ人や、正会員の入会にかかわった人の中から選ばれる。準会員は、推薦者と同じ期間だけ、会員資格を与えられるが、推薦者の会員資格が終了すると同時に、正会員の資格が認められる。しかしながら、この状態になる権利を約束されているわけではない。準会員は正会員と同じ権利、特権、および義務を持っている (細則第5節A項)。

2番目に、現役を引退して、職業分類を強制的に失った状態にある会員に適用される、引退会員 *Retired member* (注：現在のパスト・サービス会員) がある (細則第6節1項)。

3番目に、通算25年間にわたって瑕疵のない会員であった者や、職業分類を自分の意思で断念したり継続したりすることを、理事会によって認

められた状態である、長老会員 **Veteran member** (注：現在のシニア・アクチブ会員) がある。1905年組の長老会員は、特に創立長老会員 **Pioneer veteran member** に指名されている (第6節2項)。退職会員と長老会員のカテゴリーは、シカゴ・クラブにおける特徴的なものだが、たぶん、他のクラブも、親クラブが組織された年代に近づくに従って、順次採用されるものと思われる。

4番目に、クラブの元会長、陸海軍からの二人づつの士官、シカゴに配属されている外国の大使や領事などの名誉会員 **Honorary Member** がある。名誉会員は、現実の職業分類を代表せず、入会金や会費の支払いを必要とせず、出席義務を持たず、役員を選挙する権利を持っていないが、クラブにおける、その他すべての特権を享受することができる。

1933年9月1日現在で、クラブには、1905年組の15名の創立長老会員と、1906年、1907年、1908年組の20名の長老会員と、その他の15名の長老会員と、13名の元会長の名誉会員と、19名の陸海軍および外交官の名誉会員がおり、その他の会員はすべて、正会

員と準会員である。

準会員制度は、各々の職業分類から1名だけの会員を選ぶという規則を堅持するために模索した人々の間から出てきた妥協案であり、規則を緩めるために考え出されたものである。基本的な原則にさかのぼった論理的な裏づけから、この状況を説明することには、少々無理がある。運用に当たって、これが引退した正会員と有為な若い人たちとの交代を、クラブにもたらしすことを意味するならば、実用的な効果があがるに違いないが、申し合わせだけでは、この機能はほとんど果たされない。大切な考え方は、若い血を組織の中に注入するための会員増強の手立てとして、準会員の存在をより慎重に活用する可能性を与えることである。

準会員が推薦者の退職と同時に、正会員の地位を与えられるという規則については、すでに述べた通りである。この観点から、入会した準会員を、正会員と同じように扱い訓練することが必要である。名誉会員は、過去においてクラブでよく活躍した会員や、アメリカ合衆国や外国の政府で奉仕した元役員や、ロータリーの目的のために貢献したか、それに準じる働き

をした部外者に限定すべきである。

引退会員の制度は、一生涯会員であるという一般的な原則を弱める意味で、その可能性を僅かでも広げる理由から興味深いものである。この問題は、ロータリアンは、事業や専門職種の指導的立場を引退した後でも、自分の職業分類を独占することが許されるかどうかということである。もし職業活動から完全に退くのならば、これは問題にならないことであらうが、もし、ロータリーの終生の会員として3番目下4番目のカテゴリーで、事業上の正会員として残るのならば、クラブは優れた人物によつて職業分類を代表させる機会を失うことを意味するので、多少の疑義と問題点があるとしても、職業分類を再分割する方法をとるべきであらう。もし当人が、他の素晴らしい人のための道を閉ざすとすれば、そのような人は、クラブにとつての財産というよりも、厄介者になるであらう。

この問題を提起している会員の感情を傷つけずに、この問題を処理する方法を考えることは非常に難しい。しかし、事業上の理由で退職した会員は別に於て、引退会員や職業分類を持たない会員の立場は、万難を排して

例会に出るために、ロータリーの会員として10年、15年、20年を全うした、彼の過去の奉仕を評価することによって与えられるべきである。もし正会員が事業や専門職種の指導者から選ばれるとすれば、その人が会員として迎えられる時には、すでに立派な中年になっているはずである。15年も経てば、例え彼らが退職していなくても、若い人たちが有名になつて、その職業分類を代表する素晴らしい指導者になっている可能性は高い。多分この問題は理事会の自由裁量権以外の問題だと思つたので、この職業分類のない状態にある強制的な引退制度の詳細は、ここでは考えないことにする。しかし、その可能性はクラブによって考慮すべきであろう。

これはロータリー活動に従事する年齢構成に、直接つながってくる問題である。数多くの不満は、シカゴ・ロータリークラブや全体としてのロータリー活動が、老人によつて構成される割合が増えてきているという事実起因している。そのことを悲観しているあるシカゴのロータリアンは、アンケートに対する回答の中で、次のように述べている。

シカゴ・クラブの会員は、保守的な老人たちによって、かなり大きく支配されているように思える。私は、彼らの考え方を変えてもらうように努力するのか、それともみんなが変わるように努力するのか、どちらが大切なのか迷っている。すでに、気心の合った雰囲気を見出せなくなってしまう。この問題に対して、我々の活力を捧げるためには、どうすれば正しい方法に進んでいけるかについて、他の団体からより簡単な解決策を示してもらいたい。

ロータリーは、幾つかのクラブにおける会員の平均年齢が高い理由について、現在の国内の企業では、若い実業家たちがしばしば転勤をする傾向が強いとか、主義として加入に反対であるとか、もっと若い会員で構成されている他の奉仕クラブに魅力を感じているという理由が、少なからずあることを、しばしば指摘している。3年前、アイオワのロータリアンは次

のように述べている。

一見、ロータリーの輪がぐらぐらし始めているように見えるが、それはしっかりと固定されているので、ロータリーの危険性はない。今日の若い人の考え方は、単にボーイ・スカウトのグループを援助したり、ありきたりのロータリーの昼食例会や講義だけでは満足するものではない。世界情勢に極めて敏感なので、彼らはもっと多くのことを要求している。これからの世代の人たちは、既存の団体の歯車の一つとして入ってくるのではない。入会してくる世代の人たちは、退廃的な当節に、友愛クラブや文学クラブや昼食クラブなどの多くの組織がごろごろしている危険な状態の中で、敢えて参加してくるのである。批判的な世代の人たちは、人生を無駄にされたくないという思いから、結果を要求してくる。ロータリーがこれらのことを成し遂げない限り、生き長らえることが不可能なことが、運命づけられているのである。

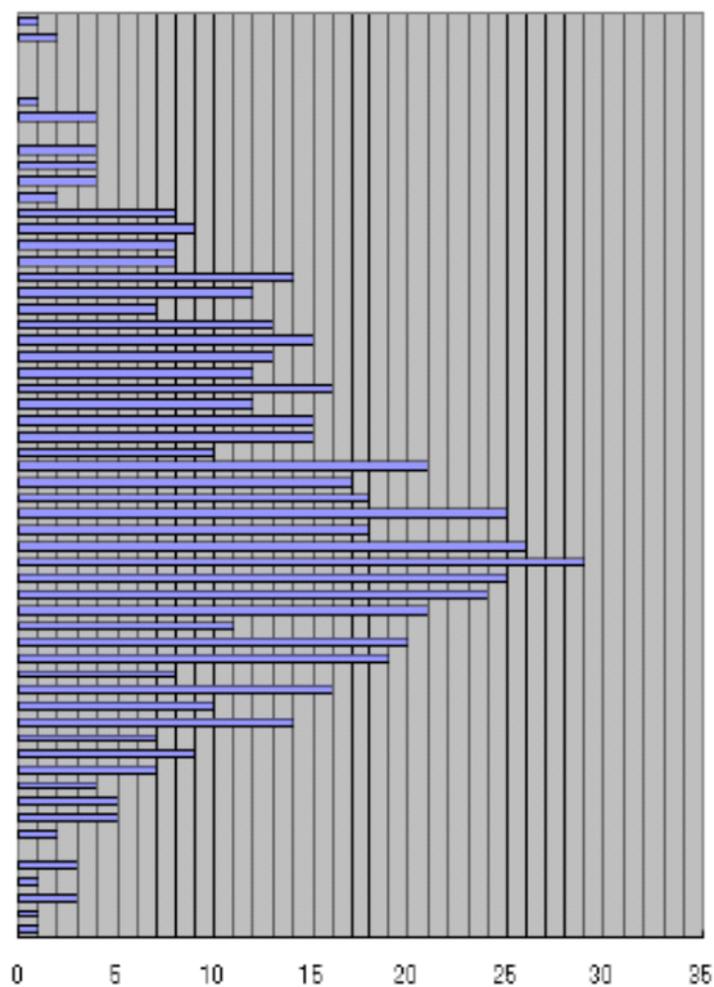
シカゴ・ロータリークラブにおける、1933年3月現在の付表は、現在の会員の年齢構成を明らかにしたものである。すべての年齢の中で一番会員数が多いのは48才であり、大勢を占めるグループは、49才、51才、54才、59才、62才、66才である。年齢分布のグラフは、48才の年齢のグループの前と後とで、急激な下降線を描いている。シカゴ・ロータリークラブは、明らかに、円熟した年配の人たちの組織であり、さらに重要なことは、年月の経過と共に会員の平均年齢が上がるだけでなく、彼らの入会時における年齢が上がる傾向があることである。言い換えれば、毎年の新入会員の年齢は、確実に上がっているということであり、1930年における新入会員の平均年齢は45才であったのに対して、1927年では41才であり、1924年では38才であった。統計の表でこの傾向を適正に示すことは、現会員と同じように、死亡したり退会した元会員の年代の完全な表がない限り不可能である。しかし、この一般的傾向については、疑いの余地はまったくない。

この発見が、警告に値するものであるかどうかは、今のところ不明であ

る。調査委員会は、若者は万難を排して奉仕しなければならぬし、クラブは若者の世代からの新しい血を入れることが、必然的に運命づけられている、という意見を翻すつもりはない。経験の乏しい若者たちが、指導力を備えていることは稀なので、事業と専門職種の指導者たちのクラブは、円熟した人たちが中心になるクラブでなければならぬ。若い会員が、年配の会員よりも疑いなく望ましいという考え方は、ある面では正しいが、別な面では正しくない。結局のところ、年齢による会員資格の是非は、個人的な資格、職業上の資格ほど重要ではないということである。

調査委員会がなし得なかつたこの重要な問題も、クラブの執行部が行えば、その解決は容易であると思われる。新入会員の獲得は、決められた平均年齢になるように、毎年、一定の割合の新入会員を入れるべきであろう。準会員またはアディショナル正会員制度は、若い人たちを獲得する方法として開発されたものであり、「準会員またはアディショナル正会員」特別計画として考え出されたものである。さらに、もっと簡単に、正会員の最高年齢を設定することも可能である。60才または65才、または70才と

会員年齢分布図



いう年齢に達して、自分の職業分類が開放され、有望な若者によって充填されるまでは、会員はすべての権利と義務を以前と同じように享受できるのである。しかしこの問題は、調査委員会としては、急を要するものとは思われない。

ジュニア・ロータリークラブを組織すべきか？

これに大きく関連して、ジュニア・ロータリークラブの実現または可能性の問題がある。この提案は、表面的には、ロータリー理念を高校や大学の若者に学ばせて、未来のロータリアンを獲得するための若者の母体にしようという考えから、再三にわたって出されたものである。

青少年活動プログラムの一環として、多くのクラブが、地域社会の高校生や若者たちの組織を後援してきた。国際ロータリーはこの種の活動に賛成してきたものの、そのような組織がロータリーの名前を使うことには、強く反対してきた。1932年12月16日に、シカゴ・ロータリークラ

ブの目標設定委員会は、この問題を、シカゴ・ロータリークラブ婦人の会（イリノイ州非営利法人）に委託することを決定した。ここでは、その問題は、ロータリアンの子弟に限定した閉鎖的な組織として計画されたが、その後シカゴ・クラブは、何の行動も起こしていない。

若い人たちのために苦勞して作り上げた組織が、イタリアのファシスト党やロシアの共産党のような支配的なグループによつて運営される可能性も考えなくてはならないし、国際青年会議所や同じような種類の他のジュニア組織の存在も考えなくてはならない。ここで、再び、ロータリーは事業上の指導者たちの組織であるという原則を再確認する必要がある。それは、すでに設立されている事業所の指導者の中から、会員を獲得しなければならぬということであつて、その機能は、リーダーにするために若い人たちを訓練することではない。これは、高校や大学の機能である。

ロータリーは、会員獲得の機関として、ジュニア組織を必要とはしていない。青少年活動に関連したそのような組織が、若者たちの目的になつていないかどうかは、別の問題であるが、その問題を含めた委員会の回答は、

すでにそのニーズに答えている数多く外部の組織の状況を勘案して、否定的なものであった。このようにして、会員資格や獲得方法などの関係から、ジュニア・ロータリークラブは慎重に考慮する案件から除外された。

女性が活動する場所

ロータリー活動における女性の立場から、事業や専門職種に従事する女性が会員として認められるかどうかという問題は、理屈上の問題に過ぎず、大多数の会員たちは、女性の間の事業や専門職種のリーダーはそんなに多くはないので、男性だけに会員資格を限定することが絶対必要であり、賢明なことだと考えているようである。さらに、すでに国際ゾンタやアルトルザのような女性の組織が作られて、この分野をカバーする試みが図られている。

ロータリー活動を男性だけに制限する考え方の理由は、敢えて実業家が男性の速記者を雇ったり、家庭的な婦人を女速記者として雇うのと同じよ

うなことであつて、いたずらに内部を混乱させることに対する恐怖心からである。ロータリアンは、家庭を切り盛りし母親でもある妻を持った、所帯持ちなのである。

最近感じたことであるが、事業と呼ばれるものは、家庭を管理していく役割の責任よりも、より人間性あふれた奉仕なので、我々がこれらの女性たちに門戸を開放したとしても、これらの現実のロータリーの女性たちは、我々と同じような友好的な関心を抱きながら我々の組織を見ることはない。

従つて、シカゴ・ロータリークラブへの女性会員の入会は、当分の間は実現不可能だと思われる。その代わりの機会を与えるために、会員の家族の婦人たちを外郭団体として組織する措置が、すでに取られている。

拡大解釈をしないという条件で、「シカゴ・ロータリークラブ婦人の会」

と呼ばれることになったこの組織は、「ロータリーの基本となる友情と社会奉仕へ関心を払う機会を、ロータリアンの家族である婦人たちにも提供する」という目的で、イリノイ州の非営利法人として、1921年5月24日に設立されたことは、注目に値することである。会員資格は、シカゴ・ロータリークラブの瑕疵のないすべての会員の妻、母、姉妹、娘たちのために開放されている（1921年10月26日制定定款、第3条）。正会員は、ロータリアンの妻、妻がいない場合は直系親族であり、準会員はロータリアンの家族である他の適格な婦人である。名誉会員や元会長経験者からなる終身会員もあり、役員は管理母体の理事会としての会長、副会長、幹事、および会計である。会費は年間10ドルであり、グループの例会は2週間ごとに開かれるが、定期的な昼食例会は毎月第3水曜日に開催されている。

この組織には、現在（1934年4月現在）143名の会員がいるが、かつては250名だったこともある。様々な種類の慈善活動や社会奉仕活動に関心を持ってきたが、婦人たちが特に関心を持ったのは、身体障害児

に対する一連の活動であった。プログラムは変化に富んだものであり、組織の方針は、一般的なロータリー目的の影響を受けながらも、会長個人個人の考え方によって、かなり変化に富んだものであった。「ロータリー婦人の会」の名前から明らかなように、会員の資格はもちろんのこと、まさしくその存在そのものをシカゴ・ロータリークラブに頼った付属的な組織である。そのようにして、極めて有益で、重要な活動を数多く行ったが、問題があるとすれば、それは多分、確実な奉仕活動に移行したいという要望に対して、婦人の組織として、直接それに関連する指導力を養成する訓練をしていなかったことに起因するものである。より大きな責任を与えて強化し、僅かな種類の活動にしぼって、その活力を集中することによって、男性のクラブと同じような機能を果たせるはずである。

4. 入退会問題と会員身分の維持

会員に関するその他の問題を考える前に、新入会員を確保する際の実際の手続を詳しく見ることによつて、入退会の問題点を明確にしておきたい。シカゴ・クラブにおけるこの手続は、国際ロータリーの「職業分類委員会プログラム（1925年—26年）」に記載されている14段階の手続に近いものである。

RIの手続は、当該クラブでどんな職業分類が未充填であるかを確かめために、RIの職業分類指針を調査することから始められる。この作業はほとんどのクラブでは、職業分類委員会の仕事である。この委員会の推薦に基づいて、理事会は、職業分類が開放されていることを宣言すると共に、推薦人であるクラブ会員に対して、開放されている事実を文書で知らせる。職業分類規則によると、クラブ幹事を經由して提出された推薦書は順番どおりに綴じられて、10日以内に、適格な推薦者を經由して職業分類委員会に送られる。会員選考委員会は、その中から適格である候補者の名前を選び出して、それを理事会に推薦する。もし理事会の同意が得られれば、推薦者は、幹事を通じてこれを公開することの是非を候補者に問い合わせる。

もし候補者がこれに同意すれば、推薦者および2名のクラブ会員の署名のある正式書類を提出する。

そこで幹事は、反対するクラブ会員に10日間の猶予を与えるために、候補者の名前を文書で知らせる。10日間が終了し、誰からも反対がなければ、理事会は候補者について投票し、もし投票の結果が賛成ならば、幹事は、推薦者を通じて、新入会員に歓迎の文書を発送すると共に、入会金と会費を徴収し、会員証を発行する。それから教育委員会は、新入会員にロータリーの目的を理解するという義務を課し、その努力をさせる。

この推薦の手続は、人口10万人未満の小都市のクラブとシカゴでは多少異なっている。現在行われている手続は、理論上、少なくとも次のことが要求されている。1932年12月16日付の目標設定委員会の議事録によれば、1931年に設けられた産業委員会は、会員の活動を分析し選択すると共に、それを増進させる方法を検討する委員会であり、都市において優秀な指導力を發揮できる資質を持った人を、数とは関係なく、常に探し出すことである。その機能は、RIの職業分類一覧表に基づいて、シ

カゴ・クラブから代表者を出していない産業や専門職種が何であるかを確かめて、会員資格のバランスを保つ方法を研究することである。職業分類の開放を話し合うために、会員内の異なった企業グループに声をかけて会合を開き、指導的立場にある会社役員や代表者の名前と各々の職業分類に属する会社名と共に、あらゆる産業に関する未充填職業分類表を、入会委員会と理事会に提出しなければならない。次いで入会委員会は、そのような空白を充填するために会員を探す作業を行うのである。

照会は、候補者名、会社名、役職、会社所在地、電話番号、適当と思われる職業分類が記載された、会員推薦書（形式A）のコピーが、クラブの会員個人個人から入会委員会に送られてくる。もし入会委員会がこの情報に基づいて適格な候補者を見つけた場合は、正式に入会を勧誘するために、入会申込書（形式B）を推薦者に送る。この最初の部分が、推薦者と賛成者によって満たされることで、始めて会員の指名という、これに次ぐ大切な部分に進むのである。この書類の中に含まれている24項目の質問は、候補者に関するあらゆる関連事項を、入会委員会に熟知させるように企画

されたものである。入会委員会の職務は、候補者の推薦を会員に頼んだり、提案したりすることではなく、候補者の事業や職業分類が適切であるかどうかを判断することである（1932年12月16日付、目標設定委員会議事録）。

そこで入会委員会は、推薦者によって紹介された候補者と面接して、彼の事業やロータリーに入る理由を質問し、彼が去った後で、申し込みに賛成か反対かを投票する。この一連の行動の後、推薦書が理事会に提出され、推薦を支持するか、拒否するか、再考するために委員会に差し戻すかを、投票用紙によって採決する。2票の反対投票があれば、拒否が決定される。もしも同意が得られれば、候補者の名前は、ジレーターに印刷される。印刷されて10日間以内に、すべての会員は、文書で理事会に反対意見を表明することができる。そこで理事会は、再び賛否の投票を行い、4票の反対投票があれば、拒否が成立し、推薦者と候補者は、幹事を通じて、受理されたか拒否されたかを通知される。この手続は、正会員、準会員の双方に適用される。ただし、細則第1条第7節a項によって除外されたある種

の名誉会員は、理事会の推薦によって、クラブ会員の2/3の投票によって決定される。

実際の適用に当たっては、手続はこのマニュアル通りに行われるわけではない。1931年に創設された産業特別委員会は、職業分類の各分野を分析して会員に提示する役割を、入会委員会から分離するために設けられたものだが、入会委員会がその機能を完全に果たしているので、現在は活発に活動しているものの、産業委員会には活動の場が与えられなかった。

ほとんどの場合は、委員会が候補者の未充填職業分類を探す代わりに、委員会の簡単な作業によって作られたり、もっと簡単に、推薦者や候補者が未充填職業分類部門を見つけ出すことが多かった。もちろん、入会委員が下した現実の決定に従って、理事会がその推薦を承認することになっているのは当然のことである。毎年、多くの申し込みに対して、承認されるものの2倍くらいが否決されている。目標設定委員会は、もっと手早く指導力を持つ見こみのある会員を作り出したいという考え方から、全体の手続が遅すぎるので、もっと手際良くすべきであると感じており、会員の推薦

手続きに最も詳しい産業委員長と入会委員長とクラブ幹事に、決定に関する大きな権限を与えるべきであるという勧告をした。(1932年12月16日付の理事会議事録と1933年3月10日付のジレーターに記載された、ジョージ・ハーガーによる手続きに関する興味深い批判文を参照のこと)

この手続きがいささか複雑なのは、遮二無二入会させようという考え方を避けて、会員を慎重に選考してから入会させようという賢明な要望に起因するものである。会員選考という大きな仕事は、全体の組織を成功に導くために最も重要なものであることは明らかであり、1920年以来、その規模を倍増してきたクラブは、ゆっくり力強く成長して、この不況の下で共に支えあってきたのだが、その当時必要とされたことは、産業委員会がもつと素早く活動することであった。

達成された結果に関しては、人間の質にはばらつきがあることから、選ばれた会員の質について常に何がしかの不満があったものの、全体として、会員は伝統を守りながら堅実に増強されてきたと言わざるを得ない。

調査委員会が確認した限りでは、入会委員会の活動は、全体的に見て優秀であったということができよう。二つの質問が、その活動が効果的であったことを示す鍵となる。

1. 彼らは、本当に事業と専門職種のリーダーである会員として認められているのであろうか？ もしこの質問に対して、すべてのケースにおいて肯定的な答えが得られないとするなら、それには幾つかの理由があるに違いない。一方では、現実の問題として、入会委員会やクラブ全体が、事業と専門職種を指導する真の組織を作り上げるために必要な指導力を得ることによって、奉仕理念を実行することを望むのは、不可能なことかもしれない。この理念の重要性は理解しているものの、彼らは、しばしば、他の分野や他の組織を通じて奉仕活動に没頭しているような、会員として適格な地域社会のリーダーを見つけ出すという、満足すべき現況を作り上げることができなかつた。クラブが何年もかけて、表むき実現してきたことは、単に、新入会員がすでに会員となつていている人たちと良い仲間や友人になることだけに重点をおいてきたわけではないというこの根本的な目標を、

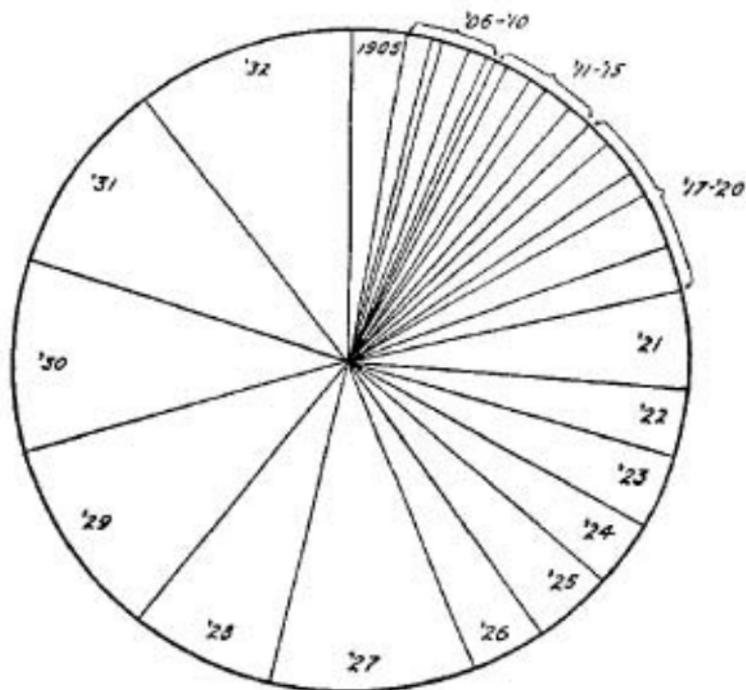
堅く心に刻み込んでおかなければならない。

2. 彼らは、果たしてクラブの誠実で、効果的で、永遠の会員として認められたのであろうか？ この質問は入会委員会の活動に対してだけではなく、会員を定着させ同化させることが、クラブ活動への関心を大いに高め、前から入会している人たちの力量以上に、特別な状況に対処する規則に順応する結果をもたらすという、クラブ全体の活動にも投げかけられているものである。問題は、数多くあるの有益な奉仕活動のやり方を、いかに会員たちに理解させるか、積極性を持たせるか、指導力を持たせるかという問題なのである。

外部の人たちは、クラブに入会するためのハードルが非常に高いという第一印象を持っている。毎年、約10パーセントの会員が脱落して、新しい会員と入れ替わっているのです、この数年間の全体の新入会員は、全会員の20パーセント以上にも達する。表2は、1922年以降の、入会者数と退会者数を示したものである。

表 2

年 度	入会者数	退会者数	年 度	入会者数	退会者数
1922-23	59	54	1928-29	113	49
1923-24	65	71	1929-30	109	58
1924-25	72	50	1930-31	86	82
1925-26	75	57	1931-32	73	89
1926-27	106	50	1932-33	62	101
1927-28	98	61			



付随の円グラフは、この状態を別な見方から示したものである。円グラフのそれぞれの部分は、入会年度別の現在の全会員に対する割合を表したものであり、現在の全会員の1/4以上は、この3年以内にクラブに入つた者であり、6年以内に入つた者は半数に達する。3/4以上は過去10年の間に入つた者であり、10年以上の会員は、現会員の1/4にも満たない。もちろん、これは、最近クラブが確実に会員増強をしたことによるものである。しかし、数年来の経済不況のせいで1923—24年度と1931—1932年度の2年間は、退会者の数が入会者の数を越えていたにもかかわらず、過去10年間の間で2年間（1926—27年度、1928—29年度）だけ、退会者の数が入会者の数の半分以下であったことは、特記すべきことである。これだけ大量の入退会者が出たことは、少なくとも安定性と継続性を欠いたこれらの下地を嘆き悲しむものである。

多くの人が入れ替わることは、多くの人たちにロータリーの理念を浸透させることが可能になるという意味から、むしろ好ましいことであるという人もいる。すでに1905年から適用が考えられていた、この「会員交

代」の理論は、折に触れて、年齢の点から明らかに制限を受けた会員や、クラブの長老ロータリアンに適用される引退会員を例に挙げて力説される。この計画は、確かに明らかな利点を持っており、どのような組織でも言えることであるが、特にロータリーにおいては、急速な交代の利点を促し、会員身分を安定させ継続させる最善の策だと考えられるのにもかかわらず、ロータリーがそれを一度も採用したことがないのは、調査委員会にとつては不満なことである。従つて、この議論の結論は、会員の交代を促すという問題ではなく、会員身分の終結に多大の責任があると思われる状況について、その要因を減少させる問題に目を向けなければならないということになる。

クラブ細則第2条には、会員身分が終結する4項目の不測事態について記載されている。会費の滞納、半年の間において40パーセント以上の例会欠席、旅行するしないにもかかわらず1ヶ月間の例会欠席、理事会の2／3の投票によつて決定された不法行為である。

クラブの規約には10のカテゴリーにわたつて身分終結の理由が記載さ

れている。過去10年の間に、毎年5名から10名の会員が、会費未納によって退会を余儀なくされている。退会の理由としては出席不能が最も多く、この理由による身分終結は、1923—24年には9名、1930—31年には36名に及んでいる。毎年のように起こる幾つかの身分終結事例で多いのが、これに平行して起こる出席怠慢である。地域限界外への転出は、毎年10名から20名にも及んでいる。業種の変更による終結は年間18名に上る一方で、事業不振によるものも年間9名に上っている。死亡または病弱は計算から除外されている。「特別な理由」「その他の理由」「経済的事情」「関心の欠如」「ロータリアンとしてあるまじき行為による指導」などは、ほんの数例に過ぎない。

これらのカテゴリーは、奇妙に表に出てこない理由が重なっているのが一般的であり、たぶん殆どのケースでは、会員身分終結の本当の理由を明らかにすることは不可能であろう。個人的な考え方は、しばしば本当の理由が無難な形に姿を変えて述べられることは、疑いのない事実であるが、調査委員会が個々のケースについて、記録に留められていることの背景に

まで調査の手を伸ばすことは、時間の点からも明らかに不可能なことである。死亡や地域限界外への転出や業種の変更などの特別の理由による会員身分終結は、それを改善する方法は見つからないが、委員会は、これらの原因以外の大部分の会員身分喪失の理由は、同僚たちやロータリーの目的や理念に親しませることに、たまたま失敗した状態のまま、新入会員に出席を強要した結果であると共に、ロータリーの活動のために必要な時間や費やした時間から得られた結果に対する会員の評価にあると見ている。そしてこれらのことが、お互いに入り組んだものと考えられる。

調査委員会としては、ロータリーにおける出席要請の少なくとも一部は、定期的に出席しなければならない意義が誤解されていることによるものではないかと考えている。ロータリーにとって、60パーセントという数字は、現実に客観的な関係を持たない不思議な意義に包まれた数字である。会員は、自分の職業分類に明記された活動に対して、少なくとも自分の時間の60パーセントを捧げることが期待されていると共に、半年間に、昼食例会に60パーセント（正確には63パーセント）出席することが期待され

ている。国際ロータリーは、毎月の出席率表や出席競争の文書によって、個々のクラブに直接的にまたは地区ガバナーを通じて、会員が各々の例会に少なくとも60パーセントは出席する努力をするように、一貫して勧めてきた。

60パーセント出席要請は、元来、全員またはそれに近い数の会員が例会に出席しない限り、その機能を發揮して、会員間の事業を促進するという重要な目的を効果的に果たすことができないという仮定の下で、できるだけ多くの会員の出席を保証するために設定されたものである。シカゴでは行われていないが、ほとんどのクラブでは会員の出席を促すために、電話をかけたたり、出席要請のチームを派遣したりしている。国際ロータリーや平均的なロータリアンの判断では、クラブの価値や会員の関心は、出席率に大きなウエイトがおかれ、定期的に出席しなければ、規則を破ったものとみなされている。この不況の最中でも、一般的に見れば、それが破られることは殆どない。

この規則は、しばしば馬鹿げた出席の強制という結果となって、現在で

も続いており、出席記録をを維持するために、あら

ゆる奇策を弄することにつながっている。あるクラブでは、欠席の断りを電話するか、ほんの2、3分他のクラブの例会に顔を見せたり、他のクラブのラウンド・テーブルに出席すれば、出席のクレジットを与えられると言われている。ロータリアン個人は、一〇〇パーセント出席に対して、その度ごとにロータリーからの表彰状とバッジを貰い、クラブはクラブで、毎月のR Iのニューズレターで発表されるクラブの出席率を見れば分かるように、R Iから例会における偉大な出席記録を評価されるのである。個々の会

年度別平均出席率

年 度	出席率	年 度	出席率
1924-25	72.63	1929-30	71.00
1925-26	71.32	1930-31	67.89
1926-27	71.56	1931-32	65.92
1927-28	70.92	1932-33	59.38
1927-29	71.34		

員や個々のクラブは、国際ロータリー、地区、クラブ役員から、常に圧力をかけられながら、最高の出席率をあげるために努力しているのである。シカゴ・クラブの毎年の平均出席率は、1920年から1924年までは出席を強制しないにもかかわらず、常に上昇し、不況の風が吹き始めた1929年以降の6年間も、満足すべき平均出席率を保ち続けている。

シカゴ・クラブの約1/4の会員は、不自然な強制ではないとしても、出席要請が厳しすぎると述べており(Q10)、約2/5(39.26パーセント)の会員は、火曜日の出席の補填として、委員会への出席をクレジットにすべきであると考えている(Q11)が、ロータリーのためになるべく多くの時間を捧げる必要があると答えた者は、たった11.36パーセントに過ぎない(Q12)。ある会員は、規則正しい出席の要請は、法律の条文に従うために、しばしば、もつともらしい理由をつけられがちであるとして、次のような提案をしている。

もし会員が、少なくとも年間の例会の半分以上出席すれば、要請は充分かなえられていると思う。出席は、別な週とか、年間を通じて最も都合の良いときに補填が認められるべきである。

60パーセント出席要請に対する強い強制は、必然的に、地域社会の何人かの優れた事業と専門職種の指導者たちを、クラブが失う結果につながったに違いないというのが、調査委員会の意見である。そのような指導者たちは多くの活動を抱えているので、地域社会の中で彼らの著名な技術を使わなければならない対外的な奉仕活動が重なったときには、この要請通りに例会に出席することが不可能になる場合が出てくる。クラブが、厳密な出席基準に従って彼らの価値を判断することは、近視眼的な見方であると同時に、危険なことでもある。これは、例会に出席すること以外には何もしない平凡な会員ばかりを持つことにつながり、自分の自由になる時間の50パーセントしか例会に出席できなくても、地域社会のために自分の

技術を活用する大使として、指導力を発揮する人よりも、一〇〇パーセントの出勤記録を作ることの方が、ロータリーにとって価値があると言うことになるのではないだろうか。たぶん、あらゆる場所で、会員身分を失ったロータリーの卓越した元指導者たちの多くは、この見境のつかない出席要請を強制したことによって、離れていったものと思われる。ロータリーは、出席規定を厳密に適用することによって指導力を発揮する人を失い、しかも多くの場合、強制することが自慢すべきことだと錯覚したり、会員の中には、出席要請をしなければならぬような指導者を入れることを拒絶する風潮さえあったように思われてならない。

近年、60パーセント・ルールは、少なくとも市民としての威信を失墜させない範囲内で、シカゴ・ロータリークラブの執行部による適切な運営と常識をもって実施されている。この事由による、会員と指導力の損失は莫大なものである。1932年12月31日に終了する6ヶ月間に、60パーセント出席要請を怠った会員は213名に及び、全会員の約1/3にも上り、これらの会員のほとんど全員が、会員身分の終結の対象になるも

のであった。理事会が、少数の極端なケースを除いて極端な行動を差し控えたことは、賢明な措置であったというのが、調査委員会の意見である。

どのような組織でも、強制できないような規則や、組織が崩壊する犠牲を伴うような規則を持っていることは危険なことであり、少なくとも、シカゴのような大都市のクラブでは、60パーセント出席要請を改正すべきである。これに関係して、次のことを提案したい。

1. 出席要請を、例会の半分の出席に減らすこと。
2. 6ヶ月間ではなく、1年間のクラブへの出席を計算すること。
3. 機械的な出席要請ではなく、奉仕を通じて、より素晴らしいロータリー理念を実証することを進めるための基準を設定して、委員会会合やその他の限定したロータリーの奉仕活動を、出席に代えたり補ったりするクレジットとして認める方法を考えること

多くの人は、すべての出席要請を完全に廃止するような、豪快な動きを期待していたのかもしれないが、これは謙虚で保守的な要請である。最近シカゴ大学では、クラスへの強制的な出席を廃止した。その結果、よいクラスでは、今までよりも良い出席率となり、教師たちは、以前には欠けていた、価値ある実質を伴った魅力的な演出をしなければならないという刺激をうけている。何人かの指導者たちは、ロータリーもまた教育機関であるという意見を持っている。授業に出席することを会員たちに強制するということは、その授業に対して、会員たちが関心と魅力を抱いているのかという競争原理に基づいて出席を促す状態には、未だ至っていないことを示すものである。この事実に基づいて、シカゴ・クラブが、正常にかつ健全に出席を促すために、強制ではなくて、クラブのプログラムの魅力に依存していたことは、賢明な措置であったと共に、R Iの当局からの強制に抵抗するものでもあった。

会員の同化

会員身分の終結が起こる、大きな一般的原因の2番目は、新入会員がロータリーのことを詳しく知らなかったことによる失敗、すなわち、ロータリーの目的を教育することに対する失敗があげられる。現在の会員の1/3以上(36.54パーセント)は、推薦者が彼らに知識を与える責任があることを自覚していなかったと述べている(Q8)。この考え方は、過去の6年にわたって、留任した入会委員会と教育委員会の委員長が、推薦者に対してこの責任を果たすように要請し続けたにもかかわらず、未だに問題が残されたままである。1/4以上の会員(27.40パーセント)が、詳しく知らせるように努力をしなかったことを認めており(Q9)、これとは矛盾するが、彼らの対応には不満であると答えた会員は、僅か11.36パーセントに過ぎない(Q7)。その一方で、30.86パーセントの会員は、シカゴ・ロータリークラブが、会員にロータリーの理念を詳しく知らせることが不充分である(Q6)と答え、34.07パーセントの会員が、ロー

タリーの目的と理念に邁進する多くのプログラムがある（Q15）という彼らの意見を述べている。もしロータリーを退会した元会員の回答が、このアンケートに含まれていけば、不満足を反映したこれらの割合がもっと大きくなることは間違いない。

入会3年目になる会員は、次のように述べている。

シカゴ・クラブは、ロータリーの基礎を教育することに、もつと多くの努力を払わなければならない。将来のシカゴ・クラブの会員に対して、ロータリーの目的について教育するという真剣な努力がされなかったために、私がそれを理解することができなかったことを、この文章を書いた本人として私自身がよく知っている。私が理解している範囲の、職業分類に関する我々のやり方や、ロータリーの精神が矛盾に満ちているのは、ロータリーの目的や運営を完全に理解していないことよって起こることが分かってきた。

私は、信条や人種や肌の色や考え方に關係なく、全体のためになるあらゆる援助の手をさしのべて、すべての機会を通じて私の同僚たちを支えるのが当然のことであり、それがロータリーの目的と完全に一致すると信じている。しかし、私は、ロータリーの目的や運営を漠然としか理解しておらず、現在に至っても、未だにシカゴ・クラブの中に友人を作ることができないので、ロータリーを通じて、ほんの僅かでもこの理念を実行に移すことはできなかった。

大規模なクラブにおいて、知り合いと親睦を深めることに関する問題点は、第8章で議論したい。会員にロータリー理念を教え込む問題は、もしそれが説教を思わせるようなものならば、どのようなクラブでも難しいことである。ロータリーは教育的な組織だが、どんな場でも言えることは、最も効果的な教育は、言葉によって教え込むことではなく、活動に参加させることである。適当な範囲内でこれを行うことは重要な役割であり、現

時点において教育委員会は、それを期待しているだけではなく、それを
実現することを目指している。もし、会員の何人かが不満足だと思ふよう
な結果が出ても、それは教育委員会の落ち度ではなく、教育方法そのもの
の落ち度であるという説明を疑ってはならない。この方法を適用しただけ
ではだめであり、新入会員に、ロータリーの文献により親しみを持たせな
くては、その目的を達成することはできない。

教え込む技術をより効果的にするためには、クラブの文献類が多く役割
を果たすはずである。しかし、どのような形式であれ、この技術だけでは
不十分であることは当然で、1時間の実際の奉仕活動は、10時間の読
書や講義や説教や議論に値するものである。奉仕理念は、それを活動的な
指導力という言葉に翻訳して、初めて大きな意義を持つてくる。教育的な
問題に対する回答は、言葉ではなく、行動と実行に移す意思である。

最後に、ロータリーに費やす時間に対する会員の心構えについて考えて
みたい。シカゴ・ロータリークラブの現在の運営は、非常に多くの時間を
要求していると思つてゐる会員は、11.36パーセントという小さな割合

に過ぎなかった（Q12）が、15.06パーセントの会員は、委員会に対する奉仕から免除してもらうことを希望し、32.84パーセントの会員は、委員会への奉仕を特権というよりも義務だと見なしている（Q13）。ほぼ半数の会員（45.93パーセント）は、もし、もつと大きな教育的な機会が得られれば、もつと多くの時間を、快くロータリーに提供すると答えているが、47.65パーセントはその意思を示しておらず、6.42パーセントは態度を保留している（Q17）。その一方で、娯楽的な活動をする機会に、より多くの時間を割いてもらいたいと答えた会員は、たった16.30パーセントであり、否定的な回答が76.30パーセント、未決定が7.41パーセントであった（Q18）。奉仕活動に対する機会に、多くの時間を割くという回答が46.91パーセントなのに対して、否定が40.74パーセント、未決定12.35パーセントであった（Q19）。

これらのアンケートの回答は、もちろん、必ずしも、想定された質問の機会が起こった場合の数字を示すものではない。しかし、会員のうちの僅か1/5しか娯楽に関することに興味を示さなかったことは重要である一

方、ほぼ半数の人たちは、教育や奉仕の機会に興味を示している。ロータリーのプログラムや委員会やその他の会合に費やされる時間について、少なくとも半数の会員は、娯楽のためよりも、奉仕や教育のために使われる機会を価値あるものと考えている。これは、バランスのとれたプログラム
の必要性を認めるものだが、奉仕や指導力を活性化するように計画された
教育的な活動や、それに付随する活動は、あまり資金を使わずに、会員間
の時間や活力が利用できることを示唆するものである。そのような活動は、
疑いなく、より思慮深い会員の大部分の関心を集めると共に、シカゴ・ク
ラブにすでに備わっているにもかかわらず、探し求めてきた強い指導力を、
最大に役立たせる方法を通じて、適切な計画として提供することができれ
ば、かなりの数に上る年間退会者の減少につながることは間違いない。

第5章 構造上の問題点

1. 子クラブの問題点

シカゴ・ロータリークラブの内部とロータリー国際大会において、大都市の区域限界内における子クラブ設立の要望に関する問題についての議論が、何年もの間続いた。この提案には、シカゴ・クラブを始めとして、そのことが可能になった1922年のロサンゼルス大会以降も、アディシヨナル・クラブを作らなかつた、ニューヨーク、サンフランシスコ、フィラデルフィア、バッファロー、セントルイス、ピッツバーグ、カンザスシティ、ニューオリンズ、ポートランドなどのクラブの多くの会員も、消極的ながらもずっと反対し続けてきた。特にイギリスのロータリアンやRIB Iや、一般のアメリカのリーダーによつて支持されているこの提案に対して、シカゴ・クラブは反対運動の矢面に立ちながら、耐え続けてきた。

74のクラブが存在するロンドン大都市圏の状況は、ロンドン・クラブ

の最近の動きには、子クラブの侵害によって、自らのクラブの将来や名声や成長に重大な関係を及ぼし兼ねない影響が見られるものの、子クラブの望ましい形を表わす決定的な証拠とみなすことができよう。幾つかのアメリカの大都市には、一つ以上のロータリークラブがあり、特にニューヨークでは五つの区に四つの別々のクラブがあり、ロサンゼルスには、かつては郊外であったが市町村合併によって今は市内になっている地域に、複数のクラブが存在する。1922年のロサンゼルス大会で、その権限が与えられて以来、人口一〇〇万人以上の都市には、新しいクラブはまったく作られていないと言われている。この議論はかれこれ10年以上も続いており、今後も未来永劫に続くことは確かである。本章によって、この問題を考えるために、適用した方が良いと思われる判断基準を提案する一助になることを望むものである。先ず最初に、この問題に対して議論を続けているシカゴ・ロータリークラブの現在の会員の態度に関心を払いつつ、双方の意見を再検討し、公式な結論をまとめる方法を探すことによって、この問題を容易に解決することができるようになるに違いない。

アンケートの中の質問28から質問33までは、この件に関する会員の考え方を確かめるために設定したものである。シカゴの区域限界内を地域別に分けてロータリークラブを作ることに賛成する反応を示した会員は1/4以下の22.47パーセントであり、明らかな反対は73.09パーセント、態度保留4.44パーセントであった(Q28)。シカゴの全体の事業と専門職種の指導者から構成されている一つの親クラブより、それぞれの地域別の事業と専門職種の指導者によって子クラブを作る方が望ましいと考えている会員は、僅か16.5パーセントに過ぎなかったのに対して、78.52パーセントは反対であり、5.43パーセントは態度保留であった(Q29)。質問30の「近隣地域のロータリークラブにはどのような需要があると思われるか?」からは、さして大きな手応えを引き出すことはできなかった。質問31は、「これらの目的にかなうために、あなたの近隣では、ロータリーの他にどんな団体が設立されているか?」である。質問30に対する回答は、次のような意見に代表される。

* その需要はまったくない。私を知る限りでは、大都會の子クラブや複数クラブは成功したためしはない。

* 地域的なクラブで繁栄するのは、沢山あるチェーンストアぐらいのものである。

* 私の事業所の近隣地区はダウン・タウンにある。しかし、私の住居の近隣にいる商売人や事業家の中には、ロータリーと関連を持つような人は誰もいない。

* 現在すでに、非常に多くの地域組織がある。さらに増えることによって、会員の質は下がるだろう。

* イーグルウッドやウッドローンやハワード・アベニューやウィルソン・アベニューの子クラブは、ロータリー理念を高め、我々がシカゴ・クラブから受けるのと同じような利益を作り出すと思われる。

* この場所は、すでにキワニスによって占められており、ロータリーがこれ以上重複したとしても、健全な子クラブを維持することは困

質問31に対する回答には、キワニス、ライオンズ、地域的な同業者組織、商工会議所、地域社会福祉団体の存在が繰り返し述べられている。すでに指摘したように意見の違いがあるものの、シカゴ・ロータリークラブの会員は、もし子クラブができれば、シカゴ・クラブの会員をやめて、子クラブのために役立ちたいという意思を持っている会員は皆無に近いことが明らかであり、僅か5.68パーセントの会員が、そのことを考えていると答えているに過ぎない（Q32）。

その一方で、24.69パーセントの会員は、シカゴ・クラブの会員を辞めない条件で子クラブに賛成しており、反対が65.93パーセント、回答を保留したものは9.38パーセントであった（Q33）。もしも、シカゴに子クラブが設立されるとしても、当然のこととして、既存のシカゴ・クラブの会員ではなくて、まったく新しい会員で構成する必要があるということになる。いずれにせよ、これが子クラブの賛同者と反対者双方が認め

る妥協点なのであろう。

このような種類の問題は、頭数だけで賛否の数を数えて答えを出すことは、ほとんど不可能なことであり、これらの意見を述べただけで、議論が終わったとみなすのは早計である。調査委員会は、初期の段階における子クラブには、親クラブからの激励と支持が絶対に必要であることは明らかであるとしても、大きな問題に対する、シカゴのロータリアンの困り果てた感傷がこの結果を導き出しているのであって、この問題についての子クラブに対する決定的な口実とは言えないと思うので、決してそれを達成する上で克服することができないような障害ではないと考えている。しかし、結論に達する前に、双方の論点を慎重に検討することが必要であらう。

子クラブの問題に関しては、しばしば、言葉巧みに述べられてきた。もしロータリーが素晴らしいものならば、ロータリーが沢山ある方がもっと素晴らしいに違いない。すべての大都市には、幾つかのはっきりと分かるビジネス・センターがあり、シカゴのアメリカ合衆国勢調査地図には、市内の75の異なった地区が示されている。周辺地域にいる事業家たちに

とっては、市の中心部にあるクラブは何の役にも立たないものであり、偏にロータリーの怠慢によって生じたニーズは、他の団体によって満たさなければならぬ。ロータリーはすでにその職業分類制度によって、充分な制限を課しているのだから、その上さらに、一つの都市に一つのクラブなどとして自らを制限すべきではない。一都市に複数のクラブが存在することが、各々の職業分類の代表を増やし、クラブ同士の実り多い競争を引き出して、他の奉仕団体などからの競争に対決しながら、地理的に細分化された場所で市民に役立つ活動を進めることができる。

1931年11月3日に、RI第40地区ガバナー、ウイリアム・マツクギル **William V. MacGill** は、国際ロータリー定款・細則の第4条の条文を指摘して、子クラブを設立する理由に関する素晴らしい声明を、シカゴ・ロータリークラブ理事会に提出した。

至近の公式な国勢調査によって人口が一〇〇万人以上で、共有する地域

限界を持っている都市においては、その都市が共有する地域限界内に、明らかに識別可能な一つ以上の商業や取引の中心地域を有する場合は、定款・細則を適用することによって、その都市のすべてのクラブの会員の賛成によって、各々の商業や取引の中心地域に一つのロータリークラブを組織することができる。

さらに彼は、1924—25年に採用された規則の下で、拡大委員会がその活動を進めても既存クラブの協力が得られない場合は、地区ガバナーの提唱によって、新しいクラブの設立ができるにもかかわらず、シカゴにおいてはまったくそれが成されていないことを指摘し、RI理事会によって承認された拡大の原則を引用して、次のように述べている。

1. もしロータリーがその宿命を全うしようと思うのなら、それを維持できる世界のすべての地域社会に、ロータリーを作らなければなら

ない。

2. 職業分類制度を厳密に適用して、そのクラブを維持できる優れたローターリーの才覚を備えた人たちを集めれば、どんな地域でもローターリークラブを組織することが可能である。

3. 地域社会がローターリーを待ち望んでいるという考え方は間違いない。ローターリーが望むような地域社会を作ること、ローターリアンの義務である。ローターリーの拡大に当たって、ローターリアンは、理想を売っているセールスマンにも例えられる。よいセールスマンとは、例えば最初は彼が目指した客が品物を買わなくても、決してそれを諦めることはない。

4. 地域社会において、成功裏にローターリークラブを維持することが期待できる場所では、クラブが作られると直ちに、クラブと地域社会の双方にとってよい結果をもたらす。それはすべて地区ガバナーの義務であり、ローターリークラブの組織に対するあらゆる責任を負つ

て、できる限りの早急に利用可能なあらゆる機会を捕らえて、すべてのロータリークラブとロータリアンに協力させなければならぬ。

そこで、マックギル地区ガバナーは、シカゴのロータリアンの事業所の位置が示されている地図に基づいて、シカゴ・ロータリークラブの会員が、市の周辺部分を代表していないことを指摘した。38名以外の会員は全部、55番街、カジー通り、アービング・パーク通りが接している地域に、彼らの事業所を持っていた。彼は、キケロ・クラブ、オークパーク・クラブ、メイウッド・クラブなどが実行している素晴らしい活動を引用し、地図の上に引かれた架空の線があるためにロータリーに入ることができない、サウス・シカゴ、イーグルウッド、クローフオード・マジソン・アップタウン、ジェフアーンソン、クリアなどのループ地区からずっと離れている他の地域社会の悲しさを語った。彼は人口831人に対して1名のロータリアンを持っているオーロラのことを指摘した。

シカゴ・ハイツは800人につき1名、キケロは1,115人に対して1名、ディアフィールドは132人に1名、グレンコーは251人に1名、オークパークは750人に1名、ウィルメットは337人に1名であるのに、何とシカゴは人口5,349人に対して1名のロータリアンしかいないのである。彼は、シカゴに一つの教会しか必要でないと言い張る宗教界のリーダーの態度と比較しながら、シカゴに一つしかロータリークラブを作らないという考え方を嘲笑した。彼は、この制限を利用して、他の奉仕クラブがロータリーを追い越すに違いないと語り、反対の意思を表明して話を終えた。

1933年の国際ロータリーの定款第4条第2節の一部改正に、この効果は反映されている。

一つの都市、自治区、市域に二つ以上のロータリークラブを組織し、これを会員として承認することはできない。但し、都市、自治区、市域が、そ

の地域内に判然と商業上の中心地とみなされるものを二つ以上有する場合は、かかる地域内に既存する各々のロータリークラブの会員の2/3以上の賛成によつて、各々の中心地別にアデイシヨナル・ロータリークラブを組織し、これを国際ロータリーの会員として承認することができるといふのが、この定款・細則を提案する目的である。

改正制定案33—26として、この提案は、1933年6月にポストンで開かれたロータリー国際大会において採択された。それを前もつて考慮するために、会員であるクラブに提出された、RIの子クラブ設立に関する決議案、制定案の概要は次の通りである。

1. 多くの都市は幾つかの地域社会によつて構成されている。すべての地域社会にクラブを持つことこそ、RIの目的を達成する方法である。

2. ここで提案された条件は、決して強制的なものではなく、任意なもの

のである。アデイショナル・クラブの設立には、その都市に現在存在するロータリークラブの2/3以上の同意が必要である。

3. 人口による制限は、技術的な決定方法であつて、次ぎに述べる三つ留意すべき制限ほど重要なものではない。先ず、アデイショナル・クラブは、判然とした商業や取引の中心地におかれること。二番目に、都市の地域限界内のロータリークラブの2/3以上の賛成を得なければならぬこと。三番目に、RI理事会の承認を要するということである。人口一〇〇万人などという特別な理由などはまったくない。

4. ロータリーを強力なものにするために、人口1,000人当たりのロータリアンの数をできるだけ多くすべきである。ある小さな地域におけるこの比率は、人口17人についてロータリアン1名と非常に高いのに反して、ある大都市では、人口5,300人に対してロータリアン1名と非常に低い。

5. 現在のロータリークラブに将来性が期待される、判然とした商業

地域を有する人口一〇〇万人未満の都市では、ロータリーの会員になることを拒否されている多くの人たちが存在する状況にある。

6. もし各々の判然とした商業地域が、それぞれロータリークラブを保持していれば、ロータリーの原則がより大きい範囲に広がると共に、奉仕をするための都市全体の機会を、多くのロータリアンの共同事業として活用することができるに違いない。

7. 例外的な能力を持った人たちで燦然と輝く一つの親クラブよりも、都市の判然とした商業や取引の中心地にある各々のクラブの方が、平均的な能力を持っている人々の指導力を開発する大きい機会を持っている。「1933年国際大会において検討すべき決議案と制定案の原案。1933年3月28日」。

子クラブについての論旨が、RIの概要で同様に示され、曲がりなりにも説得力を持ったこの制定案が反对者に対して示された。どんな都市でも、

二つ以上のクラブができれば、クラブの間で摩擦が起こるに違いないとか、シカゴにおいて実力のある実業家の大部分は市の中心部にいるとか、子クラブができればひよつとすると親クラブの会員数の減少を招くかも知れないので、必ずしもシカゴのロータリアンの全体数を増やすわけではないとか、シカゴ・クラブには1,700以上にも及ぶ未充填職業分類があるので、子クラブがなくても拡大の機会は充分あるとか、親クラブのプログラムや会員の能力が低下することによって、財力と名声が落ちるに違いないとか、子クラブを組織することは、ロータリーの活動力にとって望ましくない浪費につながるのか、奉仕をするという目的は、近隣を基礎にした二重の職業分類を可能とすることで、親クラブ内の近隣地区のグループによって達成できるに違いないなどという議論が延々と続いた。

ロータリーは、事業と専門職種の各々の職業分類からの1名の代表者をもって構成されることが、まさしくその基本である。より多くのロータリ

ークラブによる活動とは、共同の地域限界内の子クラブを是認するという、この考え方から出発したものである。従つて職業分類の重複を是認することは、多くの子クラブを持つことなく、職業分類を重複を是認するものではないので、多くのクラブの活動と矛盾するものではない。従つて、ロータリーの目標の達成を長い目で見たときに、我々が考へている方法の方が、ロータリーの目標の遂行を管理する上で、より多くのロータリークラブの活動よりも、より生産的であると確信している。我々のクラブにおける10年間にわたる精力的な努力によつて培われた会員の才覚は、新しい子クラブがもっと増えることによつて、現在訓練中であるために、奉仕に対する意義や可能性を持ち合わせていない会員だけの多くのロータリークラブが出現することによつて、本質的に弱められることは間違いない。

国際ロータリーは、先に述べた制定案33—26の論旨を示すために、次の声明を出した。

1. いかなる規模の都市のアデイシヨナル・クラブの創立でも、卓越した個性を持った人を、クラブ会員として受け入れることを怠れば、既存の親クラブは必ず弱体化する。

2. 現存する親クラブの存在価値は、アデイシヨナル・クラブの結成に際して、現在の会員が所属しているクラブがどんなクラブであるかにかかっている。

3. 都市の人口は常に変動するので、判然とした商業区域の場所は、常に修正していかなければならない。この変動は郊外よりも市内で頻繁にかつ急激に起こる。大都市内の分離された商業地域にあるロータリークラブは、そのような人口の変動の結果、弱体化する可能性すらある。

4. この提案によって、商業の中心地域が共にロータリーの存在を求

めて合併するよりも、むしろ、分化する傾向を示すかも知れない。従って、これらの地域の代表者たちは、単一の親クラブよりも親しい関係になるはずである。

5. 一〇〇万人以上の都市でさえ、アデイシヨナル・クラブが互いのテリトリーを侵す傾向が見られる。小さい都市ではいっそうその傾向が強いかも知れない。これは、大都市内の商業中心地間の境界線が、厳密かつはつきりと確定されていることが、極めて稀であることによるものである。「1933年国際大会において検討すべき決議案と制定案の原案。1933年3月28日」。

これらの賛成と反対の各々の議論の内容について、詳しく分析することは、あまり意味のない作業である。なぜならば、ある部分は、意見の多くが、「そうしたい」とか「そうかも知れない」といった、いろいろな種類の立証不可能な仮定に基づいたものであり、またある部分は、賛成意見や反

対意見の多くが、大首都圏におけるロータリーが備えるべき機能に関して、はつきりした考え方を持っていないからである。ロータリーが何を言わんとしているのかによって、双方の意見はますます漠然としたものとなり、発端から混乱を極めた。

この報告書の中で、繰り返し指摘しているように、ロータリーの「代表者の性格」を理論武装する考え方は、ロータリークラブは地図上の地域や人口の集団を代表しているのではなく、事業と専門職種の代表だと言うことである。ロータリーの特徴は、著名で価値あるリーダーが代表を務めている、主要な各々の事業と専門職種による職業上の代表であるにもかかわらず、個々のクラブに関する限り、会員は明らかに、定められた地域内の事業と専門職種の中から選ばなければならないことである。そこで、次のことが問題になってくる。この地域とはどのようなように定義すべきなのか？ 答えはロータリーそのものの歴史と目的から明らかである。ロータリーは都市における活動であり、その対象は、田舎の地域、郡、国、州、町村や近隣の地域ではなく、あくまで都市である。理論上から言えば、各々のクラ

ブは、親睦と奉仕のために結ばれた、都市社会における事業と専門職種の指導者の代表なのである。

それならば、都市社会や都市とはどのように定義すべきなのか？ それは、社会的、政治的、経済的に、すなわち人口密集地域、行政地域、経済地域に定義することができ。ロータリーは、定義の基礎として人口分布を妥当なものと考えていないので、人口による代表を出すことはできない。多くの人は、商圈全体を組織の適正な領域だと考えており、この考え方が子クラブの設立を提案するときの下地となっている。そのような新しい出発を支持する人たちは、まさしく、人口という感覚から子クラブの設立を提案しているのではなく、各々の明確な商圈からクラブの設立を提案しているのである。しかし、商圈を定義する厳密な方法は存在せず、経済圏の原則を単純に適用しただけでは、結論を出すことにはつながらない。シカゴの商圈も広い意味では、シカゴの産物だけではなく、広い範囲で売買されたり交易されたりする産物を取り扱うシカゴの地域というものを意味しているのであって、この商圈は各々の製品によって変化するものである。

誰かが、各々の主要な産物についての、シカゴ産業界の一連の地図を描いたとしても、2枚の地図は決して同じような境界線を示すことはないだろうし、それを組み合わせた地図は、経済学的な見方からは、シカゴ大都市圏を大雑把に示すものにしかならないであろう。しかしながら、この地域は、まさに郊外に向かって、到達可能となった地域限界を超えて拡大していく、シカゴ・ロータリークラブの組織に対する基礎としては、まったくそぐわないものであろう。その地域は、ウイスコンシン州や、南はインディアナ州、東はたぶんミシガン州全体に拡張し、50以上の中小都市を含み、この広大な地域全体における産業の必須の部分である経済生活圏すべてを含んでいるのであって、少なくとも、シカゴのループ地区を中心にして引かれた半径50マイルの円と同じくらい広い地域を占めているのである。ロータリーが都市から都市へ、町から町へと事業の境界線とは関係なく拡大されていったので、この地域の中小都市のほとんどには、すでにロータリークラブが存在している。あるロータリークラブは、行政の強権によって会員たちに線引きされて決められた地域を基本にして、広く定義

された地域の境界線を採用し、またあるロータリークラブは、本通りのすべての交差点が商業地域を構成しているという仮定で進められた計画を基本にして、狭く定義された地域の境界線を採用している。その結果は双方とも合理的なものとは言えず、現在行っているような程度のものではなく、商業地域をより正確に定義する現在よりもよい方法が考え出されない限り、ロータリーの組織にとって、この考え方の拠り所となるものは存在しない。

行政上の地域は最も有益な基礎

行政上の地域は、依然として基本的なものとして存在し続けている。この観点から見ると、都市や都市の社会は、政治的な感覚による都市という地域限界によって定義された地域である。これは、事実上、ロータリーがその拡大に際して利用した組織の基礎となったものでもある。各々のロータリークラブが機能を発揮する都市社会の中には、政治上な地域、行政上の地域、司法上の地域がある。確かに、政治上の境界線は、社会的、経済

的な感覚で見れば、極めて人工的なものである場合が多く、特にシカゴ地域は、地方自治体、司法機関のすべての部門が入り混じった、驚ろくべきかつ絶望的な混乱の渦中にあった。この問題は、市民としての立場からロータリーの関心を惹いたものの、ロータリーは、クラブの構造や会員構成の基礎として、すでに国や州や地域の立法機関よって定義されている市や町などを認めて、それを採用せざるを得なかった。

子クラブの活動は、各々の市域にあるロータリークラブが提案したものではなく、行政が定義した地理上の小さい単位であるにもかかわらず、それを「判然とした商業地域」という言葉で定義した市とか町に対する、的外れの方向の活動とも言えよう。ここに、議論に先立つ混乱の原因がある。組織の基本条件として、行政上の地域を無視すべきなのであるか？しかし、子クラブが存在する他の都市でも、それを無視するわけにはいかなかった。ロンドンにおける、行政上の「シテイ」は、1平方マイルにも及ぶ金融の中心地であり、そこにはただ一つのロータリークラブしかなく、その他の「ロンドンのクラブ」はロンドン郡やロンドン地区大都市圏の中

にある自治都市を基本にして設立されたものである。幾つかの事例では、はっきりと定義された基本があったわけではなく、ノーレスという名前の男によつて、彼の生活の糧として、クラブの数を増やすことによつて彼の収入を増やすために設立されたものもあるのである。

ロンドンにおいても、ロータリークラブの分布と、商業地域とか人口密集地とか都市境界とかその他いろいろな縄張りの境界線による分布との間には、相対的な小さな相互関係が存在している。ニューヨーク・クラブは、行政上の地域を基本にした大ニューヨーク市の5区を基本にしているし、ロサンゼルス・クラブは、各々の行政上の地域を基本にした都市と町のクラブであったが、これらの地域は後にロサンゼルス大都市圏に加えられ、現在は別々のクラブとして留まることが許されている。シカゴに付属している、オークパークやエバンストンやキケロにある地域的なクラブと同じように、それに続くことが許されるはずなのに、シカゴ・クラブは、ロサンゼルスやニューヨークやロンドンのように、その他多くの子クラブや商業地域のクラブを作ろうとはしなかった。

もし商業地域を、ロータリー組織の基礎と同じように都市や町に適用するとすれば、その地域は行政が定めた単位のように小さいものではなく、もっと大きなものとなる可能性が高い。シカゴ大都市圏とは、商業地域としてウッドローン、ハイドパーク、レーベンスウッド、サウス・シカゴさえも含んでいるというのが、偽りのない感覚である。組織の基礎となる商業地域が、そのような広い大都市圏全体を含んでいるだけでなく、全体の大都市圏の副商業地区をも含んでいるので、理論的にも正確に定義をすることができず、どうしても混乱をきたしているのである。

現実の問題は次に述べる通りである。行政上の単位はロータリー機構における地理的な基本条件から除外すべきか？ もしそうするのなら、その代わりに何をもつてくるべきなのか？ この基本条件に代わるその他の満足すべき代替案はまったくくないというのが、調査委員会の意見である。しかし、これまで延々と続いてきた議論の多くは、子クラブの支持者が根本的な問題については

つきりとした考えを持つことに成功したとは言えるものではなく、彼らが

それを成し遂げるまでは、今までのような、漠然とした不明確な言葉で討論を続けなければならず、それは時間の浪費以外の何ものでもでない。

この分析によつて、この問題を考える上で、ロータリーの二つの基礎的な特徴をはつきりと留意しておかなければならないことを強調しておきたい。(1)職業がロータリーの代表の基本であること。(2)行政上の地域が都市社会の定義となること。この関係を重要視するためには、3番目の特徴も考えださなければならぬかも知れない。ロータリーが対象としているロータリーの奉仕活動に参画する人とは、都市社会で事業や専門職種にたずさわっている人たちではなく、都市社会における事業や専門職種の指導者たちなのである。彼らは、地方や都市近郊や近隣地域で消費するため製造したり配布したりする商品やサービスにたずさわっている事業や専門職種の人たちではなく、都市全体や大都市圏や国内や国際的な市場にかかわっている人たちのことを指しているのである。

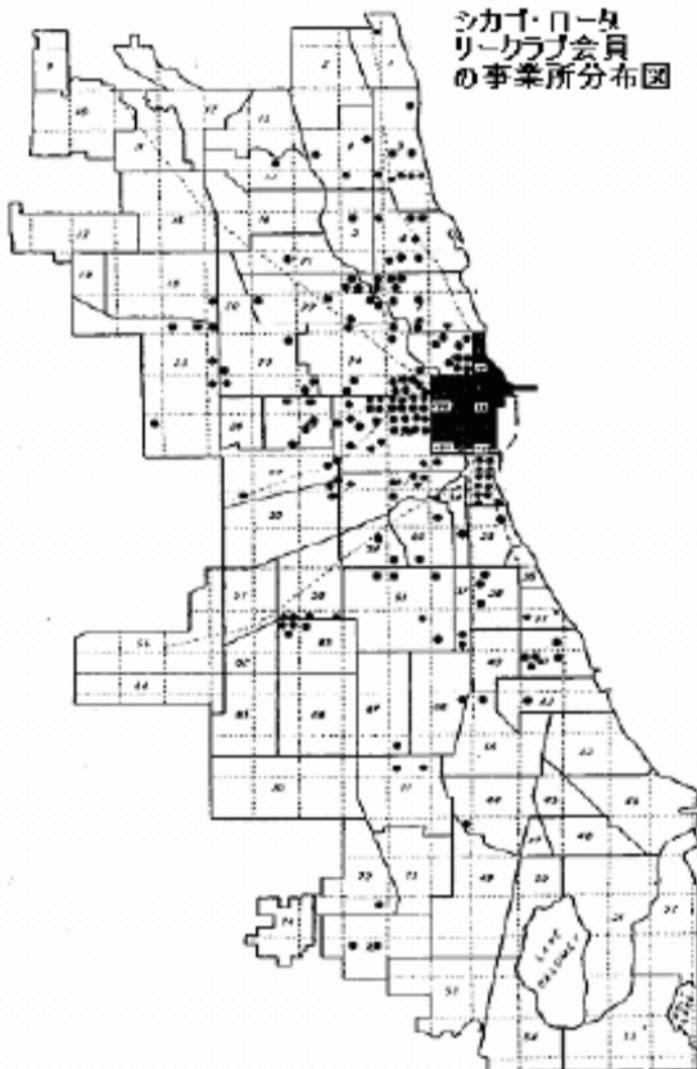
そのことから、もし今後ロータリーが、大都市圏の中心部で地理的な分割を気ままに行えば、二つの重大な危険を冒すことにつながる。一つは、

本当の指導者とは認められないような事業や専門職種界の人たちの、程度の低い層の集団を作る危険性である。シカゴのような地域社会で、ロータリーが、貧弱な才覚しか持ち合わせていない考え方や能力や人格の人を受け入れることは、明らかにロータリー活動の名声と影響を損なう、反動的な動きと言えよう。これと匹敵するもう一つの重大な危険は、これらの異なった層の中ですでに効果的に活動している、他の職業分類クラブの貴重な奉仕を侵害することは疑いがないと言う事である。従って、前者の危険性は、確実にロータリーの評判を下げ、世界中の著名な事業と専門職種の会員たちからのけ者にされ、後者の危険性は、ロータリーを含むあらゆる職業分類クラブの効率を落とす可能性につながる。

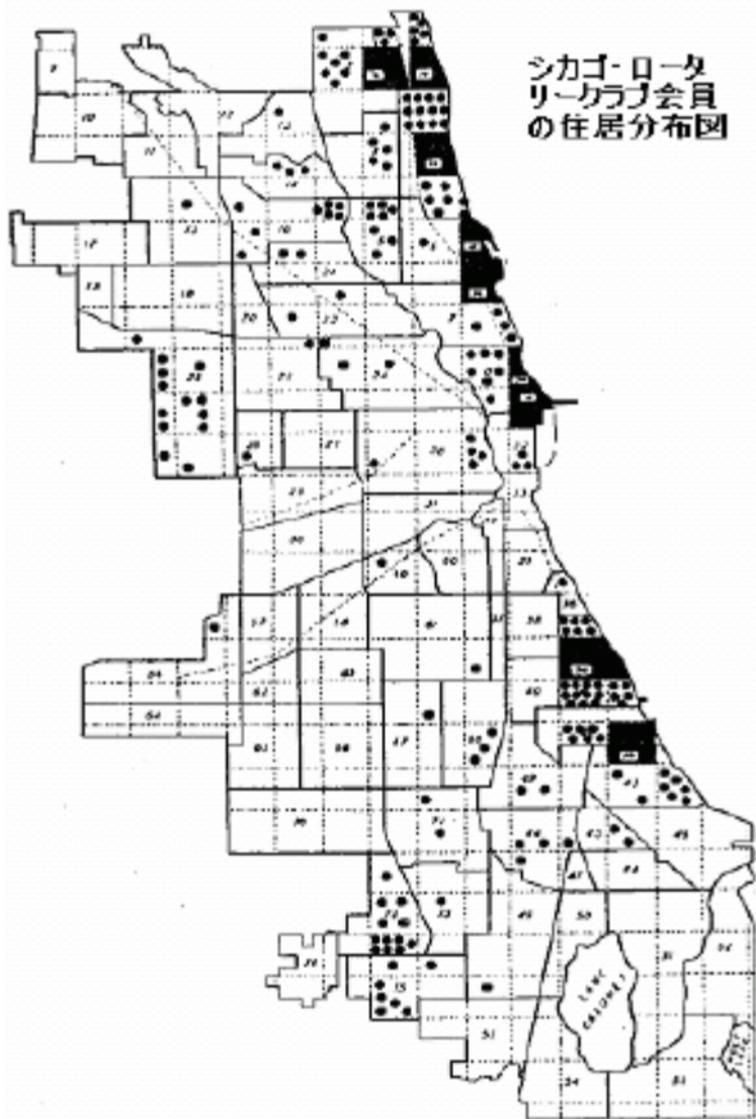
シカゴの問題に対してこれらの考え方を当てはめれば、これが間違いない事実であることがすぐ分かるに違いない。「シカゴ・ロータリークラブ会員の事業所分布図」と「シカゴ・ロータリークラブ会員の住居分布図」の付図は、合衆国国勢調査地図のシカゴ地域の地図に基づいたものである。この地図は75地域に分類されており、これらの地域は商業地域でも近隣

地域でもなく、国勢調査の目的だけの手段として、どちらかと言えば勝手な分割をしたものである。ロンドン、パリ、ニューヨークと違って、シカゴ大都市圏の商業地域はループ周辺の中心地から放射状に広がっている。この地域は、大雑把に言えば、ノース・アベニュー、ウエスタン・アベニュー、31番街、ミシガン湖に接している領域であり、その中に、シカゴ全域の事業と専門職種の人たちの指導者の事業所が集中していると言うことができる。シカゴ・ロータリークラブは、670名の会員のうち524名が、前述の地域内に事業所を持っている人々によって構成されているというのが、その実態である。これらの地域限界の外にも、トップ・クラスの仕事と専門職種の指導者たちがいるものの、シカゴのロータリアンの事業所が、市の周辺部に点在していないという事実こそ、喜ばしいことであると同時に、クラブが優れた才覚を持った人の組織であるという最もよい証拠でもある。もし、地域を代表するという間違った考え方から離れて、

シカゴ・ロータリー
クラブ会員
の事業所分布図



シカゴ・ロータリー
クラブ会員の
住居分布図



事業と専門職種の指導力を代表するという面に注目すれば、シカゴのロータリアンの現在の事業所の地理的分布は、非常に満足すべきものであることは明らかである。

ロータリアンが住居から選ばれない、または選ぶべきではないということから考えれば、住居分布図はある意味では見当違いのものである。しかし、住居の分布によって、次ぎに述べるような見方が証明される。高度に集中化された大都市圏にいる事業や専門職種のリーダーたちは、明らかな理由によって、事業所の近くに住むことは稀である。自分たちの事業所の近隣で生活を営んでいる大都会の事業や専門職種の人たちは、その地域に大切な職業上の活動や市民活動だけに関心を持っている、近隣地域の実業家なのである。シカゴのロータリアンの住居分布図は、事業所の分布図とは何の関連性も持たないものであって、シカゴのロータリアンは、おおむね彼らが働いている所には住んでいない。

僅か61名だけが、524名が事業所を持っているノース・アベニュー、ウエスタン・アベニュー、31番街の長方形の中で生活しているに過ぎず、

彼らが住んでいる場所は、ミシガン湖畔、南部、北部、北西部、西部、南西部の町の周辺部の住宅地域なのである。さらに1/3以上の272名は、シカゴの市域をまったく離れた遠方で生活している。彼らは遠く離れた近隣地区に住んでいる通勤者や郊外の住民なのであって、シカゴ大都市圏の経済の運動神経中枢とは、ほとんど、またはまったく関係を持っていない、地域的な経済活動の中に住んでいる通勤者と郊外居住者なのである。

これらの状況の下では、シカゴの都市限界内にロータリーを広げようとか、各々の近隣都市にロータリーを広げようなどと言う、現在の議論のほとんどは、まったく意味を持たないものである。シカゴのロータリーと、シカゴの実業界の指導者とは区別されるべきであり、実業界の指導者を会員にするに当たって、本筋を逸脱したあげく、その評判や潜在的な魅力を低めたり、そのランクを田舎の近隣地域で事業を営む人たちにまで下げることが、致命的な誤りを犯すことにつながり兼ねない。

会員であるかないかにかかわらず、ループから遠く離れた場所に事業所を持つている事業の指導者たちは、ループで開かれる会合に参加すること

は難しいことである。この事実から引き出される結論は、そのようなクラブに対して指導者たちがまったく興味を示さないから、地域的なクラブを組織する必要がないということではない。結論はむしろ、シカゴ・ロータリークラブが、シカゴの交通システムを改善するように、その関心を高める努力をしなければならぬと言うことである。

ロータリー国際大会の代議員の大多数に上る85パーセントは、大都市におけるロータリーの問題を正しく認識していないと、50名にも満たない小規模の地域から来たクラブの代表に語ったのは、至極当然なことである。このようにして、誠実な動機と高い目標に重点を置きながら、地理的な分割によって、シカゴにおけるロータリーの拡大を計ってきたにもかかわらず、上記のような立場の理論から、最後まで、考え方を変えたり譲歩したりしないだろうと言うのが、調査委員会の見方である。

2. 機能と地理的分割

もし地域的なクラブの設立が、ロータリーの原則や目的と理論的に調和できないとすれば、その代わりに考えられる多くのやり方がある。もし、シカゴ・ロータリークラブが子クラブを作るための分割を拒否すれば、ある種のジレンマに直面することになる。それは、シカゴの地域社会の実業界の指導者として、もっともふさわしい代表であり、もっと効果的な奉仕活動をすることを要求されるからである。会員が職業上のリーダーを止めた時でさえ、出席と会費の支払いを続けることを免れる術がない終生会員であるという会員身分のせいで、常に会員が増えていくという結果を招いている。会員数が増えることによって、ロータリーの原動力である親睦を達成することが難しくなり、組織は扱い難いものになっていく。子クラブに分割することは、すでに示した理由によって望ましくないことであるが、別の形によって、分割するのと同じ効果をあげる可能性がないかどうかという疑問を提起することは、重要なことである。

問題は、共通の関心を持った小さいグループをまとめることによって、クラブの機構を十分に修正することである。これに関連して、どんな種類のグループにすべきか、どんな種類に関連付けべきかという疑問が出てくる。この二つの事柄についての一般的な可能性について、彼ら自身は次のことを指摘している。分割には、共通の地域内または地理的な関係によるグループでクラブを分割する形をとるか、共通の機能または職業的な関係によるグループの形をとるかである。前者の可能性を探るには次のことが必要である。

1. 当該地域に住居を持っている会員で構成された、クラブ内部の近隣クラブ対策委員会。
2. 当該地域に事業所を持っている会員で構成された、クラブ内部の近隣クラブ対策委員会。
3. 子クラブの設立を相談するための、住居か事業所基盤のいずれかを

持っているクラブ会員による、非公式な子クラブ設立に関する会合。

4. 親クラブのテリトリー内にあつて、協力していこうという意思のないクラブを除いた子クラブの、出席補填が与えられるような規模の、公式な子クラブ設立に関する集会。

機能によって分割の将来性を探るには、次のことが必要である。

1. 特定のクラブ活動の基礎となる会員を一緒にグループ化できるように、クラブの既存の委員会システムをより一層開発していく。

2. 共通な事業と専門職種に関心を持った職業上のグループを、クラブ組織内に設立する。

3. これらの活動を総合的に支持するクラブの委員会の他に、その考えに賛同して、そのような活動に自らを捧げる人たちが任意に参加で

きるような、共通の教育、娯楽、職業上の関心を基本にした新しい
委員会を設置する。

先ず、クラブ内における近隣クラブ対策委員会や、ロータリアンによる近隣クラブの会合の可能性を考えるに当たって、この提案がシカゴ・ロータリークラブのどれだけの会員の間に好意的に受け止められているかを観察することが必要である。ポール・ハリス自身は、子クラブのロータリアンによる近隣クラブの会合の考え方に興味を抱き、彼の住んでいる地域の親睦を深めるために、そのような会を数多く組織している。彼の同僚は次のように述べている。

距離が遠いことや、時間がかかりすぎることや、駐車に不便なことから、何人もの会員たちが、昼食例会の出席に失敗したことは間違いない事実である。市内のいろいろな場所で開かれるラウンド・テーブルで、会員が

出席補填が得られるように提案したが、正式なプログラムとしては認められなかった。そのようなラウンド・テーブルに出席することで、ホーム・クラブへの出席の一定のパーセンテージを与えれば、出席も良くなり、知り合いを増やすこともできるのだが。

子クラブを持つべきである。それをやることによって、シカゴ・ロータリークラブのすべての会員たちは、出席が容易になる。副会長たちが、毎週本部に提出する報告書の中でも、私はそのことを言っている。子クラブの問題を軌道に乗せ、進展させるためのテーブルを準備してもらいたい。

この提案には、いろいろな思惑が混ざり合っている。ある会員たちは、より身近な親睦を深めるために、近隣に小さなグループを作ることを望んでいるし、別の会員は、近隣クラブの便利さに関するものである。これらの会員たちは、まさしく、毎週火曜日の昼にループに行きそびれた代替として、子クラブの例会を望んでいるのである。ここでは、概念と目的を明

らかにすることが、非常に大切である。もしその目的をシカゴの近隣地域のロータリーに伝えようとしても、現在の会員によるいかなる適正な手段を通じてでは、それを達成することができないのならば、同じ近隣地域に住んでいる人たちか、同じ近隣地域で事業をしている人たちの何れかによって、近隣クラブ対策委員会や近隣地域のグループによる会を作る必要があるだろう。もし前者を基盤にするならば、委員会やグループをあまり交えないで、多くの近隣地域に住む人たちによる大きいグループを組織することが可能となるに違いない（ロータリアンの住居が集中している住居分布図を参照のこと）。もし後者を基盤にするのならば、商業地域の中心にロータリアンの事業所が集中しているのだから、近隣地区に事業所を持っている人たちをグループ化することはさして問題になることではない。別々の子クラブを作ろうという議論のほとんどは、親クラブの会員の集いや、近隣クラブ対策委員会で起こってくるものである。ロータリアンの関心は、市民生活や経済に対するものよりも、近隣の問題の方が柄に合っているのである。彼らは、すでに設立されている子クラブほど効果的に、地

域社会のニーズに対応することはできないのである。

しかし、もし動機が、近くに住んでいるロータリアン同士の親睦を高めるためなら、これに対して多くを語ることは、明らかに無意味なことである。このような集会では、近隣地域の市民や事業の諸問題を扱うことができたとしても、市民全体や職業奉仕の分野における重要な問題を扱うことは不可能である。地域社会におけるそのような奉仕は、理論的には他の団体の役割であって、ロータリーという団体は、この点で効果的に機能することは、ほとんど望めないし、この分野に対して努力することを、大切な目標だとは考えていない。これらのことを考えると、出席補填のために近隣クラブの正式な例会に出席することは、望ましいことではない。会員の大部分は事業所のある場所と、居住地域が離れているので、地域的な近隣のグループによる昼食例会は殆ど実現の可能性はない。ロータリーの婦人たちの協力による、社交的な性格を持った非公式の夕刻の例会は、非常に望ましいものであるが、これは、クラブのプログラムや活動に何ら特別な変化を与えるものではなく、それに期待するわけにはいかない。

この話題を終える前に、ほぼ1/3(29.14パーセント)の会員が親クラブ内の近隣地区のグループについて好意的であり、これに対して反対は63.70パーセント、態度保留が17.16パーセントであったことを述べておきたい(Q26)。会員の一部(24.44パーセント)は、子クラブの基礎となる職業分類の重複には賛成であるが、65.43パーセントは反対であり、態度保留は10.12パーセントであった(Q27)。この問題は、これ以上議論を進めても無意味であり、子クラブ設立の作業はシカゴのロータリアンには向いていない作業のように思われる。もしシカゴ・ロータリークラブが地域的な事業と専門職種の人々の組織ならば、地域的な職業分類は意義を持つものである。いつの日にかそんなことが起こって、分割によって、見事に子クラブを設立する時がやってくるかも知れない。親クラブの中にある地域的な職業分類は、医師、歯科医、弁護士などの極めて例外的な職業分類を除けば、決して理想的なものとは言えないし、さらにここには、近隣地区の開業医ではなく、個々の専門分野で指導的立場にある権威者をクラブに入れるという目標があるはずなのである。「ロータリー

の影響をシカゴ全体に広げるために、何かその他の特別な提案をしたか？」という質問36に回答をよせた大部分の会員は、もつと市民に対する活動をすべきであると答えている。この姿勢は調査委員会に対する意見にも現れており、そのような問題にたずさわるべきであるという、明快な意思を表わす意見とも言えよう。都市社会の活動であるロータリーは、地理上の代表ではなく、職業上の代表であることに基本をおくべきであつて、彼ら自身が合理的に関与すべき市民や事業上の問題とは、近隣地域の問題ではなく、都市全体に関連する問題であることが原則なのである。

職能上のいろいろな形によって分割することは、組織を確実に活発化させて、より大きな機会をもたらせるものである。しかし、共通の職業や趣味や市民への関心によってクラブを分けることに賛成する会員は僅か14.32パーセントしかなく、このような形による分割に賛成する会員はほとんどいないのに対して、78.27パーセントは反対、7.41パーセントは態度保留であつた(Q35)。その一方で、幾つかの興味深い意見が寄せられた。

* 一般的な事業の職業分類でクラブを分割したら、その職業分類の誰が、他の会員たちに情報を提供すればよいのか。

* 適切に維持していくにはクラブが大きすぎると思う。まったく異なった二つのクラブに分割することが駄目か、難しいなら、クラブを二つかそれ以上に分けて、会長も委員会の代表者を各々別にして、魅力的なプログラムや他の活動に参加するのも、お互いに完全に別にするような計画を実行してみたらどうだろうか。

* 4乃至6週間ごとに、食品販売、建築業、公共機関および出版、輸送および通信、専門職種などの部門別グループで会員を分けて、座席を配慮してみる。

* 物事を成し遂げようという意欲のある会員による、小規模の委員会を作るべきである。経済問題、その他の問題、職業奉仕のその他の問題を一つにしぼって議論するために、毎週または2週間ごとの例

会で20名から40名までのグループを組織して、その考え方が論理的な結論に達するまで、数週間か1ヶ月以上にわたって議論を続けてもらいたい。昼食例会でクラブに発表する前に、そのグループの会員にそうさせるべきである。

これらの提案は、職業によって分割しようと言う前記の意見がヒントになっっているように思われる。調査委員会としては、この可能性は、充分考慮に値する重大な意見だと思うが、分割という言葉をこれに関連して使うのはふさわしいことではなく、その真意は、クラブを単にばらばらに分けるのではなく、職業に関連したグループとして、より良心的で意図的な会員の組織を作っていくということである。職業上の代表という性格を持ったロータリアンたちは、実践の心を理論的に高めるような計画を作り上げるに違いない。

ロータリアンは、彼ら自身の事業と専門職種のために選ばれていると同

時に、事業や専門職種の団体に対するロータリーの大使として選ばれた人たちでもある。ある者はボーリングや野球に興味を持ち、またある者は身体障害児や青少年活動に興味を持っている。これらの様々な目的を推進する委員会は、彼らの各々の興味を引き付ける。しかし、ロータリーのよいところは、皆が事業と専門職種に関する問題には関心を持っており、その話し合いの場が、単に設けられているだけではなく、必要欠くべからざるものとなっていることである。事業や専門職種に関する諸問題を考える活力を高めるために、類似するか関連性のある事業や専門職種を持った人たちを集めて、会員の職業分類を再編成しようという、抜本的な作業を行った例がある。

この計画は、数年前、ニューヨーク州のロックポート・ロータリークラブによって採用され、その概要が示された。会員は、第1分類……小売業・卸売業・配布を含む販売および流通・サービス業・保険および証券、第2分類……機械・設備を含む製造業・繊維製品および織物・その他手工業、第3分類……法律・銀行・医学・歯学・教育・宗教を含む専門職種、第4

分類……公共事業・新聞を含む公的サービスの四つの職業形態に分けられている。

ある意味で類似した職業上の分類によって会員をまとめるように意図されたこの計画の下では、四つの主要な分類の委員長とそれぞれの部門のグループに責任者が置かれている。非公式なグループの会合では、共通の関心のある事柄について討論して、クラブ例会における、職業奉仕のプログラムの資料を作り出している。このクラブの例では、クラブの職業委員会は、四つの部門の委員長によって構成されていた。当時ロックポート・クラブは78名の会員を擁していた。

そのような計画に対する最も大きな反対は、異なった職業に関心を持った事業や専門職種の人たちが共に手を携える代りに、同業者組合や専門職の団体による職業上のつながりによって、会員が分けられる傾向があることである。調査委員会は、シカゴ・ロータリークラブに対して、この種の特別な提案をするに足りる十分な根拠はないので、この考えを提案するつもりはない。このやり方が良いのか、それとも別のやり方が良いのかは分

からないが、ロータリーの教育に具体的な意味を持たせるためにも、クラブの大きさから起こってくる特別な問題に対処するためにも、職業奉仕に更なる活力を与えることが重要だと思われる。

第6章 組織の問題点

構造とは別個に組織の問題を考える上で、クラブの諸活動を処理する役目を持つているクラブの委員会組織と、一般的な運営とを研究する必要があることを提案しておきたい。いろいろと機能を付け加えながら大きくなってきた他の組織と比べると、シカゴ・ロータリークラブの委員会の発展ぶりは、長期間にわたって熟慮されてきた計画を踏襲しているとはいうものの、個々の新しいニーズや奉仕活動に対処するために新しく委員会が作られることは、ほとんど偶然に近いものであった。

これらの発展を詳しく検証することなしに、1922年と1924—25年におけるクラブの委員会構成の総合的な調査および再編について論じることが、細心の注意を要する。ヘーリック会長の下で、1925年4月16日に理事会によって採択された組織人事委員会の最終報告書は、分析の専門家による結論を含んだものであった。当時クラブには、会員選考、

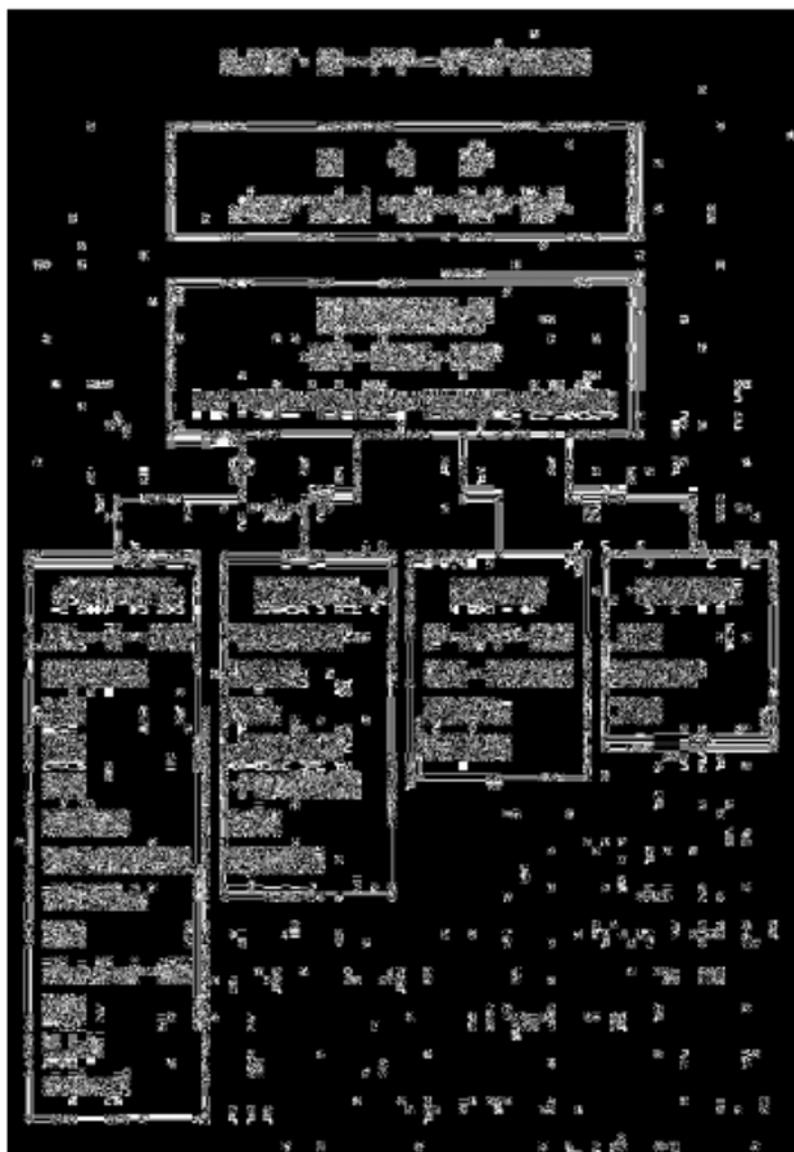
プログラム、親睦、クラブ会報、市民、教育、財政、青少年活動、運営、職業秩序、激励、不平処理、広報、会員増強（出席）、予算、地区および国際大会の16の常任委員会があった。これらに加えて、組織人事委員会が通常の委員会として提案した、ジレーター宣伝、ラウンド・テーブル、アスレチック、接待、募金、身体障害児の六つの特別委員会がある。これらの22の委員会は、グループとしてではなく、お互いに独立しながら連絡と協力を行う機関として、予算委員会と連動しながら活動していた。

1927年6月の国際ロータリーのオステンド大会において、クラブ組織に対する「目標設定計画 Aims and Objects Plan」と呼ばれるものが採用された。その原型となる計画は、理事会に直結した会長、幹事と、新しく作られた3委員会、すなわち職業奉仕委員会、クラブ奉仕委員会、社会奉仕委員会の委員長によって構成された目標設定委員会の設立を勘案することであって、その他すべてのクラブの委員会は、これらの3の主要なグループの下で、小委員会として設置されるというものである。従って、クラブ奉仕委員会の下には、職業分類、会員選考、プログラム、親睦、教育、

広報の各委員会が所属し、職業奉仕委員会の下には職業秩序委員会が所属し、社会奉仕委員会の下には青少年活動委員会が所属することになる。なお個々のクラブは、地域のニーズに合った特別の委員会を設立することが可能である。

三大奉仕の下に、クラブの委員会を機能的にグループ化するには、大変な努力を要した。6年も前の1921年のエジンバラ大会において、6ヶ条の綱領に改定されたにもかかわらず、新しい計画には国際奉仕委員会が設置されなかったことに注目してもらいたい。しかし、目標設定計画の改定に伴って、国際奉仕委員会もまた他の3委員会と同じように設立された。1932年の新しい計画では、クラブ奉仕委員会の下には職業分類、会員選考、親睦、出席、プログラム、広報の六つの小委員会、社会奉仕委員会の下には青少年活動、身体障害児、学生貸付金基金、農村都市親睦の四つの小委員会が置かれたが、職業奉仕委員会と国際奉仕委員会の下にはなにも設置されなかった。

RIは、できるだけ早く、この新しい計画をすべてのクラブが採用する



ように説得したにもかかわらず、1932年の春に至るまで、シカゴ・ロータリークラブはそれを完全に採用しなかった。現在の委員会構成は、付表に示した通りである。社会奉仕、クラブ奉仕、国際奉仕、職業奉仕は、目標設定委員会のそれぞれの部門であり、クラブの29の委員会は、これらの四つの部門の下に、単純にグループ分けされているように見える。このグループ化は、四つの部門のそれぞれの下に、機能を論理的にグループ化した少数の小委員会を配属したものであるが、結果的に、1・2ヶ所非理論的などころもある。会員選考委員会は職業奉仕と直接的な関係がないにもかかわらず、この部門の下に置かれているし、国際奉仕の下に小委員会が存在しないのは、いかなる理論的根拠をもって国際奉仕委員会は綱領第6条を推進していくのか不思議なところである。シカゴ・ロータリー財団、地区および国際大会、将来展望委員会はすべてクラブ奉仕に属しているのに、大都市圏委員会は社会奉仕に属している。

機能の面からは非論理的に見えるが、これらの矛盾は、できる限り四つの部門の活動を均一にするために意識的に作られたものである。現実には彼

らは、委員会活動に関する効率的な運営や協力の方法について、いかなる深刻な妨害も受けたことはない。調査委員会から見ると、やっと最近になってシカゴ・ロータリークラブが目標設定計画を採用したわりには、今の時代に効果的な抜本的な再編成であるという感じを受けないが、将来の可能性の参考として、仮定の再編成計画を提案してみたい。その目的は、明確かつ理論的な機能に基づいた部門に、クラブの既存の委員会を再編成することである。

クラブ奉仕部門に負担をかけ過ぎないようにするために、クラブ内の運営と親睦の促進という二つのはっきりした活動で、グループ分けする方が望ましいと思う。この機能上の部門を認めることによって、四つの奉仕部門の代わりに、五つの奉仕部門に落ち着くことになる。これらのうちの三部門は、指導力の開発を通じて、奉仕理念を現実には波及させることを大きく強調するために、新しく名前をつけた。すなわち、社会奉仕は「市民指導力 Civic Leadership」になり、職業奉仕は「事業指導力 Business Leadership」になり、国際奉仕は「世界市民 World Citizenship」になる。

これらの新しい名称は、この報告書のこれから先の章において、分析専門家の記憶に留めながら、活用していくつもりである。

もしも既存の委員会の中で設置が疑問視されるものや、廃止すべきもの、新しく作るべきものがあれば、それぞれについて確実に、厳密かつ繊細に評価しなければならぬという問題が持ち上がってくる。調査委員会は、如何なることがあつても個人的見解を述べることを避けるように決められているので、これらの問題点の幾つかについては、残念ながら触れずにおきたい。外部のグループが短期間の調査の過程によつて得た評価よりも、個々の委員会の常にたゆまぬ深い造詣の方が、より適正な評価が得られると思う。

クラブ運営を健全に行うという一般的な原則に基づいて、他の理由によつてクラブの関心や努力にふさわしい機能を備えていない限り、活発に活動していない委員会はすべて廃止すべきである言われるが、この原則はすべての例に当てはまるものではない。委員会の委員長インタビューと、記録の調査に基づけば、過去において最も活動的だったクラブの委員会は、

入会、教育、親睦、SAAであり、活動の少ない委員会は、苦情処理委員会とシカゴ・ロータリー歴史委員会であろう。しかし、苦情処理委員会が活発でないことは、悲しむよりは明らかに喜ぶべき事柄である。陸海軍親睦特別委員会が長続きした背景には、その有用性をあげることができる。大規模で重要な委員会でありながら、市民委員会と職業秩序委員会とはあまり効果的でなかったが、この両者は、クラブの一般的な計画の中で、大きな問題となってくる活動を実行に移すことを前提とした委員会であり、これらの活動と関係する微妙で難しい問題は、この委員会の下で、それぞれについて適切に考慮されなければならないのである。

組織や委員会の設置、委員会の数、機構や機能の統合よりも重要なことは、クラブ全体の人数に関連した委員会の人数である。クラブの大きさや、活動の多彩さを考えれば、その活動のうちのものほとんどすべてが、委員会の活動であることが分かる。従って、特に重要なことは、委員は二つの目的に基づいた考え方によって選ばなければならない。(1)クラブの会員一人一人が持っている能力によって奉仕する機会を与える。(2)各々の委員

は、委員長によって、委員会活動に会員が興味を向けるように仕向けられ、真の指導力に必要な時間と、活力とインスピレーションを備えるように指導される。

15. 06パーセントの会員は、委員会活動を免除してもらいたいと考え、32. 84パーセントはそれを義務だとみなし、43. 46パーセントは特権だとみなし、8. 64パーセントは回答を保留している（Q13）。この結果は、現在の会員の半分以上が、委員会に対する奉仕に比較的醒めていることを示すものである。委員会会合の出席記録を見ると、殆どの活動はほんの一握りの人たちで行われ、大勢の委員が欠席しているのが目立つし、委員会の会合が殆ど開かれていないことも注目に値する。親睦、SAA、ラウンド・テーブル、入会委員会だけが、月に一回程度開催されているが、ほとんどの委員会は、年に2・3回しか開かれていない。

これは、1912年から1927年の間の年次報告書による、委員会出

席の一覽表を示したものである。1927年以降の委員会出席記録は多少断片的で、不完全なものである。しかしながらこの表では、委員会の開催頻度が低いほど、委員の関心も低くなる傾向が見られる。すべての委員会の一般出席平均を次に示す。

年度	委員会会合	出席率
1922—23	年111	66.70%
1923—24	年151	59.41%
1924—25	年160	63.23%
1925—26	年200	49.82%
1926—27	年139	57.54%

そのように稀にしか開かれぬ場合では、効果的な委員会活動の機会を提供することが少ないことは、言うまでもない。この状況に陥った一つの

理由は、疑いなく、委員会活動を定期的に行うために要求される時間の多さにある。別の理由は、それぞれの部門の担当副会長や委員長の指導力と統率力の不足にあるのかもしれない。委員会の奉仕活動に対して、ある程度出席補填を与えようという配慮は、多くの会員が委員会活動を渋らないようにすることを目指したものである。関心を示さない重大な原因は、たぶん、委員会の人選や、多くの委員会活動に見られるような、幾らかとりとめがなくて、おざなりな性格にあるのかも知れない。

これらの問題を解決しようとして行われた様々な努力は、まったく成功しなかった。できるだけ多くの会員を委員会活動に参加させる目的で、委員会は、もし会員たちが厄介であることを指摘すれば、少なくとも厄介になってきた幾つかの問題点について詳しく説明するに違いない。

細則上、比較的小さな委員会としては、青少年活動9名、職業秩序5名、募金5名、市民11名と定められており、親睦委員会は最低30名と最も大きな委員会である。しかし殆どの場合、そのような活動をするために必要な会員数をもっと増やすために、特別委員会を除いた委員会活動は、

670名中僅か170名しかない最小定員数を、はるかに越えるものであった。

実際問題として、最近の運営における委員会の定員は、この制限を越えて拡大解釈をされており、青少年活動委員会40名、職業秩序37名、基金12名、市民36名で構成されている。この方針は、会合のたびごとに、それぞれの委員会の人数が変わるといふ、怠慢と混乱に対処するという立派な目的のためであった。もし25名の委員会で、ある委員会会合には10名の委員が出席し、次の会合には10名が出席するようでは、委員会が効果的な機能を果たさないことは確かである。クラブは、人数の多い委員会には、主要委員会と小委員会の双方を委員会内に作って、構造上でも活動をしていく上でも満足のゆくように、大きい委員会と小さい委員会を妥協させることによって、その大きさを調整してきた。

この措置は、小人数の委員会制度に戻ってこの難題に対処すべきだといふ、調査委員会の要望に沿うものではないが、その対策はむしろ、もっと慎重に委員を選ぶと共に、最大の配慮を払って委員長を選ぶことによつて、

重要な委員会活動を頻繁に開催するように仕向けることであろう。委員の割り当てに際して、会員の好みを確かめるために、白紙のアンケートを配ることを実行するのも、よいことであるが、そのやり方には、しばしば会員の半分以上が、その返事を出さないという事実によって、失敗に帰するという限界がある。割り当てをすることは、様々なもつともらしい理由によって好き嫌いが述べられたり、断られることもしばしば起こる。会員の個人的な好みによる配分と、クラブのニーズが一致するという保証はまったくないので、すべてのケースについて、そのような好みを優先することは、明らかに不可能なことである。しかしそのような状況は、個々の会員に、所属したい委員会の数を重複して指定させ、1番目、2番目、3番目と選ぶ順序を指定するようにして依頼することで、簡単に解決できる問題である。

現在のRIの会長である、1933—34年度理事ジョージ・ハーガー George CHager は、1932年の初夏に、アンケートの回答を慎重に調査した結果、委員会の割り当てに際しては、重複を避けるべきであるとい

う結論に達した。多くの場合は、一人の会員を一つ以上の委員会に所属することを許したり頼んだりすべきではないが、逆に、ボランティア活動の代わりに、委員会で奉仕をするという意味から、各々の会員は少なくとも一つの委員会に所属することを、はつきり要請すべきであるということである。

また、ハーガー会長は、同じ会員が同じ委員会に、毎年のように所属する実態に終わりを告げさせるべきであると考えた。この特権を否定しなければならぬ理由を説明することは容易い。委員会活動を交代することは望ましいことであって、会員の特権に対する適切な回数について、もっと関心が払われなければならない。25名の委員長による25の委員会それぞれが、すべてのクラブ会員が委員会で奉仕をするための機会をもたらしてくれるのである。

以下の具体的な提案は、これらの問題の幾つかに適用できる解決策として示したものである。

1. 毎年少なくとも一つの委員会で奉仕することを個々のクラブ会員に要請すること。
2. 理事会の特別な配慮または細則の取り決めによって、いかなる会員も、二つ以上の委員会に同時に所属することを禁ずること。
3. 個々の会員が、すでにどんな委員会で奉仕したかを示すと共に、来るべき年度の委員会割り当てに際して希望する順序を少なくとも五つ選択できるように、年間の委員会アンケートを修正すること。
4. 委員会の委員の交代に関する指名を、会長に一任すること。連続性を壊すので、完全な交代はないはずであり、毎年それぞれの委員会の委員の半分を変えることが必要である。クラブ幹事や委員会の委員長や幹事と相談しながら、どのように変えたら良いかという決定を、会長に一任すべきである。

分析の最後に当たって、委員会活動の成功は、会員の関心を喚起させる

か否かにかかっていることを述べておきたい。これは、重要で具体的な仕事を成し遂げる可能性が、委員会に与えられているかどうかにかかっているということである。この責任は、将に、会長、4名の副会長、4名の長老会員、幹事、委員長を含んだ目標設定委員会次第である。委員長の選任に大きな配慮が払われれば、各々の委員が効果的に役目を果たすことは間違いない。一般的な提案は別にして、たった一つの具体的提案をすることが、いかに大切かということである。活動に捧げる時間も、興味もないような名前だけ売れているような人を指名することを止めて、できるだけ誠実に活動し、関心を抱いている指導者を委員長に任命すべきである。

第7章 クラブ奉仕

1. 役員選挙

この章においては、クラブの内部の運営に関連する多くの他の問題について考えてみたい。留意すべき点として、クラブ役員や職員に関する役員選挙の手續、財政に関する一般的な問題点、クラブの出版物および広報に関して特に明確にしておきたい。これらの問題点が、「クラブ奉仕」の分野をすべて包括しているとは言えないにしろ、調査委員会としては、この報告書において議論を喚起すべきだと感じたこの分野における唯一の問題点だと思ふからである。運営上の細かい点はクラブの執行部に任せべきであり、ここで述べた問題点は、規定を厳格に適用するというよりも、一般的な原則や方針として考慮すべきことである。

クラブの役員を選挙する従来の方法は、細則に記載されていることもあって、いまさらここに述べる必要もないほど、すべての会員が充分熟知し

ている。全体としてこの方法は、役員能力を評価すべきとか、手続に対する会員の反応がどうかは別にして、まったく申し分のないものである。この件に関する強い不満は、誰からも出てこなかったし、例えそのような不満と批評があつたとしても、それは極めて少数の考え方を示すものにか過ぎない。

アンケートの回答として送られてきた役員選挙の今までの方法に関する非難は、手続上の性格が非民主的であるということである。確かに、組織の形は、活発な意見を述べる十分な機会が提供されているし、その意見を聞くために作られた少人数のグループが決定するようになってきている。実際の運用に当たって、指名委員会は、前年度の理事から構成されているグループや、その他の元役員や、他の年度の信頼の厚い会員が毎年指名される。指名委員会の選挙と引き続いて行われる候補者の選挙は、普通は、長老会員によつて了承された結果と、委員会の決定によつて指名委員会が指名する。1924年以来、選挙に対する大きな反対はまったくなかった。細則には、指名に挑戦したり、一般会員が直接に指名する機会が、充分に用意

されている。理事会や役員が会員に対して効果的に役割を遂行する限り、これに反対する人は、最小限に留まるようになっているのである。

従つて、調査委員会としては、役員能力によつて選ぶべきとか、自薦や選挙運動によつて機会を広げるべきだというような判断は、選挙の仕組みを批評する上での些細な理由に過ぎないものだと考えている。選挙の仕組みが非民主的であるとか、小集団によつて支配されているとか会員が指摘するのは、どんな大きな組織でも同じように言えることである。他の組織における実態や、シカゴ・ロータリークラブの歴史を詳しく検証すると、これが間違いでないことは疑いないと同時に、しばしば支配しようと企んでいると非難を受ける人ほど、クラブの仕事に快く時間とエネルギーを提供する人だという事実も明らかである。もし役員に就任する機会を与えられたとしても、抗議をする会員の大半は、他の仕事に忙しいことを理由にして断るに違いない。クラブ定款に従つて、自分たちが自由に選択できるとすべての会員が感じるように意図された方針であり、調査委員会としては、現実にとどのような形であるにせよ、民主的でない方法によつてシカゴ・

ロータリークラブの理事と役員選挙の手續を改正することは、明らかに不適當であると考えている。この観点から、指名委員を選んで、指名委員会が候補者を指名するという正式手續は廃止すべきであることを強調しておきたい。

しかし、シカゴ・ロータリークラブのような組織では、創立間もない頃にやったように、二人の候補者を立てて選挙に対する一般の興味をかきたてるようなやり方は、民主主義の間違った表現方法だと言えよう。このように、どうすれば役に立つのかという有益な目標を見つけることは難しいが、会員の活力は、クラブ内の選挙戦に向けるのではなく、ロータリーの目的を達成する方向に向けられるべきである。現在の方法は、会員がそのやり方を支持して、黙ってそれに従うことを意味しているので、もしも、正当な理由による反対があるのなら、指名委員会に対して、それに反対する効果的な機会をもうけるべきであろう。それは、有能で公共心溢れた、効率的な役員を選択することにつながり、どのような選挙制度を要求したとしても、理に叶ったことである。

2. クラブ事務局と職員

クラブ事務局に関するアンケートの回答は、若干の会員から反対の意見があったものの、現在の事務局の場所とサービスの提供状況については、一般的に満足しているように思われた。ホテルの昼食例会に関して、ある会員が、我々ほとんど全員が感じている意見を述べた。「あまり、過剰なサービスをするのは止めてもらいたい。」

シヤーマン・ホテルの一般的な対応は、クラブを喜ばし、会員や事務局の職員に快適さを味あわせるように、常に全力を傾注していると思われる。クラブ事務局職員の勤務ぶりは、すべての会員が効率的であると感ずっており、この点について93.33パーセントが満足し、不満は僅か2.22パーセント、回答なし4.44パーセントである(Q54)。どのようになれば、職員がその役割の価値を高められるかについての会員からの具体的な提案は、非常に少なかったが、ある会員は、なぜこのように大勢の職員が必要なのかと、いつも不思議に感じていると述べている。別の会員は、もっと

多くの印刷物が事務局から配られるべきだと述べ、またある会員は、事務局の部屋が会員間の事業上の付き合いを深める上で役立っていることを指摘している。これらの僅かな意見以外には、この件に関しては反対の非難も建設的な提案も共になかった。この状況から出てきた唯一の結論は、現実に幹事の効率的な支配下で管理されているので、会員はクラブ事務局に満足していると同時に無関心であるということである。

しかし、あくまで仮定の話として、現在の財政状態の下で、たぶん今は問題ないとしても、困難な問題を抱える可能性がないわけではない。一つは、職員や理事会や時折の委員会だけでなく、会員にも対応できるように計画されたクラブの部屋でなければならないという問題である。もしも、シカゴ・ロータリークラブが、ゆったりして本を読んだり、くつろいだり、おしゃべりしたり、社交的な付き合いをしたり、大がかりな正式プログラムが出きるような大きな部屋を持つていれば、より深い親睦が進み、会員にとってすべての点で大きく役立つことは疑う余地はない。

しかしながら、このやり方には二つの問題点がある。最初の問題は、こ

の大掛かりな部屋は、多くの場合、ロータリー以外の社交クラブや友愛組織がすでに考えて、作っているということである。もう一つの問題は、これを維持運営するためには、年間35,000ドルもの予算が必要だということであり、双方の問題点は相互に関係づけられるものである。会員の多くは、すでに、シティー・クラブやユニオンリーグ・クラブや大学のクラブのようなループ地区や、郊外のクラブ・ハウスを持った他のいろいろなクラブに入っている。彼らは、たぶん、ロータリーのクラブ・ハウスを建設するために、余分の金銭的寄付を行うつもりはないだろうし、その必要があれば他の方法で処理して、社交的な目的のために現在の事務所を拡げるつもりはないと思う。これらの問題点を最後に述べて、調査委員会の問題提起を終えたいが、この問題は再三議論されてきたものの、今まで如何なる措置もとられたことがなかった。何らかの措置を講じる必要があると思えば、疑いなく最善を尽くす方が賢明であろう。しかし、1934年はその行動を起こす時期ではない。

しかし、これに関連するもう一つの可能性は、もっと実用的で貴重な考

え方である。それは小さいクラブ図書館としての可能性である。ロータリーは本質的に教育機関であり、その目的は、指導力を通じて奉仕することを会員に教育することである。指導力を備えるためには、情報が必要である。平均的なシカゴ・ロータリークラブの会員は、ロータリーの文献を手に入れる場所を持っていない。事務局には、ジレンターやロータリアン誌のファイルや各種の委員会の議事録や報告書や、国際ロータリーから出版された新しい文献が完全にそろっている。さらに、イギリスのロンドンのロータリアン、ビビアン・カーターの *The meaning of Rotary* や、1927年にワシントン州ホーキアムのフランク・ラムが書いた *Rotary-a business man, s interpretation* というロータリー活動を書き綴った、燦然と輝く2冊の本のコピーも揃っている。しかし、そのような利用可能な物があるにもかかわらず、会員は気軽に利用しようとはせず、本当のところその需要はまったくないようにさえ思われる。しかし、ロータリーの理念に精通するような充分の機会が与えられていないと主張するロータリアンの意見（別章より引用）と、この状況との関連については、考えさせら

れる処の多い問題である。

ロータリーの公式な文献は、かなり沢山揃っていて大したものである。何らか方法を講じて、それを熟読したいと思っているロータリアンに、魅力的なやり方で、利用できるようにすべきである。たとえば、そのような文献を熟読することが、気まぐれとか頻度の少ないものであったとしても、会員とその活動にとって有益なものとなるに違い。ロータリーの文献よりも、もっと重要なものがあるとするれば、もし奉仕理念が、事業上の問題と経済体制、政府の問題と政治体制、福祉や慈善や災害援助と社会体制、世界地域社会と国際体制などを意味するのならば、ロータリーが明らかにそれを解決するために貢献しながら、一日中働いている日常生活の中で出てくる具体的な問題に大きな影響を与える文献でなければならぬ。

たとえ公立図書館が本を買い続けられなくなったとしても、ロータリーが図書館事業に参入しないことだけは確かである。しかし、内容を識別して選択することは、専門的な助言者が図書館員を訓練することによって、いとも簡単にできることである。この問題を解説した6冊の定期刊行物を

読むか、この問題について毎年出版されている12冊のいい本を読むだけで、会員たちは、奉仕理念がもたらす不思議な活動の情報源として、大いに活用することができるのである。現在の理事会の部屋よりも小さい部屋が一つと、一人の図書館員がいるだけでその目的は充分達成できる。もし、会員の中にいる教師や牧師や社会科学者などから、ボランティアとしての充分なアドバイスと援助があり、物質的な設備が提供されれば、現在の事務局職員がその役割を果たすことができるに違いない。いずれにせよ、ここには会員に対して、最も実りの多いサービスを提供する豊かな機会がある。調査委員会は、真剣に検討することなしに、この可能性を簡単に退けるべきではないと考えている。

我々は、すでに、常日頃から何故このように大勢の事務職員が必要なのか不思議に思っているという、ある会員のアンケートに対する回答を紹介した。これはたぶん、節約する方向に向かうべきであるという一般的な傾向を受けて、会費を下げるべきであると感じているごく僅かな人たちの意思を、この不思議だという言葉で表した少数意見であろう。調査委員会は、

クラブ職員が真心のこもった運営を遂行していることを確認しているし、このような考え方が会員間に広くあるわけではないと考えている。クラブ職員によって、さらに素晴らしいプログラムの提供を受けたり、彼らにかかる経費に勝るとも劣らないサービスを受けている点を考えれば、会費が高いとか、費用がかかりすぎるということを、実際に多くの会員が感じていることを示す証拠は、どこにもない。

1920年には、クラブは325名の会員に対して、2名の有給職員を置いていたが、1933年には、647名の会員に対して男性2名、女性3名、合計5名の職員を置いている。会員と有給職員の増加と共に、会員の能力やクラブの名声や影響力は、明らかに増している。他の組織と比べても、会員に対する職員の比率は過度ではなく、他の同じような組織の予算でも、総予算の1/3から1/2を人件費に当てているケースが多い。

高価な経費

行政の分野かボランティア組織の分野かにかかわらず、組織的な問題を研究する場合には、ほとんどの金はその目的を達成するために直接使われて、管理に当てる金はほんの僅かしかないことに、しばしば音を上げたくなるものである。広い範囲にわたって活動しなければならぬ組織の経験から、この種の活動が経済的に極めて高くつくことは明らかである。ボランティア組織においては、まさにそれが当てはまり、うまく組織された執行部が効率的な機能を發揮することが、その団体を存続させる必須条件でもある。そのような組織の委員会が、方針やプログラムを決定するために会合を開催しようと思つても、その方針を伝える時間的余裕がない。委員長が会合を召集しようと思つても、適切な通知を出したり、会合に必要な準備をする時間も設備もないのでどうしようもない。組織の活動を活性化するために、いろいろな方法を駆使しなければならなかつた会員の時間と活力が、事務局員の存在によって開放され、すべてのことは円滑に機能するのである。

その上さらに、組織の事務的な仕事は、その職務に値する報酬以上のも

のであり、クラブ会員の職業分類にも匹敵するほどのその他諸々の仕事を達成するという結果につながっているのである。調査委員会は職員の給料を減らすという目先の緊縮策を提案するつもりはない。会員の負担を減らすような、資金に関する他のよい方法が見つかるまでは、さし当たってクラブがしなければならぬことは、委員が進んで時間を提供したり、仕事を引き受けるように気をつけることである。

3. 広報および出版物

出版物について適切だと思われることに関して、少しだけ結論を述べておきたい。ロータリーの定期刊行物は、現在および将来にわたって、その量も質も大きくなっていくものであることに、注意を払わなければならない。全体の国際ロータリー活動を伝える偉大なる月刊誌であるロータリアン誌について議論することは、大切なことである。

アンケートのQ59とQ60の2項目は、RIの機関紙に対するシカ

ゴ・ロータリアンの態度をはっきり示すために考えられたものである。僅か11.60パーセントの会員が、それをまったく読まないと述べ、約半数の会員(44.94パーセント)は、毎号一つか二つの記事を読んでいる。約1/3(29.63パーセント)は、毎号半分くらい読み、7.41パーセントは毎号すみからすみまで読み、6.42パーセントは回答がなかった。これは穏やかな表現ながら、失望感を示したものとみなすことができる。調査委員会はロータリアン誌よりも、ロータリアンの方に非難の対象を置きたい。この雑誌は魅力的で、読みやすく、面白く、かつ上手に編集されている。もしも、送られる側が、無関心にそれを受け取っているのならば、理由はその雑誌の欠陥によるものではなく、ある一部の会員のロータリー活動に対する興味の欠如にある。

質問に回答を寄せた特別な提案は、次の通りである。「ロータリアン誌をよりよいものにするためには、どんな方法があるか」は、すべての読者を完全に喜ばすことは、どのような雑誌の編集者でも不可能であることと、完全に矛盾するものである。ある会員が、クラブ・ニュースや報告書や個

人的に関心のあることを望めば、べつの会員は、ロータリーの特別な記事や、一般的な経済や政治の記事を望むであろう。国際ロータリーは今回の調査の範囲には直接入っていないので、その前提に従って、これ以上ロータリアン誌を深追いすることは避けたい。もし、今回の報告書において採用された分析の一般の方針に従って、もっと詳しく調査すれば、ロータリアン誌の編集者が一考する価値があるような、新しい強調事項や新しい価値や目的を証明できただけではなく、努力を必要とする新しい方向付けさえも提案できたかもしれないことを、付け加えておきたい。

シカゴ・ロータリークラブの出版物であるジレーターについて述べれば、ジレーター宣伝委員会の活動のおかげで、会員からの広告収益によって一本立ちした、優れた機関紙である。調査委員会の性格という立場から、会員がそれを必ず読んでいるかどうかを訊ねることは、あまり意味のあることとは考えていない。次の週のプログラムを見つけ出し、前週のプログラムの要約を知る程度くらいには、読まれていると推定されるからである。事業家は、商売や一般の雑誌、機関紙や新聞などの、関心を得るために競

って出される出版物によって溺れかけている。たぶん、すでに存在するロータリーアン誌と同じ分野に属する、優れたクラブの機関紙として、経済の考え方や指導力の記事で埋め尽くして、ジレーターを作り上げていこうと、どんな試みをしても無駄なことであり、ロータリーアン誌に向けられていた関心を転換させる程度の効果しか発揮できないであろう。

一般的な外部広報に関しては、シカゴのロータリーのものは、キワニスやライオンズのものほど興味深い記事が出ないと、しばしば指摘されている。これは、ロータリーの活動が他の奉仕クラブの活動ほど、一般大衆にとって重要ではないとか、興味深いものではないといった事実に起因するものではない。たぶんそれは、すべてのシカゴの新聞の発行者が、シカゴ・ロータリークラブに代表者を出し、かつ広報委員として活躍しているにもかかわらず、よく計画された広報活動のやり方を、首尾一貫して続けることに失敗したためであろう。委員会は常にシカゴの新聞社と接触する方法を模索しているが、いつも成功するとは限らなかった。1927年10月4日に委員会は、新聞社に、毎月、卓話者の情報を提供するために、

何人かの会員を交代でその任に当たらせるといふ計画を採用した。1930年1月14日、委員会はシカゴの新聞社と連絡をとって、

一般的な活動や興味ある人物や、毎週のプログラムの出来事などの記事を掲載した定期的な文書を、規則的に送ることを提案した。委員会は、クラブ幹事の判断の下で、「ジレーターとクラブ広報の編集者は、職業的な新聞や広報の専門家を当てる」ことを勧告した。この提案は委員会との摩擦を引き起こし、広報委員会の機能はジレーターとはまったく関係を持たないものであり、自分のクラブ内の活動に専念すべきであるという動議が、1930年1月28日に提出される結果となった。この委員会の委員に、細則第8条第17節を適用することによって、従来はつきりしていなかった広報委員会（1932年に、公共情報委員会 **Public information Committee** に変更された）の厳密な役割が、はつきり示された。

クラブ活動に関する適正な広報は、ロータリークラブによる市民活動を効果的に行うための必要条件であることは明らかである。それは、公衆の面前にロータリーの名前を出すことや、ブラスター組織を吹聴することに

本来の価値があるのではなく、市民生活の改善に貢献しようとする如何なる団体でも、一般大衆の姿勢に影響を与えるために努力する必要があるからである。ロータリーは宣伝団体ではなく、政治団体でも、徒党を組む団体でも、宗教団体でもない。しかし、もしも地域社会の指導力を増すための、効果的な機関になろうとするならば、公共の問題、特に市民問題について、会員自らを教育する必要がある。その名前がよく知られているからというだけではなく、知恵をしばって処理しない限り、それを実行することはできない。公共情報委員会が知恵をしばって努力しなければならぬのは、この理由のためである。さらに、毎日の印刷物による広報が必要かつ望ましい姿であって、他の形の広報は無視すべきであることを、心に留めてもらいたい。

最後に見通しを述べておきたい。ロータリーは、ニュース・バリューのある事柄があった時には、よい新聞社を見つけるべきである。そのようなニュース・バリューは、広報の特だねや、一般に関心のある問題に対する建設的な考え方や行動によって達成することが可能となる。シカゴ・ロー

タリークラブはそのテーマとして、前者ではなく、後者の道を選ぶほうが賢明である。

第8章 親睦奉仕

ロータリーの原動力である親睦こそ、この組織の必要条件ともいえる大原則である。会員間の心のこもった人間関係の促進は、この活動の偉大な源ともなったきつかけの一つであり、それ以降ずっと、シカゴ・ロータリークラブはもちろんのこと、すべてのロータリーの活動の根幹となってきた。圧倒的大多数の会員は、親睦の価値こそ、組織における他のなものにも変えがたい大切なものであると考えている。事実、アンケートの返答で会員の何人かは、自分たちの間で親睦を図ることがロータリーの主な目的なので、クラブが外部に対して行う活動の幾つかを中止すべきであると述べている。

会員間の親睦が最も重要だということは、アンケートにおいて、この親睦という特別な事柄に対する意見や提案が、他のすべての事柄やこれに関連する事柄よりも多く寄せられたという事実がこれを証明している。これ

らの意見はあまりにも広範にわたり、変化に富んだ内容なので、この章においてはその中のごく一部だけを紹介することに留めたい。

すでに第3章において、奉仕の理想に関連した親睦と、クラブ内で進めていく親睦との二つの親睦の考え方があることを議論したことを思い出してもらいたい。お互いに肩を叩き合ったり、単に仲間が集まるような形の自己満足の親睦は、必ずといっていいほど、社会に奉仕するために経験を分かち合ったり、共通な目的を持ちながら協力して活動しようとする努力が成長した形の親睦よりも、奉仕理念を実行に移す際に効果が発揮できないことを、ここで改めて指摘しておきたい。この分析をここで再検討する必要はないが、親睦と親睦活動を評価するための基準を決めておくべきであらう。

ある意味では、親睦だけを分離して議論するのは技法上の問題に過ぎず、親睦とは、すべてのロータリーの機能を浸透させる上で欠かすことのできない真の原動力の原因と結果の双方であって、ここで分類したクラブ奉仕、事業上の指導力、市民に対する指導力、世界市民などというその他のクラ

ブ機能とは、明らかに別の次元のものである。それにもかかわらず、この分野において最初に注目された委員会活動として、またすべての親睦活動の焦点として欠かすことのできない毎週の昼食例会プログラムとして、親睦をより広めより深めるための手段や方法が考えられてきたことは、意義深いことである。

親睦を深めるために、昔考えられた方法のうちの幾つかが、いまだに使われている。成熟した今の時代でも、深い友情や親睦の感情は、無頓着で、幸福で、陽気な友情として光り輝いていた若者や少年時代の行動を採り入れることによって、うまく培われるという仮定に基づいたものである。ロタリーは少年時代の組織を採用し、ファースト・ネームで呼び合う親睦と心温まる友情によって、子供たちが成長していく何万倍にも相当する、若者らしい幸せな健全さを取り戻したのである。

「若者に戻るといふ喜びは、努力してみる価値のあることだ。我々のうちの何人かは少年時代に帰って仕事をする必要があるであり、老人の頑固さが消える前に、その栄光を勝ち取らなければならない。」この考え方の結

果として、ファースト・ネームやとニック・ネームを使う慣習が生まれた。

「すべての活動には、若者たちが帽子を取って、自分たちが愛する大学を賛えて歌うプリンストンとエールの試合に見られるような、勇気と自由奔放さを自らが謳歌する歌が必要である。」背中を叩き合ったり、握手をするという親しみをこめた和やかな雰囲気は日常的なものとなり、ロータリアンは再び少年時代を取り戻した。当時のそのような行動に対して、外部の批評家からはもちろんのこと、ロータリアン自らからも嘲笑を受けることなどまったくなかった。クラブがだんだん古くなるに従って、そのような活動の実態が、大げさに吹聴されるのはどうしようもないことであり、同じような道をたどるのは、決してロータリークラブだけではない。どんな事業家といえども、社交クラブや同業者クラブやカントリークラブや、同窓会では、自分たちの感情をこのような形で表現するのはごく普通のことであって、そのようなやり方が、現代社会の冷たくて非人間的な付き合いの気取ったやり方よりも、自然であり健全な反応であることは、容易に理解できよう。ロータリアン、非ロータリアンにかかわらず、ヨーロッパ

大陸の人たちは、そのことに關して、しばしば驚きを表す。楽しいことこそ文明人の歴史的伝統のかなめとなる部分であり、酒肴によつてもてなしたり心をこめて対応することこそ、人生を波風たてずに乗り切っていくすべての關係を作つていくための習慣であり、そのようにして親睦を深めてきたことは、誰にでも理解できることである。

この種のお祭り騒ぎが、本当の真心を表すものである限り、それに対するどんな批判も、単なる美的な趣味の問題に過ぎないものである。趣味に關しては論争しないことは、ローマ時代から言われてきたことであり、現在でもニーチェは、すべての人生は趣味と趣向を巡る闘争であると語っている。調査委員会がこれに關連して述べておきたい唯一の提案は、ロータリークラブでは当たり前になつてゐる、型にはまつたお祭り騒ぎが、その一方で、これ見よがしな方法を取ることなく、深くて素晴らしい親睦を進めていく上でじゃまになる可能性がありはしないかと言う事である。會員が、友情厚い雰圍氣の中で、お互いに元氣付け合おうとする力は、結果として素晴らしい親睦の形をクラブにもたらす。年月が経つに従つて、シカ

ゴ・ロータリークラブの中で、子供じみた悪戯や現実的な冗談が次第に弱まり、クラブに真の親睦が育まれていったという、この一連の流れに注目することは興味深いことである。もし第3章で提案した分析が当を得ているとすれば、ロータリーの会員たちが真の暖かさや深い友情の相乗作用で満足を感じていることを外部の人に表現しようとして、わざとらしいそぶりを見せる必要はまったくないと思う。

そこで、注意を要する特別な問題を挙げておきたい。647名もの会員を擁するクラブにおいて個人的な付き合いを深めることは、それを樹立することも維持することも難しいことである。特に新しい会員は、もし自分や推薦者が知り合いを得るといふ責任を達成できなかつた場合は、途方にくれた感じになるものであり、多くのシカゴのロータリアンは、もっと親密な知人を得たいという必要性を強く感じている。この点について、幾つかの典型的な意見は次のようなものである。

新しい会員が、大勢の会員の中から友人を得るといふ、難しい仕事を現実させなければならぬ。少なくともアット・ホームな感じで古い会員たちと充分知り合いになって、新しい友人だけではなく古い友人たちとも同じように、会ったり議論したりするために例会に参加するのだという、真の喜びを得られるまでの数ヶ月は、新入会員を元氣付けるための、何らかの試みが為されるべきである。入口に立っている接待委員が一生懸命に活躍しているにもかかわらず、彼らが入会してからかなり経っているというのに、友人を得ようとする努力が、ロータリアンによって妨げられているような感じがして、新入会員をアット・ホームな感じにさせるには程遠いというのが私の意見である。これは私の経験を通じた話である。

会員同志の知り合いの幅を増やそうという努力は、例会のプログラムや特別の行事で行うのではなく、委員会はもちろんのこと、それとは関係のないグループの集まりでも、クラブ全体の行事にできる限り多く参加することである。ゴルフやボーリングなどは、現在における最も効果的な知り

合いを作る活動の一つである。

クラブに入会してきたすべての新しい会員のために、会員になって2ヶ月後に、ロータリーで自己紹介をするために、5分間を確保してもらいたい。自分のクラブの中にいる会員の才能を、もっと活用してもらいたい。6週間に1回は外部の卓話者を完全に廃止して、僅かでも会員のための時間を持つべきである。

ある特定のクラブ委員会は、特に親睦を深めるための役割を担っている。親睦委員会は、毎週の昼食例会で知り合いを広げ真心を確実なものにするために努力しているし、ラウンド・テーブル委員会は、やや小規模な昼食グループの世話をしている。記念委員会は誕生日やその他の記念日のお祝いを手伝ったり、葬式や遺族の弔問に出かけている。希望の光委員会は外部に対する慈善活動だけではなく、病気になった会員も訪問している。スポーツ委員会は、ゴルフ、ボウリング、遠足などの世話をし、陸海軍親睦

委員会は、軍隊の退役軍人の間の友情を深めたり、クラブの中における軍隊の式典の準備をしている。グリークラブは音楽的関心によつて会員に訴えかけている。これらのグループの活動と協力にもかかわらず、親睦の問題は、シカゴ・ロータリーのクラブの規模の大きさ、急速な成長、大幅な会員の入退会のために、まったく気の休まる暇はなかった。

根本的な難しさは、明らかに火曜日の昼食例会が、会員が大きな集団として共に集う唯一の機会であるという事実にある。例えこれらの例会が親睦だけのために開かれたとしても、647名の会員のそれぞれが、個人的に親しくなることは当然のことながら無理な相談であり、他の646名の会員が、ほかの目的で毎週1回会わないことはないとしても、問題の深刻さがそんなに軽くなるわけではなかった。しかしながら現実には、毎週の例会はクラブ全体のかなめとなるものであり、さらにここでは、1時間半にわたる、リクリエーションや、ためになることや、娯楽や、ロータリーや一般的な教育や職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕に関する各種のプログラムを準備しなければならないのである。集団的な親睦という大掛かりな話し

合いの場であるにもかかわらず、個人対個人の親しい関係や静かな会話を進めるように配慮しなければならないのである。プログラム委員会は、催し物や娯楽や比べようもないほど素晴らしい教育的なプログラムを提供するために、その計画が続けられる限り、力いっぱい、最善の努力しなければならぬ。

この点に関する幾つかの提案を次に示してみたい。これは、全体のプログラムの問題と、提供されたプログラムに対する会員の反応とを幅広く考える上で、大切なことである。毎週のプログラムは、明らかに親睦だけではなく、奉仕と指導力の心を会員に教育するという総合的な効果で判断されなければならない。プログラム委員会は、シカゴ・クラブのプログラムが、シカゴ地域のモデルとなるものであり、すべてのロータリークラブの前例となるに違いないという正しい判断のもとで、すべての会員に訴えかけ、円満で常識的な知性と審美的な内容を持ったプログラムを提供してきた。シャーマン・ホテルにおける火曜日の昼の活動を通じて、この一般的な目標が達成されていることは、誰の眼にも明らかである。1933年の

1月の終りから3月の終りの間に、シカゴ・ロータリークラブの会員たちの前で繰り広げられた一連のプログラムは、たぶん、他のロータリークラブや、比較することができ全国の他の組織のものと比べて、それほど遜色のないものであろう。全国的にも国際的にも権威者として著名なチャールズ・メリアン教授、ブランソン・デ・コー教授、ウイリアム・ビーブ教授、アムハースト大学のスタンレー・キング学長、オーギュスト・ピカール教授、コロンビア大学のフレデリック・ウッドブリッジ理事長、フレデリック・ストック、バートン・ホルムスの諸氏による、8回にわたる一連の講義が行われた。婦人の日の一例では、クラブの88周年のためのプログラムが、古い会員たちによって提供された。

さてそこで、彼らに提供されたプログラムに対して、会員はどんな反応を示したかということになる。アンケートのQ14の「あなたにとって、昼食プログラムで一番価値があると思うものは何か？」はこれに呼応したものである。会員からの回答を見ると、プログラムの主な役割は、教育的な情報233名、親睦201名、娯楽65名、出席クレジットを得るため

21名であり、1/3の会員(34.07パーセント)はロータリーの目的と理念に貢献するプログラムに対して好意的な反応を示している(Q15)。会員の大部分はプログラムに満足しているものの、数々の批判や提案すべき意見を持つている会員も沢山いるので、これらの意見を簡単に再検討してみたい。以下に示したものは、プログラムにはほぼ満足していると思われる意見を代表する、典型的な意見である。

シカゴ・クラブのプログラムのレベルは、非常に高いと思う。個人的には、馬鹿騒ぎをするのは好きではないし、しようとも思わない。純粹に親睦を深めるための時間をもっと欲しいし、それは卓話によってもたらされるものではない。

現在のプログラムはよい。たぶん、すべての人たちがそう考えていると思うが、ロータリー理念上6番目の綱領として定められている国際的なこととがらにもう少し熱を入れるべきである。そのような問題の担い手である

ことを記念する意味から、その日の重要な出来事の代りに、分間づつでも、それに関する話をしたほうが良い。

ロータリーの話は退屈極まりない。シカゴ・クラブの例会で満足したり、興味を持ってもらおうと思えば、もつと、いろいろなプログラムを混ぜななくてはならないと思う。

私の意見は、このようなクラブにおいてみんなの興味を惹くためには、いろいろなタイプのプログラムを組み合わせたことが必要だと思う。現在のプログラムは素晴らしいので、急激な変化をきたすような試みをするとは、間違いだと思う。

ロータリー理念に関するプログラムに賛成している人々からの意見は、次の通りである。

プログラムの度ごとに、僅かづつではあるが繰り返してロータリーの目

的や理念が提供されている様子が眼に浮かんでくる。すべての例会で、そのような目的を貫いてきたため、会員たちがあきあきしてきたことが、その目的に失敗する結果につながったのではないだろうか。

ロータリー理念に関するプログラムを、もっと増やしてもらいたい。軽い気分のプログラムも悪くはないが、時には重要な問題や時流に合ったプログラムが必要である。

優れた管理運営をするために、個人個人の責任に関するプログラムを、もっと多くする方が良いと思う。より実用的な教育的プログラムはロータリーの目的外であり、教育という目的はある程度覆い隠す必要があると思うが、あえて教育について触れておきたい。

軽い教育的なプログラムを、ロータリーが作るように提案したい。その目的はロータリアンを対象としたプログラムである。これは充分やらなくてはならないことであり、事務的に取り扱う必要があるだろう。クラブの中に、ロータリーがどんなものであるかをまったく知らず、それを学ぶ前

に辞めていく人がいるのは確かである。私は、道德観を以って、ロータリーの基本や目標を慎重に教えることによつて、退会者が実質的に減ることを確信している。そのためのプログラムは、彼らが無味乾燥なものだと感じないように、また説教しているとか、教え込まれているとは感じないように、疑いなく、よくバランスの取れたものでなければならぬ。時に応じて例え数分間でもいいし、また全体のプログラムを、この問題に提供できれば、更に一歩前進したものと思う。このことは、新入会員やある程度無関心な会員全部にとつて、特に関心のあることだと思われる。委員会活動で一生懸命活動することによつて、初めて、ロータリーの精神を吹き込まれるものである。しかし、現在ある数多くの委員会の中では、特に重要な委員会の大部分では、一人の人が何年間もその任に就いている。一つか二つの委員会に関心を持っていて、毎年のように頼まれたとすれば、彼は決して、他の委員会の活動に関して学んだり、ロータリーに関して学ぶ機会を持つことはないに違いない。

多くの会員は、もっと多くのプログラムが、クラブ会員による事業上の討論に向けられるべきであると考えている。アンケートにおいて、この件に関して、 Δ 件もの異なった意見が出された。代表的な意見は次の通りである。

会員個人個人が携わっている事業に関するプログラムをもっと多くすべきである。それはたぶん、友人のライフ・ワークや自分の事業に関する直接的な情報と同じくらい、興味と魅力がある情報に違いない。

会員自身によるプログラムをもっと多くしてもらいたい。会員自身が携わっている事業や専門職種に関連するプログラムを、8週間ごとに実施すべきである。

我々が聞かなくてはならない崇高な理論の代わりに、30分でもいいから実用的な事柄について話をしてもらいたい。

大学の講義ではなく、事業や実務的なことを話すべきである。

卓話のほとんどは大学教授と平和主義者の話ばかりなので、我々が現在求めて、わが国の現状を熟知している成功した実業家からの話をもっと多く聞きたい。

ほとんどが有料の著名な卓話者であり、年がら年中、講演料の支払いに追い回されている。ロータリーの大切な目的、特に綱領の第2項目に関する建設的な話をもっと多くしてもらいたい。話し合いをする機会をもっと増やそうという話し合いが必要である。

卓話に対する毎回の要望は、外部の卓話者やより一般的な教育的のプログラムを望む声は決して少ないものではないという、反対の立場からプログラムを批判する一派が、これに反撃している。

もつと素晴らしい人を呼びたい。ガバナーのホーナー、スブラーグ、サージェント、ダウス、ホーマー・バックレーなどのような人たちからの話

を聞きたい。金融界、経済界、政界における指導力の衰退の中で、僅かに生き残っている我々に希望を与えてくれるようなリーダーを捜してもらいたい。

我々自身が選んだ現代の話題について、5・6分の討論会をたまには開きたいものである。

娯楽や音楽の催しを最低限にカットすべきである。科学や事業や政治の問題などの毎日の重要な話題について、もっと多く扱うようなプログラムに賛成である。

たまには政治的な問題について卓見を持っている卓話者の話を、反対の意見を持っている卓話者と時間を別にして、聞きたい。

娯乐的なものに偏りがちなので、教育的なプログラムにもっと重点をおくべきである。

もっと多くの教育や時事問題や、市民、政治、経済の問題について、真剣かつ大胆に取り組むべきである。未熟な傍観者や、背中を叩き合ったり、不必要な入門書に頼っているのは時間の浪費である。

彼らの考え方を知らるために、もつと多くの外国の卓話者を呼ぶべきである。

教育的なプログラムを減らして、娯乐的なものを多くしてもらいたいと希望する会員はごく少数である。彼らは、昨今の実業家は非常に疲れているので、実務に携わっている憂鬱な時間から転換して、元気づけるために、軽い娯楽が必要であると考えている。しかし、この考え方は比較的少数の意見を代表したものに過ぎない。

大多数の会員は、毎週の昼食例会のプログラムを、息抜きの機会だとはまったく考えておらず、むしろ、その道の権威者から、ロータリーの目的に直接関連した時機を得た問題について聞くことができる絶好の機会だと捉えている。意見の大部分は、この目的の達成を妨げるようなプログラムを排除するか、最小限にするような要望を示したものであつて、多くの会は、突然卓話者の席に座らされたり、過度に紹介を受けるようなことを、たびたび繰り返さないようにすることを提案しているのである。もしもこ

それが、クラブの昼食時間中にピアノを演奏することや、懐かしい歌を歌うことをやめたり、昼食会の親睦を妨げる集中砲火のような他の活動をやめることを意味していたとしても、事実何人かの会員は、その日の急ごしらえの卓話者に時間を割くよりも、臨席の会員同士で親しく話し合いをする方が、よっぽどいいと思っているのである。

プログラムに関するアンケートからも明らかのように、実に幅広い意見や反対の提案まであることは、このような形の調査を実施する上におけるアンケート方式の難しさの一つなので、調査委員会は、この要望に対する技術的な限界を認めてもらうことを深く希望するものである。まず第一に、このような調査をすることに批判的な一部の会員たちの考え方の中には、普段ならば決して問題にしないような、大なり小なりある不満を述べようとする心理的な気分が生まれるものである。これは、いわば、信仰復興論者が、聴衆が犯したわけではない過ちを後悔するように、聴衆に説教するようなものである。

調査委員会は、時折、自分たちの発言に関して個人的な責任をとること

を免れようとする余り、独断的ともいえる考え方や批判を述べる匿名の回答が、会員たちから寄せられていることも、また了承している。大きな活動の中で緊張が高まると、考え方に迷いと不安が増してくることは、経験がこれを物語っている。その一方で、多くの問題点があっても、友人や同僚たちがやっている活動に反対しているという誤解を受けることを恐れて、公開された会合では、不承不承応援しているに過ぎないので、真実だと感じている批判や提案を匿名で行うことは差し支えないと考えることも、当然のことであろうし、親睦が基本であることが強調される雰囲気の中で、一人の反対者が、自らが破壊的な批判者として非難されることをためらうのも、もつともなことである。アンケートの技法上の大きな難題の一つは、一人の会員の意見がどのような価値を持っているのか、表明された二つの考え方をどう評価するのかが、部外者に対して正しく表明されているかどうかである。

この考え方は、今回の調査のいろいろな場合に当てはまるが、すべての提案を対処しようとする時に必ず出会う、新しいプログラムの方針を提案

することがなぜ不可能なのかということをも明快に説明しようとする際に役に立つ。調査委員会は、プログラムは概して優秀であるという意見を持っているが、プログラム委員会が考慮するために、次のような具体的な提案をしてみたい。

1. プログラムは、一つ一つのプログラムだけではなく、クラブ奉仕、親睦、職業上の指導力、市民に対する指導力、世界市民というクラブの五つの大きな関心事と機能に対応した、一連のプログラムとして、バランスを取るべきである。これら五つの平均的なものではなく、これらの総合分野のうちの一つが選ばれるべきである。

2. 個々のプログラムは、血沸き肉踊るようなプログラムを通じて、ロータリーの目的に関連した思考や精神的な内容を持たせるべきである。それ以外のことは考えるべきではなく、クラブは娯楽を職業とする会社が提供するような、純粋な娯楽プログラムを提供する経済的立場にはない。

3. 堅苦しい形式や紹介は最小限に減らすこと。重要なプログラムに関する質問や討論の機会を提供すべきであるが、毎例会にこれを当てることは不可能であろう。

4. クラブ奉仕のプログラムは、時に応じて周年行事の形や、クラブの方針に関する討論会や、具体的な問題についてロータリー理念を実行するための議論という形を取ることができる。

5. 勤務時間内に行われる毎週の昼食時間の中で、数多くある他の競合する行事の中で最も魅力的な行事として、正式のプログラムや正式な卓話以外の昼食会そのものが、親睦という大義名分の下で大勢の会員の出席を促すための十分な魅力を、未来永劫に發揮し続けるかどうかは疑わしい。しかし、少なくとも昼食時間の間くらいは、抑圧や堅苦しさを混乱や組織活動を離れて、他愛のない会話を楽しむ自由があるという、幾ばくかの認識が、何人かの会員によって述べられたことは、至極もつともなことである。

6. 職業上の指導力に関するプログラムは、著名な実業家や金融界経済

界の専門家による、一般的な事業に関連する問題についての講義によって、指導的立場にある会員の事業経験を豊富にすることを基本にすべきである。

7. 市民に対する指導力のプログラムは、公務員、政治学者、社会学者、経済学者などを集めて行われるべきで、時には、少なくとも論争の種になるような問題を双方の立場から討論したり、一般的な討論などを行う機会を作るべきである。

8. 世界市民のプログラムは、宣伝の目的や地域的な視点からではなく、国際関係における政治経済の実態について会員に深い洞察力を与えることを目的として、特色を持った外国人の卓話者や現在の国際問題の専門家を当てるべきである。

9. クラブは、プログラムの中で、もつと頻繁に自分のクラブの会員を活用することを考えるべきである。アンケートの回答では、そのように変えることが会員全体の興味を増すと共に、クラブの経済を潤すことを指摘している。

10・

1932年12月16日の目標設定委員会の議事録に記載されているように、現在の問題について議論するために、出席は自由だが出席補填となるような一連の補助的な昼食会のフォーラムを、火曜日以外の日に開催すべきである。

第9章 事業上の指導力

1. 職業奉仕とは何か

前の2章で論じた問題点は、会員間のクラブ運営とクラブ内の問題に関することを中心にした関係上、外部に対する機能や組織の活動などについて論じることが残されている。これらのことは、他のこと、少なくとも、奉仕理念を真剣に受け止めたり、何とかしてロータリークラブを、昼食を食べながら余興を楽しんだり協力しあう単なる社交団体よりも良いものにしていこうと言うことなどよりも、ずっと重要なことである。第3章において長々と指摘したように、ロータリーの奉仕理念は、当世風にいう指導力、すなわち今日重大な局面を迎えている経済・政治・社会の諸問題を上手に処理していかなければならない事業主や専門職種の人たちの一部に備わっている、行動と考え方の指導力を発揮する、という条件の下だけで、実用的な効果を発揮できるものである。指導力という言葉は、奉仕という

言葉よりも若干内容の乏しい不可解な言葉かも知れない。調査委員会としては、現在使っている奉仕という言葉より、もっと神秘的な意味を持った言葉だと信じているが、あえて、その言葉を使うことを提案しなかった。しかし、奉仕理念が何らかの社会的意義を持っているのならば、指導力を発揮できることは当然のことである。ある会員は、このことを適切に述べている。

ロータリーの精神は、自己犠牲と奉仕の精神である。我々会員の立場は、まさに、ロータリーの置かれてある崇高な立場から、危険な崖つ淵まで降りてくることである。我々の多くは、奉仕することを当然のことだと考えている。指導力は、しばしば人生の現実から逃避する状態に陥る。高い地位に登りつめると、自らをさらに高めることを簡単に忘れるものである。何人かのロータリアンは、それを忘れてしまっている。

我々の組織の本当の原則を守りながら、とるに足らないことかもしれない

いが、少なくともすべての会員の偉大なる潜在能力を認めている、我々の会員の中にいる少数の素晴らしい指導者の例こそ、この種の傾向を打破する一例である。すべての人たちに奉仕する本当のロータリアンの光り輝く例として、そのような人を選び出さない限り、ロータリアンを永続させる道はない。

職業奉仕や事業上の指導力に関する一般的な問題を考える前に、ロータリーの奉仕活動に共通する奉仕や指導力は、ロータリアン個人の問題として考えるべきか、ロータリークラブの全会員による団体活動として考えるべきかという、古い問題点について関心を払わなければならない。ロータリーの目的は、その人の事業または専門職種、同業者組織、教会、社交クラブ、近隣などにおける奉仕を通じて、個人個人を訓練するというロータリーの活動を通じて達成されると一般的に考えられている。この考え方から、団体活動は、奉仕をするために会員個人個人を訓練することに役立つ上で、重要なものであると考えられている。また、緊急事態に際しては効

果を發揮するものであつて、意見の対立を乗り越えて、すべての会員の賛同を得た上でそれに対処すれば、個人が対処するよりもクラブで対処したほうが、効果的に実行できるといふ性格を持つものであることを強調しておきたい。

この立場を、ある程度はつきりと分かり易く、一般の人たちに表明する必要がある。もしも、その目的が、古い考え方による、いわゆる教育やインスピレーションによつて奉仕を学ばせることならば、グループによる親睦や団体活動は、もろもろの社交的な付き合いによつて奉仕したいという願いを、個人個人に浸透させる上で、重要な価値を持つていることが現実に理解できるに違ひない。もしも、その目的が、会員に指導力を学ばせるという意味で使われるならば、状況はたぶん違つたものとなつてくるに違ひない。指導力とは、人生を歩んでいく各々の指導者が、自分の部下や追従者との関係において、独特な個人的な意義を持たなければならぬと、各々が意識することでもある。あらゆる点において現代社会の条件の下では、古い形の利己主義によつて指導力を發揮することは不可能である。要

求されるものは、様々な分野における指導者たちの集団としての考え方と団体活動であり、必要とされるものは、共通の目的のために団結して行動する指導者のグループという意図的な組織なのである。要するに、その目標は、色々な分野で活動している数多くの個人の指導者を増やすだけではなく、共に活動する指導者の組織や団体を増やすことであり、ロータリーはそのようなことを推し進めていく機会を提供する組織なのである。

このような考え方によれば、ロータリーは単に教えたり、思いつかせたりするだけではなく、注目に値する問題について、会員たちが考えたり行動することを学ばせる組織でもある。もし、その目的が、発想の交換をしたり、情報を集めたり、個々の問題に関する意見をはっきりした合意に到達させることであるとすれば、団体的な機能を持つことは、必要欠くべからざることであろう。いったん合意に達すれば、個々の会員たちは、団体としての計画実現を目指して、思い思いの分野で活動することが可能となる。しかし、そのようなプログラムを堅実にやり遂げようとすれば、団体としての考え方や研究や討議だけではなく、一定の団体行動が必要となっ

てくる。強調しておきたいことは、特別な問題は、その内容に大なり小なり問題をかかえていると言うことである。しかし、指導力を訓練していいという考え方は、たぶん、今までのやり方よりも、団体としての手法をより強調せざるを得ないだろう。

ロータリアンは職業上の代表者として選ばれているので、第三者は、職業奉仕がクラブ活動の中で最も重要な分野であることに気付くと共に、職業上の活動を通じて指導力を発揮するために、明確に定義された理念を持ち、クラブが上手に組織されていることに気づくに違いない。実際は、シカゴ・ロータリークラブが関わっている団体的な職業奉仕活動は、四大奉仕の中で最も低い意義しか持っていないし、現実の問題として、国際奉仕もどちらかと言えば同じような状況にある。クラブ奉仕は明らかに適切な具体的な意味を持っているし、社会奉仕活動は多彩で極めて活発である。しかし、職業奉仕は、シカゴのロータリアンの大部分にその明確な意味がまったく伝わっておらず、現実には会員の大部分は、自らの個人的な職業や技術を通じて効果的に奉仕をしているにもかかわらず、この分野に属する

クラブの団体活動はほとんど無いか、あってもめっちゃくちゃな状態である。

この団体奉仕が取るに足らないものであることは、アンケートQ57に対する回答の、会員からのコメントによっても明らかである。「もっと効果的に職業奉仕に貢献するために、クラブはどんな特別な方法を講じたか?」どんな職業奉仕かという意味であるにもかかわらず、その回答は途方もないほど混乱した考え方を示している。ある会員は、青少年のために仕事を見つけることを意味すると考えているし、別の会員は、学生のための大学奨学金を意味すると思っている。ある会員は商業道德だと思っているし、別の会員は、市民権や道徳や親睦について学ぶことだと考えている。会員や委員長と交わした会話の中でも、職業奉仕の意味について、あいまいさを認めざるを得ない印象を受けた。一見ただけで驚かされるようなこの状況は、この報告書の第1章から第3章にかけて長々と書いたように、疑いなく、ロータリーのあまりにも早い進化に伴って、最初の動機が変化したことによるものと説明すべきであろう。目的として述べられているように、利益と奉仕とを置き換えたことによって、今までは単なる職業上の活

動であつたものが、職業奉仕と表現されることは、いかにも不自然なことであつた。この新しい言葉は、未だに明確な意味を持つに至っていないにもかかわらず、それを追求しようとする人はまったく見当たらない。

この混乱にもかかわらず、職業奉仕に、クラブ内で実行しなければならぬ、多少なりともお互いに漠然とした関係を持った、事業上の利益の増進、職業分類の充填、職業道徳、事業や専門職種の業界団体の設立、それぞれの事業や専門職種に貢献する一般的プログラムという、五つのはつきりとした機能を持っている。

表向きは隠されているものの、事業上の利益の増進がこの中の最初の目的であることは、事業を促進することが、ロータリーの特有の使命であることから明らかである。たぶん今でも多数いると思われるが、相互取引を行っている会員は秘密裏に行動し、他のロータリアンが彼らと取り引きする時には、驚ろいたふりをしながら内心喜んでいるに違いない。

未充填職業分類を充填する作業は、産業委員会の職務である。これは、唯一の公式な職業奉仕の役割であるが、理論上この機能は、クラブ奉仕に

属するものである。いずれにせよ、従来から産業委員会の活動は不活発であり、産業委員会が役割分担をすべきだと思われる役割を、未だに入会委員会が果たしているような状況である。最近になって、会員増強をもっと体系的で洗練されたプログラムにするために、職業分類の問題点を調査した調査委員会によって、産業委員会の役割分担を広げるように変更されたにもかかわらず、クラブ会員をクラブを構築していく上の添え物位にしか考えておらず、部分的にしか役立っていない。産業委員会は、職業奉仕と何らかの関係を持った機能を果たすべきだと思うが、今のところ、そのような機能を果たしていない。

職業道徳については、その素晴らしい考え方と、実際の活動を推察する限り、少なくとも、その状況は落胆すべきものではない。奉仕理念が形成されたごく最初の頃から、顧客に満足感を与え、商慣習に高い道徳的基準を適用することが、職業を通じて奉仕をする最も重要な意義であることが当然だとされてきた。ロータリーの重要な目的は、自分の職業を通じて個人個人が切磋琢磨することであって、例えばどんなに深く望まれたとしても、

ロータリークラブによる団体的な活動は二義的なことである。さらに奉仕は、正直で、価値があり、公正でなければならぬだけではなく、価値あるニーズの実現に役立たなければならぬ。世間の不評を買ったり、世に有用でない職業に従事している人は、一度たりともロータリーの代表として選ばれたことはなかった。ロータリー活動の重要な目的の一つは、自らの職業の価値を会員に浸透させると共に、世に有用な職業を通じて価値ある奉仕をすることを教えることである。事業における真の成功とは、真の奉仕によって為し得るものであり、ロータリーは、悪い慣行を改め、善意に満ちた奉仕に転換することを商売人に気づかせるために、その裏づけとなる法律のような力強いものとして、存在しているのである。すべての事柄には、悪い慣行がある反面、それに対抗するよい慣行もあるものであり、道徳的な感覚だけではなく物質的な面でも、よい慣行は、悪い慣行よりもさらに大きな満足感に浸れることは、数々の経験がこれを物語っている。ロータリー職業倫理訓はこの分野における、ロータリーの努力の結晶である。様々な専門職種や事業の同業者団体が道徳律を採用したこともまた、

ロータリーの提唱に大きく刺激された結果である。R I 本部は、ロータリアンが直接的に影響を与えた結果、1922年以降に採用して、正しく実行されている全国の企業の道徳率は、少なくとも145にのぼることを報告している。

シカゴ・ロータリークラブの職業秩序委員会は、職業上の活動に関連した事柄だけではなく、職業道徳の問題にも継続的な関心を払ってきた。事業や専門職種の同業者団体における会員の活動に関連するアンケートと共に送られてきた、1922—23年の委員会活動に関する短い報告書を通じて、そのことを指摘することができる。1923—24年に、ある会員の会社から送られてきた宣伝物に対する苦情を調査した結果、その文書はロータリーを商売に利用しているという過ちを犯していることを見つけ出し、理事会はその善処方を勧告した。同じ年には、雇用者と従業員の関係についてのアンケートを実施している。1924—25年には、専門的な技術の業界におけるロータリアンの影響についての別のアンケートを実施し、結果的に455名の会員中239の会員が回答している。この中で、1

80の業界組織に属する会員の報告書を通じて、110の業界が正しい職業道徳を適用するために、その手段として道徳律を採用していることが報告され、この調査は次の年にも続けられた。1930—31年に委員会は、近隣クラブの例会のために、毎月、職業奉仕グループの会合を開く計画をたてたが、この提案に対する結末がどうなったかについての記録はない。1932—33年の状況を全体的に見ると、再び、業界団体に道徳率を正しく適用することを進めるといふ、同じような問題に取り組んでいる。

現実の問題として、職業道徳の分野が果した業績を、具体的な証拠として強く印象づけることは難しい。確かに、数多くの道徳律が様々な業界や組織に採用されたが、その道徳率によつて実際に商慣習の基準が改善されたかどうかは定かではない。職業秩序委員会は、シカゴのロータリアンの商習慣に対して具体的かつ実用的な考え方を提案して、今まで克服できなかった悪い慣行に立ち向かったのである。これらの悪い慣行は、個人的には非難すべき習慣であると共に、恣意的な目的を持ったやり方であり、会員個人個人にとつても不本意なものであった。このような状況がいつまで

も続く限り、職業秩序委員会は気軽にチャリティーをするように、可能な限り早急に、少しでも具体的に、道徳率の重要性を指摘しなければならぬことは、誰の目にも明らかなことである。

もしロータリアンが、率先して、自らの事業所に道徳率を設定するとう議論をしぶるようなら、他の人々にそれを設定することは望むべくもないことである。

職業秩序委員会は、専門職種団体や同業者団体に所属するロータリアンの立場を強めていくために、これと同じような難しい問題と対峙しなければならなかった。委員会は、1924―25年のアンケートに引き続いて、多少強引とも思われるやりかたで、どうしてもこれに応じなかった40名を除いた、すべての会員を説得した。その結果として、1926年には、67.7パーセントの会員が同業者団体に加入するという反応を示した。何年間かの加入者を一覧表にすると、1905年には会員の83パーセントが同業者団体に加入し、1918年には81パーセント、1926年には73パーセントであったものが、1906、1909、1910、19

14、1917年には僅か50パーセントしか所属していないというデータを示すことができる。しかし、この種の活動に反対する何人かの会員の反応を目のあたりにして、1926年の委員長リチャード・マックルூアは、この活動そのものに対して疑いを抱いた。

この問題に関連する次の考え方について、個人的な責任を感じている。職業秩序プログラムに対して回答しなかった40名ほどの人たちが、むしろ憤りを感じていると思う。その団体の中で、私事のために厚かましく干渉するようなロータリアンの支持を受けている価値のない団体に、強制的に入会させようとすることに対する非難であった。これは非常に重要な問題を提起したものである。業界の団体の会員である者を、ロータリアンの会員として認めることは、ロータリーにとって、正しい方法なのであるか？ 職業秩序委員会は、細則を変更して正しい方法として認めるように提案したのだろうか？ このような活動を職業秩序委員会の当面の事業

として採用したことは、シカゴ・ロータリークラブにとって賢明な措置であったのだろうか？（1925—26年度活動年次報告書10ページ）

そのような問題点が全然表面化しないことが、この種の活動を進めていく上における独特な難しさである。専門職種または業界の団体において、単にロータリアンが会員であるという事実だけでは、例えそれがどのように定義されていたとしても、そのこと自体で、職業奉仕理念が達成されたことを示すものではなく、それを達成するためのほんの第一歩にしか過ぎない。もし、同業者の同僚に対してその団体に加わることを断るならば、そのロータリアンは、自分の職業に関するロータリーの大使として、ふさわしくないばかりでなく、いかなる意味においても、職業の指導者としてふさわしい存在ではない。ロータリーにふさわしい優れた事業主が、そのような団体に属している者の中から見つかるかも知れないし、この種のグループの中から会員を獲得することは、ロータリーにとって不必要である

ことが分かるかもしれない。シカゴのロータリアンの1/3から1/4は、業界団体に未だに入っておらず(Q22)、彼らを加入させようとして説得する職業秩序委員会の努力は、少なくとも、一定の割合のクラブ会員の反発をかうものであった。このような状況の下では、委員会自身が、その活動が意義あることであるかどうかを疑問に思うだけではなく、第三者としても、この考え方が職業奉仕とどのように関係するのか、不思議だと感じるに違いない。

自分たちの職業における職業奉仕と関連した五つの活動について、クラブの会員から話されることは殆どない。少しだけそれに似通ったプログラムが、毎年計画されてはいるものの、その要望に対して与えられる機会は皆無に等しい。小さいクラブでは、プログラムのほとんどはこの種のものであつて当然であろう。シカゴ・クラブのプログラム委員会は、クラブ運営には最高のプログラムが必要であると考えており、殆どの場合には、身近にいる才能を持っている人に頼む代わりに、外部からの卓話者やタレントに頼む傾向が強い。都会の気晴らしとか組織という形を通じて、異業種の

競争相手と共に例会に集う必要性があるというよりも、多分にR Iの伝統的な出席強制のためとも言えよう。1933年3月の出席率は、ビーブ、ピカード、バートン・ホームズ、チック・セールに卓話を依頼したことによって、2月よりも9パーセントもあがった。従って、確かに出席率をあげるという点では、もっと頻繁に彼らを呼ぶほうが、プログラムにより良い結果をもたらすことは間違いないが、彼らが職業奉仕に大きく貢献しているわけではない。

結論として言えることは、シカゴ・ロータリークラブは、職業奉仕が何を意味するのかという明確な考え方を、まったく持っていないということである。これに関して応援するような活動は、内部からの反対を受けて成功せず、目立った成果をあげることではできなかつた。もし職業奉仕の理念が何らかの意義を持っているのなら、可及的速やかにこれを改める行動を引き起こさなければならぬ状況にあることは間違いない。

2. 職業奉仕はいかにあるべきか

この分野において何を為すべきかというすべての提案は、事業上の指導力を高めることは、ロータリー活動の中で最も重要なことであり、職業奉仕活動こそこの目的を達成するための、すべてのクラブ活動の中で最も重要なものであるという、この報告書の前提に基づくことが当然だと思われる。しかし、事業上の指導力という言葉は、職業奉仕と同様に、その言葉自体は空虚な言葉に過ぎないものであり、その言葉の中に込めらるべき内容こそ、その時代に特有な、実業界のニーズを反映するものでなければならぬ。

最初に述べておかなければならないことは、現時点および過去3年の間において実業界が最も必要としていることは、少しでも事業を伸ばさなければならぬということであった。デフレーションや不況の時期には、どのような経営者でも、市場を守ったり、事業の機会を拡大する努力をいささかでもおろそかにすれば、自らや、自分の職業や、いかに有益な奉仕理

念であろうとも、それを正当化することはできない。ロータリークラブは、その組織や構成員のおかげで、広く地域社会を改善すると共に、会員に利益をもたらすために会員間の事業を發展させることに見事に適応した組織である。シカゴ・ロータリークラブや一般的なロータリー活動が、何を意図しているものであるかということを立てし続ける必要がないという理由は、根拠のないものである。ロータリアンの利益追求を禁止することは、ロータリーやロータリアンに対する信用につながるものではない。もし利益を追求することが、利己的なことであり価値のないことならば、利益を追求し確保することによって事業上の利益を作り上げてきた、すべてのアメリカの文明や、西欧社会の社会や経済の制度は、利己的で価値がないことになる。もし事業を通じて利益を追求することが、同僚や地域社会に対して、知的で誠実な奉仕をすることに反するのならば、社会において私有財産の基礎を築くことはできず、利益を蓄積していこうという希望は絶たれるに違いない。もし資本主義の下において発揮すべき効果的な政治的経済的な指導力から、利益の追求を断念することを要求されれば、資本主義

の社会に経済力や政治的な影響を行使するという、真の指導力はまったく発揮できなくなるに違いない。

3. 事業の促進は開かれたものか

ロータリアンが密かに事業の拡大を図るのではなく、堂々と意識的に生
活したり事業に邁進できるような、事業の大切さが認識される画期的な日
が、たぶん来るに違いない。利益と奉仕との調和は、何といつても、ロー
タリーの中心をなす問題であると同時に、考えようによっては、20世紀
の欲望に満ち溢れた社会の中心をなす問題でもある。調和とは、利益は重
要なものではないと装うことによって達成されるものではないし、ロータ
リーもまったくその立場をとっていない。会員間の相互取引がクラブの主
な役割であった、1905—15年頃の考え方に戻ることによって達成さ
れるものでもない。いつまでも非難を受けているそのような相互取引は、
当時としては望ましいことであって、もしそのようにして事業を發展させ

ていった組織の会員たちがいなければ、1934年において、現実の社会奉仕を実行する人たちは現れなかったに違いない。しかし、もし、その与えられた機会や責任に恥じないような行動をしようと思うのなら、ロータリーは、空々しい時代遅れのブースター戦術をとるのではなく、事業上の諸問題を知的で体系的に研究をすることによって、一般的にいう「よりよい事業」を進めることに自らを捧げる必要がある。事業が成り立たなければ、事業上の指導力もまったく必要がなくなる。もしある職業が他の職業によって淘汰されれば、その職業による職業奉仕はできなくなる。これは根本的で基本的なことである。そして、頭脳明晰で見通しが利き、これらの事実の言外の意味に率直に気づくようなロータリアンが、少なくとも何人かはいえることは間違いない。

あるシカゴロータリアンが適切に批評している。

ロータリアンの華奢な足にとって、事業とはあまりにも小さ過ぎて、汚

すぎて、現実的過ぎるものなのだろうか？ 実業家の団体に入っている事業家たちは、なぜ事業をさておいて、青少年活動や刑務所改善の活動に携わるべきだと声を大にしなければならぬのだろうか？ 現代社会における商売や事業は、惨憺たる状態にある。今日の産業界には、声を大にして解決を迫らなければならぬ問題が山積している。私は、これがロータリーが現実には活動し努力しなければならぬ分野であると、固く信じている。

もつと多くの知人とのつながりや友情や親睦を深めていくことに努力しなければならぬ。ロータリーの理念は、充分な取引によつて事業の利益を増やすことによつて、さらに多くのことが成し遂げられるものである。

我々のクラブでこれを改善すれば、会員の間により多くの協力が得られるに違いない。例えば、ロータリアンが、ロータリアンの事業のやり方が役立つことを認識して、その方針に沿ったやり方を公表すれば、みんなを助けることにつながる。特に、サービスや品質については、ロータリアンが公正な取り決めをすれば、それが可能である。これらの取引が開かれたも

のであることは有益なことであり、ロータリアンが他のロータリアンを恨むべきではない。率直さは信用につながり、信用は信頼を意味するからである。

調査委員会は、どのような提案にでも必ず反対があることに充分気づいている。事業を伸ばしていこうという目的を持っている実業家のクラブは、必ず利己的のためだという謗りを受けるものである。ロータリーは長い年月をかけて、利益という動機を捨て去った。会員の大多数は、ロータリーの付き合いは、事業を発展させるために、意識的かつ体系的に使うべきであるという提案に、大きな衝撃を受けた。奉仕抜き利益という考え方は、奉仕プラス利益という考え方に取って代られ、深く心の中に植え付けられていった。惰性の重みや伝統の力や、ロータリアンのすべての抑制された重荷は、どんな素晴らしい事業のプログラムにも付き物である。もしロータリーが自分の事業だけに没頭しているならば、ささやかな親睦や、ひら

めきや、理想や、精神的な資質や、物質的な価値にこだわらない考え方を失ってしまうに違いない。

ロータリーの最大の役割と挑戦

調査委員会の意見としては、「奉仕と利益」や「指導力と収入」は、対称的で相反するいささか不可思議な現象であって、根本的に相容れない間違った考え方であるというこれらの反対は、見当違いなものだと考えている。これらの二つのことがらは調和しなければならぬし、もし調和しなければ、現在の経済体制における西欧文明の未来は存在しないことになる。これを調和させることこそ、ロータリーの最大の役割であると共に、ロータリーの最大の挑戦でもある。ロータリーとロータリアンの関心の上からも、実業と全体の繁栄に対する関心の上からも、真実の奉仕と指導力の上からも、シカゴ・ロータリークラブがこの機会を慎重に生かすことを希望するものである。

社会学者よりも事業の経営者の方が、事業を伸ばしていく最も合法的で効果的な方法を判断できることは、当然のことなので、調査委員会としては、この分野における活動の詳細なプログラムを指摘することは避けたい。今は半ば忘れかけているか、おぼろげにしか憶えていないような、事業を伸ばしていく具体的な方法や手段が繰り返されたことが、初期のクラブの歴史が証明している。1915年と1934年1月に開かれたシカゴ・ロータリーのビジネス・ショーは、単に職業上や個人にとって参考になっただけではなく、それを実際に試してみることによつて、その会社から提供された商品やサービスの質を証明できるものであり、会員に対して、商品を試す利点を学ばせるものでもあった。販売促進に関する体系的な学習が、クラブの活動として実行されたのである。その流れは、会員間の事業上の付き合いを深めるために採用され、高い評価を受けたその事業を進めていくことが、ロータリーの事業としてふさわしいという考え方が、ただちに会員たちの間に広がっていったのである。

みんなに必要な協力体制による利益

狭く閉ざされた考え方を頑なに守っていただけでは、単なる事業の発展は望めたとしても、それによつて事業上の指導力を開発させることにはつながらないことは明らかである。経済問題に関する知的な研究や、その問題を解決する共同の努力や、社会秩序や統合や計画を熟知させる試みなどの広い視野に立つことが早急に要求されている。健全で有益な経済活動を進めていく手順は、この事実に対処できるまでには至っていない。

シカゴのロータリアンは事業上の相互扶助によつて、自らを助けると共に地域社会を助けてきたし、間接的に、国や世界の繁栄が衰退していくのを助けてきたことにもなる。しかし、信用と通貨、貿易と関税、借金と投資、為替管理と出入国などの問題をうまく処理して、国や世界を繁栄させるには、全国的規模の事業家たちの共同の活動なしでは達成されない。

もし、色々な地域に、それぞれ個々に事業を積極的に自ら進んで設立する最大の理由が、個人的な利益を得るためだと言うことが真実ならば、国

内や世界の事業上の問題を解決するために、同じ動機が最大の理由になることもまた真実であるかどうかを、体系的に研究しなければならない。もし、そうだとは言いきれないとするならば、その理由は疑い無く、平均的な実業家は、大なり小なり、自分の事業が伸びた数の不確定要素や、見かけ上の国の内外の経済状態という間接的な要因にさらされているという、複雑に絡み合った相互関係に支配されているために、心ならずも、厳しい状態におかれて自分の事業の諸問題に没頭せざるを得ない環境に置かれているからに過ぎない。会計係の不正とか、広告担当者の無能とか、現場責任者の無力のために事業が傾いた実業家は、その問題の原因をつきとめてそれを改善する行動さえとれば、おそらく物事は解決するに違いない。しかし、ウィーン銀行危機や、バクーにおける石油の過剰生産や、独裁国家としてのヒトラーのナチ党員の熱狂ぶりや、戦時国債の償還に対するアメリカ下院議員の脳味噌の欠陥などの、いわば因果関係という長い鎖の結末として起こった不況に直面している事業の経営者たちは、その難問を正しく診断し、その対策がどこにあるか知ることは、決して容易いこ

とではない。従って、事業の指導力に関する知識をつけるという問題は、世界危機の原因かどうかは定かではないより間接的な社会問題に対して、自らでその裏に潜むものを感じ取れるように、実業家たちを教育しなければならぬという問題に晒されているのである。この考え方に沿って、会員に奉仕のあり方を教育することこそ、ロータリーが成し遂げることのできる、会員と世界に対する偉大なる価値を持った奉仕である。

ロータリーの会員は、世界中で最も素晴らしい精神を秘めているが、多くの他の善良な市民と同じように、ロータリアンは、経済問題の悲惨さに気づいていないというのが現実である。ちょうど今、我々は不況の影響を感じて、その原因と対策について大騒ぎをしている。これをうまく進めていくには、次に述べる二つの考え方が重要である。

先ず第一に現在の不況は、この150年間に起こった最初のものに過ぎないものであって、恐らくこれが最後のものになるであろうという確約は

まったくくないということである。将来起こるこれと同様な、またはより悪い条件を避ける唯一の希望は、将来の経済の混乱の原因を取り除くように、国内と世界の計画を達成しようという目的をもって、経済問題の根本的な研究をしている人々の善意にかかっている。

次に、政治と経済に対して、善良な市民たちの多くが明らかに無関心であることが、世界中の最も深刻な問題のうちの一つである。もし我々の現在の経済体制と政治形態が、今までと同じように生き延びて、平和と繁栄をもたらす可能性を十分に実現しようと思うのなら、高い資質の社会的、精神的な背景を持っている多くの人々が、自分たちの無関心さから脱却するだけではなく、自分たちが満喫している素晴らしい利益は、それを満喫しているこれらの人々の個人的な犠牲によって得られたことに気づかなければならない。

ここにはまた、真の事業上の指導力を強めて、事業に対する教育を行う

方向付けをいかに効果的にするかという可能性について、一部のロータリアンは絶望視しているという、非常に深刻な問題が存在する。これらの問題は職業秩序委員会の議論の中で再三表面化した。すべての論争の争点は、親睦を裂くことに対する恐れと、意見の相違を避けようとするものであるが、早急に解決しなければならぬ問題については、もっと突っ込んだ論争が必要だと思ふ。もしロータリアンが、客観的で公平な心を持って、生命とでも言うべき経済の問題についての考え方の違いを考える意思がないとか、これらの問題には興味がないとか、関税や戦時国債の話よりもゴルフやボーリングの方が好きだとか、偏見に凝り固まっていて、まじめな議論をすることを避けるとすれば、その時は、望ましい方向に向かって共に歩んでいくことは、明らかに不可能であろう。調査委員会は、例えこのような事態が起こったとしても、決して悲観する考えはない。知的な事業上の指導者たちは、それらの問題を改善するための基本となるような物議をかもしだす問題に対して、会員の関心を喚起させるための具体的な課題に対する講義やフォーラムや討論のプログラムを通じたり、事情を熟知した

専門家によってその事実を発表する機会を提供したり、実りが多い発想の交換を通じたりして、意見の合意を取り付けることによって、その機会を与えるはずだと考えているからである。ロータリーが不況を克服しようと思うのならば、この提案をほのめかす以外に方法はない。ここで示したすべての提案は、会員間にこれらの問題に関する指導力と、事業と経済問題の健全な考え方を開発して、ロータリアンを教育するために、ロータリークラブが体系的な方法で利用できるものであると同時に、利用しなければならぬことである。

この分野において、すでに国際ロータリーは多くのことを実行し、会員であるクラブに行動するように勧告していることは注目に値することである。国際ロータリーは、1932年9月に「ロータリークラブの職業奉仕活動の典型的な活動とプログラム」、および1933年1月に、「職業奉仕委員会プログラム指針」によって注目を喚起している。北アメリカ経済諮問委員会(ウォルター・ヘッド委員長)の「計画指針」は、シカゴ・ロータリークラブが実施可能なプログラムを指導する有益な改善策として、非常

に優れた適切な文献だと思われる。

クラブが考慮すべき話題。

1. 生活水準の維持向上。(すべての国に、適切な高い生活水準を設定、維持するための経済勧告の議論)
2. 生産と消費のバランス。(その目的を持つ現在や過去の様々な産業や政府の計画に関する賛否両論の議論を含む)
3. 雇用問題。(老齢年金、失業保険、労働期間、余暇などを適切に定めることによる、労働者を雇用する者としての責任に関する考え方。これらの事柄は、シリーズ化する機会を与えることによって、全体としての価値が高まる)
4. 関税。(債務国と債権国、生産国と消費国などの間で起こる条件の違いや関税の関係を率直に議論をすることによって、公正な国際貿易に対する考え方を考慮する場とする。これらの議論は、ゲリラ的

- な性格ではなく、純粹な経済学としての立場から、常に全世界的な見地に立脚したものである)
5. 分業活動による雇用の創出。
6. 移転によつて修理や改造を促す可能性。
7. 満期を迎えた抵当権を持つ家屋所有者を援助するために幾つかの地区の委員会を組織する。

クラブプログラムのための、その他の提案は次の通りである。

1. 経済問題に関する文献や書籍の再検討。(注:シカゴのクラブ事務局は、興味深く価値のある文献や書籍を提供するという点で、皆の手助けができるかもしれない。関心を示すべき経済問題を取り上げた多くのベスト・セラー本の書評も備えている)
2. ジョン・フリンの著作、「事業における汚職」の再検討。(特に、贈

3. 収賄と裏金の関係について重要）
贈収賄と裏金に関連する州や地方の法律の骨組みともなる部分を、弁護士または制定者によって提出させる。
4. 国際ロータリーによつて出版された経済のパンフレットの再検討。
これらは下記のものがある。贈収賄と裏金（No. 32）、国際経済学（No. 31）、六人のヨーロッパのロータリアンによる経済恐慌に対する考え方、七人の北アメリカのロータリアンによる経済恐慌および後遺症に対する責任。
5. 事務局は、快くクラブに出席して、経済問題について講演する、国内の様々な分野の92名の卓話者のリストを準備している。何人かの人は有料だが、何人かは必要経費だけ、またはまったく報酬を要求せずに快く話をしてくれる。事務局は、様々な分野で利用できる人々のリストを、クラブに供給することができることを喜ぶものである。
6. 全米商工会議所と国際商工会議所の報告書（住所：ワシントンDC、

コネチカット通8番街)

7. 国内および国際未来計画の議論。(パンフレット7—8ページ参照のこと)

8. 失業および失業保険計画の実際的影響に関する議論と提案。

9. 国際連合の経済部門の報告書。この件に関する情報は、国際連合事務局に手紙を書くことによつて確保できる。(カナダ、モントリオール、およびニューヨーク39番街東6番地)

10. 農産物の価格を高値安定させる方法。これを実施することによつて、どのような範囲に、現在の関税に対して有益または有害な影響をおよぼすか?

11. 国際貿易に対して大きな信用と協力をもたらす方法。

12. 特に、過去の戦争と未来の戦争に備えるために支払う大きな経済損失の見地から軍備縮小。

13. 国際的な貿易を盛んにするための国際的な言語の価値。

14. 結果として、最も有利な条件と最も低い価格で製造できる場所で品

物を生産するために、国際貿易制限の廃止。

15. 支払能力に基づいた戦時債権の再調整と保障。(注：一般的に了承されるアメリカ合衆国の立場は、戦時債権はヨーロッパから支払われるべきであるが、これは現物支払いによつてのみ支払われることは明らかである。ヨーロッパの国々は支払能力があるので、品物を生産するだけではなく、それを債権国に輸送できる立場にある) 労働条件と移民に関する国際協定。

17. ソ連との貿易およびロシアと他の国々との将来の対応。

18. 経済の問題を世界の問題として考える必要があるので、一地域の熱望や野望の犠牲になったり、単に国益の昂揚のみを図るべきではないという、国家方針を、すべての国に設定すること。この話題は、すべての他の事柄の基本となるものである。

ロータリーに対する直接的な挑戦

ロータリーの考え方と活動の中に職業奉仕の重要性を正しく取り入れてもらうために、委員会が努力をしてきた指摘を、再確認しなければならぬ。そのような一連の出来事が、この調査を始めてから僅か数ヶ月の間に起こった。商習慣に対してニュー・デール政策が引き起こした激動は、資本主義体制において事業を成功させるためには不可欠な基本条件として、自由競争と個人主義を守ることを強調してきた実業界の考え方の中に、地震のように激しい衝撃を与えるものであった。

ロータリー職業秩序委員会が、同じ職業のすべての会員に共同事業をさせようとして抵抗にあったのと同じように、我々は突然、アメリカ合衆国政府が強権を発動する事態に出くわしたのである。調査委員会は、突然国の方針になってしまったものに対して、しつこく議論を吹きかけるのは的外れだと思うし、更に、事態があまりにも迅速に動いているので、揺れ動いている不況に対処しようとしているわが国の努力目標や、新しい政策が

成功するかどうかを予測することは、愚かなことであり不適切であろう。

調査委員会としては、ニュー・デイル政策に対処することこそ、ロータリーが今まで経験したことのない最も大きい挑戦であると共に、その機会が到来したものだと考えている。もしもロータリアンが、この政策に単に反対するだけではなく、整然とした態度で取引上の問題点を考え出して、同業者たちがこれを適用するように指導力を発揮すれば、職業奉仕は、今や政府が認めたプログラムとして真の意味を見出し、ロータリーの目的と活動の中で、崇高な位置を占めるようになることは間違いない。

ここには、利益を追求するために、従業員や顧客に対して情け容赦のない制限を設けようとする残忍な競争相手のグループに対して、道徳的な影響力を及ぼそうとするような職業倫理委員会の姿は望むべくもなく、従業員と消費者に対して公正な取引を保証するように指導者が基準を設けることよって、それに反対する少数の個人主義者を強制的に従わせるための、取引の指導者として認めようとする、アメリカ合衆国政府の姿があるのみである。さらに、アメリカ合衆国の人々が、この政治的な圧力を受け入れ

る覚悟をした理由は、そのような公正な取引によってのみ、確実に継続的な利益が得られるだけではなく、危険性のないことが保証された継続的な購買力につながることを、やっと認識したためであると思われる。

この考え方は、もちろん新しいものではない。すでにこのような秩序正しい計画をたてて、長い間続けてきたにもかかわらず、少数の利己主義者によって内部から破られてしまった木綿繊維業界のような産業がある。その一方で、経済的に恵まれている数千人の少ない株主で成り立っている業界を指導すべき立場にある会社が、数万人の従業員と、数百万人の零細な消費者を危険に晒す可能性を持つような、「私の事業を、どのように営めばいいのかを、誰も教えてくれない。」と、未だに言っているような支配人を持っているのである。

この報告書が書かれた時点における、特定の政治行動の結果がどうであれ、多くの有能な第三者は、決して古い取り引きが復活することではなく、資本主義の経済体制の継続と利益とは、自由主義と自由競争に連動した、断ちきることのできないものであることを確信しているに違いない。従っ

て、職業奉仕におけるロータリアンの大きい機会は、指導力が一般大衆の支持を受けたかどうか、政府の了解が得られたかどうかという状況によって発揮できるものであり、それが、業界組織の指導的立場にある会員の理念に重なってこそ現実のものとなるのである。ここに、ロータリーがその責任を担うべき、市民や地域社会の企業に対する、ロータリーの偉大なる挑戦がある。現在のロータリアンは、最高の奉仕を実践することによって、従業員や消費者の手本となるような公正な取引を進める指導力にふさわしい、個々の取引に最高の理念や原則や習慣を樹立することによって、職業奉仕の指導力を発揮する機会を持っているのである。

第10章 市民への指導力

1. 社会奉仕の意義

もし職業奉仕がロータリーにおいて、ある程度あいまいで、定義されにくい概念だとするならば、社会奉仕には豊富な事例があつて、ほとんどのロータリアンにとつて理解しやすい、身体障害児、クリスマス・バスケット、青少年活動、学生貸付金や他の多くの活動などの多彩な具体的事例を持ったものである。ロータリーは元来、事業上の目的のための実業家の組織であつたのに、事業上の目的は背後に隠れてしまったようにさえ感じられる。ロータリーは、元来は二義的なものであり、付随的な機能に過ぎなかつた市民の目的のための市民組織となり、シカゴ・クラブを含む多くのロータリークラブの主要な活動になつてしまった。古いロータリアンにとつて社会奉仕とは、胴体（職業奉仕）がほとんど消えかけているのに、尻尾だけが不釣り合いなほど異常に発達した犬が、尻尾を振っている様を連想

するに違いない。

ロータリー活動における社会奉仕の歴史を詳しく検証すると、例えそれがシカゴ・ロータリークラブのものに限定したとしても、一冊の本に収まるほどの内容を持つものになる。調査委員会は、この分野においても他の分野と同じように、管理運営の詳細よりも、組織や活動の一般的な機能の分析と、一般原則に関与すべきであり、一般的なロータリー活動における社会奉仕の起源や社会奉仕活動の性格には単に注目を払うだけで充分であると考えている。

親睦と事業の発展という相反する分野の活動が、ロータリーの最初の出発点に当たって、ポール・ハリスから提示されたことを、思い起こしてもraithたい。彼や彼の同僚たちの何人かは、ロータリーが、まさしく利己的な組織であるという批判に衝撃を受けて、地域社会全体に役立つような公福祉事業のプログラムを実践することを決断した。シカゴ公衆便所設置運動は、これらの一連の努力における最初の結果である。ハリスは、最初から、クラブは市民組織だと考えていたと述べている。ひとたび、奉仕と

いうスローガンが定着すると、シカゴ・ロータリークラブやあらゆる場所の他のロータリークラブは、いろいろな種類の慈善や福祉活動に乗り出していった。社会奉仕は、熱狂的に公共心や博愛心に傾いた会員たちを募つて、奉仕理念を具体的に実現する機会を求めた活動として、一斉に歩み始めた。

会員個人として、その上さらに何をすべきなのかと、クラブは尋ねた。何人かの者は答えを待たずに行動を開始し、少年に対する福祉事業や身体障害児対策やその他の博愛の奉仕に従事した。熱心な人たちは、人に勧められるまでもなく、ロータリーの全体の数多くの活動を見極めて、地域社会に何をすべきかをクラブに助言し、主管委員会はこれに参加を希望する委員を追加指名した。所信表明の演説は、ロータリーの基本的な目的から離れて、慈善活動に強く偏る傾向を示し始めた。多くの人々は最初から、ロータリーは、すべて裕福な人々によって構成されている慈善活動だと思

っているので、広くまた遠くから寄せられる要望は、数限りなく舞い込んでくる。ロータリーは、どこにでも行き、何でもすることができると思われているのである。ついに、古い会員たちの何人かが、雪崩のごとき博愛に関する慈善事業に巻き込まれている、危険な状態を見なければならぬ瞬間が訪れた。しばしば起こるように、抗議の声はまず、批判として登場し、国際ロータリーの会計ラッフス・チャピンによって書かれた記事と漫画が、セントルイス大会で発表され、この問題に対する執行部の考え方にスポットライトを当てた。ロータリーは、社会奉仕活動をどこから始めて、どこに留めるつもりなのであるうか？

「歴史のハイライト」ロータリアン誌、1929年2月号24ページ

社会奉仕活動を制限する必要性は、別の決議に反対していたチャピンやシカゴ・クラブの成果として、1923年のセントルイス大会で、今なお有名な決議34の採択につながっていった。決議34はシカゴ・クラブの

ウエストバード会長とナッシュビル・クラブのウイル・メーニア・ジュニアによって立案されたものである。このロータリーの「社会奉仕の憲章」は、すべてのロータリアンに熟知されたものなので、ここで改めて全文を再掲することは避け、次の通り原則のみを要約してみたい。

1. ロータリークラブは、市民全体の積極的な支持なくしては成功しえないような広範囲の社会奉仕活動は行わない。ロータリアンはこのような活動を商工会議所を通じて行うべきである。
2. ロータリークラブは完全にそれが遂行されるように準備されていない限り、計画を承認してはならない。
3. ロータリークラブは、他に機関があり、それによってすでに立派に行われている事業に乗り出すようなことをしてはならない。
4. すべてのロータリアンが個々の力を動員する活動の方が、ロータリーの精神に適っている。

国際ロータリーは、次の記述を決議34に追加している。

ロータリークラブは、その性格から言っても継続的な活動にはなじむものではないので、1年を超えないように明確に期間を決めて完結できるような活動を選ぶべきである。

パンフレット38—Aロータリーに関する質問と回答（1931年11月、16ページ）

これら原則を表明して、社会奉仕活動を制限する試みをしたにもかかわらず、たぶん決議34が通過した1923年以前よりも今の方が、なおいっそう盛んに、ロータリークラブが膨大な数にのぼる特異な活動を実施しているというのが、現実の姿である。その活動のリストは将に脅威に値するものである。次の表は、1932—33年の、国際ロータリー事務局の

ファイルの中の「アメリカ、カナダ、ニューファウンドランド、バミューダのクラブにおける、主要な社会奉仕と青少年活動」に基づいたものである。この取りまとめは、シカゴ・ロータリークラブの社会奉仕活動を評価する見通しをたてるために、調査委員会が行ったものである。委員会は、この結果が、将来社会奉仕活動を発展させていくための改善策として、クラブにとって価値あるものだと考えている。

1932—33年度アメリカのロータリークラブ別社会奉仕活動一覧表

1. 諮問委員会 7

地域社会の奉仕活動の統合。諮問委員会は、通常、関心のあるすべての組織の会員から構成されている。

2. 体育活動（高校における体育活動の後援と体育活動備品の購入） 171
3. 航空（空港、アマチュア飛行家に対する援助等） 10
4. 登校対策（登校推進） 89

5. バンド（財政および公演） 92
 6. 美化都市 53
 7. 善意運動 27
 8. 失明者援助 13
 9. ボーイスカウト 919
 10. キャンプ（郊外キャンプ、結核患者、身体障害者など） 188
 11. 商工会議所（設立援助） 110
 12. 慈善 256
- 職業安定所、地域給食などの慈善団体の育成と援助資金の運動。
13. 市民権および帰化問題 8
 14. 市民生活改善（防火、交通規制、公共事業、地区規制、減税等） 98
 15. 高校学生に対する道徳率適用 1
 16. 共同募金（組織作りと寄付） 99
 17. コミュニティ・ハウス（特に若者や、外国人のための施設提供） 11
 18. 地域社会のリーダー養成（リーダーたちのクラブを結成） 1

- 19 地域社会調査（社会施設、駅、金融機関、学校等） 8
- 20 身体障害児対策 562
- 21 青少年交換（外国人学生、渡航者） 7
- 22 児童のための課外授業活動
- （弁論大会、作文コンテスト、交通安全運動等の後援） 21
- 23 健康（公衆衛生、歯科検診、ミルク、看護サービスなどの推進） 47
- 24 4－Hクラブ 128
- 25 趣味の会 34
- 26 病院および診療所 75
- 27 文盲対策 10
- 28 青少年犯罪（法廷、出所青少年のケースワーカーとしての協力） 71
- 29 図書館（公立または学校） 18
- 30 その他の事業（歌唱コンテスト、地域の催し物、音楽祭の後援等） 20
- 31 映画（優良映画キャンペーン） 2
- 32 託児所 4

33	公園および運動場	109
34	リクリエーション（大人と子供のための公共設備援助）	30
35	田舎と都会の相互親善運動	222
36	奨学金	77
37	プール	51
38	恵まれない子供対策	383
39	青少年のための職業指導	6
40	Y M C A および Y W C A	145
41	学生貸付金制度	384
42	青少年の人生相談	6
43	青少年クラブ援助	70
44	学費援助（援助を要する学生との相談および資金援助）	41

調査委員会は、この活動のリストに関して、完全にノウハウを知りうる立場には無い。この計画の分類の項目には、明らかに幾つかの重複がある

ものの、この区域内の2,500以上ものクラブの社会奉仕活動を忠実に表しているとは仮定すれば、この一覧表は、質問をしたクラブの半分ほどが実施した活動に過ぎないことは明らかである。シカゴ・ロータリークラブが確実に関係している活動は、他の項目に含まれているものがあるとしても、多分、一覧表に載っている44の活動のうち、青少年活動、慈善、市民生活改善、身体障害児、学費貸付制度の僅か五つを実施しているに過ぎない。

もしこれらの社会奉仕活動を、RIの原則である決議34を参考にして評価すれば、確かに興味深い結論が出てくる。これらの活動の中に、地域社会全体が支援することを要求しなかったものが幾つあるだろうか？ 答は明らかにそれに該当するものは一つもない。それらのすべては、地域社会のニーズとして、奉仕対象として計画されたものであり、程度の差こそあっても、適正に奉仕すべきものとして、全体の地域社会の支持が要望されるものばかりである。ロータリークラブが完全に達成できるプロジェクトは、これらの内の幾つだろうか？ この質問に対する正しい解答は分からない。項目の2、8、9、10、17、19、20、24、26、27、29、32、

33、36、37、41、42、43 はすべて、多分完全に達成することが可能なプロジェクトかもしれない。これらの半分以上は、継続的な処置を必要とする活動であると考えられ、一年以内に完結する可能性のあるものは殆どない。

これらの活動の幾つかは、他の機関によって取り扱われているプロジェクトではないだろうか？ この質問に対する返答は、明らかに、それぞれの地域社会によって変わってくるものの、調査委員会の知っている範囲では、そのすべてが、現時点においてシカゴで、一つまたは幾つかの特別な組織によって取り扱われている。少なくとも二つのケースでは、シカゴ・ロータリークラブの提唱の結果、そのような特別な組織が発足している。それは、シカゴ青少年週間同盟と、エルクスが世話を続け、エルクスの要望に添ってイリノイ州内のロータリークラブから権限を譲渡された活動である、イリノイ州身体障害児協会である。一般的に見てこれらの活動が、大首都圏の地域社会において、実際にニーズのある奉仕の代表的なものであり、すでに他の組織によってサービスが提供されていないものかどうか

は疑わしいように思われる。これらの活動の幾つに、すべてのロータリアンが個人的に動員されたのだろうか？ これもまた、答えは明らかにN oである。これらの活動の各々は、多分に、すべてのロータリークラブの最小限の会員のごく一部だけが、特別な関心を払ったものに過ぎない。

社会奉仕はよろず屋！

結論は明らかである。決議34に定められているにもかかわらず、社会奉仕は、ロータリアンのあちらこちらのグループにとっては、道楽とも言えるよろず屋的存在として続けられているのである。社会奉仕分野では、ロータリーは、有名な騎手ステファン・リーコックのように、馬は止まっただままで、騎手だけがいろいろな方向に走り去る。シカゴでは、提案された青少年活動、身体障害児、学費貸付制度、一般慈善、市民生活改善という五つの方向に向かって走っていく。これらは、価値のあることであり、尊い事業とも言える。彼らのすべては、実業家であり博愛主義者であり、

公共心の厚い市民としての能力を持った高い資質に支えられた個々のロータリアンである。しかし彼らの中の誰が、クラブとしてのロータリークラブから引き受けたのかを理解しているかは疑わしい。そのようなすべての活動は、ロータリーの根本的な目的と能力との関連を、充分勘案した上で行わなければならないことが、今後、議論を続けていく上での前提となる。

さらに、個人というよりもむしろクラブの活動として行う社会奉仕活動は、ロータリアンの一部の者に、市民に対する指導力をつけることに役立っているに過ぎないという推測すら成り立つ。そのような指導力は、すべてのロータリアンが必ずしも個人個人の指導力として期待しているもの

ではなく、市民に対する指導力とは、ロータリークラブを通じて行う、ロータリアンの公式な団体奉仕活動によって、その実態が説明できるものであることを意味している。しかし、そのような疑わしい可能性が当然起こってくるすべての事例について、これをはっきり証明することができない限り、重複した活動という問題のある活動として、反対されるに違いない。個々のロータリアンは、ロータリーの理念を、そのような組織を通じて外

の世界に波及させることが期待されているので、常に、他の組織を通じてこの種の活動に従事し、これを支えていかなければならないことは、言うまでも無い。

職業上の指導力は重要なもの

社会奉仕が正統的な立場を占めていない理由は、この報告書の前章を熟読した読者には明白であらう。ロータリーは、親睦のため、付き合いを深めるため、発想の交換をするため、事業を発展させるために、共に集う実業家の組織であると調査委員会は考えている。その本質は、これらの機能を達成することによって、会員間の指導力を効果的に強めていくことである。問題となる指導力として、職業上の指導力、社会的な指導力、市民に対する指導力が考えられるが、最初のものだけが重要で、根本的なものではない、その他のものは二次的で付随的なものである。社会的通念で推し量る限り、事業こそが、ロータリーの最も重要な事業なので、ロータリーク

クラブはクラブとして、職業奉仕活動を団体的に開発しなければならぬし、開発すべきである。個人としてのロータリアンは、事業と専門職種の分野における、社会的なまた市民の指導者になるように

訓練を受けなければならない。理にかなったこれらの特別な分野の活動を成し遂げるに当たって、団体的なクラブ活動が必要となってくる。単に個人や僅かな会員（大勢の会員の場合もある）にとつて興味がある場合や、前述のロータリアンの分野のように、すべての事業上の指導者たちの支援を受けて動員されない場合や、ロータリーとして根本的な性質や目的や制限などが適切でない場合は、団体奉仕活動としてではなく、個人的に活動すべきである。

2. ロータリー募金箱

ロータリークラブの社会奉仕活動は、本来慈善的な性格を持つものである。シカゴ・クラブの四つか五つの主要な奉仕活動は、慈善か、それに類

した性格のものである。純粹の慈善や博愛の活動は、クラブの通常会費以外の、自発的な年間寄付金として、1923年に設立され、1934年1月1日までには80,000.00ドルを超えるまでになったクラブの募金箱によって運営されている。最初、これらの活動は、しばらくの間は再検討されていたが、その後、考慮に考慮を重ねた結果、その役割が評価されたものである。

A. 身体障害児

身体障害児委員会は、1923年3月3日に、ポール・ハリス、キワニのE. E. ベーカー、ポール・ウエストバーグ会長の主唱によって組織化されたものであり、その定款と細則を立案することによって、最終的にイリノイ州身体障害児協会の組織を作ることを中心としたものであった。初期の段階において、委員会は、自らのクラブ会員のアドバイスを受けただけではなく、C. W. ホーレー博士、H. B. トーマス博士、シルベスター・

シール（シカゴ・ロータリアン）に加えてスポルディング校の元校長ジェーン・ネイル女史や訪問看護協会のエドナ・フォーリーなどの専門家を顧問として迎えた。委員会の仕事は、彼らと会うことによって利用可能な機材と身体障害児のニーズを、救助と、個人的サービスと、他の機関との協力と、紹介の四つの分野に分けることであった。1923年1924年の初期における援助活動は、義足の購入や副木の支払いなどの、委員会が関心を抱いた個々の事例を援助する形がとられ、個人の奉仕は、個人またはグループによる、様々な親切な行為という形がとられた。最初から委員会は、最初のリーダーたちがすべてロータリアンであったイリノイ州身体障害児協会を支えてきた。年間1,200ドルから1,500ドルに及ぶ財政的な寄付が、協会を支持するために、クラブによって捻出された。

1924年に委員会は、問題点の調査を開始し、その結果は1925年に、ジェシー・ステイブソンによって「1924年5月—12月の間のシカゴにおける身体障害児の地域信託の調査」としてシカゴ地域信託から出版された。調査は、先ず第一に、医学および教育的なニーズが指摘され、

その後まもなく、教育委員会の職業指導局による協力が得られるようになった。1925年には、その調査は、シカゴ大学院の社会奉仕学部の協力によって、職業訓練と就職の分野にまで拡大された。1923年から1927年までの間に、委員会はこの作業に対して、11,083.33ドルを費やした。

1929年に委員会は、シカゴの身体障害児家庭を援助することを考えたが、将来ずっと委員会が巻き込まれる恐れがあるとして、この提案は理事会によって否決された。1930年に委員会は、イリノイ大学医学部に新しくできた、小児外科病棟の整形外科病床のために使われる1,000ドルを提供した。当時の小委員会は、立法委員会、広報委員会、身体障害児活動委員会、プログラム・余興委員会、職業紹介委員会、備蓄基金委員会、里親委員会、身体障害児学校への訪問委員会から構成されていた。

トーマス委員長の下で、イリノイ州公共福祉部の理事ロドニー・ブランドンと頻繁に会い、動員された他の組織の人たちと共に、イリノイ大学医学部にこの建物を開設する資金として、250,000ドルを2年間にわた

って充当するように当局に要望するために、彼に支持を求め、その努力は1932年に実を結んだ。1930—31年には、委員会は孤児院の8人の身体障害児の世話をしたり、外科病院に対する援助を続ける一方で、副木を購入したり、身体障害児を支援するために病院の費用を支払ったりしたが、孤児院における事業は、1932年2月1日現在には中断されている。その後委員会は、子供のためのサマーキャンプを後援したり、金がないために医療機関に行けない子供たちのために、車代を提供したり、労力を提供する活動を続けた。

B. 青少年活動委員会

その活動は、恵まれない少年を援助したり、少年犯罪を減らしたり、青少年に健全な娯楽を与えたり、就職の機会を提供するために計画されたものであり、シカゴ・ロータリークラブが長年にわたって実施してきた活動の一部である。1920年に、ニューヨーク・ロータリークラブは、青少

年問題に対する公共の関心を高めるために計画された、青少年週間プログラムを開始した。この活動は、1925年には3,000以上の都市でそのようなプログラムが実施されるに至るほど、ロータリーを通じて急速に広がっていった。1921年に、シカゴ・ロータリークラブは、アメリカ青少年クラブ連盟とシカゴ地域信託によつて管理されている「シカゴ青少年活動設立準備委員会」に財政的援助をした。シカゴ・クラブは、青少年週間プログラムや、青少年活動団体の大会の後援などの活動を行った。1924年に設立され、1932年からはシカゴ青少年週間連盟と呼ばれるようになった、シカゴ青少年週間連盟を支援し、1924年以降は、他の組織もそれを支える手伝いをしている。

青少年活動委員会は、シカゴの様々な組織の活動を調整することに、かなりの成功を収めた。1922年の発案は、都市にユース・ホステルを建設する可能性の是非についてであった。この計画は後に、シカゴ公共施設協議会に引き継がれた。1928年には、少年審判の議事録の調査を支援したり、産業界等における潜在的な幹部候補である若い人たちの、国際的

な職業交流を経験させようという計画が練られたが、1932年には、独自の組織による活動となり、それに協力することが決まった。

C. 学費貸与基金

1926年以来、学費貸与は青少年活動委員会の役割の一つになっているが、それ以前この活動は、奨学金委員会によって扱われてきた。近年、優秀な学生に対する学費貸与が広がり、青少年活動委員会の主要な活動のうちの一つとなった。現在、募金箱から青少年活動委員会に割り当てられる資金のすべては、この目的のために使われている。24の高校の校長によって推薦を受け、会員たちにその価値があると認められた12人から15人までの学生には、シカゴ近辺の大学に通学することが可能となるこの方式の貸与金が与えられ、貸与を受けるそれぞれの学生には、ロータリーのアドバイザーが付けられている。1934年1月1日における貸与額は15,000ドルにのぼっている。

D. 一般的慈善活動

以上述べた活動に加えて、クラブは、希望の光委員会 Sunshine Committee を通じて、貧困家庭の援助のために、かなりの量に及ぶ直接的な慈善活動が行われている。この活動はウイリアム・ミラー元会長によって始められ、長年にわたって、毎年のように、貧困家庭にクリスマス・バスケットを届ける形を採るものであり、最初から23年間の長い間、バロン・ジョーンズによって指導されてきたものであり、年と共に、委員会が必要があると判断した家庭に、徐々にその範囲が拡大されていった。これは個人対個人の活動であり、既存の援助機関の協力をほとんど必要とするものではなかった。1930—31年における、評価すべきボランティア活動として、イリノイ州失業者緊急救済資金に昼食クーポンを寄付したことを付け加えておくべきであろう。

これらの様々な慈善活動の資金は、前に述べたようにクラブ予算ではなく、会員の一部からの自発的な寄付によるものであった。1923年より

以前は、これらの寄付は各々の特別な事例が起こるたびに、会員に直接頼むことによつて集められていた。当時は、多くの依頼を避けるために、募金箱委員会が作られ、募金箱はその委員会によつて管理されていた。これは、その資金を青少年活動委員会、身体障害児委員会、希望の光委員会に分配する慈善資金の中心的な受け皿となるものである。1927—28年には、年間10,000ドルの目標額が設定されたが、これを達成することはできなかつた。委員会は、教育的なものと慈善的なものを除いた目的に募金箱を使うことには反対されたと、記録に残されており、委員会はそれに反発して、例えば、1928年には、このようなことを実施した数少ない団体の口火を切つて、会員全体が小切手または現金で一〇〇パーセントの寄付を行い、2,700ドルで、万国博覧会の会員の切符を買うことを考えついた。金は、手紙、電話、個人訪問、ジレーター広告などを通じて、会員の個人的勧誘によつて集められた。募金箱のチームは、会員からなるべく多くの資金を集めるために、直接的な接触を図る方法として、1930—31年に組織されたものである。

最初の年の募金箱は、半分の会員（52.19パーセント）が寄付したに過ぎなかったが、1924—25年には58.86パーセント、1925—26年には71.09パーセント、1926—27年には70.23パーセント、1927—28年には67.75パーセント、1928—29年には70.パーセント、1929—30年には77.38パーセントとなった。調査委員会アンケートのQ20の回答で、会員の66.91パーセントは募金箱に寄付すると答えたが、寄付しないという回答が30.12パーセント、回答しなかったものが2.96パーセントであった。合計額は、毎年5,000ドルから8,000ドルにのぼっており、1932—33年には、5,762ドルが集まって、この内の35パーセントは身体障害児委員会へ、35パーセントは青少年活動委員会へ、希望の光委員会へは10パーセント、緊急援助へは10パーセント、積立金10パーセントであった。

今までに、募金箱に対して、会員の少数から多くの不満がよせられているが、その不満の大部分は、募金を依頼する委員会のやり方に対してであった。募金箱委員会は、様々な方法でこの不満の原因を調査しようと試み、

会員の態度について情報を得るために、再々アンケートが送られたが、この中で最も重要なものは、1931年12月1日に送られたものである。クラブの全部の会員に廻されたが、僅か54.11パーセントの会員からしか回答がなかった。回答の87.70パーセント（全会員の47.53パーセント）は募金箱に賛成であったが、その他の質問の回答は、かなりの不満と不安を示すものであった。アンケートの結果を次に示す。

	はい	いいえ
1. 募金箱の廃止に賛成か？	41	317
2. 継続を希望するものは		
学費貸与資金	238	112
孤児院の身体障害児の看護婦	294	49
希望の光委員会の年間慈善活動	292	61
3. 募金箱の活動を縮小または拡大すべきか？		

	縮小	拡大
4. 1年に1回、自発的な寄与をして、募金箱を続けることに賛成か？	149	63
または、募金箱の配分を受けているそれぞれの委員会が、代ってみんなに訴えかけてはどうか？	311	311
5. 募金のために個人訪問することは不愉快か？	21	263
6. 募金箱の分配に関して、今年何か変わった提案をしたか？	157	191
7. もしも、寄付していないとすれば、さらに一層訴えかけをすれば寄付をする気になると思うか？	52	216
8. 全体の寄付金を増やす他の方法があると思うか？	66	95
9. 募金箱の目的を永続させるために、シカゴロータリー財団に対して信託保険や公正証書による贈与をする意思はあるか？	33	4
10. 募金箱として使うために、毎週の昼食代の費用を25セントか	43	265

50 セント、自発的に増額することに賛成か？

25 セント

117 188

50 セント

41 186

大多数の会員には中止を提案する意図はないものの、この結果は、募金箱活動を拡大するというよりは、むしろ縮小しようという意見が少なかつたことによることは明らかである。身体障害児の活動が会員間で最も大きい支持を受け、次いで一般的な慈善活動であり、学費貸与基金の支持が最も少なかった。個人訪問に関しては大多数が反対であった。圧倒的多数の会員は、募金箱活動を永続させるために、シカゴ・ロータリー財団を創設してこれに寄付する意図は無く、募金箱の目的のために毎週の昼食代の費用を自発的に上げることにも反対している。

このアンケートに現れた考え方は、今回の調査委員会のアンケートの結果にも立証されている。Q21の回答でも、募金箱の継続に賛成すると自

ら述べているのは73.09パーセントであるのに比べて、反対は17.28パーセント、回答のないものが9.63パーセントであった。現実の問題として、募金箱について寄せられた意見のすべては、縮小または廃止を主張するものばかりであった。何人かの会員は、会費を25ドルか50ドル上げることを指摘しており、別の会員たちは、最近、寄付に対する強い評価や依頼がまったくなく感じている。他の意見は、簡易宿泊所や援助物資は、他の組織を通じて慈善寄与をすべきであると指摘している。何人かの会員の意見は、ロータリーの特徴は、会員が職業分類の考え方によつて構成されていることを前提としたものであるという傾向を代弁したものである。ロータリークラブの慈善活動の取り扱い方に関する、今回のアンケートの質問に対する回答や、1931年に、クラブ委員会によつて送られたアンケートの回答は、クラブの慈善活動として扱う範囲と方向に関して、会員間にかなりの見解の相違があることを示している。紙面の関係上ここで改めて繰り返し返さないが、募金箱を縮小または廃止を主張する意見を詳しく述べようとした人たちは、この問題に対する反応を考えたものと思われる。

調査委員会は、いかなる独断的な結論をも出す必要はないと考えているが、たぶん、この報告書によって浮かび上がってきた考え方によって、問題を明らかにすることが、この問題を考える上で、シカゴ・ロータリークラブの会員に役立つだろうと思っている。我々が観察しようとしているロータリーとは、歴史的にも論理的にも、会員の間には奉仕理念を育み、指導力を開発していくための実業家のクラブである。前章で定義したような職業奉仕こそ、この理念を実践に移していく活動の重要な分野であることは間違いない。慈善活動をさらに広げていくことが、ロータリーの目的であるなどと、簡単に認めるべきではなく、慈善活動は、元々、第三者からの批判に対して、クラブの存在をより正当化し、会員に遣り甲斐のある活動を与えたものに過ぎないのであって、この活動は、ロータリー以外のこの種のクラブの重要な役割なのである。

確かに、シカゴのような規模の地域社会では、最も有利な環境の下にあるロータリークラブが、数多くの直接的な慈善活動を達成できる可能性を持っているとは言え、失業して助けを求めている、経済的に恵まれない極

貧の人たちの数は限りなく多いのである。小さい町のロータリークラブは、援助を必要とする地域社会の、将来が約束されている可能性を持った若い学生たち全員に、学費貸与をすることによって、社会問題を実質的に処理しようと考えたことは、当然のことであろう。しかしシカゴでは、何千人にもものぼる、優秀ではあるが貧乏な高校卒業生に、高等教育を受けさせようという大問題は、少数の学生に学費貸与をするような方法では解決できない問題ではない。さらに、大都市圏の複雑な地域社会における身体障害児援助活動は、もしそれを効果的にしようと思えば、特別な訓練と設備が必要不可欠となるに違いない。

ロータリーの役割は社会的な指導力を高めること

シカゴ・ロータリークラブは、すでに、調査委員会が、福祉と慈善の分野においてロータリーとしてふさわしい活動であると信じるに足る能力を、イリノイ州身体障害児協会とシカゴ青少年週間連盟組織を結成する最初の

きつかけを与える指導力として、一つの実例として形で表している。もしロータリーの役割に対する我々の分析が正しければ、福祉の分野におけるクラブの活動とは、慈善活動を現実に直接的に個人で実行することよりも、先ず、事業や専門職種分野において社会的な指導力や奉仕活動を進めていくことである。ロータリーは、市民に対する指導力や市民に対する奉仕を進めることに関心を抱いているが、クラブが政党の役割を帯びたり、市当局の仕事を肩代わりすることを勧めるロータリアンは、誰一人としていない。

ロータリーの立場から、直接的に慈善活動を続けていくべきだという議論の真意は、参加者に有意義な事業に共に従事しているという満足感を与えるという視点から、親睦の理念を育ていくことにあるような思われる。組織という立場からは、この種の会員に満足感を与えるような活動に従事させることは、クラブにとってまったく適切なものである。しかし、福祉の問題は、我々の現代の産業界における、個人的に素晴らしい活動によってすばやく簡単に処理すれば、それで足りるという考え方ではなく、地

域社会や社会的な問題として解決しなければならぬことが、だんだん分かってきた。ロータリークラブとしては、最近ロータリークラブが携わってきた幾つかの慈善活動から得られたような、会員の純粋な気持ちに満足感を与えるような活動よりも、時代のニーズに適応した指導力という考え方から、社会問題を扱うという原則に立つことが、より重要なことだと思われる。多くの社会科学者の判断では、福祉の分野における個人的な慈善活動を広げることは、個人的なものの考え方を強引に押し付けることになり兼ねないと思う。

特に、最近実施してきた社会や福祉の事業は、善意に基づいた必要性というよりも、むしろ、特別な訓練をするためとか、特別な背景を持ったものである。もし、ロータリークラブが、クラブ・ハウスの建設を引き受けるに当たって、会員や委員会自身の考え方を取り入れて、みんなが好むような形の建物を作りたいという希望を実現しよう思えば、当然、強度や張力やバランスやデザインを充分理解している有能な建築家の意見を聞くに違いない。今日の福祉事業の分野においても、当然これと同じことが言え

るのである。

これらの考え方を勘案して、調査委員会は次のことを提案するものである。

1. 社会的分野における奉仕の新しい機会は、シカゴ地域社会における活動一覧表にある44種類の活動に適應するかどうかを調査して捜しだすべきであつて、単なる慈善のための新しい事業は、これ以上引き受けるべきではない。この一覧表には、ロータリーという組織が存在しなければ処理できなかった、本当の社会的なニーズが含まれている。シカゴ・ロータリークラブは、再び1922年の原則に戻つて、新しい組織を設立したり、既存の組織の活動を調整するために努力することが要望される。そのためには、シカゴ・ロータリー財団は、資金を供給し、ニーズを調査し成果を上げる上で専門的な役割を果たすことができる、極めて貴重な存在である。

組織を設立することは、もともと、身体障害児や青少年週間活動で実行したことであり、その結果として達成された業績は、すべ

ての点で価値があり適切な活動である。いったん外郭団体を作り上げ、その役割にふさわしい活動が開始されれば、ロータリーはそれから手を引いて、新しい分野の奉仕活動を探すことが必要である。注意すべきことは、毎年、完結できるような新しいプロジェクトに集中することである。

2. そのようなプログラムを実行するために、クラブの会員は、社会奉仕の問題に精通した専門家のアドバイスを受け入れ、社会奉仕分野の社会学者や然るべき権威者と話し合うべきである。調査委員会は、この報告書において、この大きくて困難な活動に関する、プロジェクトの詳しい内容を策定する意図はない。必要な知識を持ち合わせているクラブの会員が沢山いるので、もし彼らが、実行しなければならぬ必要性に気づけば、喜んで建設的な提案をするに違いない。もしもこの件に関する効果的な何かをしようと思うのなら、社会学者やソーシヤル・ワーカーとの定期的な会合を持つことが不可欠であろう。

3. ロータリーと行政

ロータリーの目的として、事業上の指導力と社会的な指導力を備えることがあげられるのと同時に、市民に対して指導力を発揮することも、ロータリーの真の目的の一つである。クラブは、市民の問題全般を処理する市民委員会という委員会を持つている。1928—29年に、委員会は、委員会の活動に対する反応を調べるために、委員にアンケートを送った。委員会議事録に記録されている回答の要約によれば、ロータリアンは、公立学校、陪審員としての奉仕、世紀の進歩博覧会の企画、シカゴ防犯委員会の援助、投票棄権などのような問題は、クラブとしてではなく、個人として活動すべきであるという意見が大勢を占めている。それらの回答の大部分は、クラブ行動としてこれらの問題は不適當であると考えている。この6年間の、市民委員会の議事録を調査すると、市民活動のために活躍している多くの他の組織が、市民活動に関連する広い範囲にわたる問題を引き受けており、それを進めるために、シカゴ・ロータリークラブに支援、支

持、協力を要請していることが、明らかである。現実の問題として、実業界を指導しているロータリーの優越性は、もっと広く認められるべきであり、今後そのような要望は、さらに頻度を増すことが予想される。

ロータリーは、シカゴの衛生改善地区における市民サービス改善の要望に賛同して、その提案を支持するように再三頼まれ、その市民たちの権威ある要望書は、市当局の担当者に正式に受理された。シカゴ・ロータリークラブは、同じように、州の所得税や他の法案に反対するように頼まれたし、一定の改良を主張している公園の理事会から送られてきた決議を採択することや、政府の減税と経済のための運動に参加するようにも頼まれた。また、グラント・オペラを支援することや、国際善意の日に代表者を送ることや、裁判官候補者の推薦に加わることなどを頼まれた。

そのような事例について市民委員会が賛同して活動を開始する前に、必ず理事会の承認を得ることが必要である。市民委員会の議事録では、ほんの僅かな事例だけしか、承認されなかつたことが明らかになっており、クラブの記録によっても、理事会はそのような事例に対しては、殆ど行動を

取らなかつたことが示されている。調査委員会のアンケートへの回答の中で、多くの会員は、ロータリークラブは市民の問題に対して、前向きに力強い行動をとるべきであるとか、選挙の時に候補者を支持する態度を表明すべきであるとか、イリノイ州刑法の改正に当たつて指導力を發揮すべきであるとか、シカゴの税制の乱脈に抗議して、学校を政治と切り離す運動に関与するべきであるとか、どのように市の業務を行うかについて市職員に提案をするべきであるというような提案を行っている。

ある会員は、もしロータリーが、市や州や国の人々に、民主党であるとか、共和党であるとか、社会党であるということではなく、政府には良いか悪いかの二種類しかないという事実に気づいてもらうことに役立てば、偉大なる可能性のある奉仕ができるに違いないと述べている。この気持ちに異議を唱える人は誰もおらず、よい政府こそ、疑いなく、ロータリーが育んできたと考えられる指導力の類を通じて達成すべき目標の一つなので、ロータリーが政府に対して、もっと活動的な役割を果たすべきであると考えているこれらの会員たちに共感することは容易いことである。調査委員

会は、ここで再び、その有益な機能が、双方の論点を明らかかなものにすると共に、この報告書において分析してきたように、ロータリーの基本的な目的と展望に対する関連性を示すことができると考えている。

ロータリーは市政を改善する組織ではなく、政党でも、陳情団体でも、宣伝組織でもない。公的な活動分野における役割は、市民の問題について事業家たちを教育することと、これらの問題を処理する指導力をつけるように、彼らを訓練することである。

もしこの取り組み方が正しければ、その義務を怠っているどころか、市民委員会は、ロータリーの活動を、政党や陳情団体や宣伝組織や市政改善団体だと勘違いしている外部の団体から寄せられた、数多くの要望に対して、肯定的な行動をとることを差し控えるか、さもなければ否定的な行動をとることによって、適切な機能を發揮しているのである。市民委員会は、持ち込まれてくる要望をふるいにかけて、それを事を荒立てることなく、ロータリーとしての適切な守備範囲外に持っていくという、有意義な目的のために役立っているとも言えよう。

行政に関連するロータリーの役割とは、何であろうか？

ロータリーの行政に対する影響力の重要性

まず最初に、委員会がこの調査に取り組み始めた当時予測したよりも、今の方が、ロータリーが連邦や州や地方の行政の領域で活動する部分、もっと大きく重要になってきていると述べておくほうが安全だと感じている。

連邦政府が関係している限り、政府と実業界の提携を認めた全国産業復興法が制定されたことは、経済界における生きざまを制御したり指示したりする職業上の体表権という、ロータリー組織の基本となる要素が、アメリカ合衆国によって認められたと言えよう。

そのやり方は、教育的な能力として、すでにロータリーには備わっているやり方である。この点を考えると、シカゴ・ロータリークラブが国や州や地方を問わず、政治的の問題に関する取り組み方を変えようと思ってい

るのならば、ロータリーの重要性について出された声明を、すべての点において最大限活用することが賢明な方法ではないかと、委員会は考えている。また、ロータリーの根本となる部分は、政府が疑問を抱いていることに関して、個々の会員を教育することであって、個人を通じてこの教育過程の結果を広めるために、いろいろな職業に携わっている同僚たちと共に活動しているという事実を強調することが大切なのである。シカゴ・ロータリークラブの活動として要請されてきた、ロータリーの守備範囲外の数多くの行政や政治的な問題を棚上げにしてきた市民委員会の過去の活動は、価値のあることであって、調査委員会は、クラブがさらに一歩踏み込んで、クラブはいかなる政治的な問題を解決しようとする行動を引き受けない、という規約を定める方が良いと考えている。

これは、シカゴ・ロータリークラブが、政治的な問題に対して、あまり時間を割いたり関心を持っていないという事実を述べただけであって、調査委員会がそう考えているという意味ではない。それどころか、クラブがこの分野における活動を大いに増やしてほしいという意味を含めて、敢え

て提案しているのである。

政治や行政の分野の問題点を論争することを避けようと言う傾向にも、幾つかの目立った例外があったことは、クラブの歴史の研究からも明らかである。この控えめな理由の一つは、もしロータリーにおいて、ある会員や会員のグループが、市民委員会が関係している活動を覆すような結論に達した場合、そのような両者の議論に対して、シカゴ・ロータリークラブの支持を求められるかも知れないという、充分根拠のある恐れがある上、市民委員会に対して、行動すべきか行動すべきでないのかという相反する批判に対する責任が次々と起こってきて、クラブが内部意見の違いによって、ばらばらに崩壊するかも知れないという懸念があるためである。

決議を廃止し、議論と討論を盛んにすること

もし、いかなる政治的な問題も行政の問題も決議することができないことが、クラブの規則によって定められているならば、その時は、クラブが

荷担しても論争に巻き込まれる恐れのない、教育問題のような争点について公に論じる方法がある。

従つて、調査委員会は、クラブが政治の問題や行政の問題に対して決議を行う可能性をなくすように、規約を変更することを提案する。

いったんこの行動がとられれば、クラブは、プログラム委員会の協力のもとで、幾つかの適切な委員会を通じて活動することによつて、これらの非常に重要な政治的な問題や、行政の問題に関する卓話者を招いて、プログラムの質を向上することができるとは違ひない。そこで状況が変わつて、強い議論の対象となる問題を避けて通らうとする代りに、これらの問題について本質的なレベルの高い議論を闘わせるように皆を訓練できるようになれば、プログラムの内容は更に豊かで興味深く価値あるものとなつてくるに違ひない。そのためには、大きな重要性を持ったどのような問題でも、双方の立場を適正に表わすことを学ぶように注意しなければならぬ。もし問題が非常に重大なものであれば、例え充分時間をかける可能性がない場合でも、プログラムの中で、同時に双方の意見を述べるように気配りを

することも大切である。そのような場合には、ある例会で一方の意見を述べ、次の例会でもう一方の意見を述べるようにすることもできる。

注意しなければならないことは、これらの問題をクラブに提案しよう思うならば、厳選された卓話者を呼ぶように留意しなければならないということである。プログラム委員会は、感情に走らず、特定な立場の論点を力強く提案できるような、博識を備えた人を選ぶべきである。これは、クラブ会員の圧倒的多数が、特定な立場に賛同するような問題を提起する場合には、特によく当てはまることであつて、このような場合には、問題を処理するに際して、すでに彼の立場をよく知っている聞き手の感情と先入観を単に煽り立てるだけではなく、クラブの大多数を代表する側に立った意見を述べるような発言者を選ぶように、特別な注意を払うことが必要となる。

これらの争点となる問題について、議論と討論を採り入れなければならぬ。これらの争点となる問題は、このようにめまぐるしく変化する時代には、クラブは、できる限り時代を先取りするような態勢で、会員を維持していかねければならぬ。義務を負っているからである。4年前に、アメリカ合衆国が

金本位制を放棄する可能性があると述べた講演者に対して、その話を聞いた、アメリカのいかなる実業家の組織の人たちからの賛同を得ることも、まず不可能であったし、同様に、2年前には、現在国民産業復興機構の支配化にあるような、企業経営の手段として実業界と政府が共同で運営に当たるといふ方式に対して、それを聞いたほとんどの組織の実業家から賛同を得ることはできなかった。それにもかかわらず、4年前や2年前に、これらの問題を提起した人がいたのである。これらの二つの例は、事業に対する心構え以外に提案しなければならぬ適切な例である。これらの事實は、政治や行政の争点となる問題や、近い将来において、活動や生命の根源となるに違いないいろいろな問題を議論するに当たって、ロータリーが、実業界の指導者としていかに高い教育レベルを備えた会員を擁しているかという単なる一例に過ぎない。

今や、これまでは決してなかった、商業団体がアメリカ合衆国政府の計画の重要な部署として、公式に認めらるようになった。ロータリーの個々の会員は、ロータリーの原則に従って、ロータリークラブとして世間に知

られている職業上の代表者という手段を通じて、自分が属する業界の道徳基準を昂揚するように努めることが重要な役割である。

ロータリーの代表者としての会員の役割

可能な限り多くのことを学び、世の中の歩みの中で得たものを、できる限り多くの職業上の仲間に再配分することが、個々のロータリアンの義務である。経済界と政界とは、別々な水路を通って別々な海に流れる、二つの別々な川だと考えてはならない。例え過去にどんな事例があったとしても、現在の我々の政治と経済体制は一つのものである。職業分類を基盤にしたロータリーの定款こそ、未来を正確に予測する、ほんの僅かな薄明かりになるものであろう。ロータリーは事業だけを代表するものであるが、新しい政治や経済に基づく生活は、事業だけではなく、労働や農業などの問題が複雑に絡み合ったものである。社会構造の三大要素のそれぞれは、意識的に別々に存在し続けようとしているが、実業家、特に、事業の指導

者たちは、これらの三大要素全体をいかにして前進させるべきかという情報を得ようと模索しているのである。

要するに、調査委員会は、シカゴ・ロータリークラブはこれまでよりも、政治や行政の問題に対してもっと積極的な関心を持つようにすること、この関心を、クラブ例会における数多くの重要な政治や行政の問題に関する公開討論によって明確にすること、これらの議論は、教養という利益となつてクラブの会員個人個人に備わるはずであること、クラブとしては決議によつていかなる行動も起こさないか、さもなければ、提示された問題についてどちらの側にもつかないことを、勧告したい。

この方法を取るによつて、シカゴ・ロータリークラブはいかなる議論にもクラブとして巻き込まれることなく、これらの会員個人個人が指導者となつているシカゴの実業界の対応を通じて、個々の会員にとつて一般的な教育をする上での素晴らしい機関となることを、調査委員会は確信している。

第11章 世界市民

1. 国際奉仕

1921年のエンジンバラ大会において、ロータリーの国際奉仕プログラム「奉仕の理想に結ばれた実業人と専門職業人の世界的親交によって国際間の理解と親善と平和を推進すること」が付け加えられて、現行のロータリーの綱領第9条となった。

綱領第6条が採用される何年も前から、すでにロータリーは国際的な組織になっていた。その世界中への急速な広がりは、近代技術や近代産業が距離の概念を超えて世界を一つの広い地域社会と化し、いつまでも他の国々の影響を受けずに留まる運命にありえない大きな世界の流れの一部になったということを意味している。1921年に、83,150名の会員を擁する1,243のロータリークラブが、地球上に散在していたものが、1933年には、147,000名以上の会員と3,603のロータリークラブに

膨れ上がった。ロータリーは真の国際組織であり、その国際大会は小型の国際連盟総会にも等しい。その事務局は国際連盟の事務局と同じようなものであり、会員は多くの国の国民にも例えられよう。彼らは国境を超えてお互いに連絡しあい、共通の目的を推進するために、世界中で互いに協力し合っているのである。

多くのロータリアンが、国際的な平和と善意を促進するという構造と目的に対して、自らを見事に適応させた活動を展開しているので、それは別に不思議なことではない。ロータリーから出される文書は、この分野に関する提案やプログラムや要望で満ち溢れている。社会奉仕と同じような国際奉仕の奉仕理念そのものを考え直されなければならないし、ロータリーの主要な目的との関連性や、ロータリー活動を通じて行う目標を明確に設定し、それを達成する可能性についてバランスを取っていかなければならない。このようにして、つい最近まで最も弱いと言われてきた国際奉仕は、ロータリーの重要な活動となってきた。しかし未だに大多数のロータリアンは、社会奉仕の活動で慈善などの接点を通じて逃れたように、国際奉仕

の活動において何を接点として逃れればいいのか分からない段階に留まっているのである。社会奉仕は、ロータリーが引き受けることができない、また引き受けるべきでない、ロータリーの根本的な性質や目的と異なった多くの活動を、その活動の中に巧みに組み入れてきた。それに比べると、国際奉仕は、まったく言ってもいいほどそのような努力はしていない。国々の間の平和と善意への漠然とした憧れに対して、あちらこちらのロータリークラブの夢や英知が述べられ、あれやこれやの様々な活動となって現れてきている。これらの活動は、心を打つような方針について、その資料を出せないばかりでなく、この分野において、不適切な方向に外れて勝手に広がっていかないように決議^①を表明することを国際ロータリーに迫ったような、大切なことを未だ見つけ出せずにいるのである。

RIのパンフレットである国際奉仕活動プログラム（1931年4月）には、様々なロータリークラブの国際奉仕活動が、7ページにわたって収録されているが、綱領第9条の実現を促進するための具体的な方法として、何をなすべきかという統一見解も計画も共通の概念もまったく表明されて

いない。幾つかのロータリークラブは、彼らの地域社会に住んでいる少数民族の生活と習慣に関するプログラムを取り上げたり、外国人の卓話者による講演を実施している。また他のクラブでは、家庭に外国人学生を招待したり、外国人学生によるプログラムを取り上げている。またあるクラブは、地域社会の様々な国のグループを代表者として構成される、国際的な会議を設けることを援助している。あるクラブは、外国の領事を卓話者として招待している。多くのクラブは、外国の他のクラブとの相互訪問やバーナーの交換を行って国際理解を深めているし、青少年活動や社会奉仕活動を組み合わせて、国際的な感覚を持ったプログラムや活動を行っている。国際奉仕活動が、他の国々からの情報を広め、心の底からの理解を深める目的を持っていることは、一般的に了承されているもの、これらのことをどのようにすれば最もうまくいくか、政治的や社会的にどのように関わるべきかについては、ほとんど了解が得られていない。

それでは、国際奉仕は、どのようにすれば真の意義を持つようになるのでしょうか。この質問に答えるには、一方ではロータリーの性質と潜在能

力に対する一般的な考え方について言及すると共に、他方では国際関係の性格と問題点に対する考え方について言及しなくてはならない。親睦と職業奉仕に貢献する職業上の指導者として事業に影響を及ぼしている限り、ロータリアンは国際関係に対しても、明らかに関心を抱いているはずであり、また抱くべきであって、さらに今の時代には、ロータリアンは、いろいろな目に見える、または目に見えないやり方で、事業に対してしばしば重大かつ深刻な影響を与えているのである。通常、実業家は戦争によって金を儲けると言われており、その理由は、現代の戦争はしばしば実業家が欲張った結果として引き起こされると言われているが、実際には、事業家のグループが、危機状態にある戦争に対して、愛国者や外交官のように、決断を要する役割を果たすことは稀であり、長い年月にわたって論争を続けてきたように、政府の方針に対して影響を与えることを通じて、なんとか役割を果たしているに過ぎない。

普通、実業家は戦争の余波を受けて、現在表面化している大きな痛手よりも、さらに大きな損害を受けることは間違いない。実業家は、政府が発

注する軍需物資、軍服、装備、食料品等の形のあるものを即時納めることによつて、戦争による利益を簡単に享受することができるものの、政治と経済の関係があまりにも複雑に絡んだ結果として起こる戦争と、それによつて蒙る損失との直接的な関係がどうなるかについて、いつも簡単に理解しているわけではない。しかし、いずれにせよ、現在のほとんどの事業家たち、特にアメリカの事業家たちは、国際的な関連から自分たちの事業を考へたり、ボスニア・ヘルツェゴビナのセルビア人の不満とアイオワの養豚事業や、満州の政局とニューヨークの絹産業や、クレムリンのパーティーの言い争いとオレゴンの材木事業との係わり合いが、微妙で複雑な因果関係の原因となると考へることには慣れていないのである。

平均的な市民は、自分の事業と戦争との密接な関係について、深刻に考へる習慣を身につけていないばかりでなく、現実的にはつきりと国際間の平和の問題について考へることは殆どないだろう。戦争を回避することこそ、西欧文明が別の大きな国際的な混乱に耐えることができるかどうかという疑問を晴らす上で、20世紀の国際政治の中心となる問題なのである。

しかしそこには、戦争状態とは直接関連しない、平均的な市民が疑いや誤解や先入観や迷信などに包まれて行動する可能性を持った、国際的な競争や協力などのその他の問題が数多く存在する。これは、個人個人が、職業的また非職業的な活動に関心を集中することが大切なことであつて、大きな関心を抱いていないと思われるその他の問題や活動や状況や国際的な内外の関係には、無関心を装うことが大切であるという、奇妙で非難すべき態度以外の何ものでもない。1914年以来、国際的な問題に対する一般的な関心が急速に高まってきたにもかかわらず、そのような問題は非常に複雑な上に、遠隔の地で起つたことであり、見知らぬ他人のことであり、敵になる可能性もある一定の距離を持った外国人の問題なので、国際的な問題に人々の関心を向けることは特に難しいというのが現実の姿である。国際理解と善意を進めていく上で、無関心を装うことに慣れることは、あらゆる努力を妨げる最初の大きな障害であり、愛国心に凝り固まつた狭い先入観は、更に大きな障害でもある。この二つの難題は、双方とも、多くのロータリアンが国際奉仕を追求していく上で、ほとんど避けて通ること

ができない障害として、立ちほだかっているのかも知れない。

各国の経済的相互依存の強化

国際協力と平和を促進するために計画されたロータリー活動を実践するために、最も現実的に即した出発点は、国際的な経済関係とそれぞれの地域における事業の間に関連性を持たせることである。産業革命が始まって以来、世界中のすべての品物とサービスは未曾有の規模で交換されて、近隣同士の繁栄や幸福は、偏に、地球上のすべての品物の取引と価格という複雑な絆に依存せざるを得ないという、一つの巨大な世界経済の中に組み込まれてしまった。世界市場に直接関係する事業に携わっているロータリアンは、当然のことながら、この事実を充分に認識しているはずである。しかし、国内や地域的な市場にしか関わっていない大多数のロータリアンにとっては、一見したところ離れた地域の出来事のように思われる国際経済が、自分自身や自分の地域社会の上に影響を与えることに気づくのは、か

なり難しいことである。

しかし、これらの問題に対して如何に建設的で、有為な考え方であったとしても、専門家たちからは最悪に理解され、普通の人たちからは不可解な謎と思われるような、複雑な状況を集中的に調査することが必要となつてくる。具体的で身近な例をあげると、現在も尾を引いている戦時債権の問題がある。金の大量移動による国際金融と国際取引に及ぼす影響や、商品やサービスの移動による国境を超えた外国との交流は、すべての経済学者や一部の政治家にとつては至極当たり前のことである。しかし、「通りがかりの人」にとつては、そのような政府間の義務と、彼らの福祉や豊かさとの間にはまったく関係がないにもかかわらず、もしアメリカ合衆国政府が、ヨーロッパから支払ってもらふことに失敗すれば、自分たちが高い税金を負担しなければならなくなるのは間違いないと思つている。フランスがたくさんの金を所有しており、例えその意思があつたとしても、それをアメリカに輸送できない理由を知つていたとしても、国際経済や国際政治については何も知らないのである。彼らは、単なる迷信や誤つた考え方や

誤解などという素晴らしい知識を持つているに過ぎないのであって、初步の経済学の手ほどきを受ける機会を持たない限り、疑問となる問題点について知的な意見を述べる素地はないのである。この「通りがかりの人」こそ、平均的な実業家に他ならない。国際奉仕に関するロータリーの適切なプログラムは、これらの難かしい問題を現実に処理するために、例えば政治家やジャーナリストや実業家の能力の欠如から、彼ら自身の事業が破産に追い込まれたとしても、ロータリアンは時間と忍耐の続く限り容易に理解するための特別な訓練を重ねながら、数々の複雑な問題に対して、思慮深く注意深い研究をすることが要求されているのである。ここにロータリーの教育を語る上での、最も難しい問題がある。

2. ニュー・デール政策

さし当たって、その問題に関して納得できるような意見を形作ることが如何に難しくても、その複雑な問題に対して背を向けることは、実業家に

とっては極めて簡単なことかも知れない。ニュー・デール政策は、新しい関係と新しい社会の視野に慣れるように、自らの考え方を変えた新しい活動に挑戦することを提案するものである。現実には、政治家が国内経済を回復させようとする積極的なプログラムに、そんなに熱心に没頭しなければならなかった理由の一つは、例え僅かでも国際的な分野に最善の努力を払った見返りとして、何かを具体的に完成させたという、満足感が必要だったからとも言えよう。

「世の中の煩わしいことから逃れて、家でじっとしている方がよっぽどいい」という悲鳴は、この国にある幾つかの非常に影響力を及ぼす団体だけからあがっているだけではなく、ロータリークラブがあるすべての他の国も、同じ状況にあるといえよう。自由貿易や国際協力などという伝統的な偉大な遺産の幾つかでさえも、経済的な国粹主義の流れの中に、一瞬のうちには飲み込まれようとしている。従って、ロータリーがこの流れに翻弄された結果、国際的な国粹主義の背後に横たわっている問題にかき消されてしまつて、国際ロータリーの綱領第6条が単なる崇高なお題目に終わる

ことは、火を見るよりも明らかである。

さらに、それに反論するか細かい声は、国の封じ込め政策や、他の国家集団では必要とされ熱望されているものの、その実、あまり重要とは言えない感情的な愛国心のたぐいの大きなうねりの中に、かき消されてしまっている。我々の心の奥に秘められているこのか細かい声は、皆がよく知っているように、結局は我々の複雑な産業文明の中では、人の金を使って、地域の安定した幸福と繁栄を達成することはできないということ、我々に語り掛けているのである。20世紀における西欧諸国の制度は、西欧文明を生き延びさせることと、愛国心を主張して国益を高めることを追求することとは両立しないという、発展の段階に到達したのである。

調査委員会は、シカゴ・ロータリークラブのようなロータリークラブが、国家的な活動に関して上記のような提案をすることが、最も効果的な方法であると考えている。会員は偏見に囚われず、現在では多数派とは言えない人たちを含めた、両方の立場の人たちの言い分を聞く機会を提供して奉仕すべきである。ロータリーの活動は、世界が繁栄するという僅かに残さ

れた望みが絶ち切られことを心配している多くの学者の意見によって、方針や心構えに重大な影響を受けている会員に対処したり、特に現時点における、世界中の諸国間の経済的相互依存を高めたりすることよりも、ずっと大切な、国際協調と国際協力の基本となる貴重な奉仕を行うことができるのである。

もしシカゴ・ロータリークラブが、この解決法を探したいと思うのならば、すでに調査委員会は、第10章において同じような提案をしたはずである。クラブは、政治的なことだと解釈され兼ねないすべての事を話したり、行おうとする時、必ず起こってくる金縛りの状態から自らを解き放つ必要がある、クラブが論争となる対象から逃げ続けている限り、会員が直面している最も重要な問題を処理することは不可能に違いない。さらに、委員会が、自らが対処すべき方法をこのように提案しなければならぬと言ふことは、とりもなおさず、クラブがクラブとして行動をとったり、プログラム自身を認めるような状況下にはないことを意味しているのである。

3. 世界は一つ

シカゴ・ロータリークラブの国際奉仕活動は、今まで述べてきたような問題点や難かしさを反映したものでなければならぬ。クラブは、外国の君主の訪問や歓迎などのようなものを含めた、数多くの一般的な国際親善の行事を進めてきた。沢山の旗を立てたり、祝砲を撃つたりしたが、国際問題の関連性を十分に把握してゐるわけではない。

これをより深めていくために多くの提案が出された。その一つは、シカゴ・ロータリークラブによる、産業界の若者の国際交流への参加であるが、クラブの統制力の低下によって、現在このプログラムは中止されている。

1931年に、国際奉仕委員会は、外国の高級外交官を特別な名誉会員として、入会金や会費や出席義務を免除して、ロータリーに招聘することを理事会に提案し、その提案は承認された。

もしクラブが、一方や他方から支持するように頼まれる恐れなしに、国際的な諸問題の争点となるような議論を聞くことができたり、まったく率

直で自由に議論することが出来るロータリアンとしての立場の外国の代表者を会員として持つていけば、それによって得られるものは、確かに大きいものがある。会員がシカゴに住んでいる外国の学生を昼食例会に招待したり、家庭で歓迎したりするという、国際奉仕委員会が計画したプログラムも、これと同様に興味深い将来性を持つものである。1932年に小委員会からのハガキによるアンケートに応えた53名の会員が、88名の外国人学生の昼食代を払うことに同意し、23名の会員が46名の外国人学生を家庭で世話することを了承した。そのような接触を頻繁に繰り返すことは、外国の正式な代表ではなく、その国のスポークスマンとは必ずしも一致するとは限らない、進歩的でリベラルな若者の考え方を知ることができ、多くの機会があることを示すものである。

さらに、調査委員会のアンケートに対する回答の中であるロータリアンが指摘したように、こういった団体の価値は、外国の学生にとって大きいものかもしれない。学問の探求に加えて、彼らは一般的な学問では学ぶことが不可能な、アメリカのやり方や風俗習慣や、アメリカの実業家の考え

方に至る知識まで学び取ることができるのである。こういった付き合いは、大都會に住む外国の若者にとって、特に得がたい経験とも言えよう。

質問の回答の中に、これに関連する幾つかの意見があつた。「クラブが特別なやり方を示せば、もつと効果的な国際奉仕が可能である」「すべての人種や国民や産業界の間にある、憎しみや愚かな行動を止めることに力を注ぐべきである」という意見が何人かから寄せられた。「我々全員で、直ちに世界的な活動を積極的に進めるべきである」とぎつづくばらんに述べる者がいる一方で、これに反対する意見もほぼ同じくらいあつた。「一般的に言えば、私は反対だ。社会主義や国際主義に進もうとする傾向は避けるべきだと思ふ」「これ以上、国際主義や平和主義を強調する必要はない。市民権の乱用を正す方向に努力するべきである」「アメリカ主義を遵守する国民として、他の国の人々の問題に不必要な干渉をすべきではない」

もちろん、これらのいろいろな反応において、シカゴのロータリアンが、全体的なアメリカ人よりも、多くの国際感覚を示しているわけではないので、調査委員会は、深い愛国心や、複雑で一見したところ関係の薄い問題

に深くかわらうとしない性格が、簡単に直ることはない、さして大きな期待を抱いているわけではない。しかし、調査委員会は、以下の提案を国際奉仕委員会とクラブ理事会が考慮するように提案したい。

1. 国際奉仕を職業奉仕と統合させることによつて、より大きな成果があげられる。ロータリアンの事業に対する関心は、国際的な諸問題の考え方に対する最も論理的な出発点となるものである。プログラムと活動は、シカゴ地域における各々の主要産業に対して、戦時債券、関税、金本位制、為替制限、出入国管理、軍備などのような問題に対する知識を、会員に教育する目的で進めるべきである。

2. 国際的な問題に対する外国の考え方を理解するために、シカゴにある多くの国際的な団体を育成することによつて、付き合いを深めていくべきである。それぞれの国における現在および将来の指導者の可能性を秘めている、外国の有力な外交官を名誉会員として入会させたり、学生を家庭に招待することは、この分野における大切な

活動である。

3. シカゴ国際関係協議会や国際連盟協会などのような、国際的な活動に関心のあるシカゴの他の組織との協力が必要であり、一般的なクラブ・プログラムのために、国際関係の様々な分野における公平な専門家ではあるが、どのような国や主義の宣伝者や代弁者でもない専門家を、講演者として招聘する努力が必要である。

4. シカゴを訪れる外国の来訪者と接触を持つことによって、体系的な価値を開発していこうという、確実な歩みが必要である。単に、ロータリアンが彼らと会って、彼らから学ぶだけではなく、彼らがシカゴの事業および専門職種に携わる人と出会う機会を活かして、外国人たちと同等な価値を共有すべきである。

5. アメリカ合衆国の外交方針についての、集団的なフォーラムや議論が行われるべきであり、国際奉仕に関する昼食例会プログラムこそ、最も効果的な可能性を持った集まりだという考え方で、感情的な口論ではなく、それぞれの考え方を話し合う討論として、徹底的

に論議されるべきである。ロータリー・クラブとして、このプログラムのやり方を採用するためには、クラブが正式な活動として要請したり、この考え方に対する反対などの、クラブの万一のことを考えて、たぶん、正式に細則を改正した方がよいと思われる。ロータリーの綱領にあるように、もう一つの奉仕の目標である自らの職業集団に知的で活力ある指導力を備えるために、よく修練を積んだ、実業と専門職種のロータリアンを送り込むことが必要である。

6. 現在不幸な状態にある世界の地域社会における国際奉仕活動は、我々が言い続けてきたように、基本的に、情熱と慣性の両方の力である局地偏重主義に打ち勝ち、すべての国の指導者たちに世界は唯一つであり、世界の市民であるという考え方を植え付けることによつてのみ、その効果が発揮できるのである。

第12章 要約、結論および参考文献一覧

この報告書の幾つかの重要な点を単に要約するだけではなく、今までと同じように調査委員会が警告を発することが必要だと思う。この要約は、クラブ活動の全体のプログラムを念頭において読んではならない。この報告書の重要性は、多くの話題のそれぞれについて議論して、特別な結論や勧告を提案したものではないと調査委員会は考えており、そのような特別の勧告は、すでに説明や提案などの方法で数多く為されてきたはずである。

社会科学者グループとして公正無私な立場にある委員会、ロータリーの一般的な性質や機能、特にシカゴ・ロータリークラブの一般的な活動を現代の実業界や経済界の立場からを分析することを試みた。この分析は、可能な限りクラブを再構築し方向付けを正すように指導すると共に、基本に立ち返って考える力をつけることによって、確実な根本的な原則を提示してもらおうことを意図したものである。我々の分析によると、これらの原

則や管理を実施によって得られる特定の成果は、クラブの会員と事務局の努力いかんにかかっている。

我々の仕事は、この原則を彼らに公式に解説することにある。我々は、この分析の全貌を、要約の形で説明できるとは考えておらず、我々が試みた解釈を総合的に理解することによって、全体的に考えなければならぬ。従って、調査委員会は、これから述べようとする要約が、報告書の本文において、一般的な分析をする背景となった、クラブ活動の基本にたちかえることなく、報告書全体を評価する基本として使われないことを希望するものである。

第1章……ロータリーの曙

我々は、シカゴ・ロータリークラブやロータリー活動の歴史について、毎年の詳細を述べることを避け、国際ロータリーの源となり、その成長のモデルであるシカゴ・ロータリークラブの源となった活力と思われるもの

を強調したつもりである。ロータリーは、実業家たちの暖かな個人的関係や、共に活動することによって満足感をもたらささない、抑制の利かない非人間的で、時には情け容赦のない事業競争が繰り広げられている時代に産声を上げた。活動の歴史は、相互の利益と親睦が最初のきっかけであり、ロータリーの目的である利益を覆い隠すために設けられたと思われる奉仕は、後になって考え出されて推し進められたことが、はっきりと分かる。

我々はまた、最初にできた唯一のクラブとしてのシカゴ・ロータリークラブと、国際ロータリーとその事務局の間に常に介在する奇妙な関係についても指摘した。この歴史の調査から明らかになった付随的な特別の提案は、毎年毎年の進歩の詳細として利用することができるので、クラブは活動年次報告書を出版することを実施すべきである。

第2章…シカゴロータリアン

この章では、シカゴにおける典型的なロータリアン像を描いてみた。は

えぬきのアメリカ人の実業家であり、結婚した所帯主で、適度に富裕であり、政治的には保守的で共和党支持者であることが分かる。会員資格が、シカゴの市民を代表したものであるという考え方をまったく持っていないし、シカゴ実業界全体の代表者でもない。しかし、会員は比較的質がそろっており、大企業の指導者としてシカゴをある程度代表するものであつて、ロータリー理念を促進するために、共に考え行動することのできる人たちである。シカゴのロータリアンは親睦と事業上の付き合いをするためにロータリーに入っている。他のクラブは近隣で事業を営む人たちを対象としているのに対して、ロータリーは市全体の事業の経営指導者を対象としているので、ロータリーが他の職業分類クラブと競合することはあり得ない。

第3章…ロータリーの役割

ロータリーの精神的な活動は、様々な人々に対する、様々な事柄に影響を与えている。ロータリーの本質は、選り抜かれた実業家の組織であると

いう現実に根ざすものであり、その社会的な意義は、現代社会の実業家の置かれている立場を通じて見出す必要がある。ロータリー組織の最初のきっかけは、親睦と利益であった。奉仕という考え方は、親睦だけでは社会に対して効果的に奉仕をすることに貢献しないとか、地域社会に奉仕するための指導力を持った団体であるという方向づけを、親睦という形で外部に示すべきであるといった、自らを反省する形として後から加えざるを得なくなった考え方である。心理的に考えた奉仕理念とは、限りなき利益の追求に対する良心の呵責を映し出したものである。奉仕のきっかけと利益のきっかけを融和させる問題は、お互い補い合うというよりはむしろ正反對な問題なので、それぞれに関して、明らかな同じような崇高な動機づけを考えない限り解決しない問題である。現在の世界のニーズは、社会統制と経済計画を達成するための集団的な指導力を求めている。ここに、他どのような組織よりも、その指導力を発揮するのに適した、特異な構造と構成員を持ち、奉仕理念を現実的かつ建設的に実行するロータリーの機会が存在するのである。

第4章…会員身分の問題点

ここには、シカゴ・ロータリークラブが大規模であるが故、引き起こされた数々の問題が浮かび上がってくる。クラブの規模を小さくする必要はないが、単なる会員の数よりもっと大切なことである、会員に要求される質と才能を確保するために、1,000人よりも多い会員数にするような努力はすべきではないというような、いろいろな考え方を提案した。目標とすべきゴールは、会員を事業および専門職種の指導者の代表者として養成することである。様々な会員資格や、シカゴ・ロータリークラブの選考方法は、この基準に基づいたものであつて、その内容を評価したい。クラブは、新しい指導者が入会する余地を作るために、年度末に、正会員の職業分類から引退会員に移行するような、何等かの方法を講じる可能性を考へることを提案する。シカゴのロータリアンの高齢化は、組織に重大な危険を及ぼすとは思われない。ジュニア・ロータリークラブの設立は無理としても、ロータリーの婦人たちには、有益な奉仕をする大きな機会が与え

られるべきであることを提案したい。入退会の割合が高いことが議論されたが、出席要請を緩和することを提案するものである。

第5章…構造上の問題点

ここでは、シカゴの近隣ロータリークラブの設立の問題について、現状における論争と、報告書で採用された全体としての分析の一般方針との両面から議論した。ロータリーの会員身分の基本が地理的なものというよりは職業的なものであることや、ロータリーの会員の基本となる地域限界と行政が管理上定義した地域限界との間に、納得すべき妥協点を見つけることが不可能であることや、単独の都市のクラブを通じて、大都市圏の地域社会の実業界を指導する必要性があること等から、近隣クラブがまったく設立されなかったことが判明した。地方分権や地理上や機能上などから、様々な可能性が議論されたり、評価されたりしたが、断定的な提案をすることは、会員の多くから異議を受けることになり兼ねないので、差し控え

た。

第6章…組織の問題点

シカゴ・ロータリークラブの構造と機能との間の関係を、目標設定計画に基づいて検討した。実現可能な再建計画は、現在立案中の修正案として提示する予定である。確定的な具体的提案は、委員会制度を熟慮した上で提案するつもりである。

第7章…クラブ奉仕

役員選挙に関する現在の方法を分析した結果、全般的に問題がないことが判明した。クラブ事務局と職員もまた検討の結果、同様に効果的に機能していることが分かった。しかし、クラブの小型図書館を作る可能性を考慮することを提案した。ロータリーの出版物と広報の問題点は、それぞれの項目の下で同様に議論した。

第8章…親睦奉仕

ここでは、プログラムの問題点と共に、一般的な親睦の問題について議論した。親睦は、それ自体が最終の目的だとは考えられないが、ロータリーの他の目的や目標と関連づけねばならないことを指摘した。さらに、クラブのプログラムが、会員に共通の目標に挑むために共に活動しているという精神的・心理的な満足感を与えて、過去に批判を受けたような、若気の至りのような元気を必要としない、深い親睦の出発点になる結果を必然的に生むことにつながることを指摘した。プログラムはクラブ奉仕、親睦、事業上の指導力（職業奉仕）、市民への指導力（社会奉仕）、世界市民（国際奉仕）の機能の間でバランスが取れていること、純粹な娯楽のプログラムは避けること、形式的なことは最小限に減らすこと、5回の例会のうち1回は卓話者なしでもつぱら親睦に励むこと、もっと多くの卓話者を会員の中から抜擢すること、公開フォーラムの昼食例会や夕食例会をもつと

頻繁に開催すること等々を指摘した。

第9章…事業上の指導力

ここでは、職業奉仕の問題点を検討した。問題点は、現代社会において指導力を学ぶためには、集団的な技法をとる必要があること、実業界の問題点は個人個人の行動によっては解決されないこと、この指導力に対する集団的な研修を適用することは、ロータリーに与えられた一つの機会であることを論じた。現在、職業奉仕の置かれている漠然として矛盾に満ちた意味合いは、様々な批判を浴びており、職業奉仕の活動は様々な評価を受けていて、これらの活動は、非常に不満足な状態にあることが分かった。会員と地域社会の間で、率直で開かれたより良い取引を進めるように関心を向けることや、すべての職種における指導力を会員に体系的に学ばせる必要があることを主張した。政府と産業界が提携することは、ロータリーが備えている効果的な数々の指導力を、会員が発揮することを要請するも

のなので、ロータリーはニューデール政策に挑戦すべきであることを強調した。

第10章…市民への指導力

ここでは、ロータリーの様々な社会奉仕活動について議論した。決議34が、ロータリーの数多くの脱線を防げなかったことや、クラブ活動としてのほとんどの社会奉仕活動が、事業上の指導力の分野にあるロータリーの主要な目的とは無関係であることを述べた。シカゴ・ロータリークラブの慈善活動を検証した結果、この活動はロータリーの目的にも、シカゴの地域社会の社会奉仕のニーズにも関連性がないので、現在の形で続けるべきかどうかという問題を提起した。社会奉仕の分野における新しい機会は、専門家と相談した上で見つけ出し、国際ロータリーの決議34の原則に従って対応すべきである。この分野におけるロータリーの真の役割は、大多数の会員の関心を結集させて、他の機関がそれを取り上げる時点まで、ロ

ータークラブの継続的な義務としてではなく、すばやく実行に移すこと
によって、すでに、地域社会の他の団体によって適正に取り上げられてい
ないプロジェクトを開始することにある。社会的なニーズに適うという意
味から、個人主義が跋扈する現代の大都市圏という条件の下で、表に出
こない散発的な慈善活動であることを強調しておきたい。

行政の分野に属する、論争のある問題を扱うことに対する、クラブの明
らかな拒否反応が分析されて、もしクラブが議論を闘わせて特定の立場を
とれば、内部のグループ間の意見の相違が生じる恐れがあり、クラブが分
裂したり、重要な目的が妨げられる可能性があることが分かった。そこで、
再び、経済と政治活動の別々な流れを結合して、市民に対する指導力を発
揮するための事業上の指導力を備えることを必要とする、ニューディール
政策に対するの挑戦の問題がクラブの前に提示された。会員たちが、フォ
ーラムや討論のプログラムを通じて、市民の問題について、心を開いて現
實的に考えるように勧めると共に、争点となる政治問題を大胆に取り扱
べきであり、このプログラムを可能にするための特別な提案として、クラ

ブは、特定の政治的な、または政府に対する提案に対して賛成反対の立場を表明する決議を採用する状況の下にはないので、細則を改正すべきであることを提案した。

第11章：世界の市民

ここでは、綱領第6条の達成を目指すために国際ロータリーによって提示された国際奉仕活動に関して、シカゴ・ロータリークラブが、世界平和と協力を推進するために期待されている役割について議論した。世界平和と協力を推進するためのロータリーのプログラムが効果的であるのに対して、国際的な経済や金融の問題につきものの複雑さから、今や世界のあちこちで国家主義の力が強まっていることにも触れた。その一方で、国際的な事業協力によって活力を与える必要性や、ロータリーは閉鎖的な考え方や行動を捨てて、それぞれの業界において会員が効果的な指導力を発揮するように修練するという考え方と活動を進めなくてはならないことを強調

した。シカゴのロータリーを通じて、世界は一つであるという考え方を推し進めること、外国人にアメリカの実業家の考え方と習慣をよく理解してもらおうと共に、シカゴのロータリアンが外国人の物の見方を好意的に理解すべきであるなどの様々な特別な提案がなされた。

事業上の指導力、市民への指導力、世界市民の全体的な議論を通じて見受けられるように、たぶん、ロータリーが取らなければならない最も重要なステップは、我々を取り巻く、実業界や市民や世界に影響を及ぼす分野の問題に対して、活発に物怖じしないで挑戦すべきであるという、筋の通った考え方を推し進めていくことであろう。これは、クラブが、クラブ外部の様々な活動と提携しなかったとか、クラブが賛成や反対の意見を表明しなかったというよりは、むしろ、双方の意見を考えたり、報告を受ける機会がないままで、提案を公表しようとしたり、提携しようとしたことに、クラブの会員が反発したからである。

この成果を知的に達成しようと思えば、1年か2年かもつと長期間にわ

たつて実行していくプログラムを設定して、確実に体系的な追跡調査をすることが必要である。これは、決してクラブ例会を、すべて学術的なセミナーに変えることを意味するものではない。クラブ例会は変化に富んだものでなければならぬ。むしろプログラムは、選りすぐった重要な問題をすべての角度から体系的に検討するような一連のプログラムとして、1年か2年にわたつて会員に提供できるように配慮すべきであることを提案したい。

例えば、すべてのロータリアンに重大な影響を及ぼしている、課税の問題を取りあげるべきである。ほとんどすべての他の州と同じように、イリノイ州でも、公的な歳入のシステムの抜本的な改訂や、税收に関する地方自治体と州と連邦政府間の再配分をすべきであるというニーズがあることは間違いがない。この問題を考えることこそ、地方自治体や州や連邦政府の機能を検討する上で重要なことである。もしも、それぞれの場所が、その地域内で、彼らが続けていこうと考えている活動の費用に見合うだけの充分な税金を効果的に集めることができなければ、これらの活動は、税金

を効率的に集めることができる政府の手に移すか、税金を集める大きな機関でも作って、地方自治体に税金を分配する新しいシステムを考え出すか方法は残されていない。

これらの基礎的な問題は、広範囲にわたって可能な限り調査をすることが必要であり、その上一般的に言えることは、我々の社会政策を作りあげようとしているこれらの力は、好むと好まないに限らず、負担せざるを得ない人たちから、税金を取りたててきて、やりくりすることだけにしか、大きな関心を抱いていない、ほとんどまったく特殊なグループなのである。結論として言えることは、我々が選んだ議員が、財産税を減らし、消費税を採用し、所得税を増やすか減らすかの提案をしてもっと攻めたてるべきである。ロータリアンはどのように考えているのだろうか？ 実業界と政府の双方にとって重要な、このような問題を解決する指導力を備えているということは、どんな有名な権威者によっても証明することができなかった回答を引き合いにした、町の英雄による感情的な説明を、自分の考え方の基本として受け入れたり、のぞき窓のついた小さな家の持ち主に、表向き

のクレームをつけることと同じことである。批判的に解釈すれば、提案することによって最も利益を得ている階級は、僅かなマージンで動く相場師くらいのものである。町の英雄が、昼食例会で偉大なる出席を果たしているのは、疑いのない事実だし、「西部風の小さな灰色の家」が醸し出す雰囲気は、その名前が表す通り、それなりの情緒を秘めたものである。ロータリーの挑戦とは、このようなより重要で基本的な問題に自らを捧げることである。カンザスにおいて実施された、税金研究に関するクラブ・プログラムの話は魅力的なものである。州の商工会議所の後援の下で、州立大学の援助によって、13回の比較的短い講義が準備された。

トピック1の目的は、課税を研究するための背景を準備することであり、課税の詳しい段階についての事例は直接扱わなかったが、なぜ税金が取り立てられるかについて説明した。トピック2は、連邦、州、地方自治体の経費について説明した。トピック3は、連邦、州、地方自治体の税制につ

いて説明した。トピック4、5、6ではそれぞれ、財産税の起源、発達、現状についてその経過をたどった。トピック7、8では、所得税を取り上げた。トピック9では、生産税、消費税、事業税、販売税を取り上げた。トピック10では、ハイウエー税や特殊課税の問題の概略。トピック11では、相続税、人頭税、料金税、免許税を扱った。トピック12は、公費支出をコントロールする方法を分析し、トピック13は、全国税務協会のモデル税金計画の議論と、カンザスの税金問題の簡単な再検討をすることでこのシリーズの要約をした。

効果的な指導力の具体例

州内の200以上のグループが、この講義を体系的に受けたことが高く評価される。ある郡の農業組合の場合は、13週間にわたって毎土曜日の午後、郡裁判所の法廷の部屋に50人から100人の農場主を集めて実施

された。州内の105の郡と89の市にある、ロータリークラブ、アメリカン・リージョン、商工会議所、教職員団体、女性のクラブ、農業団体などの200以上の団体で構成されていた。このプログラムは、カンザス商工会議所のマネジャーの意見に従って、公正に設営されたので、成功を納めることができた。我々の目的として重要な点であるかどうかはわからないが、これらの議論の終わりに、参加者が結論として、消費税や所得税や固定資産税に反対する決議をした。現実には、彼らは課税の基礎的な問題を、このより包括的なやりかたで理解できたのかという疑問が投げかけられ、その点においては成功だったと言うのが、この特別な企画に参加した人々の強い感触であった。すべての職業に就いている何千人もの人々が、課税をよりよく理解し、彼がしなければならぬ特別な要請に対する指導力を発揮する、より多くの知識を持つことができた。

委員会が、日々の争点となる問題に直面することをロータリーに勧めるのは、この精神を持つことが必要だからである。

これらの問題を議論するために提案する親しみやすい方法は、様々な考

え方を持った資本家や労働者や消費者の代表者を連続的に登場させて、喋らせることである。この方法は派手でありしばしば有効である。その一方で、連続した講演者は、他の講演者によって提起された質問に答えずに、それぞれ自分の考え方だけを述べることで、現実的な議論にならないことがしばしば起こる。この点からは、双方の長所と短所を明快に指摘して、公平に分析することに慣れた人を見つけて、話題を選んで発表する方が、もっと効果的なものになるに違いない。

今回の報告書において、特定の一連の話題について議論することは適切なことだとは思わない。我々は、この報告書の幾つかの章の中で、事業や市民や世界に対する活動の分野における数多くの問題点を説明してきたし、それらの一つ一つは、ロータリアンの重大な関心呼び起こすに足るものものばかりである。プログラムの選択は、適切なクラブ委員会と相談した上で、ロータリークラブの役員と職員が適切に処理しなければならないし、また、国際ロータリーの役員は、事業と市民の諸問題に関して体系的に討論するための原案を提案しなければならない。

危機と変化に富んだ時代となり、多くの参考文献が出版される時代がやってきた。人々は、次から次に安価に出される小冊子の速さと力強さと手軽さに驚きすら感じる。事業や市民問題や世界の活動分野における重要な議論の出発点になるような、現在起こっているすべてのことに関する、重要な問題を議論する一連のパンフレットが出版されている。国内及び国際的な経済の問題をうまく書いたパンフレットも数多く出版されていて、さながら身近な見本市のような感がある。多くの場合は、これらのパンフレットや本の著者は、ロータリークラブの例会で個人的な見解を議論しようとしている当人たちであり、いずれにせよ、如何にして世の流れに挑戦し生き抜くかを説明できる人は、決して遠くにいるわけではない。

これら一連のパンフレットの幾つかは次のようなものである。”

Exploring the Times, アメリカ図書館協会出版、” **The Day and Hour Series,** ミネソタ大学出版部出版、” **The John Day Pamphlets,** ニューヨーク・ジョン・デイ社出版、” **Public Policy Pamphlets,** シカゴ大学出版部出版。ほとんどすべての場合、これらのパンフレット自身は、

さらに議論を進めるための基本となる問題点を述べたものであり、親しみやすい小型の本ではあるが、議論を重ねる上では権威を持った本である。

エピソード

ロータリーが抱える問題点は、現代産業文明が抱える特別な意味を持った問題点でもある。その文明の未来は、崩壊の恐れすらある世界的な危機状態にある経済や政治を、理性的で寛大な心で処理しようとしている実業界の指導者の能力いかんにかかっている。一般的にロータリークラブは、特にシカゴ・ロータリークラブは、親睦と事業上の付き合いによって名声と利益を得て、彼らが生活し働く職場や地域社会や国や世界全体で奉仕し、指導力を発揮するために共に集う、実業界の指導者の組織である。彼らが、理念と願望を込めて立ち向かおうとしている難題は、20世紀の文明の指導者たちすべてに共通した難題でもある。世界を救うことがロータリーの使命ではなく、社会に対して自らの義務を効果的に果たすために、事業の

経営者たちを訓練し、教育し、励ますことが、ロータリーの使命である。もしも世界を救おうと思うのならば、これらの義務を果たす以外に、昨年来の泥沼にアメリカを落とし入れ、将に西欧諸国を崩壊と荒廢にさらそうとしている、数多くの複雑な、経済や政治や社会問題を建設的に解決する方法はないであろう。実業家としてのロータリアンの義務と機会こそが、活動の最も重要な要因である。ロータリーは、広い可能性を持った考え方で事業上の指導力を伸ばし、この目的にかなった精神で会員を教育する活動力を集中することによって、その使命を最も効果的に果たすことができるのである。

この報告書の必要性を予感したシカゴ・ロータリークラブ理事会の一致した考え方に対して、この分析がロータリー理念をより実用的なものにすることに、いささかでも貢献することができ、この調査報告書を書いたものとして期待している。調査アンケートの回答の意見から判断すると、少数のシカゴのロータリアンは、この期待とは裏腹に、たぶん、調査の結果を好意的には受け取っていないと思われる。ロータリアンも他の

人々と同様に、とりわけ学問的な理論家の集団によって調査されることを楽しいことだとは思っていない。これに関して、在籍 20 年のあるロータリアンは次のように述べている。

ロータリーのことは、放っておいてもらいたいというのが、私の考え方である。なぜ、こんな調査が必要なのだろうか？ 多くの団体が、お人よしの馬鹿どもによって潰されてきた！ 私の意見では、ロータリークラブがシカゴ大学やその他の大学を調査する方が、よっぽど適している。

別のロータリアンは多少がっかりして、不満を述べている。

アンケートを作っただけではあき足らず、多くの回答までさせられることは肉体的にもうんざりするものである。国は民主主義でいくべきだが、ロータリーがそれに縛られることには賛成できない。

しかし、ある古い会員は希望を抱いている。

化学の研究所と同じように、ロータリーの精神にも、科学的な心構えを採る必要があると思う。すべての変化は、実験であると考えるべきであり、古くからある伝統や信念を破るのは最小限に抑えるような方法で試されるべきである。その一方で、ロータリーには、神聖で犯してはならないことなどは何もない。繰り返して実験を行うことが、決められている規則は時代遅れなものであるという合理的な考え方に、満足感を与えることになるであろう。しかし、そのような事柄は、どのような進歩的な工場でも、古い機械を大切にすると同じように、がらくたの山として処理することは慎重にする必要がある。組織の設立は、たちまち名誉欲にかられた人々の興味を惹く。例えば、我々が信じたり習慣としていたる教育や宗教や政治や専門職種などの領域の一部は、いかに古い伝統に縛られており、実業は、それに比べると少しは進歩的なので、伝統に縛られることは少ない。我々

には、若者に特有な冷酷さがもつと必要である。

言うまでもなく、調査委員会は、この心構えこそが、望ましい結果をもたらすであろうという期待を抱いている。彼らが直ちにアメリカ合衆国を肅清するような改革を行う先見の明を持っているかどうかは別にして、調査を引き受けるに当たって、クラブ理事会がその正当性を充分評価し、調査が開始されてからは、事態が急速に推移することによって、この期待は徐々に高まっていった。事実、政府と実業家の間の公式な関係を変化させるためには、若干、革命家が不足していた。芽生えるには長い間かかったが、以前は決して社会機構の中で公式な関係を持ったことがなかった、実業家と労働者と地域社会の間における新しい考え方や心構えや理解を通じて、その関係が実を結んだのである。新しい条件の考え方や新しい心構えに順応することを渋っている人たちは、学究的な社会科学者の作品をけなそうとするものである。もしこの調査が、奉仕をする上で、少なからぬ価

値を持つものならば、前向きな事業上の指導者たちや学者や学生たちに、新しい心構えを作り上げる影響を与えることは明らかである。

この報告書は、ロータリー活動を成長させるためには、現在のやり方を再教育しなければならぬことを一貫して予告するものである。我々は今、あらゆる意味合いから、ロータリーが基本的な使命と目標と考え方を公式に採用する場に立ち会ったと、誇張なく言うことができる。社会科学者と実業界の指導者の協力が続く限り、この報告書が、我々経済人の生活を発展成長させるシンボルとして役立ち、ポール・ハリスと過去二、三世紀の間の彼の同僚たちによって、暖められてきた夢をさらに適切に実現するために、少しでも建設的な活動に貢献できることこそ、調査委員会が希望するところである。

アンケート

クラブ会員へお願い

このアンケートの目的は、クラブ会員の社会的地位と心構えを考慮した上で、正確な事実に基づいた情報と意見を求めるために、シカゴロータリークラブの調査を引き受けたシカゴ大学調査委員会の使用に供するものである。

個々の回答は記録に留めず、受け取った情報は、匿名のまま保管されるので、アンケートに名前および署名は不必要である。

調査の目的は誉めたり批評を加えたりすることではなく、会員と地域社会にクラブの奉仕の機会を増大させるために活用する情報を収集する目的で実施するので、質問にできるだけ充分かつ率直に答えることが必要である。以下の質問に関して、腹藏なく回答するように協力を要請する。

特別な注意を要する質問2、14、16、25—36、61に関しては、最後のページにある「意見」の項に、自由に意見を記入すること。

注：記入には若干の時間が必要であるが、これは、調査のために必要な情報を確保できる民主主義的な方法である。これらの質問に注意深く回答し、アンケートをなるべく早く返却すること。

アンケートおよび回答一覧表

1. シカゴ・ロータリークラブの会員として在籍している年数の一番近いものに、下線を引きなさい。

1—8. 40% 2—6. 42% 3—7 4. 0% 4—4. 20%

5—6. 91% 6—7. 16% 8—4. 20% 10—11. 36%

15—8. 40% 20—3. 70% 25—4. 94%

無回答—26. 91%。

2. ロータリーに入会した最も大きな理由は何か？

実業家や専門職種の人との付き合いによって利益を得るため 79

新しい友人を得るため 198

社会的な付き合いによって人間性を高めるため 106

クラブ活動を通じて個人奉仕をするため 128

(もし上の質問以外の理由があれば、どんな意見でも記入すること)

3. なぜ他の職業分類クラブの中から、ロータリーを選んで入会したか？

4. ロータリーの付き合いは、あなたの事業に著しい増収をもたらしたか？

はい 17.28% いいえ 77.28% 無回答 5.43%

5. ロータリーの付き合いは、あなたの親しい個人的な友人の数を著しく増やしたか？

はい 78.02% いいえ 21.48% 無回答 0.49%

6. シカゴ・ロータリークラブは、ロータリー理念を会員に充分精通させていると思うか？

はい 68.40% いいえ 30.86% 無回答 0.74%

7. 会員になった時、あなたはロータリーの歓迎に満足したか？

はい 86.91% いいえ 11.36% 無回答 1.73%

8. 推薦者は、あなたが知り合いを得るための責任を果たしたか？

はい 60.49% いいえ 36.54% 無回答 2.96%

9. あなた自身は、知り合いを得るために積極的な努力をしたか？

はい 71.36% いいえ 27.40% 無回答 1.23%

10. 出席要請が厳しすぎると思うか？

はい 25.19% いいえ 72.84% 無回答 1.98%

11. 委員会に出席したクレジットを昼食例会への出席補填として認めるよ
うに規約を改正すべきか？

はい 39.26% いいえ 56.79% 無回答 3.95%

12. ローターリーはあなたの時間を非常に多く要求すると思う？

はい 11.36% いいえ 86.42% 無回答 2.22%

13. 委員会への奉仕をどう考えるか？

義務である 32.84%

特権である 43.46%

断ることができる活動である 15.06%

14. 昼食例会のプログラムの中で一番価値があると思うものは何か？

娯楽 65

教育的情報 233

親睦

201

出席クレジット

21

15. ローターリーの目的や理念に貢献するようなプログラムをもっと増やすことに賛成か？

はい 34.07% いいえ 61.23% 無回答 4.69%

16. どのようなタイプのプログラムに変えることを望んでいるか？

17. もっと教育的な機会が多ければ、もっと多くの時間を快くロータリーに捧げるか？

はい 45.93% いいえ 47.65% 無回答 6.42%

18. もっと娯楽の機会が多ければ、もっと多くの時間をロータリーに捧げるか？

はい 16.30% いいえ 76.30% 無回答 7.41%

19. もっとロータリーの目的のために役立つ奉仕や、個人的な貢献をする機会が多ければ、もっと多くの時間を快くロータリーに捧げるか？

はい 46.91% いいえ 40.74% 無回答 12.35%

20. 今までに募金箱に寄付したことがあるか？

はい 66.91% いいえ 30.1% 無回答 2.96%

21. 募金箱を継続することに賛成か？

はい 73.09% いいえ 17.28% 無回答 9.63%

22. あなたはどの種類の団体の会員か？

(1) 市民団体	41.73%	(6) 労働団体	1.98%
(2) 公共福祉団体	20.94%	(7) 愛国団体	20.49%
(3) 社交クラブ	49.63%	(8) 専門職種組合	25.68%
(4) 青少年活動団体	15.56%	(9) 商業組合	51.60%

(5) 友愛団体 54.07% (10) 宗教組織 39.26%

23. これらのどの組織を通じて、ロータリー理念を外界に伝えたか？

市民団体 13.58% 公共福祉団体 10.37%

社交クラブ 12.84% 青少年活動団体 8.15%

友愛団体 8.89% 労働団体 0.49%

愛国団体 4.94% 専門職組合 15.56%

商業組合 32.35% 宗教組織 14.32%

24. あなたにとって、ロータリーとこれらの組織とどちらが重要か？

ロータリーが重要 24.20%

ロータリーが重要ではない 50.37%

無回答 25.43%

25. 様々な事業や専門職種の最も著名な代表者だけを会員として選ぶのには、小さいクラブの方が、大きなクラブより望ましいと思うか？

はい 27.16% いいえ 68.15% 無回答 4.69%

26. 親クラブの会員として、クラブ内で子クラブを設立する計画を通じて、シカゴの近隣地域にクラブの奉仕活動を広げていこうという試みは効果的だと思うか？

はい 29.14% いいえ 63.70% 無回答 7.16%

27. 親クラブ内にある近隣地域を基準にして、確執と競争を避けた上で、複数の職業分類を認めることに賛成か？（近隣地域毎に提供される職業分類を、クラブの何人かの会員に認める）

はい 24.44% いいえ 65.43% 無回答 10.12%

28. シカゴに別な子クラブを設立することに賛成か？

はい 22.47% いいえ 73.09% 無回答 4.44%

29. 子クラブがそれぞれの地域の事業や専門職種の人々の指導者となる方が、一つの親クラブがシカゴの全体の事業や専門職種の指導者となるよりも適切だと思うか？

はい 10.16% いいえ 78.52% 無回答 5.43%

30. あなたの近所にある子クラブの対象となる市場は何だと思うか？
(そのようなクラブを作ることの要請する必要性は何か？)

31. これらの目的にかなうために、あなたの近隣ではすでにロータリーを除いたどんな組織が設立されているか？

32. 子クラブに奉仕するために、親クラブの会員身分を放棄するか？

はい 5.68% いいえ 88.89% 無回答 5.43%

33. 親クラブの会員身分を放棄しないで、子クラブ設立に賛成か？

はい 24.69% いいえ 65.93% 無回答 9.38%

34. シカゴ・ロータリークラブの会員数が多すぎるために、その機能を最大限發揮できないと思うか？

はい 23.95% いいえ 69.88% 無回答 6.17%

35. クラブ内に、子クラブではないが、共通な事業や専門職種や娯楽や市民問題に関心を持ったグループを作ること賛成か？

はい 14.32% いいえ 78.27% 無回答 7.41%

36. シカゴ全域にロータリーの影響力を広めるための、何か特別な提案は？

37. あなたはシカゴ市内に住んでいるか？

はい 55.06% いいえ 42.72% 無回答 2.22%

38. アメリカ人両親の下でアメリカ生まれ

68.64%

外国人両親の下でアメリカ生まれ

19.51%

外国生まれ

9.38%

39. 結婚しているか？

はい 90.37%
いいえ 6.91%

無回答 2.72%

40. 所帯主か？

はい 85.19%
いいえ 9.38%

無回答 5.43%

41. 家族数は？

2…10.86%
3…24.44%
4…23.21%

5…13.58%
6…3.95%
7…0.99%

8…1.23%
9…0.74%
10…0.25%

無回答…20.74%

42. 自宅を所有しているか？

はい 53.33% いいえ 40.25% 無回答 6.42%

43. 平均的な年間収入は？

3000ドル…	3.70%	4000ドル…	5.17%
5000ドル…	6.91%	6000ドル…	11.36%
8000ドル…	13.33%	10000ドル…	15.31%
12000ドル…	9.88%	15000ドル…	9.38%
20000ドル…	5.68%	25000ドル以上…	8.89%
無回答…	10.37%		

44. 主な収入源

専門職報酬

8.40%

給料

33.83%

事業収入

12.59%

給料および事業収入

45. ローターリークラブの会費支払

個人支出

64.44%

会社支出

32.35%

46. 事業規模

最大規模

35.80%

大規模

36.54%

平均的規模

15.31%

小規模

3.70%

47. 事業所の商圏

近隣地域

47.4%

市内全域

12.59%

大都市圏全域

9.14%

州全域

7.90%

国内全域 44.44% 国際的 21.23%

48. 教会に所属しているか？

はい 63.70% いいえ 31.85% 無回答 4.44%

49. 教会の宗派は何か？

50. 最終学歴

中学校在学	10.12%	中等学校卒業	6.17%
高校在学	14.07%	高校卒業	11.60%
大学在学	19.75%	大学卒業	19.01%
大学院課程	12.84%		

51. 支持政党

共和党

72.59%

民主党
独立

8.64%
18.27%

52・支持政治体制

保守主義

51.38%

リベラル

39.51%

過激派

0.74%

53・市民としての最大の関心は

付近のこと

55

市全体のこと

110

州全体のこと

49

国全体のこと

161

国際的なこと

57

54. クラブ事務局員の勤務は満足すべきものか？

はい 93.33% いいえ 2.22% 無回答 4.44%

55. クラブ事務局員はどのようにすれば、会員への奉仕の価値を高められるか？

56. 社会奉仕をもっと効果的にするために、クラブはどんな方法をとればよいか？

57. 職業奉仕をもっと効果的にするために、クラブはどんな方法をとればよいか？

58. 国際奉仕をもっと効果的にするために、クラブはどんな方法をとればよいか？

59. ロータリアン誌に対する関心度

まったく読まない

11.60%

毎号1―2章読む

44.94%

毎号半分位読む

29.63%

毎号隅から隅まで読む

7.41%

60. ロータリアンを改善する何か特別の方法は？

61. もしシカゴ・ロータリークラブの運営をあなたに委ねられたら、何か特別な方針の改善をするか？

訳者あとがき

ロータリーの歴史を学ぼうとする人にとって、最も大きな問題点は、ロータリーの創立時や初期ロータリーのことを書き記した資料が極めて乏しいことである。当時のことを知るために参考になる資料の中で、現在邦訳されている文献として、*The Founder of Rotary*（ロータリーの創始者 1928年 (Paul Harris・米山梅吉訳)）、*The Meaning of Rotary*（ロータリーの意義 1928年 (Vivian Carter・田中毅翻訳中)）、*This Rotarian age*（ロータリーの理想と友愛 (Paul Harris・米山梅吉訳)）、*My Road to Rotary*（わがロータリーへの道 1948年 (Paul Harris・竹山涼一他共訳)）、*Golden Strand*（1969年 (Oren Arnold・田中毅訳)）等があげられるが、今回の *Rotary 60-1934*年 (Chicago University・田中毅訳) によって僅かながらその資料を増やすお手伝いをさせていただくことができたと思っている。

これらの文献で共通に言えることは、ロータリー創立当時の記録は、僅かに、それも断片的に残されている資料を頼りに、後年になってまとめられたものが多く、思い違いや曖昧な記述がかなり多いことである。本書によると、シカゴ・クラブが正式な年次報告書を作成したのはジョージ・トレットドウエルが幹事を務めた1920年からであり、その以前の記録は、語り部的な存在だったチャールズ・ニュートンの記憶に基づいたものを、後日まとめ直したというのが真相らしい。

シカゴ・クラブは、自らのクラブの歴史をまとめようとして、1923年にシカゴ・ロータリークラブ歴史委員会を設けたものの、委員会活動は休眠状態が続き、結局その作業は1934年に、シカゴ大学の社会科学研究者の手に委ねられ、本書の出版に繋がった。本書は外部の機関によるロータリー運動、特にシカゴ・ロータリークラブの活動に関する調査報告書であるために、ロータリー運動を賛美したり、ロータリー理念を広げたり深めたりする目的を持って書かれた文献ではない。ロータリアンでない人たちが、短期間の間に纏め上げた文書なので、ロータリーの根幹をなす哲

学や奉仕理念の部分が殆ど欠落しており、一般市民の目に触れ易い、二次的な活動に過ぎない奉仕活動の実践を中心にして、ロータリー運動を判断している点が、致命的な欠陥かも知れないが、これがロータリアン以外の人たちの、ロータリーに対する平均的な評価なのかも知れない。本書はシカゴ・クラブ会員に対するアンケートの分析が基本になっているが、世界大恐慌の影響を最も強く受け、アメリカがニュー・ディール政策を発表した時期だということを念頭において分析する必要がある。

本書を巡って、シカゴ・クラブの会員の示した拒否反応はかなりのものであったらしく、ポール・ハリスは、ほぼ完成の域にあった **This Rotarian Age** の発行を一年遅らせて、ロータリーに対する間違った解釈を正すために、その内容を修正したという話すら伝わっている。その後、シカゴ・クラブは独自にクラブ史を作る必要性があることを改めて痛感し、歴史委員会を中心になって資料を集め、1966年にやっと発行されたのが **Golden Strand** であるが、この本の著者 **Oren Arnold** もまた、シカゴ・ロータリークラブの会員ではない。ロータリアンとしての **Rotary's**

の内容に不満を抱いたとしても、ロータリーの実態と奉仕理念を地域社会の人たちに正しく理解してもらおうことなしに、ロータリー運動を地域社会に広めたり、地域社会の人たちと共に奉仕活動の実践をすることは不可能なので、外部の人たちからの批判を謙虚に受け止め、正すべき点は正し、主張すべき点は主張する態度が必要であろう。その点から本書はロータリーアンならばぜひ一読しておく必要がある文献であり、ポール・ハリスも **This Rotarian Age** の巻頭で、「ロータリーのことを進んで研究したい」と思っている人は、シカゴ大学社会科学者7名の共著 **Rotary Co.**、カルフォルニア大学教授フランク・ラム著 **Rotary A Businessman, s Interpretation**、ロンドンの作家ビビアン・カーター著 **The Meaning of Rotary**、を読むべきである。」と述べると共に、かなりの頁数を割いて次の通りの記述している。

「著者は特にシカゴ大学の社会科学の専門家から選出した委員の、思慮緻密な批評に注意せねばならないと思う。彼らの批評を非実家の妄想とみなしこれを抹殺すべきではない。彼らは決して浅薄でないのみならず、彼

ら委員にはロータリー文書を研究し、また多くのロータリー会員と協議する機会が充分提供された。委員はこのような機会に恵まれているから彼らの批評は悪意をもって激発してはいない。すなわち彼らの批評を鼓吹したものは好意であった。その批評は、自ら満足したクラブを動かしてその惰眠より覚醒させ、無頓着のクラブを幻惑より離脱させる効果があった。すべてのクラブを向上させ一層高い責任を感じしめたのである。…中略…しかもシカゴ大学選出の委員がシカゴ・クラブに提出した推薦の一つにより、将来論争をかもおそれのある定款の付則も変更するに至った。シカゴ・クラブのこの修正に賛成した決議は大多数をもって通過し、その種題目に関する討議は完了したと言つてもよいのである。当該委員の報告は相当の時間を費やし、かつすこぶる巧みに問題を取り扱った。ここにロータリーという世界に普及した組織の力が、大いに活用される最大の機会が横たわっているとされた。シカゴ大学選出の委員からみると、シカゴのロータリークラブは勢力ある約七百名の実業家をもって成立し、これらの会員は種々の商業や職務に従事しているから、同クラブは社会の重要問題を討議

する理想的議場であり、公共の指導者を養成する理想的団体をなしている
のであるから、委員の目にはロータリーの前途は最も有望で、会員は区々
としてただに博愛慈善の方面の尽力に止まるべきものではないと考えられ
ている。しかし著者はロータリーが現在必要として力を致している方面が
油断のならないことを望むもので、ますます実験を重ねてその行程の才知
が明らかになるまでは、ぜひともロータリーの現状を継続して欲しいので
ある。…『This Rotarian Age より米山梅吉訳…』

RI第2680地区

1996—97年度。パスト・ガバナ―

田中毅（芹屋川）

ロータリー電子文庫版について

この電子文庫は2680地区PG田中毅氏によって翻訳・出版された「Rotary？」(A5製本版・横書き)をPC上で閲覧しやすいよう、A6・縦書きに再編集し製本したものです。

この「Rotary？」について田中PGは「炉辺談話294 ロータリーの歴史的文献」で次のように紹介されています。

「Rotary？」(1934年出版)は私の翻訳があり、「ロータリーの源流・アーカイブス」に収録してありますので、ご一読いただくと、第三者の目から見た、当時のシカゴ・クラブやロータリー全体の動きがよく理解できます。ただし、資料の提供を受けたとは言え、ロータリーアンではない第三者がまとめた文献なので、かなりの錯誤があります。しかし、様々な

外的・内的要因から苦境に陥っていたシカゴ・クラブを復活させるための報告書ですから、混迷状態にある現在こそ、大いに読む価値のある文献と言えます。

A5版オリジナルは273ページ、またこの電子文庫版では540ページを越す長文ですが「**Rotary**?」機会を見つけ、ぜひお読みください。

最後になりますが、「**Rotary**?」を翻訳され、またこの電子文庫作成を快くお許しをいただいた田中毅PGに感謝いたします。

2007年6月

大阪南RC Y・木村

I SAW A MAN

I saw a man pursuing the horizon;
Round ana round he spad.
I was disturbed at this;
I accosted the man.
“It is futile,” I said,
“You can never — “
“You lie !” he cried,
And run on.
— Stephan Crane —

地平線を追いかけて、
何処までも走り続ける男に出会った。
それを見て心配になり、
声をかけた。
「それは、無駄なこと」私は言った。
「それは不可能なこと」
「そんなことはない」彼は叫んだ。
そしてまた、走り続けた。
— ステファンクレーン —

I SAW A MAN

I saw a man pursuing the
horizon;
Round ana round he spad.
I was disturbed at this;
I accosted the man.
“It is futile,” I said,
“You can never — “
“You lie !” he cried,
And run on.

— Stephan Crane —

ROTARY ? シカゴ大学

田中 毅 訳

文庫作成 2007/6 大阪南 RC